

### 第三章 V層の調査

平成 26~28 年度に実施したシヨロマ1遺跡の調査で、縄文時代の竪穴住居跡 (VH) 1 軒、土坑墓 (VGP) 1 基、土坑 (VP) 8 基、石組炉 (VSF) 1 ヲ所、焼土 (VF) 8 ヲ所、Tピット (TP) 138 基、土器集中 (VPB) 21 ヲ所、礫集中 (VSB) 1 ヲ所、剥片石器集中 (VFTB) 3 ヲ所、石斧集中 (VAXB) 1 ヲ所を検出した。

平成 26~28 年度に実施した調査区は、大半が T<sub>2</sub>面上で、一部、T<sub>4</sub>面 (H28 年度 B 区) から遺構・遺物を検出している。

平成 25~27 年度調査区では西南部から東南部にかけては広く洪水堆積層が見られ、降下した Ta-d テフラは認められなかった。洪水層の攻撃斜面は平成 26・27 年度調査区の北西から南東に伸びており、シヨロマ川に沿って洪水が起こったことがうかがえる。洪水層の最終堆積段階と考えられる暗赤褐色シルト (VIIa) 層の上面標高は、TP-53・58 (O-43 区、P-42 区) で 69.7 m、TP-175 (S-39 区) で 69.1m、TP-120 (T-37 区) で 68.9m、TP-117・118 (Z-24 区) で 68.7 m、TP-100 (Y-15 区) で 68.5m とシヨロマ川の下流に向かって標高を下けている。このことも、シヨロマ川に沿って洪水が発生したことを裏付ける。VIIa 層は降下した Ta-d 層が存在する区域も被覆しており、上述した、TP-107・111 付近から北東の、厚真川に沿う段丘の後背湿地状をなす沢状地形の部分に覆っている (図 I-7 参照)。

Tピットなど深く掘り込まれる遺構では、洪水層下位の VII d 層や IX 層で直立した壁面を確認した。降下した Ta-d 層が残っている区域では下位がグライ化しており、脱色して白色化した Ta-d 層がみられ、遺構の壁面は崩落しているものが多かった。

遺構は大半が Tピットで、分布状況を見ると、数基が弧状をなして配列しているように見える。また、H28 年度 A 区の北西山側に沿って、小型の Tピットが間隔を置いて並び、大型の Tピット群とは離れた位置に分布する。

Tピットの覆土上面に他の Tピットの掘上げ土流れ込みと思われる Ta-d 層を起源とする赤褐色の土層を検出したものもあり、それらの層の切り合い関係から時期差を取ってきたものもある。

遺物は縄文時代早期後葉から後期後葉まで出土しているが、中期後葉から後期前葉のものが多い。後期初頭の土器集中 (VPB-22) を土坑墓 (VGP-30) の埋土上面で検出したが、土坑墓が埋まりきった上に土器集中が残されていたことを確認したため、関連はないと考えた。

B 区の東側の尾根上部分では恵庭 a 降下軽石層 (XI層) が残っていた。旧石器確認調査でさらに下位を掘削し、支笏降下軽石 (Spfa) を含む氾濫堆積層 (XII層) を確認したが、フォールの支笏降下軽石層は確認できなかった。B 区の西・南側のやや低い部分では XI層は見られず、氾濫堆積層 (X層) が堆積した上に Ta-d 降下スコリア・軽石 (VII) 層が堆積していた。

B 区からは 5 基の Tピットが検出され、遺物は縄文時代後期初頭が主体である。

V層から出土した遺物は土器 9,855 点、礫石器 768 点、剥片石器 630 点、土製品 5 点、石製品 16 点、石斧石器群削片 349 点、フレイク・チップ類 4,792 点、礫 8,843 点、逆茂木片 11 点など総計 25,269 点である。

(宮塚)

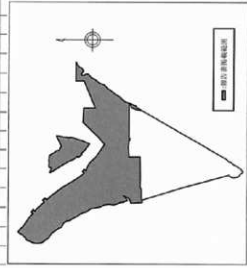
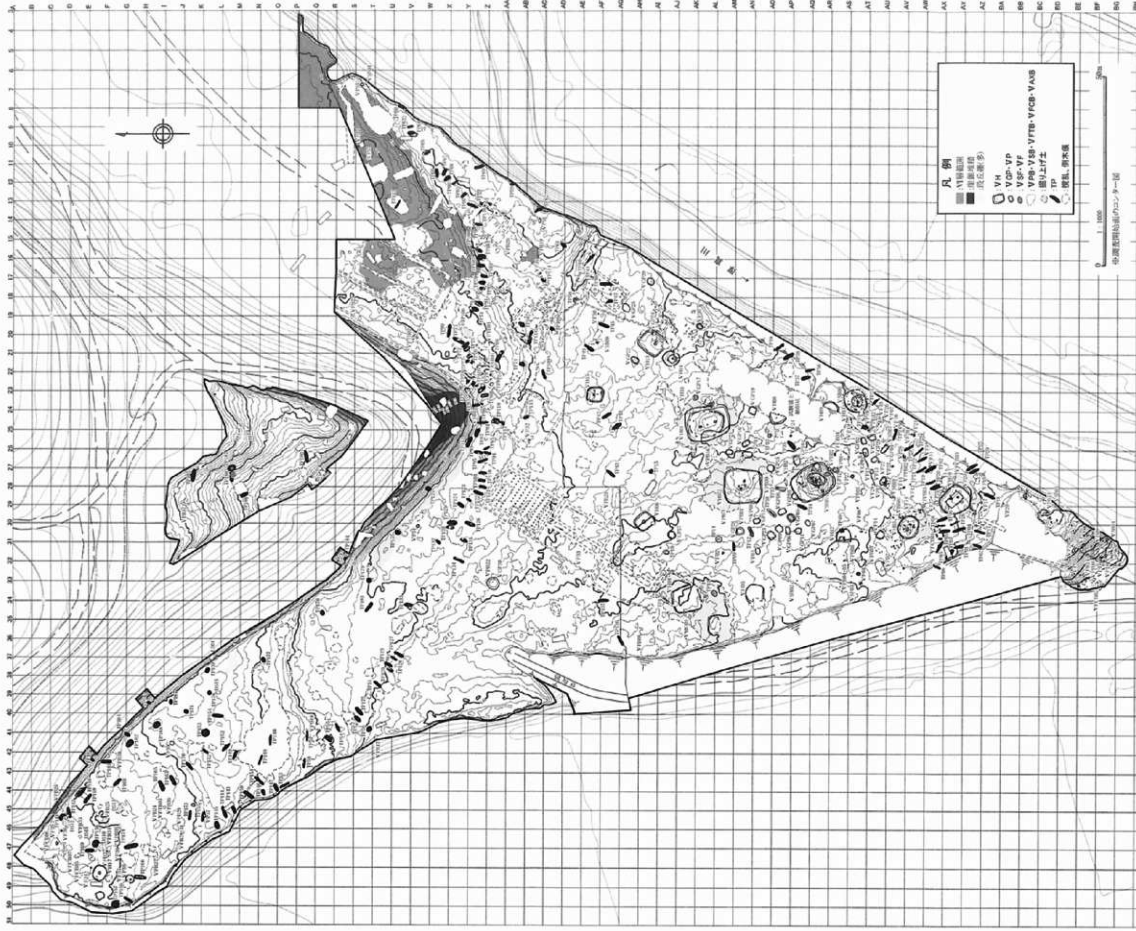


図 III-1 H25～28年度 シロクマ1遺跡V層遺構配置図

## 第1節 住居跡

平成26～28年度に調査した堅穴住居跡は1軒のみである。

VH-17 (図Ⅲ-2・3 図版15・16)

位置：E-47・48区 規模：394×354cm 検出層位：Vc

長軸方向：N-58° E 平面形：楕円形 付属遺構：HF01・HP01・02・04・PT01

**確認・調査** IV層除去中にVa層のくぼみを確認した。Va層を除去した段階で、くぼみの中央から石組を検出した。住居跡を想定し、トレンチを入れ範囲・床面を確認することに努めた。石組の周囲で他より若干硬い面を検出し、床面と判断して外周に向かって掘削を進め、壁面の検出に努めた。硬化面は石組炉の周囲以外は認められず、トレンチでは壁面の立ち上がり不明瞭だったため、Vc層まで周囲を下げて住居の輪郭を確認した。石組内に焼土を伴うことからHF01と付番した。炉跡・床面の精査を行い、写真撮影・記録した後、遺物を取り上げ、柱穴確認調査を行った。石組炉から80～100cmの位置に4ヵ所の黒色プランを検出し、半截したところ、北側の1本を除いて、3本の打ち込み柱跡を確認した。北西部から検出した付属土坑は当初、明瞭な立ち上がりを想定していたが、住居壁面より北西側に張り出しており、床面と同一レベルまで掘り下げると、Ta-dを含む黒色土のプランを検出したためPT01を付番した。完掘状況を写真撮影し、柱穴・付属土坑の記録を取り調査を終了した。

**形態** 平面形は石組炉の開口方向を長軸とする楕円形。壁は緩やかに立ち上がる。南西部の一部は倒木によって攪乱されている。

**堆積状態** 覆土は確認面からの層厚が薄く、北東部から北西部にかけてTa-dパミス(径2mm以下)を含む灰褐色土(3層)が南側よりやや厚く堆積し、床面上の4層からは炭化材片が少量検出された。南側では壁際に4層がわずかにみられる。

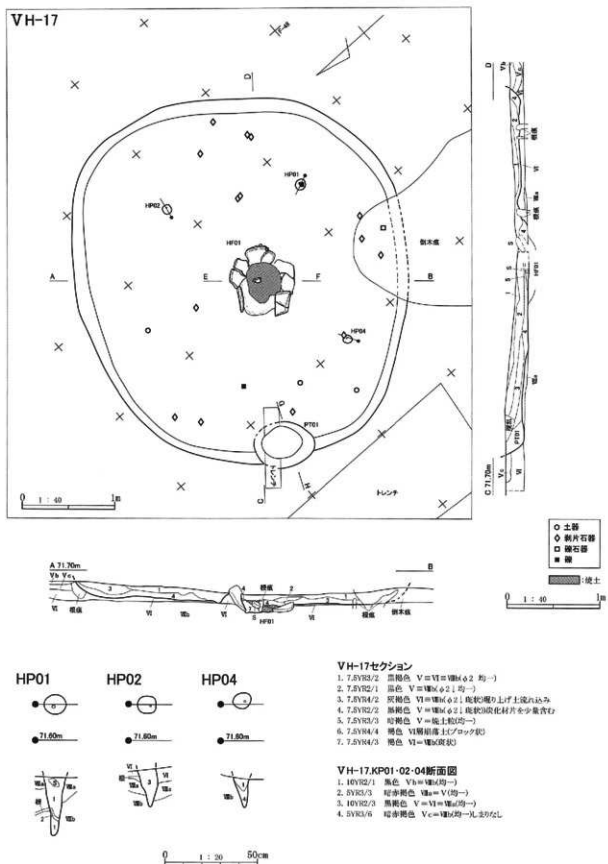
**付属遺構** HF01とした石組炉は住居跡ほぼ中央に位置し、8枚の扁平な礫を倒立させ、「コ」の字型に配している。北西方向に開口しているが抜け跡等の痕跡も認められない。炉石は外周に向かって倒れているものが多く、炉の内面側は被熱して赤色化している。焼土の厚さは最大厚で3cmである。中央部は攪乱され、炉石の一部と思われる被熱礫片が検出された。

確認できた柱穴は3本で、すべて打ち込みである。確認面での直径は10cm前後、深さはHP01が最も深くて32cm、他の2本は14cm、20cmである。

北西部の先端部に土坑を1基検出した(PT01)。規模は66×50cmであり、床面を若干掘り窪めている。

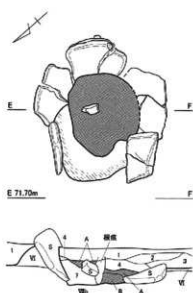
**出土遺物** (図Ⅲ-9-1～3 図版67-1～3) 土器片はすべて小破片で、覆土上位(1層)から出土しており、時期を決定できるものはない。図示した剥片石器2点はいずれも床面壁際からの出土である。1は基部が明瞭なポイントである。逆刺が小さく基部が太い。2は尖頭部を大きく欠損するポイントである。基部側には両側縁に小さく不明瞭な逆刺が認められる。その他床面からは石錐の欠損品が1点、R.F.U.Fが5点、フレイク・チップが2点、覆土からはポイント類2点、石錐2点、R.F3点、石核1点、フレイク・チップ63点が出土している。3は砂岩製の加工痕のある礫。側縁からの剥離痕を表裏に残す。

**時期** 石組炉で掘り込みが浅く伴出した石器の特徴などから縄文時代後期前葉に属すると思われる。  
(宮家 剥片石器：矢野 礫石器：宮崎)



図III-2 VH-17平面及び断面図

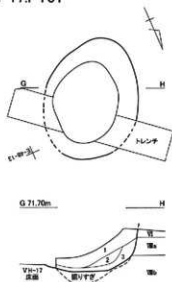
VH-17.HF01



VH-17.HF01

A: 7.5VR1/4 褐色 VI-概土粒(斑状)  
 B: 5.5VR1/6 赤褐色 炭熟層  
 ※ 1~4-712.VH-17セクションの注記と同一

VH-17.PT01



VH-17.PT01

1. 7.5VR3/3 暗褐色 VI-Vc(均一)  
 2. 7.5VR2/2 黒褐色 Vc=VII斑状  
 3. 7.5VR1/4 褐色 VI-Vc(斑状)

0 1 : 20 50cm

図Ⅲ-3 VH-17 関連遺構平面及び断面図

## 第2節 土坑墓

### VGP-30 (図Ⅲ-4 図版 17-1~5 67-4・5)

位置: Y・Z-32・33区 検出層位: VI 規模: 316×304×76 cm 平面形: 円形

**確認・調査** V層調査中にVPB-22を検出した。この土器集中の範囲を確認するため、周囲をVc層まで掘り下げたところ、直下に大型の円形黒色土プランを確認した。VPB-22との関連を考慮し、セクションベルトを設定した。VPB-22はVGP-30の埋土上に位置し、埋土の傾斜に沿って中心に向かっており、VGP-30が完全に埋没した段階で遺棄されたことが分かったので、VPB-22はVGP-30とは異なる時期の遺構として捉えた。

VGP-30の底面から炭化材片が出土し、若干硬い面を検出したので底面とし、V層の混じらないVII層を壁面として立ち上げた。完掘後、写真撮影・記録し、調査を終了した。平面形は円形で、確認面から76cmの深さを測る大型の土坑墓である。床面と埋土下位からつまみ付きナイフが出土している。

**堆積状態** VGP-30はVPB-22の断面を通して、断面撮影・記録を作成した。底面・壁はVII層を掘り込んでいる。埋土はV層を主体とし、VIIb・c層の混在状況の多寡で、縞状に見える。

**出土遺物**(図Ⅲ-9-4・5 図版 67-4・5) 図示したつまみ付きナイフ2点の他、サイド・スクレイパー1点、フレイク・チップ52点が出土した。4は横長剥片を使用したつまみ付きナイフで、刃部側が遺構内から、つまみ側が遺構外から出土した接合資料である。下端部は欠損しており、刃部左側には磨減がみられる。5は刃部が大きく折損している。折損面を打点として腹面方向からの剥離が認められ、再加工したと思われる。(宮塚 剥片石器: 矢野)

### 第3節 土坑

平成25年度に検出した21基に加え、平成26～28年度の調査では新たに8基検出した。このうち7基は長軸が90cm以上のもので、1基は50cm以下の小型のものであった。VP-31-35は東側段丘縁辺部付近、VP-32-33は北東側、VP-34は高位段丘面裾、VP-37～39は北西側に位置しており、分布域も疎らである。

#### VP-31 (図Ⅲ-5 図版17-6・7)

位置：AB-13・14区 規模：128×38×46cm 検出層位：VI 平面形：長楕円形

VI層上面で遺構確認調査をしたところ、Ta-d2パミス混じりの楕円形を呈する黒色プランを確認したため、短軸トレンチを設定して断面を観察した。1・3・4・7層はVb層にTa-d2パミスを少量含む黒・暗褐色土で、2層はTa-dパミスを多量に含む。5・6層はTa-d主体層で、壁面崩落に起因すると思われる。坑底面はほぼ水平である。

#### VP-32 (図Ⅲ-5 図版18-1・2)

位置：S-9区 規模：100×74×52cm 検出層位：VI 平面形：楕円形

VI層上面を精査中、ほぼ円形の黒色プランを確認したため、半載して断面を観察した。覆土はおおよそVb層が主体の黒褐色土とTa-d2パミス混じりの褐色土に分けられる。坑底面は水平で壁面は直線的に立ち上がる。

#### VP-33 (図Ⅲ-5 図版18-3・4)

位置：S-10区 規模：(44)×42×66cm 検出層位：VI 平面形：不明

VI層上面を精査中、不整形な黒色プランを確認した。トレンチで断面観察を行ったところ、覆土下位はVb主体の黒褐色土層とTa-d2パミスを多く含んだ層が互層に堆積している。Tピットの可能性も考えたが、規模から土坑と判断した。なお、土坑西側は半載する際に掘り過ぎたため長軸長は不明であるが、検出プランから推定すると約80cmと思われる。

#### VP-34 (図Ⅲ-5 図版18-5・6)

位置：V-30区 規模：94×72×32cm 検出層位：VI 平面形：楕円形

VI層上面を精査中、楕円形の黒色プランを確認した。1・3層はVb層主体の黒・暗褐色土、2層はVI層の崩落土。4層に混入するTa-d1・2は北側の斜面堆積物起源と思われる。

確認面からの深さは32cmで、坑底面からの立ち上がりは緩やかである。

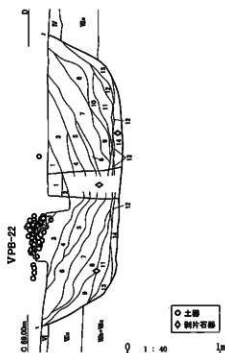
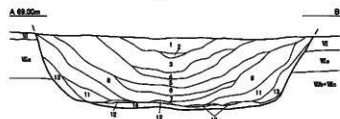
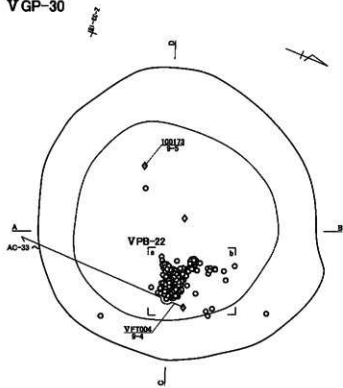
#### VP-35 (図Ⅲ-5 図版18-7・8)

位置：S-6区 規模：98×66×42cm 検出層位：Vc 平面形：楕円形

北東側の段丘縁辺部でVI層上面を精査中、楕円形の黒色プランを確認した。半載したところ、覆土上位は1～6層のVb・c層主体の黒褐・褐色土、7～9層はVIIa層以下の壁面が崩落と思われ、Ta-d主体の褐・褐灰色層に分かれる。

出土遺物 1層から礫1点、フレイク・チップ2点、2層から剥片石器が出土している。剥片石器はR.Fに分類し、坑底面からの出土ではないため本報告には掲載していない。(山戸)

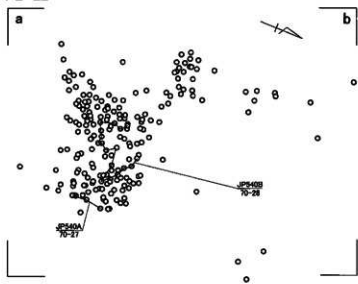
VGP-30



VGP-30

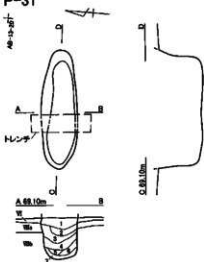
1. T.SYR2/1 黒色 V=Vb-c(均一)
2. T.SYR2/1 黒褐色 V=Vb-c(底状)
3. T.SYR4/2 灰褐色 V=Vb-c(底状)
4. T.SYR3/2 黒褐色 V=Vb-c(底状)
5. T.SYR3/1 黒褐色 V=Vb-c(均一)
6. T.SYR2/2 黒褐色 V=Vb-c(底状)
7. T.SYR3/2 黒褐色 V=Vb-c(均一)
8. T.SYR4/2 灰褐色 V=Vb-c(底状)
9. T.SYR4/4 褐色 V=c(底状)
10. T.SYR2/2 黒褐色 V=Vb-c(均一)
11. T.SYR4/2 灰褐色 V=Vb-c=V(底状)
12. T.SYR3/2 暗褐色 V=Vb-c(均一)
13. T.SYR4/3 褐色 Vb=Vb-c(底状)
14. T.SYR5/6 明褐色 Vb=Vb-c(Lより厚い底状)

VPB-22



図三-4 VGP-30・VPB-22 平面・断面及び垂直分布図

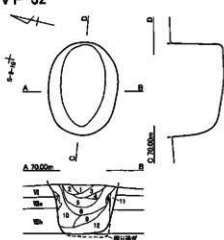
VP-31



VP-31

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=VI-Vb(φ2.1底状)
2. 10YR5/6 黄褐色 Vb-Vb(φ6.1底状)=VI
3. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(φ2.1底状)
4. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Vb(φ5.1底状)
5. 7.5YR4/6 褐色 Vb=VI(均一)
6. 7.5YR5/8 明褐色 Vb(φ1.1)=Vs(均一)
7. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ2.1底状)

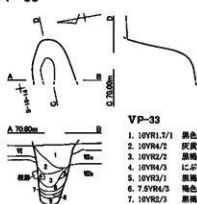
VP-32



VP-32

1. 7.5YR3/2 黒褐色 Vc=Vb(φ3-10)
2. 7.5YR4/3 褐色 Vc-Vb(φ3-10均一)
3. 7.5YR2/1 黒褐色 Vb-Vb(φ5-15塊状)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ5-10ブロック状)
5. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(均一)
6. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(塊状)
7. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(ブロック状)
8. 7.5YR2/1 褐色 Vb
9. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ3-10均一)
10. 7.5YR2/1 褐色 Vb=Vb(φ2-7)
11. 10YR4/8 褐色 Vb-Vb(ブロック状)
12. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(φ2-5)

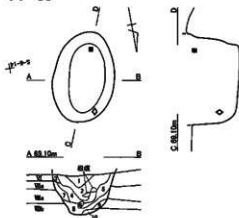
VP-33



VP-33

1. 10YR1.7/1 黒色 Vb
2. 10YR4/2 灰黄褐色 V=Vb(φ3均一)
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
4. 10YR4/3 比色不良褐色 Vb=Vb(均一)
5. 10YR2/1 黒褐色 Vb-Vb(塊状)
6. 7.5YR4/3 褐色 Vb-Vc(塊状)
7. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Vb(φ10均一)
8. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(ブロック状)
9. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb-Vb(塊状)

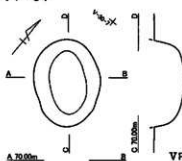
VP-35



VP-35

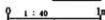
1. 10YR2/3 黒褐色 Vb-Vc(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb=Vc(ブロック状)
3. 10YR2/2 黒褐色 Vc=VI(ブロック状)
4. 10YR2/3 暗褐色 Vb-Vc(塊状)
5. 10YR2/4 暗褐色 Vc=Vb(塊状)
6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(ブロック状)
7. 10YR4/4 褐色 Vb=Vc(ブロック状)
8. 10YR4/2 灰褐色 Vb=Vb=Vs(ブロック状)
9. 10YR4/1 暗褐色 Vb=Vb(塊状)
10. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(ブロック状)

VP-34



VP-34

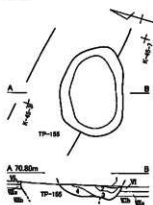
1. 7.5YR1.7/1 黒色 Y=Vb(塊状)
2. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=V(塊状)
3. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Vb(塊状)
4. 7.5YR4/2 灰褐色 Y=Vb+V(塊状)



図Ⅲ-5 VP-31~35平面及び断面図



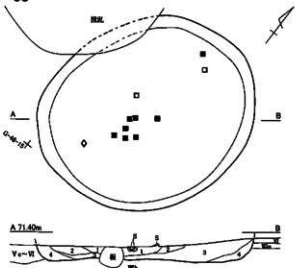
VP-37



VP-37

1. 10YR2/1 黒色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>a(均一)
2. 10YR3/4 暗褐色 V=Vt(均一)
3. 10YR2/2 黒褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>b=V<sub>b</sub>a(均一)
4. 10YR3/2 暗褐色 V=Vt(均一)

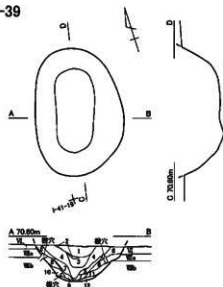
VP-38



VP-38

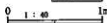
1. 10YR2/1 黒色 V<sub>b</sub>=シルト状(φ5.1)=V<sub>b</sub>b(斑状)
2. 10YR3/1 黒褐色 V<sub>c</sub>=シルト状(φ5.1)=V<sub>b</sub>b(斑状)
3. 7.5YR3/3 暗褐色 V<sub>b</sub>=Vt(斑状)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>b(φ5.1)斑状

VP-39



VP-39

1. 7.5YR2/1 黒色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>b(φ10.1均一)
2. 7.5YR4/4 褐色 V<sub>c</sub>=V<sub>b</sub>(ブロック状)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>b(φ5-15斑状)
4. 7.5YR1.7/1 黒色 V<sub>b</sub>
5. 7.5YR2/2 暗褐色 Vt-Vt(ブロック状)
6. 10YR2/3 暗褐色 Vt-Vt(斑状)
7. 7.5YR3/1 黒褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>(均一)
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 V<sub>a</sub>
9. 10YR2/3 暗褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>a(均一)
10. 7.5YR5/6 暗褐色 V<sub>b</sub>
11. 7.5YR4/6 褐色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>a(斑状)
12. 10YR2/1 黒色 V<sub>b</sub>=V<sub>b</sub>a(均一)



図Ⅲ-6 VP-37～39 平面及び断面図

VP-37 (図Ⅲ-6 図版 19-1～3)

位置：K-45区 規模：91×66×14cm 検出層位：VI 平面形：楕円形

確認・調査 調査区北西のK-45区で検出した。VI層精査中、長楕円形プラン(TP-155)と重複する楕円形の黒色土プランを確認したことからTビットを含めたセクションを設定し調査を行った。断面からTビットよりも新しい時期に構築されたものとわかる。坑底面はやや傾斜しており、南側に傾斜して明瞭な立ち上がり認められる。覆土はV層黒色土を主体としVIIa・b層が少量混じる。

(宮崎)

VP-38 (図Ⅲ-6 図版 19-4・5)

位置: G-48区 規模: 236×195×22cm 検出層位: VI 平面形: 楕円形

確認・調査 Vb-17から約5m南側で検出した。Vb層下位でVF-37を調査した際、トレンチで焼土下位に遺構覆土を確認した。遺構確認のためVI層まで掘り下げたところ、比較的大型の黒色土プランを確認した。坑底面に焼土など付属遺構は確認されず、単独の土坑とした。坑底面はVb層上位まで掘り込まれているが中央部はやや高く、壁面は明瞭に立ち上がる。覆土は基本的にVb層主体でVI・VII層を少量から微量含む。(宮崎)

VP-39 (図Ⅲ-6 図版 19-6・7)

位置: I-41区 規模: 135×93×37cm 検出層位: VI 平面形: 楕円形

確認・調査 VI層上面で遺構確認中、楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。当初、小型のTビットを想定して調査を進めたが、覆土を約25cm掘り下げたところで黒色土がほぼ平坦に堆積している面を確認した。堆積状態から坑底面と考えられたが、本遺跡では円形で小型のTビットが数基検出されていることから、トレンチを設定して更に下位まで掘り下げ断面確認を行った。結果、当初想定した坑底面下位には掘り込みは確認できなかったため土坑とした。坑底面はやや皿状を呈し壁面は緩やかに立ち上がって開口する。(宮崎)

#### 第4節 焼土

今回検出した焼土は9カ所で、うち1カ所は石組炉(VSF-04)である。VSF-04は厚真川浸食崖の段丘縁辺部でVc層より検出しており、周辺も同一レベルから遺物が出土している。このような状態から当初堅穴住居跡の炉跡と想定していたが、プランや明瞭な立ち上がりが認められないため、屋外炉と判断し報告している。5カ所は北西側のシヨロマ川に面する段丘面に集中し、そのうち2カ所はフレイク・チップ集中に伴うものと思われる。その他3カ所の検出地点については特徴的な分布は認められない。検出層位はVbからVc層で、時期が推定できる遺物としてはVSF-04とVF-31が中期後半、VF-35・36は中期後半と後期前葉の土器が周辺から出土している。(奈良)

VSF-04 (図Ⅲ-7 9-6~13 図版 20-1・2 67-6~13)

位置: S-6・7区 規模: 38×36×8cm 検出層位: Vc 平面形: 方形

確認・調査 調査区北東端側のS-6・7区で検出した。この区域は東側に厚真川浸食崖、西側に現代の攪乱で大きく掘削されており、黒色土が約1.6~1.8mの幅で帯状に残存していた。この地点は浅い落ち込みを確認していたため、遺構を想定して調査を開始した。落ち込みの中央付近に東西方向のベルトを設定しVa層を移植ゴテで掘削後、Vb層を5cmずつ面的に掘り下げた。Vc層まで掘り下げたところでベルトの南側にコの字形の石組炉を検出したことから、炉を通過するように5cm幅の十字ベルトを設定した。石組炉内サンプルを回収しながら周囲を含めてVI層まで慎重に掘り下げた。その結果、断面からは住居等の立ち上がりは認められず、炉跡は単独の遺構と判断した。写真撮影及び断面の記録を行った後に全てのベルトを除去して石組炉及び周辺の検出写真を撮影した。周辺の出土遺物を含めて炉石の微細図を作成後、取り上げて調査を終了した。南西側に開くコの字形に配置された炉石は大型の角柱礫3個体で構成されており、北側の一辺の礫は欠損している。礫の内側だけでなく上部全体が被熱し、赤色

化しているが石組炉内及びその周辺に焼土は確認出来なかった。(宮崎)

**出土遺物** (図Ⅲ-9-6~13 図版 67-6~13) 6~8 はⅢ群 B3 類の北筒式土器で、6・7 は同一個体である。6 は口縁部に向かってやや外反するもので、口唇部は丸状、口縁部直下がやや肥厚する。口縁部にはナゲ調整のあと押し文が 2 段施され、その直下には棒状工具による円形刺突文が配される。押し文は口唇部にも同一の工具で施文される。地文は 0 段多条 LR 原体による斜行縄文で、結縛痕を伴う。7 は胴部片で、現存上端部に結束第 1 種 0 段多条 LR 斜行縄文の一部が残されている。8 は風化した胴部片で、不鮮明だが細めの 0 段多条 LR 斜行縄文がみられる。

剥片石器はポイント類 3 点、ナイフ・スクレイパー 1 点、U.FI 点、フレイク・チップ 23 点が出土している。そのうち 4 点を図示した。9・10 はともに基部が明瞭な石槍に分類したものの。9 は鎌身部左側がやや湾入する。10 は表面の茎から逆刺まで直線的に作出されており、尖頭部の角度がより鈍角で形状はいずれも左右非対称になる。11 は約 3mm の薄い縦長剥片を使用したサイド・スクレイパーである。腹面右縁辺部に剥離が集中する。12 は右側縁に連続した微細剥離が認められるため U.F に分類した。13 は撥形の石斧で両面に節理面及び自然面を残すが、研磨によって側縁、刃部を作出している。刃縁の凹凸は使用による刃こぼれと思われる。

(土器：高橋 石器：矢野)

#### VF-31 (図Ⅲ-7 9-14-15 図版 20-3・4 67-14-15)

位置：AB-16 区 規模：50×31×7 cm 検出層位：VbL 平面形：不整形

**確認・調査** VPB-19 より南西に約 3m の位置で検出した。土器集中の範囲を確認するため、周囲を面的に調査していたところ、Vb 層下位で赤色化した焼土を確認した。被熱層の厚さは 7cm で Vc 層まで達してはおらず、炭化物等も含まれていない。(宮崎)

**出土遺物** (図Ⅲ-9-14-15 図版 67-14-15) 14・15 はⅢ群 B3 類の北筒式土器胴部片で、ともに 0 段多条 LR 原体による斜行縄文が施されている。(高橋)

#### VF-32 (図Ⅲ-7 図版 20-5・6)

位置：AB-25 区 規模：151×114×17 cm 検出層位：VbL 平面形：不整形

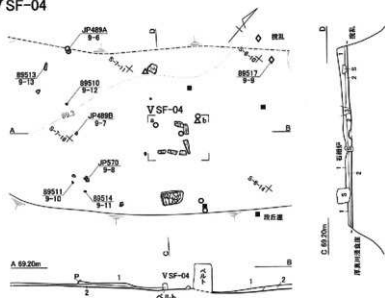
**確認・調査** Vb 層下位を調査中、炭化物混じりの被熱層を確認した。周囲を慎重に掘り下げた結果、被熱層は北西側へ不整形に広がり南東側部分は一部、根痕で攪乱されていた。被熱層の厚さは 17cm で皿状を呈しているが、断面形状で被熱層が乱れているのは根痕や約 30cm 北西にある倒木痕の影響と思われる。

#### VF-33 (図Ⅲ-7 図版 20-7・8)

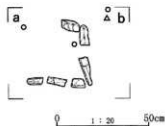
位置：AD-32 区 規模：52×25×5 cm 検出層位：VbL 平面形：不整形

**確認・調査** Vb 層下位を調査中、赤色化した不整形のプランを確認した。直上に校舎の基礎があったため攪乱の可能性もあると考えられ、トレンチ調査で範囲、断面確認を行った。その結果、被熱層が認められ概ね浅い皿状を呈していたことから焼土とした。被熱層の厚さは最大 5cm で、骨片等は検出されなかった。(宮崎)

VSF-04



VSF-04 石組炉

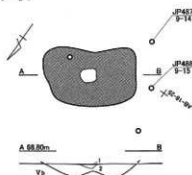


VSF-04

1. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Vc=シルト質(φ5以下)
2. 10YR4/4 褐色 Vt=1層(均)
3. 10YR4/4 褐色 2層と同様だが少し多い赤砂石の抜け層



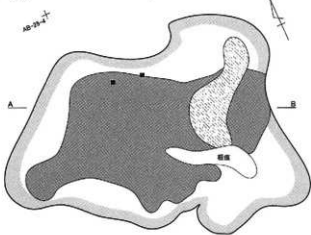
VF-31



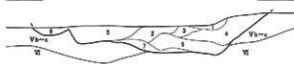
VF-31

1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb
2. 5YR1/4 二色・赤褐色 Vb被熱層

VF-32

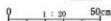


VF-32

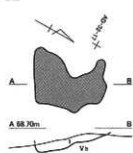


VF-32

1. 10YR2/1 黒色 Vt=樹化炭(φ5以下)→焼土ブロック(均)
2. 7.5YR1/4 黒褐色 被熱層(均)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=焼土ブロック(均)
4. 7.5YR2/3 暗褐色 被熱層(均)
5. 7.5YR6/8 棕色 Vb=Vc被熱層(均)
6. 7.5YR2/1 黒色 Vb付赤褐色土
7. 7.5YR2/3 暗褐色 Vc付赤褐色土



VF-33

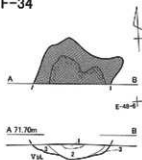


VF-33

1. 7.5YR6/8 棕色 焼土

図Ⅲ-7 VSF-04・VF-31～33 平面及び断面図

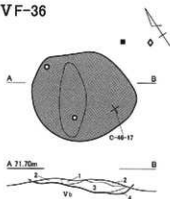
VF-34



VF-34

1. 10YR3/3 暗褐色 Vb = 焼土・炭化物
2. 5YR4/4 に近い赤褐色 Vb 焼土・炭化物・フレイク・チップ
3. 10YR3/3 暗褐色 Vb 被熱層(弱)

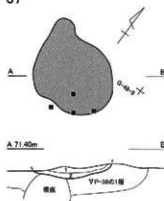
VF-36



VF-36

1. 7.5YR2/1 黒色 Vb
2. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb 被熱層(弱)
3. 7.5YR1/6 紅色 Vb 被熱層(強?)
4. 7.5YR2/3 暗暗褐色 Vb 被熱層(弱)

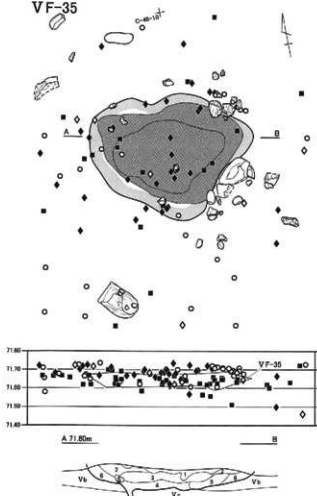
VF-37



VF-37

1. 7.5YR4/4 褐色 Vb 被熱層(弱)
2. 10YR3/3 暗褐色 被熱層(極弱)

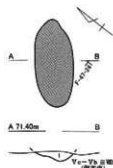
VF-35



VF-35

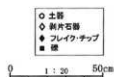
1. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb = フレイク・チップ
2. 7.5YR4/4 褐色 Vb 被熱層(弱)
3. 7.5YR5/8 緑色 Vb 被熱層(強) = V1a(現状)
4. 7.5YR1/6 紅色 被熱層(弱)
5. 7.5YR5/6 明褐色 被熱層
6. 7.5YR2/1 黒色 Vb付層黒色土

VF-38



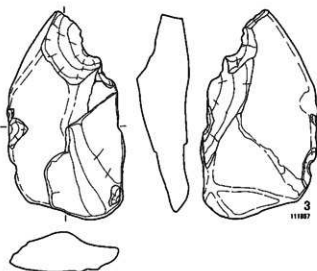
VF-38

1. 7.5YR4/4 褐色 Vb 被熱層(弱) = Vc(現状)



図III-8 VF-34～38 平面及び断面図

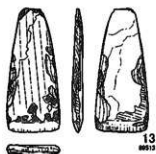
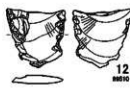
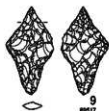
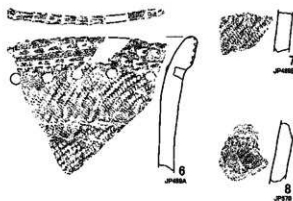
VH-17



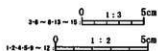
VGP-30



VSF-04



VF-31



図Ⅲ-9 VH・VGP・VSF・VF 出土遺物

## VF-34 (図Ⅲ-8 図版 21-1・3)

位置：E-48区 検出層位：VbL 規模：39×(25)×7cm 平面形：不整形

確認・調査 VFCB-05 範囲のほぼ中央に検出した。VFCB-05 を精査中に不整形な赤色化した範囲を検出し、トレンチで断面確認を行ったところ、皿状に被熱層が広がり付帯黒色土を伴っていたことから焼土とした。被熱層の1層には炭化物、2層には炭化物とフレイク・チップが混じる。

## VF-35 (図Ⅲ-8 図版 21-2・4)

位置：C-46区 検出層位：VbM 規模：88×68×10cm 平面形：不整形

確認・調査 VFCB-06 の範囲内で検出した。焼土周辺には被熱礫が分布する。平面は不整形、断面形はほぼ皿状で一部根による落ち込みがある。1層からはVFCB-06 起源の被熱礫、フレイク・チップが多く出土する。被熱層はVb層中位からVc層まで達している。本遺構においては周辺の遺物出土状態から、フレイク・チップ集中に伴う焼土で、作業場的な空間であったと思われる。

## VF-36 (図Ⅲ-8 図版 21-5・7)

位置：C-46区 検出層位：VbM 規模：57×49×7cm 平面形：楕円形

確認・調査 VF-35 の南東約 3.4m の位置に検出した。平面は円に近い楕円形である。断面は皿状ではあるが付帯黒色土の発達はなく、燃焼面に伴う微細遺物も出土していない。

## VF-37 (図Ⅲ-8 図版 21-6・8)

位置：G-48区 検出層位：VbL 規模：54×42×7cm 平面形：不整形

確認・調査 Vb層下位を調査中、不整形な褐色プランを確認した。トレンチで断面確認すると弱い被熱層で色調も褐色から暗褐色を呈する。断面は皿状で周辺には被熱礫が分布する。

## VF-38 (図Ⅲ-8 図版 21-9・10)

位置：F-47区 検出層位：Vc 規模：48×21×5cm 平面形：楕円形

確認・調査 VF-37 の東側にある倒木痕上に検出した。検出層位は倒木痕のため確定は難しいが、レベル的にはVc層検出と思われる。被熱層は極めて弱い発達で、断面には付帯黒色土が認められない。Vb層では被熱礫が出土しているが、本遺構との関連性は不明である。

(矢野)

## 第5節 Tピット

(図Ⅲ-10～59 図版 22～55 67-16～18 68 69)

**検出および調査** 平成 26～28 年度にかけてTピットは 138 基検出している。ショロマ1遺跡全体では 188 基検出しているため、過半数が遺跡北側に集約されていることがわかる。

調査は基本的にVcからVI層で黒色プランを確認、短軸で半截、断面写真、断面記録、完掘、完掘写真という工程で行っている。しかし、Vb層上位で掘り上げ土を検出したものについては、掘り上げ土の平面記録をとった後にベルトを残して周囲を掘り下げTピットとの層位関係の把握に努めている。

### 形態分類

Tピットの形態分類は、坑底面平面形の長短比および杭穴の有無を基準とする『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』（苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987）での分類案を基に、長短比数値に若干の変更を加えた厚幌1遺跡（町教委 2004）での分類を補足し、細分を含め8タイプに分けた。

A型：長短比が8以上で、長さに対して幅が狭い溝状のタイプ。

A1a型 長軸が2m以上で杭穴がないもの。

A1b型 長軸が2m以上で杭穴があるもの。

A2a型 長軸が2m未満で杭穴がないもの。

A2b型 長軸が2m未満で杭穴があるもの。

B型：長短比が4以上、8未満のもので長楕円形のタイプ。

B1型 杭穴がないもの B2型 杭穴があるもの

C型：長短比が4未満のもので、楕円形から円形に近いもの。

C1型 杭穴がないもの C2型 杭穴があるもの

**形態** 今回検出したTピットの形態分類の内訳はA1a型50基、A2a型17基、B1型33基、C1型11基、C2型24基、計測不明3基の合計138基である。これにより長短比が8以上のA型が67基と約半数近く占めていることがわかる。次いでC型が多く、3分の2は逆茂木もしくは逆茂木跡（杭穴）を伴っている。B型は全て1型で平成27年度調査に多く、主に中央から東側に分布域を示す。深さについては地点によって堆積状態が異なり、確認面からの遺跡の比較で対象に適していないが、一番浅いものはTP-182の40cmである。このほか隣接するTP-183も41cmであるが、斜面の崖錐堆積物が厚く、プランを検出するためにVI層上面まで掘り下げたため、実際はこれほど浅くはない。80cm以下のTピットは上記を含めて9基で、大半が80cm以上、V層包含層の層厚を考慮すると100cm以上の掘り込みがあったものと思われる。

**堆積状態** Tピット覆土の堆積についてはV層の概要でも述べているように、Ta-d フォールユニットと二次堆積の2つに大きく分かれる。この二次堆積はショロマ川からの洪水層により北西-南東方向に流路を形成している。そこで形態ごとの堆積状態をTa-d テフラ堆積環境と合わせて下記に記す。

**A1型** 二次堆積が認められる断面では、基本的に坑底面は黒色土もしくは黒色土を主体とした層が薄く堆積し、その上位にVIIb、VIIc層が互層堆積を成す。上位はV層～VI層主体でTP-51・53



のように半分より上で漏斗状に開くものと TP-53・133 のように坑底面付近から緩やかに開口するものがあるが、前者の方が多い。坑底面から半分近くまで崩落していないのは、二次堆積物主体の砂層が非常に硬く締まっているのが要因と思われる。また、TP-120 のように壁面が一気に崩落するものもあり、TP-175 においては掘削途中で大きく崩落している。

A 型二次堆積 TP-51・53～55・58・120・127・133・134・136・137・147・175

A 型二次堆積+フォールユニット TP-84・86・97・100・109・117・118・122・130

A 型フォールユニット TP-59・60・62・69・73・77・80・83・89・90・93・95・99・106・111～113・116・126・140・142～144・148～152・154～156・158～160・163・166・169・170・172～174・180・181・185・188

B 型 A 型とほぼ同じ堆積状態を示しており、坑底面に V 層黒色土主体層がみられるものが多い。断面形状は坑底面から開口部に向けて直線状に開くものが多く、上位半分で漏斗状に開くものは少数である。二次堆積とフォールユニットでの崩落相違点は見られない。

B 型二次堆積 TP-52・57・119・128

B 型二次堆積+フォールユニット TP-63～68・82・87・96・115・123・129

B 型フォールユニット TP-70・71・75・76・79・85・91・92・94・98・102～104・110・121・124・132

C 型 二次堆積に構築されたものは 2 基と少ない。円形から楕円形を呈するこのタイプは Vb 層上位に掘り上げ土が認められるものが多い。坑底面に薄く黒色土主体層が堆積するのは A・B 型に共通する要素で、その上に中位まで Ta-d2 テフラが大きく崩落している。覆土上位は V～VI 層主体で、掘り上げ土が周辺にあるものについては流れ込みが認められる。

C 型二次堆積 TP-56・114

C 型二次堆積+フォールユニット TP-88・107・108

C 型フォールユニット TP-61・72・74・81・101・105・125・135・138・139・141・145・146・153・157・161・162・164・165・167・168・171・176～179・182・183・186・187

分布と配列 平成 26～28 年度の調査区は B 区の高位段丘面が南側に張り出し、低位段丘面は両河川に挟まれるように標高約 70m の平坦面を形成している。微地形では低位段丘面東側に浅く窪む「だるみ」地形が認められる。Tピットの配列は大きく低位段丘面の東から西方向へ弧状を描いて分布している。配列は大きく 8 列に細分され、主要な配列をなす Tピットは A 型・B 型で形成される（図Ⅲ-56 参照）。

①は B1 型主体の 18 基で構成され、調査区東側の南西-北東軸の「だるみ」地形に沿って構築される。TP-71 を最後に西側への分布が途切れる。配列上にある TP-60・100・101・116 を除いて B1 型であるため、ほぼ同時期の所産であると思われる。

②A1a 型で構成される一群。高位段丘面裾から西側に向かって 7 基で構成される。方向はいずれも斜面向かって直交する形で構築される。間隔は 4～5m と 8～9m 前後と幅がある。TP-83 の東側にも Tピットがまとまって検出されているが、方向や間隔から本群に含めていない。

③B1 型 10 基で構成される一群。位置的には高位段丘面裾の一番張り出した地点から西側に向かっているため、②と配列が一部交差する。B1 型が主体と言うほかは、方向や配列が途切れる地点も②とほぼ同じ。

④調査区北西側に位置し、A1a 型 6 基で構成される。台地の中央付近からショロマ川浸食崖に向かって直線状にみられる。間隔は 6～10m で、比較的等間隔に近く構築されている。南東

には配列②が同一ラインの延長上にみられるが、約28m離れているため別配列とした。

⑤調査区北西側で段丘縁辺部に弧状の配列を成す一群。主にA1a型8基で構成され、④とはTピットの軸方向が異なり、間隔も⑤の方が密であるため別配列とした。

⑥調査区北西側のほぼ中央付近に、南東-北西軸で直線状に配列を成す一群。4基のみであるため配列を示すには少数であるが、段丘崖裾に直交するようにTピットの軸方向が構築されていることから、まとまりある一群と考えられる。

⑦調査区北西側で高位段丘面の段丘崖裾に沿って配列する9基の一群。全てC2型で規模が小さく、それぞれの距離が15m前後離れているもので構成されている。規模や構築地点の同一性から同時期に構築された可能性も考えられる。

⑧高位段丘面にみられる配列。元々Tピットの検出は少ないが、A1a型が南北方向に3基並列している。このほかC2型が東西方向に並列しているが、2基のため配列に含んでいない。

以上のようにシヨロマ1遺跡の北側に広がるTピットはA、B型を主体として配列が認められるため、複数で利用した可能性が高い。それに対しC型は単独であることが多く、時期以外に狩猟形態も異なる可能性が看取できる。 (奈良)

#### 出土遺物 (図Ⅲ-57~59 図版 67-16~18 68 69)

[TP-125] (図Ⅲ-57-1・2 図版 67-16・17) 1・2は逆茂木。1は木芯に空洞を残す心持材を素材としている。図示した正面を除いて長い切削痕が残されている。2は木芯部が一部腐食して空洞化している。心持材で、縦に「割れ」がみられる。上端部には1同様、折り取られた痕跡を残す。図示した正面と側面以外にも長い切削痕がみられる。下端部にはさらに細かな切削痕が残る。

[TP-135] (図Ⅲ-57-3 図版 67-18) 3は表皮が残存せず、木芯に空洞を残す心持材の逆茂木である。上端部は腐食・黒化している。図示した正面は残存部中央から下端にかけて長い切削痕が残る。切削痕の断面は窪む。この面以外は粗く短い切削痕が残されるのみである。本資料はKP01から出土したものであるが、KP02からも逆茂木と考えられる木片が出土しているが、細片であるため、図示しなかった。

[TP-138] (図Ⅲ-57-4~7 図版 68-1~4) 4~7はⅢ群B2類a種の土器で同一個体である。4の口唇部は隅丸角状で、口縁部は波状をなし5の破片は口縁部付近の資料で外反している。7の底部は外傾して立ち上がるが、6の胴部で張り出し口縁部に向かって内傾する。地文は結束第2種0段多糸LR斜行縄文である。7の底部片から地文は底部側縁まで及んでいることがわかる。

[TP-151] (図Ⅲ-58-8~11 図版 68-5~8) 8・9はⅢ群B2類a種の同一個体で、口縁部と胴部に貼付帯を巡らせ、貼付体上に3条1対のLR縄線文を施す。地文は0段多糸縦走縄文、さらに貼付帯間にLR側面圧痕を3段施し、うち2段は2条1対である。内面はやや粗雑なヘラナデで整形されている。10・11はⅢ群B3類b種の同一個体である。隆起帯上に弧状の縄文原体側面圧痕文と上下には回転方向を変えたRL斜行縄文が施される。地文は隆起帯を挟んで横走気味の羽状構成をなす。11の内面は剥落している。

[TP-167] (図Ⅲ-58-12 図版 68-9) 9は表皮が残存せず、上端部は腐食し丸みを帯びる。木芯に空洞を残す心持材を素材としている。全体に腐食による黒化が著しい。図示した正面から

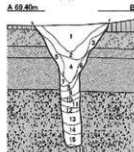
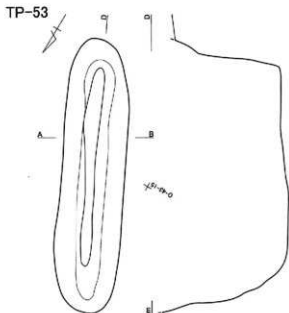
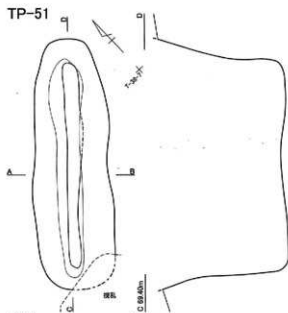
側面にかけて長い切削痕が残るが判然としない。下端部はさらに細かく削られている。(宮塚)  
 [TP-168] (図Ⅲ-58-13~17 図版 69-10~14) 出土した剥片石器 5 点の形態は類似した木葉形を呈する。尖頭部の調整などから、13~16 は石槍、17 は両面調整石器に分類した。13 の裏面基部には尖頭部より細かな剥離が見られ、基部を作出している。上端部からの打撃で尖頭部右側縁を欠損している。尖頭部は現存する部分から錯交剥離、基部も同様である。14 は裏側に主剥離面を大きく残しているが、基部は両面調整されている。尖頭部・基部ともに、裏面からの剥離によって仕上げられている。基部の表面には黒褐色の付着物が認められる。15 は裏面に一部素材の主剥離面を残す。基部は両側縁ともに急角度の裏側からの剥離によって稜が作出されている。尖頭部は錯交剥離によって仕上げられている。16 は縁辺のほぼ全周に微細剥離がみられる。正面の一部に素材の主剥離面を残し、横長の剥片を素材にしたことがわかる。17 は尖頭部が作出されておらず、側面観も湾曲しているため両面調整石器とした。

本遺構は石槍の未成品と完成品の集中と思われ、類似資料が近隣の苫小牧市静川 25 遺跡でも報告されている(苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002a)。(矢野)

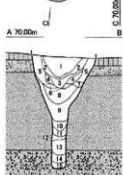
[TP-169] (図Ⅲ-59-18~20 図版 69-15~17) いずれもⅢ群 B2 類 a 種で、18 は平縁で小型の山形突起をもち、口縁部には貼付帯を配する。貼付帯上には 2 条 1 対の縄線文が施される。地文は 0 段多条 LR 斜行縄文である。19 と 20 は同一個体。2 個 1 対の山形小突をもち、口唇上に刺突文が施され、平縁部分は、刺突文の間に縄線文が施される。地文は 0 段多条 LR 斜行縄文。

[TP-176] (図Ⅲ-59-21-22 図版 69-18-19) 21 の現存部からは表皮は残っていない。上半部は腐食し丸みを帯びる。出土状態をみると、21・22 とも杭穴の下半部が空洞になっており、逆茂木の下端部が腐食して失われたことが看取される。木芯に空洞がみられる心持材である。下端部は 2 側縁に明瞭な切削痕が認められる。22 は、21 同様に表皮は残存せず、木芯に空洞のみられる心持材である。下端部 3 側縁に比較的長い切削痕を残すが上半は腐食のため切削痕が不明瞭である。他の 1 面(図右側面)には切削痕は認められない。

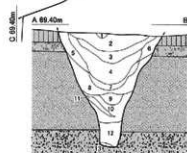
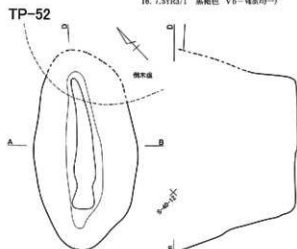
[TP-178] (図Ⅲ-59-23-24 図版 69-20-21) 23 は KP01 から出土したもので、本遺跡から出土した逆茂木のうち最大径を測るもので、現存部の直径は 57.5mm である。また、唯一表皮が残っていたもので木芯に空洞がみられる心持材である。KP01 の下端には空洞は見られず、黒褐色の泥炭層を挟む粘土層(IX層)まで達していた。下端部の切削痕は全周に及び、稜も明瞭である。24 は KP02 から出土したもので木芯に空洞がみられる心持材である。下端の切削痕は偏っており一側縁を主体的に削って先端部を作出している。切削痕は側面の一部にもみられる。KP02 の下端には空洞があり、24 は引抜かれた可能性がある。(宮塚)



- TP-51**
1. 7.5V92/1 黒色 Vb=Vb(φ31均一)
  2. 10V93/3 暗褐色 Vc=VI(段状)
  3. 10V94/4 褐色 VI=VII(ブロック状)
  4. 10V93/4 暗褐色 V-VI=VII(φ201 段状)
  5. 7.5V94/3 褐色 VIIb=V(ブロック状)-VIIa(段状)
  6. 7.5V95/6 明褐色 VIIa=VII(ブロック状)
  7. 7.5V94/4 褐色 VIIa=V(段状)
  8. 7.5V93/1 黒褐色 V=VIIa(ブロック状)
  9. 7.5V94/3 褐色 VIIb=V(段状)
  10. 10V93/2 黒褐色 VIId=V(均一)
  11. 10V94/1 暗灰色 VIId=V(段状)
  12. 10V92/2 黒褐色 Vb=VII(均一)
  13. 7.5V94/1 暗灰色 VIId=V(段状)
  14. 7.5V92/2 黒褐色 Vb=VII(段状)
  15. 7.5V94/6 褐色 VIId=VII(段状)
  16. 7.5V93/1 黒褐色 Vb=VII(均一)

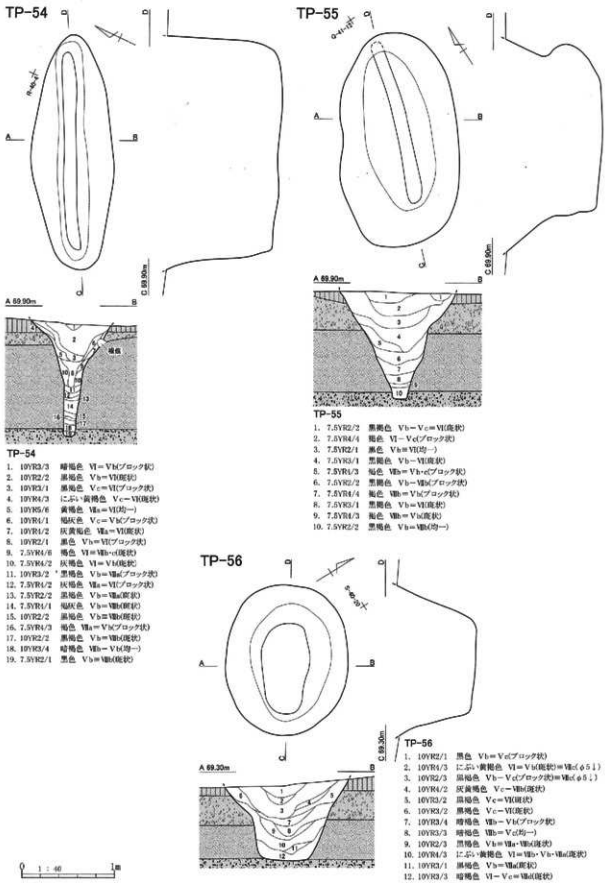


- TP-53**
1. 10V92/1 黒色 Vb=VIIb-c(均一)
  2. 10V93/4 暗褐色 Vc=VI(段状)
  3. 10V92/2 黒褐色 Vb=VII(段状)
  4. 10V91/1 褐色 Vc=VII(ブロック状)
  5. 10V93/6 黄褐色 VIIa=V(段状)
  6. 10V93/1 黒褐色 Vc=VII(段状)
  7. 10V94/4 褐色 VIIa=V(ブロック状)
  8. 10V94/3 にぶい黄褐色 VIIa=V(段状)=VII(φ101)
  9. 10V91/1 褐色 VIId=VII-c(段状)
  10. 10V92/1 黒褐色 Vb=VII(段状)
  11. 10V93/3 暗褐色 VIId=V(段状)
  12. 10V93/1 黒褐色 Vb=VII(段状)
  13. 10V94/6 褐色 VIId=V(ブロック状)
  14. 10V94/3 にぶい黄褐色 VI=V(ブロック状)
  15. 10V92/1 黒色 Vb=VIIb-c(均一)



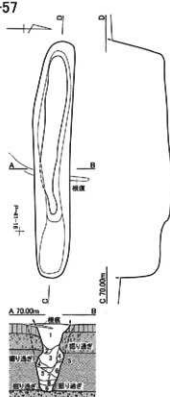
- TP-52**
1. 10V93/4 暗褐色 VI=V(段状)
  2. 10V92/1 黒色 Vb=VIIb-c(均一)
  3. 10V93/2 黒褐色 Vc=VII(均一)
  4. 10V92/1 黒褐色 Vc=Vb(段状)=VI(ブロック状)
  5. 10V91/1 暗灰色 VI=V(段状)
  6. 10V93/2 黒褐色 Vc=VII(均一)
  7. 10V94/2 灰黄褐色 Vc=VII(段状)
  8. 7.5V93/6 明褐色 VIIb=VII(段状)
  9. 7.5V94/3 褐色 VIIa=VII(ブロック状)
  10. 10V93/3 にぶい黄褐色 VIId=VIIb-c(段状)
  11. 10V93/1 暗褐色 Vb=VIIb-c(均一)しまりなし
  12. 10V92/1 黒色 Vb=VII(均一)
  13. 10V93/3 にぶい黄褐色 VIId=VII(段状)

図Ⅲ-10 TP-51～53 平面及び断面図



図III-11 TP-54～56平面及び断面図

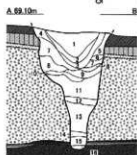
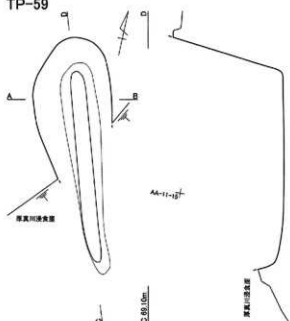
TP-57



TP-57

1. 10YR2/1 黒色 Vb=V<ブロック状
2. 10YR4/2 灰黄褐色 Vc=Vb<c(ブロック状)
3. 10YR3/2 黒褐色 V=Vb<c(底状)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Vt=Vb<c(底状)
5. 10YR3/1 黒褐色 V=Vb<c(均一)
6. 7.5YR3/3 褐色 Vb<c=V(均一)
7. 7.5YR3/3 暗褐色 V=Vb<c(底状)
8. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Vb<c(底状)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 V=Vb<c(底状)

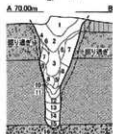
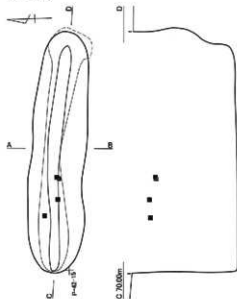
TP-59



TP-59

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb<c(均一)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Vb(均一)
3. 10YR4/6 褐色 Vb=Vt(ブロック状)
4. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=Vt(均一)
5. 10YR4/6 褐色 Vb=Vb(均一)
6. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(底状)
7. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Vt(底状)
8. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(底状)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
10. 7.5YR6/6 褐色 Vb=Vb(底状)
11. 5YR5/3 にぶい赤褐色 Vb=Vb<c(底状)
12. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb<c(均一)
13. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(底状)
14. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb<c(均一)
15. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(底状)
16. 7.5YR3/3 暗褐色 V=Vb<c(均一)

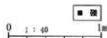
TP-58



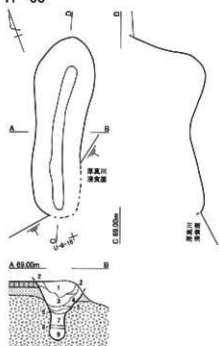
TP-58

1. 10YR2/4 暗褐色 Vt=Vc=シルト岩(6.5均一)
2. 10YR1.7/1 黒色 Vb=シルト岩(6.5均一)
3. 10YR2/3 黒褐色 V=Vt=Vb<c(均一)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 V=Vt=Vb(底状)
5. 10YR4/2 灰黄褐色 V=Vt=Vb<c(底状)
6. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vb(底状)
7. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=底層層
8. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb<c=底層層
9. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb=底層層
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 V=Vt=Vb<c(底状)
11. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb<c=底層層(底状)
12. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Vb=Vb(底状)
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色 V=Vt=Vb<c(底状)
14. 10YR3/2 黒褐色 V=Vb<c(均一)
15. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb=Vb(底状)
16. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=Vb(均一)

図III-12 TP-57～59平面及び断面図



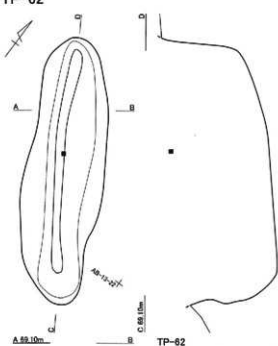
TP-60



TP-60

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vc(ブロック状)
2. 10YR5/6 黄褐色 Vt=Vc(底状)
3. 10YR5/4 にがい黄褐色 Vc=Vf(底状)
4. 10YR5/3 にがい黄褐色 Vt=Vb(底状)
5. 10YR3/4 暗褐色 Vc=Vf(均一)
6. 10YR5/3 にがい黄褐色 Vt=Vb(φ5)底状
7. 10YR3/1 暗褐色 Vc=Vb(φ5)底状
8. 10YR2/1 黒色 Vb=Vc(底状)
9. 10YR4/1 灰褐色 V=Vb(φ5~15 底状)

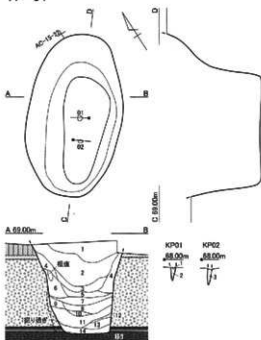
TP-62



TP-62

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vt-Vb(均一)
2. 10YR5/6 明黄褐色 Vt=Vt(ブロック状)
3. 10YR5/4 にがい黄褐色 Vb=Vt(底状)
4. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Vb(底状)
5. 10YR2/1 黒色 Vb=Vt-Vb(均一)
6. 10YR4/3 にがい黄褐色 Vb=Vt-Vb(底状)
7. 5YR4/4 にがい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
8. 10YR5/2 灰黄褐色 Vt=Vb(底状)
9. 5YR4/4 にがい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
10. 10YR5/4 にがい黄褐色 Vb=Vb(ブロック状)
11. 5YR4/4 にがい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
12. 10YR4/3 にがい黄褐色 V=Vb(均一)
13. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=V(底状)
14. 10YR4/3 にがい黄褐色 Vb=Vb=V(底状)
15. 10YR2/1 黒色 V=Vt(φ5)均一
16. 10YR3/2 暗褐色 V=Vb(底状)
17. 5YR4/4 にがい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
18. 5YR3/2 暗赤褐色 Vb=Vb=V(底状)
19. 5YR4/4 にがい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
20. 10YR3/4 暗褐色 V=Vb(均一)

TP-61



TP-61

1. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(φ5)均一
2. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(φ2)底状
3. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vt(ブロック状)
4. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vt(ブロック状)
5. 7.5YR4/3 黄褐色 Vb=Vt=Vb(ブロック状)
6. 7.5YR5/8 橙褐色 Vb=Vt(ブロック状)
7. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ2)底状
8. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=Vb=V(底状)
9. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb=V(底状)
10. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
11. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(φ5)均一
12. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=Vb(ブロック状)
13. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(φ5)底状
14. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb=V(底状)
15. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ2)底状

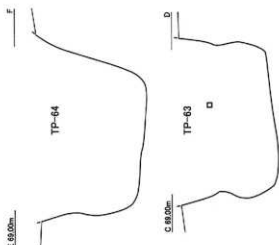
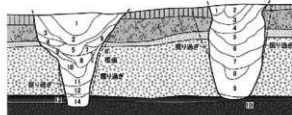
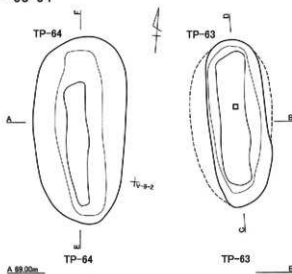
KP01-02

1. 7.5YR5/6 明褐色 Vt=Vb(φ5)底状
2. 10YR5/4 にがい黄褐色 Vt=Vb(均一)
3. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(φ2)均一



図III-13 TP-60～62平面及び断面図

TP-63・64



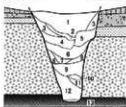
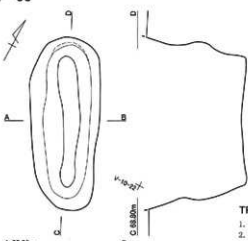
TP-63

1. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Ⅷa-b(均一)
2. 5YR6/6 褐色 Ⅷb=Ⅷ(ブロック状)
3. 7.5YR5/4 に近い褐色 Ⅷa-b=Ⅷa(斑状)
4. 7.5YR4/3 褐色 V1=Ⅷa-b(斑状)
5. 10YR3/4 暗褐色 Ⅷb=Ⅷa-b(均一)
6. 10YR4/4 褐色 Ⅷa 粘着層
7. 7.5YR5/3 に近い褐色 Ⅷa=Ⅷb(ブロック状)
8. 7.5YR6/4 に近い褐色 Ⅷb=Ⅷa(斑状)
9. 7.5YR6/6 褐色 Ⅷb=Ⅷa(ブロック状)
10. 10YR4/3 に近い黄褐色 Ⅷb=Ⅷa(斑状)

TP-64

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷa(均一)
2. 10YR1.7/1 褐色 Vb=Ⅷb(均一)
3. 5YR4/6 赤褐色 Ⅷa=Ⅷ(均一)
4. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Ⅷa(斑状)
5. 10YR5/6 黄褐色 Ⅷa=Ⅷ(ブロック状)
6. 10YR4/2 灰黄褐色 V=Ⅷa(均一)
7. 10YR3/2 黒褐色 V=Ⅷb=Ⅷa(斑状)
8. 10YR5/8 黄褐色 Ⅷa=Ⅷ(ブロック状)
9. 7.5YR5/3 に近い褐色 Ⅷa=Ⅷb(斑状)
10. 5YR5/4 に近い赤褐色 Ⅷb=Ⅷa(ブロック状)
11. 5YR5/6 明赤褐色 Ⅷb=Ⅷa(斑状)
12. 5YR5/8 明赤褐色 Ⅷb=Ⅷa(斑状)
13. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷb(斑状)
14. 7.5YR5/4 に近い褐色 Ⅷa-b=Ⅷb(均一)

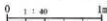
TP-65



TP-65

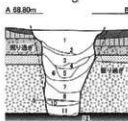
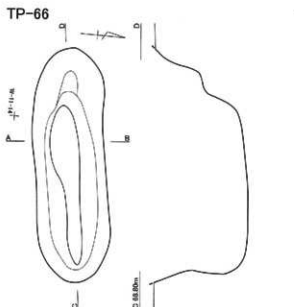
1. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅷb(φ5.1均一)
2. 7.5YR2/4 暗褐色 V1=Ⅷb(均一)
3. 10YR4/6 褐色 V1=Ⅷa(均一)
4. 10YR1.7/1 黒色 Vb=シルト岩(φ5.1均一)
5. 10YR4/4 褐色 V1=Ⅷ(均一)
6. 10YR4/4 褐色 V1=Ⅷ(均一)
7. 10YR4/4 褐色 V1=Ⅷ(均一)
8. 7.5YR5/8 明赤褐色 Ⅷb=Ⅷa(均一)
9. 10YR4/1 暗灰色 V=Ⅷa=Ⅷb(均一)
10. 10YR3/1 黒褐色 V=Ⅷa(均一)
11. 10YR3/2 黒褐色 Vc-V1=Ⅷa(均一)
12. 7.5YR7/6 褐色 Ⅷb 粘着層
13. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)

□ 礎石部



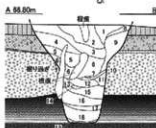
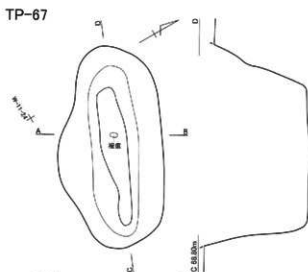
図Ⅲ-14 TP-63～65平面及び断面図





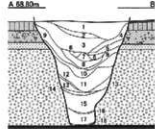
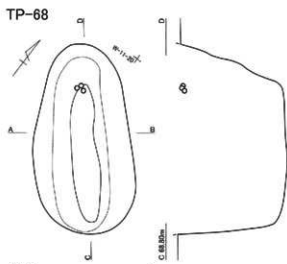
TP-66

1. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷa(極少量均一)
2. 10YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
3. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
4. 7.5YR3/1 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
5. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
6. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=Ⅷa+Ⅷa(均一)
7. 7.5YR4/4 褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
8. 7.5YR5/6 暗褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
9. 7.5YR3/1 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
10. 7.5YR4/4 褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
11. 7.5YR5/4 灰色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
12. 7.5YR3/1 暗褐色 V=Ⅷa(均一)



TP-67

1. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
2. 5YR2/6 暗赤褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
3. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
4. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
5. 7.5YR3/4 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
6. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷa(斑状)
7. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
8. 7.5YR2/2 暗暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
9. 7.5YR4/4 褐色 VI=Ⅷa(均一)
10. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
11. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
12. 7.5YR2/3 暗暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
13. 5YR4/4 灰色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
14. 7.5YR3/3 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
15. 7.5YR5/4 灰色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
16. 7.5YR4/2 褐色 Ⅷa+Ⅷa(グライ化-斑状)
17. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(グライ化-斑状)
18. 7.5YR4/3 褐色 Ⅷa+Ⅷa(グライ化-斑状)
19. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)



TP-68

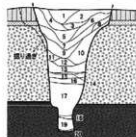
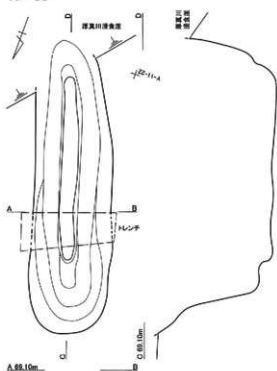
1. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
2. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
3. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
4. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=Ⅷa(斑状)
5. 7.5YR4/4 暗褐色 VI=Ⅷa(斑状)
6. 7.5YR4/2 暗褐色 Ⅷa(斑状)
7. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
8. 7.5YR2/3 暗暗褐色 V=Ⅷa(斑状)
9. 7.5YR1/6 褐色 VI=Ⅷa(均一)
10. 7.5YR4/3 褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
11. 7.5YR4/2 暗褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
12. 5YR2/6 暗暗褐色 Ⅷa=Ⅷa(斑状)
13. 5YR4/6 暗赤褐色 Ⅷa(斑状)
14. 7.5YR3/3 暗褐色 V=Ⅷa+Ⅷa(均一)
15. 5YR5/6 暗赤褐色 Ⅷa=Ⅷa(均一)
16. 7.5YR3/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
17. 5YR4/6 暗赤褐色 Ⅷa=Ⅷa(均一)
18. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)

○土層

0 1:40 1m

図Ⅲ-15 TP-66 ~ 68 平面及び断面図

TP-69

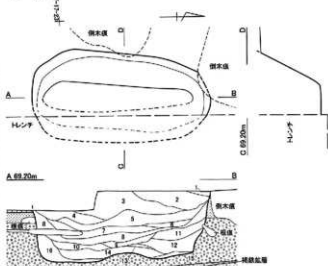


TP-69

1. 7.5YR2/1 黒色 Vb=VII(均一)
2. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb=VII(均一)
3. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=VII(塊状)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=VIIa,b(均一)
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb-VI=VII(塊状)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 VI=VII(ブロック状)
7. 10YR6/5 明褐色 VI=VII(ブロック状)
8. 10YR6/6 明褐色 VI=VII(a,b)1(塊状)
9. 7.5YR5.6 明褐色 VIIb=VII(ブロック状)
10. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(ブロック状)
11. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(塊状)
12. 10YR4/4 褐色 VI=VII(均一)
13. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(均一)
14. 7.5YR4/4 褐色 VIIb=VII(均一)
15. 10YR3/1 黒褐色 Vb=VII(a,b)2(均一)
16. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(均一)
17. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb 剥落層
18. 10YR2/2 黒褐色 Vb=VII(a,b)2(均一)
19. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(均一)
20. 10YR2/1 黒色 V=VIII(均一)



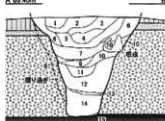
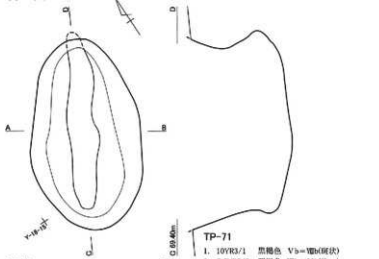
TP-70



TP-70

- |                              |                                 |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=VII(塊状)   | 9. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(ブロック状) |
| 2. 7.5YR4/4 褐色 VI=VII(塊状)    | 10. 7.5YR5/4 暗褐色 V=VII(均一)      |
| 3. 7.5YR5/8 明褐色 VIIb=VII(塊状) | 11. 7.5YR5/4 にぶい褐色 VIIb 剥落層     |
| 4. 7.5YR3/3 暗褐色 VIIb-VI(塊状)  | 12. 7.5YR5/8 褐色 VIIb 剥落層        |
| 5. 7.5YR2/1 黒色 V=VII(均一)     | 13. 7.5YR3/3 暗褐色 V=VII(塊状)      |
| 6. 7.5YR4/6 褐色 VIIb-VI(塊状)   | 14. 7.5YR4/2 灰褐色 V=VII(均一)      |
| 7. 7.5YR3/4 暗褐色 V=VII(均一)    | 15. 7.5YR3/2 黒褐色 V=VII(均一)      |
| 8. 7.5YR4/2 灰褐色 VIIb=VII(塊状) | 16. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb 剥落層       |

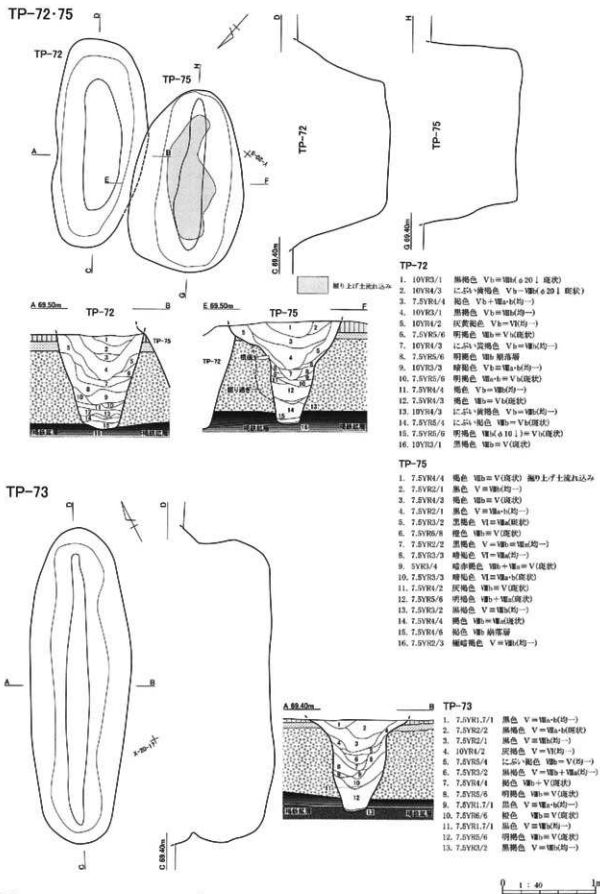
TP-71



TP-71

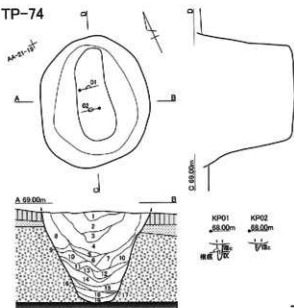
1. 10YR3/1 黒褐色 Vb=VII(塊状)
2. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(均一)
3. 10YR3/1 黒褐色 Vb=VII(塊状)
4. 7.5YR5/6 明褐色 VIIb=VII(均一)
5. 10YR2/1 黒色 Vb=VII(塊状)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Vb+VIIb=VII(均一)
7. 10YR5/6 黄褐色 Vb+VIIb(均一)
8. 10YR3/1 黒褐色 Vb=VII(均一)
9. 10YR4/2 次黄褐色 Vb=VII(均一)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=VII(均一)
11. 10YR3/1 黒褐色 Vb=VII(a,b)(均一)
12. 7.5YR6/6 褐色 VIIb=VII(塊状)
13. 10YR4/4 褐色 Vb=VII(均一)
14. 7.5YR6/6 褐色 VIIb=VII(均一)
15. 10YR2/1 黒色 V=VIII(均一)

図III-16 TP-69～71平面及び断面図



図III-17 TP-72・73・75 平面及び断面図

TP-74



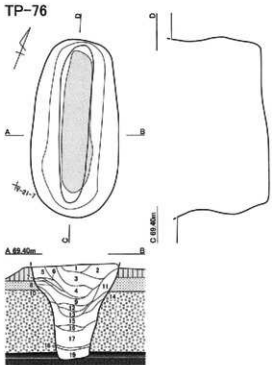
TP-74

1. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(α10) 斑状
3. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(斑状)
4. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
5. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状)
6. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
7. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状)
8. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状)
9. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状)
11. 7.5YR5/4 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状)
12. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状)
13. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
14. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状)
15. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
16. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(α10) 均一
17. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Vb(斑状)
18. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(α20) 斑状
19. 10YR2/2 黒色 Vb=Vb(α20) 均一

KP01-02

1. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一) 土が少し凝り粘

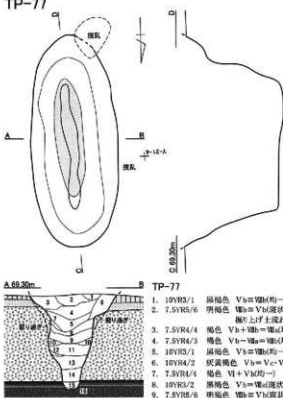
TP-76



TP-76

- |                                    |                              |
|------------------------------------|------------------------------|
| 1. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状)        | 10. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状) |
| 2. 10YR2/1 黒褐色 凝り上げ土或は込み Vb=Vb(均一) | 11. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(斑状)    |
| 3. 7.5YR5/6 褐色 Vb=Vb(斑状)           | 12. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(斑状)    |
| 4. 7.5YR5/2 灰黄褐色 Vb=Vb(斑状)         | 13. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(斑状)    |
| 5. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=Vb(斑状)          | 14. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(均一) |
| 6. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(均一)           | 15. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状) |
| 7. 10YR5/2 灰黄褐色 Vb=Vb(均一)          | 16. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(均一)    |
| 8. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=Vb(均一)        | 17. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状) |
| 9. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)           | 18. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)    |
|                                    | 19. 7.5YR5/4 に赤い褐色 Vb=Vb(斑状) |

TP-77



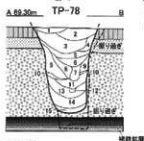
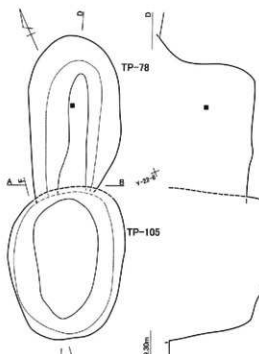
TP-77

1. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
2. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状) 凝り上げ土或は込み
3. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Vb(斑状)
4. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(均一)
5. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
6. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=Vb(均一)
7. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Vb(均一)
8. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Vb(斑状)
9. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状)
10. 7.5YR5/3 に赤い褐色 Vb=b=Vb(斑状)
11. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=b=Vb(斑状)
12. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Vb(斑状)
13. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb=Vb(斑状)
14. 7.5YR5/4 に赤い褐色 Vb=b=Vb(斑状)
15. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(斑状)
16. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)



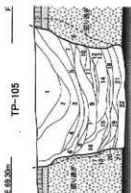
図Ⅲ-18 TP-74・76・77 平面及び断面図

TP-78・105



TP-78

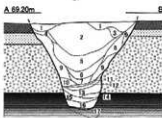
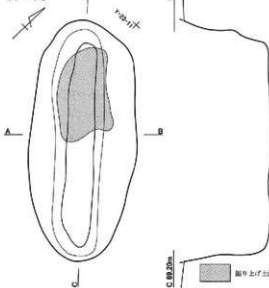
1. 10YR2/1 黒色 Vb=埋(均一)
2. 10YR3/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
3. 10YR3/1 黒褐色 Vb=埋(不均一)
4. 10YR4/3 に灰黄褐色 Vt 粘厚層
5. 7.5YR5/3 に灰褐色 Vb=埋(不均一)
6. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
7. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=埋(不均一)
8. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
9. 7.5YR5/8 棕色 埋
10. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
11. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=埋(不均一)
12. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
13. 7.5YR4/6 褐色 Vb=埋(不均一)
14. 7.5YR6/6 褐色 埋
15. 7.5YR2/1 黒色 Vb=埋(不均一)



TP-105

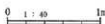
1. 10YR2/1 黒色 V=埋(均一)
2. 10YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
3. 10YR2/1 黒色 V=埋(均一)
4. 7.5YR4/4 褐色 Vb=埋(不均一)
5. 10YR2/2 黒褐色 V=埋(不均一)
6. 7.5YR5/3 に灰褐色 Vb=埋(不均一)
7. 7.5YR4/3 褐色 V=埋(不均一)
8. 7.5YR6/8 褐色 Vb=埋(不均一)
9. 10YR2/1 黒色 V=埋(不均一)
10. 7.5YR6/8 褐色 Vb=埋(不均一)
11. 10YR2/2 黒褐色 V=埋(不均一)
12. 7.5YR4/6 褐色 Vb=埋(不均一)
13. 10YR2/2 黒褐色 V=埋(不均一)
14. 7.5YR4/4 褐色 Vb=埋(不均一)
15. 10YR2/2 黒褐色 V=埋(不均一)
16. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=埋(不均一)
17. 10YR3/2 黒褐色 V=埋(不均一)
18. 7.5YR5/6 明褐色 V=埋(不均一)
19. 10YR2/3 暗褐色 V=埋(不均一)
20. 7.5YR5/6 明褐色 V=埋(不均一)
21. 10YR2/2 暗褐色 V=埋(不均一)
22. 7.5YR3/4 暗褐色 V=埋(不均一)

TP-79



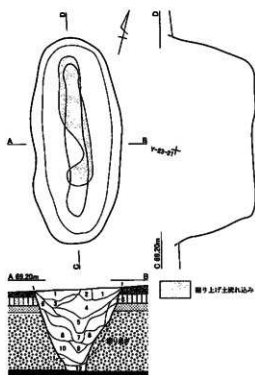
TP-79

1. 10YR2/1 黒色 Vb=埋(不均一)
2. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=埋(不均一)
3. 10YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
4. 10YR2/2 暗褐色 Vb=埋(不均一)
5. 10YR2/2 暗褐色 Vb=埋(不均一)
6. 10YR2/3 暗褐色 Vb=埋(不均一)
7. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=埋(不均一)
8. 10YR1/3 に灰黄褐色 Vb=埋(不均一)
9. 7.5YR4/6 褐色 Vb=埋(不均一)
10. 10YR5/4 に灰黄褐色 Vb=埋(不均一)
11. 10YR3/2 暗褐色 V=埋(不均一)
12. 10YR6/4 に灰黄褐色 Vb=埋(不均一)
13. 10YR5/8 黄褐色 Vb=埋(不均一)
14. 10YR7/8 黄褐色 埋
15. 10YR3/2 暗褐色 Vc=埋(不均一)
16. 10YR3/3 暗褐色 V=埋(不均一)
17. 10YR1.7/1 黒色 Vb=埋(不均一)



図三-19 TP-78・79・105 平面及び断面図

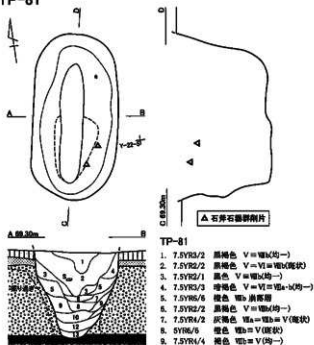
TP-80



TP-80

1. 10YR2/1 黒色 Vb=シルト岩(4.51)
2. 7.5YR2/8 黄褐色 Vb=層が上げ土入れ込み
3. 10YR1/1 黒褐色 Vb=V(均一)
4. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vc=V(泥状)
5. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均一)
6. 10YR3/4 暗褐色 Vt=V(均一)
7. 10YR2/2 黒褐色 V=Vb(均一)
8. 7.5YR3/8 明褐色 Vb=Vt(泥状)
9. 10YR4/1 褐灰色 Vb=V(泥状)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(泥状)
11. 7.5YR5/3 にぶい褐色 Vb=Vb(泥状)
12. 10YR6/6 黄褐色 Vb=V(均一)

TP-81

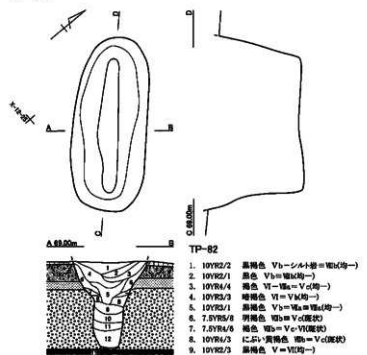


TP-81

1. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Vb(均一)
2. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Vt=Vb(泥状)
3. 7.5YR2/1 黒色 V=Vb(均一)
4. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Vt=Vb(均一)
5. 7.5YR5/6 褐色 Vb=層が上げ
6. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Vb(均一)
7. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=Vb=V(泥状)
8. 5YR6/6 褐色 Vb=V(泥状)
9. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(均一)
10. 7.5YR2/1 黒色 V=Vb(泥状)
11. 7.5YR4/4 にぶい褐色 Vt=Vb(泥状)
12. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(泥状)
13. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Vb(均一)

※ 断面図のSは遺跡点なし

TP-82



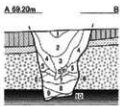
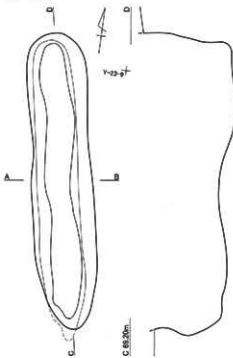
TP-82

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=シルト岩=Vb(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
3. 10YR4/4 褐色 Vt=Vb=V(均一)
4. 10YR2/3 暗褐色 Vt=Vb(均一)
5. 10YR2/1 黒褐色 Vb=Vb=Vb(均一)
6. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(泥状)
7. 7.5YR4/6 褐色 Vb=V(泥状)
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=V(泥状)
9. 10YR2/2 黒褐色 V=Vb(均一)
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Vc=Vb(均一)
11. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
12. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=V(泥状)
13. 10YR2/1 黒色 V=Vb(均一)



図三-20 TP-80 ~ 82 平面及び断面図

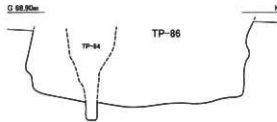
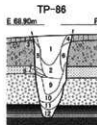
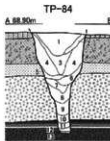
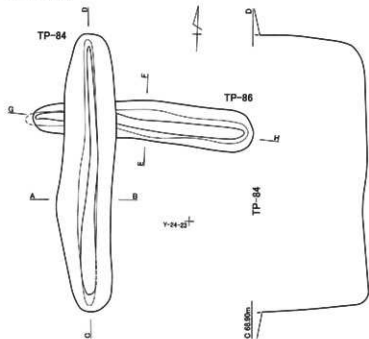
TP-83



TP-83

1. 10YR2/1 暗褐色 Vb=Ⅷa-b(底状)
  2. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷa-b(均一)
  3. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Ⅷa-b(底状)
  4. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷa(ブロック状)
  5. 7.5YR5/8 褐色 Ⅷb=Ⅷa(底状)
  6. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷa(ブロック状)
  7. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Ⅷa=Ⅷb=Ⅷc(ブロック状)
  8. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Ⅷa+b=Ⅷc(均一)
  9. 7.5YR6/4 にぶい褐色 Ⅷa+b=Ⅷc(均一)
  10. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Ⅷa-b(均一)
- ※断面図のAは地層点なし。

TP-84・86



TP-84

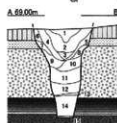
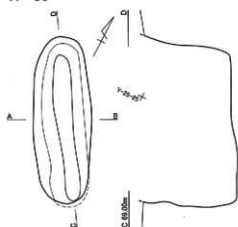
1. 10YR2/1 褐色 Vb=Ⅷa-b(均一)
2. 7.5YR5/3 にぶい褐色 Vb=Ⅷa-b(底状)
3. 7.5YR5/3 暗褐色 Vb=Ⅷa-b(均一)
4. 7.5YR5/3 にぶい褐色 Ⅷa=Ⅷb(均一)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Ⅷa(底状)
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb=Ⅷa(底状)
7. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb=Ⅷa-b(底状)
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Ⅷb(グライ化)積層層
9. 7.5YR4/4 褐色 Ⅷb=Ⅷc(均一)
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Ⅷa(底状)
11. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Ⅷa-b(均一)
12. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb=Ⅷa(ブロック状)
13. 10YR3/1 暗褐色 V=Ⅷa(均一)

TP-86

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅷ(ブロック状)
2. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷ(φ2)底状
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷ(均一)
4. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Ⅷ(均一)
5. 7.5YR5/8 明褐色 VI=Ⅷa(φ5)底状
6. 7.5YR5/8 明褐色 VI=Ⅷa(φ5)底状
7. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷb(φ5)底状
8. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷb(φ5)底状
9. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Ⅷ-Ⅷc(φ2)底状
10. 10YR6/3 にぶい黄褐色 Ⅷa=Ⅷb=Ⅷc(均一)
11. 10YR6/6 明黄褐色 VI=Ⅷb(φ2)均一
12. 7.5YR6/6 褐色 Ⅷa=Ⅷa(均一)

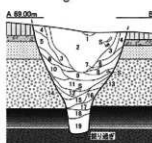
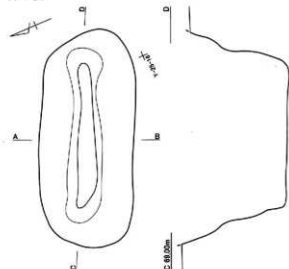
図Ⅲ-21 TP-83・84・86 平面及び断面図

TP-85



- TP-85
1. 10YR3/3 暗褐色 Vb-V(塊状)
  2. 10YR2/2 黒褐色 Vb-V(均一)
  3. 10YR2/1 黒色 Vb-V(塊一均一)
  4. 10YR3/3 暗褐色 Vb-V(塊状)
  5. 10YR4/4 褐色 Vb-V(ブロック状)
  6. 10YR5/4 に近い黄褐色 Vb-V(塊状)
  7. 10YR3/3 暗褐色 Vt=Vb-V(塊状)
  8. 7.5YR3/3 褐色 Vb=V(ブロック状)
  9. 10YR2/2 黒褐色 Vb-V(均一)
  10. 10YR2/3 黒褐色 Vb-V(均一)
  11. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(ブロック状)
  12. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(ブロック状)
  13. 10YR2/1 黒色 Vb=V(塊状)
  14. 10YR7/8 黄褐色 Vb=V(粘着層)
  15. 10YR2/1 黒褐色 V=V(塊状)

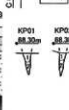
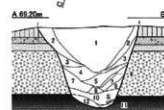
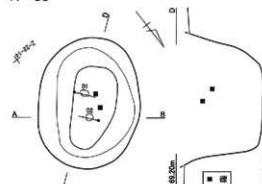
TP-87



- TP-87
1. 10YR4/4 褐色 Vt=Vc(均一)
  2. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
  3. 10YR3/3 暗褐色 Vt=Vt(均一)
  4. 10YR4/6 褐色 Vc-Vt=Vb(均一)
  5. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(均一)
  6. 10YR3/3 暗褐色 Vc-Vt=Vb(均一)
  7. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vc(均一)
  8. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vc(均一)
  9. 10YR4/1 暗褐色 Vb=V(均一)
  10. 10YR3/1 黒褐色 Vb=V(均一)
  11. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
  12. 10YR5/4 に近い黄褐色 Vb=V(均一)
  13. 10YR5/6 黄褐色 Vb=V(均一)
  14. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(均一)
  15. 10YR5/2 灰黄褐色 V=Vb(均一)
  16. 10YR2/2 黒褐色 Vc=Vb(均一)
  17. 10YR3/3 暗褐色 V=Vb(均一)
  18. 10YR5/2 灰黄褐色 V=Vb(均一)
  19. 10YR2/3 黒褐色 V=Vb(塊状)

※ 図中のSは埋没点なし

TP-88



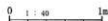
TP-88

1. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR3/3 暗褐色 Vt=V(均一)
3. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(均一)
4. 7.5YR4/4 褐色 Vt=V=Vb(均一)
5. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb=Vb(塊状)
6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vc-V(均一)
7. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(均一)
8. 7.5YR1/3 褐色 Vt=Vb(均一)
9. 7.5YR6/4 に近い褐色 Vb=V(均一)
10. 10YR2/3 暗褐色 V=Vb(均一)
11. 10YR2/2 黒褐色 V=Vb(塊状)
12. 10YR2/1 黒色 V=Vb(均一)

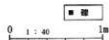
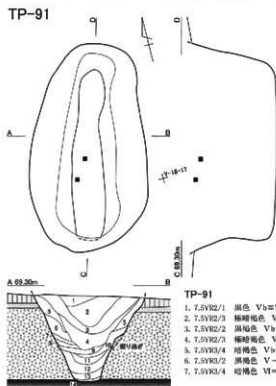
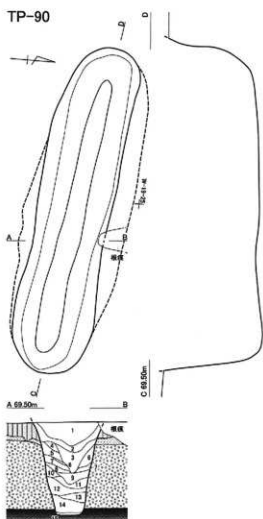
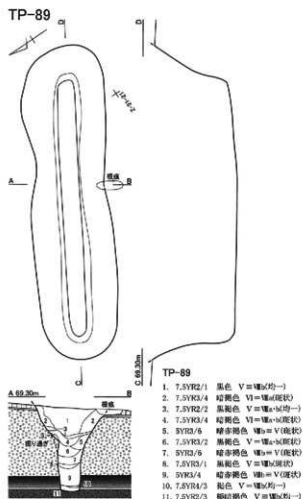
KP01-02

1. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(均一)
2. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(均一)

図Ⅲ-22 TP-85-87-88 平面及び断面図

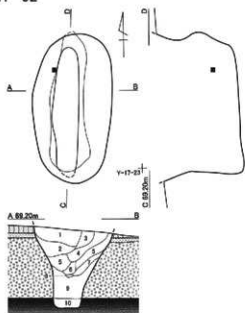






図Ⅲ-23 TP-89～91 平面及び断面図

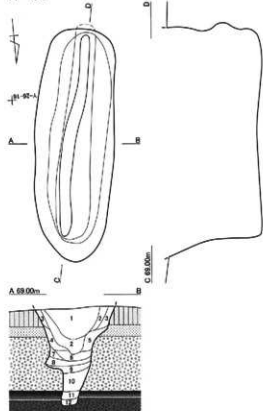
TP-92



TP-92

1. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷ(均一)
2. 7.5YR3/1 黒褐色 V=Ⅷ(均一)
3. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Ⅷa+b(均一)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷb(均一)
5. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Ⅷ(均一)
6. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Ⅷ(均一)
7. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb=Ⅷb(均一)
8. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Ⅷ(均一)
9. 7.5YR5/4 にごり褐色 Ⅷb=Ⅷ(均一)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅷb=Ⅷ(均一)

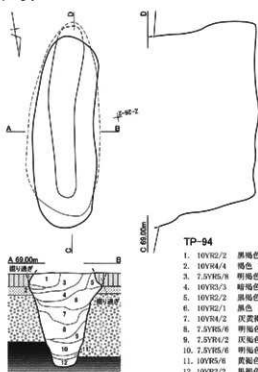
TP-93



TP-93

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅷb(φ51)斑状
2. 10YR2/2 濃褐色 Vb=Ⅷb(φ21)斑状
3. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷb(φ21)斑状
4. 10YR4/3 にごり黄褐色 VI=Ⅷb(ブロック状)
5. 10YR5/6 濃褐色 VI=V・Ⅷb(φ21均一)
6. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Ⅷb(ブロック状)
7. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷb=Ⅷb(ブロック状)
8. 10YR5/6 黄褐色 VI=Ⅷb(φ21)斑状
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb=Ⅷb(均一)
10. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb=Ⅷb(均一)
11. 7.5YR5/6 褐色 Ⅷb=Ⅷ(均一)
12. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅷb(φ51)斑状

TP-94



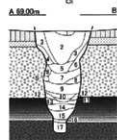
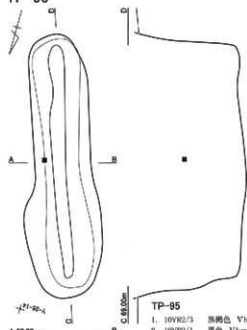
TP-94

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷb(φ10)斑状
2. 10YR4/4 褐色 VI=Ⅷb(φ21)斑状
3. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb=Ⅷb(均一)
4. 10YR3/3 暗褐色 VI=Ⅷb(φ51)斑状
5. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅷb(φ51)斑状
6. 10YR4/1 黒色 Vb=Ⅷb(φ21)斑状
7. 10YR4/2 灰黄褐色 VI=Ⅷb(均一)
8. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅷb=Ⅷb(均一)
9. 7.5YR4/2 灰褐色 VI=Ⅷb(均一)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅷb 粗層
11. 10YR5/6 黄褐色 VI=Ⅷb(φ51)斑状
12. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷb(φ21均一)

図Ⅲ-24 TP-92～94平面及び断面図



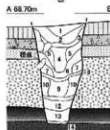
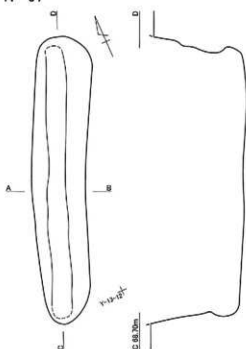
TP-95



TP-95

1. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Ⅴa(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb=シルト岩(φ5↓均一)
3. 10YR3/4 暗褐色 Vc=Ⅴl=シルト岩(φ5↓均一)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vt=Ⅴa(均一)
5. 10YR2/2 黒褐色 Vb=シルト岩(φ5↓均一)
6. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅴb=Ⅴa(均一)
7. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅴa(均一)
8. 10YR3/3 暗褐色 Vc=Ⅴa(均一)
9. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅴb=Ⅴa(均一)
10. 10YR4/2 灰黄褐色 Vc=Ⅴa(均一)
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vc=Ⅴa(均一)
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴa(均一)
13. 10YR5/8 明褐色 Ⅴb=Ⅴa(均一)
14. 10YR1/7 1 黒色 Vb=Ⅴa(均一)
15. 10YR5/6 明黄褐色 Ⅴb=Ⅴc(ワック状)
16. 10YR2/2 黒褐色 V=Ⅴa(均一)
17. 10YR2/1 黒色 V=Ⅴa(塊状)

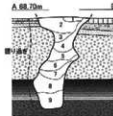
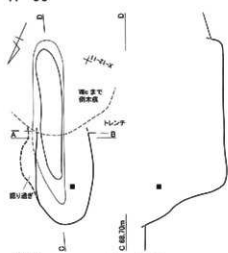
TP-97



TP-97

1. 10YR2/1 黒褐色 Vt=Ⅴl(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅴl(均一)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Ⅴl(塊状)
4. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅴl(塊状)
5. 10YR5/6 黄褐色 Vt=Ⅴa(均一)
6. 10YR6/4 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴa(塊状)
7. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅴb=Ⅴa(塊状)
8. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅴa(塊状)
9. 7.5YR4/3 褐色 V=Ⅴa(塊状)
10. 7.5YR6/6 褐色 Ⅴb=Ⅴa(塊状)
11. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅴa(均一)
12. 7.5YR4/3 褐色 V=Ⅴa(塊状)
13. 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴ(均一)
14. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅴa(均一)

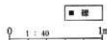
TP-96

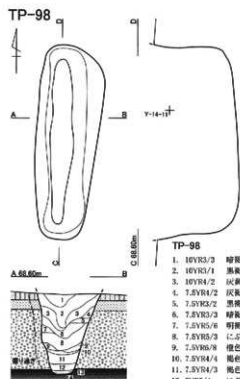


TP-96

1. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅴa(均一)
2. 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴl(均一)
3. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅴb=Ⅴl(塊状)
4. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Ⅴa(均一)
5. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Ⅴa(均一)
6. 7.5YR5/3 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴc(塊状)
7. 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴ(均一)
8. 7.5YR6/4 にぶい黄褐色 Ⅴb=Ⅴ(均一)
9. 7.5YR5/2 暗褐色 Ⅴc=Ⅴ(均一)

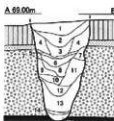
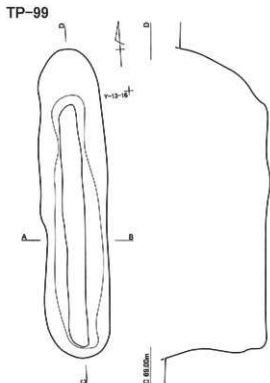
図Ⅲ-25 TP-95 ~ 97 平面及び断面図





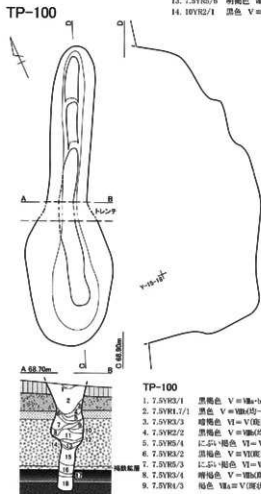
TP-98

1. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Ⅷa(均一)
2. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Ⅷb(均一)
3. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb-VI(均一)
4. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=VI+Ⅷa(均一)
5. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=VI+Ⅷa(均一)
6. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Ⅷa(均一)
7. 7.5YR5/6 明褐色 Ⅷb=Ⅷa(均一)
8. 7.5YR5/3 にごい・褐色 Ⅷa+b=V(均一)
9. 7.5YR6/8 橙色 Ⅷb=V(均一)
10. 7.5YR4/4 褐色 Ⅷb+V(均一)
11. 7.5YR4/3 褐色 Ⅷb+V(均一)
12. 5YR5/4 にごい・赤褐色 Ⅷb=V(均一)
13. 7.5YR6/6 明褐色 Ⅷa=V(ブロック状)
14. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)



TP-99

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅷa(φ51 底状)
2. 10YR3/2 暗褐色 Vb-VI=Ⅷb(φ2 ↓ 底状)
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Ⅷa(均一)
4. 10YR3/3 にごい・黄褐色 VI 層落層
5. 7.5YR2/3 にごい・褐色 Vb=Ⅷa(底状)
6. 10YR5/4 にごい・黄褐色 VI=V(ブロック状)
7. 7.5YR6/8 橙色 Ⅷb 薄落層
8. 7.5YR4/2 灰褐色 Ⅷa=Ⅷb(ブロック状)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb 薄落層
10. 7.5YR4/2 灰褐色 Ⅷa=Vb=Ⅷa(底状)
11. 7.5YR6/8 橙色 Ⅷb 薄落層
12. 10YR3/2 暗褐色 Ⅷa=Ⅷb(ブロック状)
13. 7.5YR5/8 明褐色 Ⅷb=Ⅷa(ブロック状)
14. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Ⅷb(底状)
15. 7.5YR4/4 にごい・赤褐色 Ⅷb=V(均一)

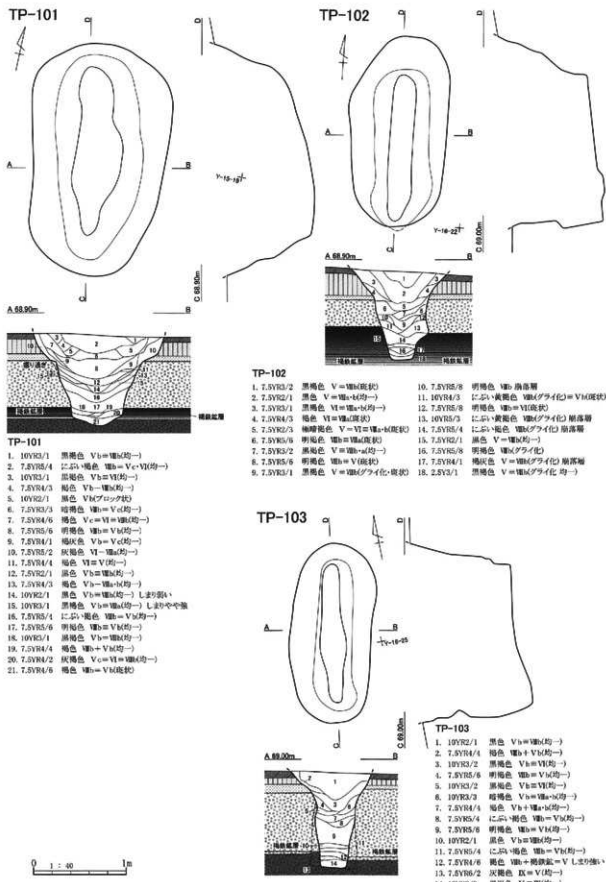


TP-100

1. 7.5YR3/1 黒褐色 V=Ⅷa+b(均一)
2. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷb(均一)
3. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=V(底状)
4. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Ⅷb(均一)
5. 7.5YR5/4 にごい・褐色 VI=V(底状)
6. 7.5YR3/2 暗褐色 V=Ⅷa(底状)
7. 7.5YR5/3 にごい・褐色 VI=Ⅷa=V(底状)
8. 7.5YR2/4 暗褐色 V=Ⅷa(底状)
9. 7.5YR4/3 褐色 Ⅷa=V(底状)
10. 7.5YR1/2 灰褐色 V=VI=Ⅷb(底状)
11. 7.5YR5/4 にごい・褐色 Ⅷb=V(底状)
12. 7.5YR3/1 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
13. 7.5YR4/3 褐色 V=Ⅷb=V(底状)
14. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷb(極少量 均一)
15. 7.5YR6/8 橙色 Ⅷb(シルト)=黄褐色シルト(底状)
16. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷb(均一)
17. 10YR5/6 黄褐色 Ⅷb=Ⅷa=VI(均一)
18. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷb(底状)

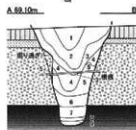
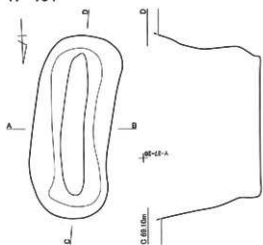
図Ⅲ-26 TP-98～100 平面及び断面図

0 1 : 40 1m



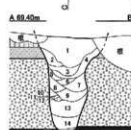
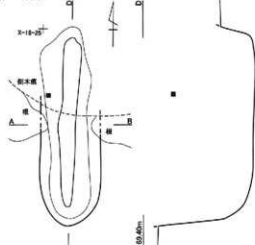
図三-27 TP-101 ~ 103 平面及び断面図

TP-104



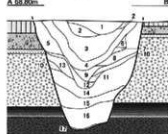
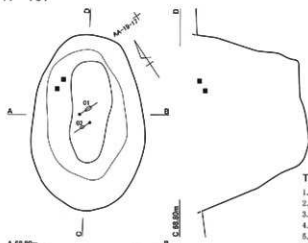
- TP-104
1. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Ⅷa(均一)
  2. 10YR2/1 黒色 Vb=Ⅷb(シルト貯・均一)
  3. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Ⅷa(均一)
  4. 7.5YR5/4 にごり褐色 VI=Ⅷa(底状)
  5. 5YR5/8 明赤褐色 Ⅷb=Ⅷa(ブロック状)
  6. 10YR3/1 黒褐色 V=Ⅷa(均一)
  7. 10YR6/6 明黄褐色 Ⅷc=Ⅷ(ブロック状)
  8. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
  9. 10YR5/4 にごり黄褐色 Ⅷc=Ⅷ(底状)

TP-106



- TP-106
1. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
  2. 7.5YR2/2 黒褐色 VI=Ⅷa-b(底状)
  3. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷa-b(均一)
  4. 7.5YR3/2 黒褐色 VI=Ⅷa-b(底状)
  5. 5YR3/8 暗赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  6. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Ⅷa(均一)
  7. 5YR2/4 暗赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  8. 5YR4/8 赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  9. 7.5YR2/2 黒褐色 V=Ⅷa(均一)
  10. 5YR4/8 赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  11. 7.5YR4/4 褐色 V=Ⅷa(均一)
  12. 5YR3/4 暗赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  13. 5YR4/6 赤褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  14. 7.5YR4/6 褐色 Ⅷb=Ⅷa(底状)
  15. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(均一)

TP-107

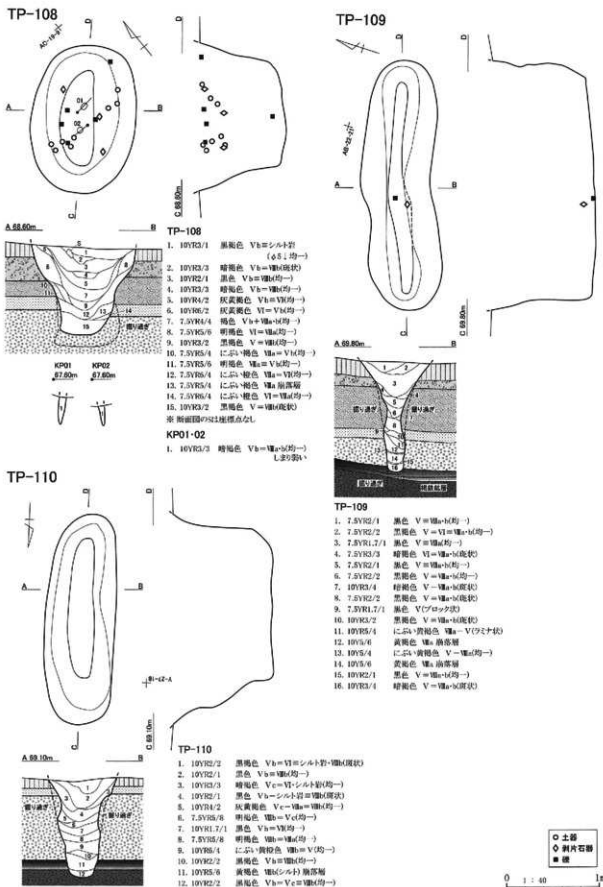


- TP-107
1. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
  2. 10YR3/3 暗褐色 VI=Ⅷa-b(均一)
  3. 10YR3/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
  4. 7.5YR1.7/1 黒色 V=Ⅷa(極少量)
  5. 7.5YR1/6 褐色 Ⅷ=Ⅷ(底状)
  6. 7.5YR3/3 暗褐色 VI=Ⅷ(底状)
  7. 7.5YR3/2 暗褐色 V=Ⅷ(底状)
  8. 7.5YR5/6 明褐色 VI=Ⅷa-b(均一)
  9. 7.5YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(均一)
  10. 2.5Y3/1 黄褐色 Ⅷc=Ⅷ(底状)
  11. 10YR4/6 褐色 Ⅷb=Ⅷ(底状)
  12. 7.5YR2/1 黒色 V=Ⅷa(均一)
  13. 7.5YR4/6 褐色 Ⅷb=Ⅷa-b(底状)
  14. 5YR4/4 にごり赤褐色 Ⅷb=Ⅷa=Ⅷ(底状)
  15. 10YR2/2 暗褐色 V=Ⅷa(底状)
  16. 10YR1/4 褐色 V=Ⅷa(底状)
  17. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Ⅷa(均一)

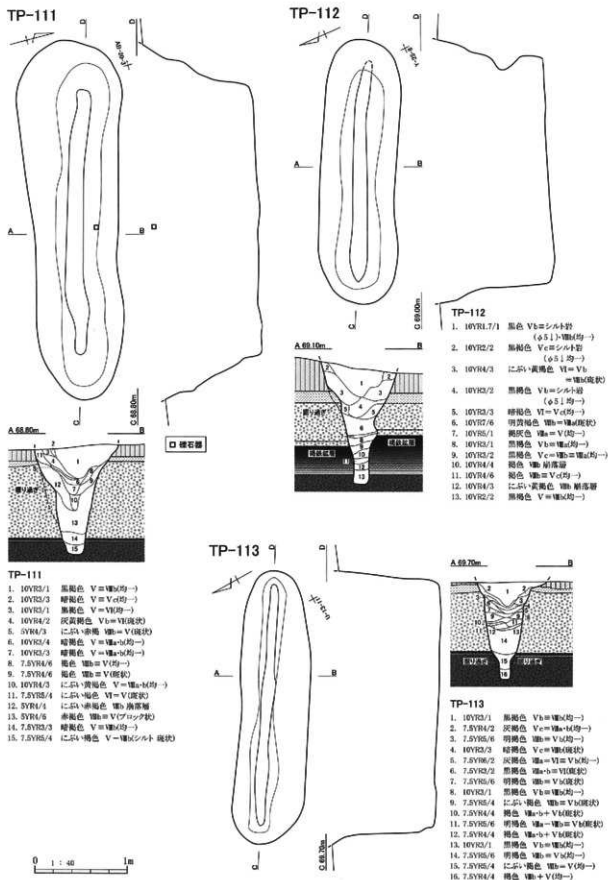
- KP01-02
1. 10YR2/1 黒色 V=Ⅷb(底状)
  2. 10YR1/1 灰褐色 Vb=ⅧE(貯・L2.0左)



図Ⅲ-28 TP-104・106・107 平面及び断面図



図Ⅲ-29 TP-108～110 平面及び断面図



図Ⅲ-30 TP-111 ~ 113 平面及び断面図



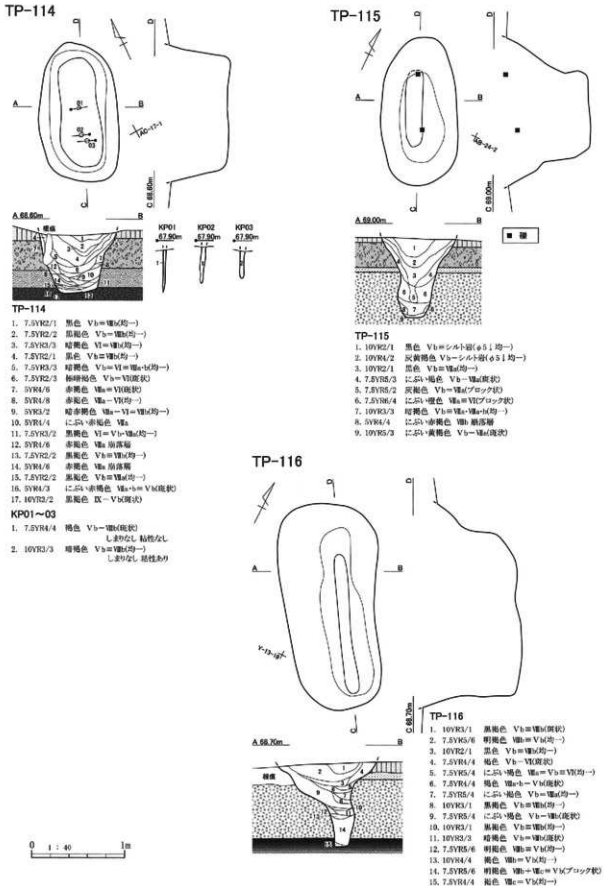
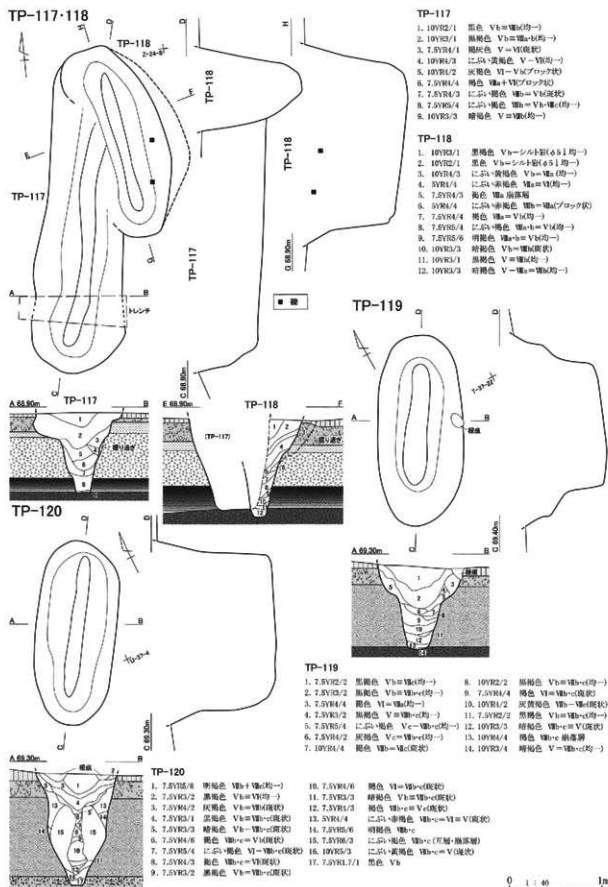
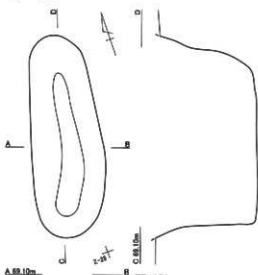


図3-31 TP-114 ~ 116 平面及び断面図



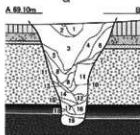
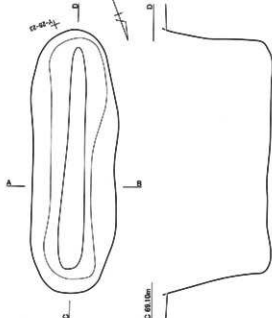
図Ⅲ-32 TP-117～120 平面及び断面図

TP-121



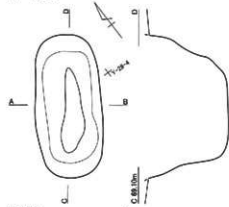
- TP-121
1. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=Vb=VI(均一)
  2. 10YR5/4 にごい黄褐色 Vb=VI=VII(底状)
  3. 10YR3/3 暗褐色 Vb=VI=VII(底状)
  4. 10YR2/2 黒褐色 Vb=シルト質(φ2) (均一)
  5. 10YR4/3 にごい黄褐色 VI=Vb=VII(底状)
  6. 10YR2/2 暗褐色 Vb=VII(底状)
  7. 10YR3/3 暗褐色 Vb=VI=VII(底状)
  8. 10YR5/4 にごい黄褐色 VI=Vb=VII(均一)
  9. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=VII(均一)
  10. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=Vb=V(均一)
  11. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(均一)
  12. 7.5YR4/1 暗灰色 Vb=V(均一)
  13. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(均一)
  14. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(均一)
  15. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=粘着層
  16. 10YR5/8 明黄褐色 Vb(シルト)=Vb(底状)
  17. 10YR2/1 黒色 Vb=VII(均一)

TP-122



- TP-122
1. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(底状)
  2. 7.5YR3/2 暗褐色 Vb=VII(均一)
  3. 10YR1/7/1 黒色 Vb=粘着層
  4. 10YR2/2 暗褐色 Vb=VI(均一)
  5. 10YR4/3 にごい黄褐色 VI=Vb(底状)
  6. 10YR4/4 褐色 VI=VII(底状)
  7. 7.5YR5/4 にごい黄褐色 Vb=VII(底状)
  8. 7.5YR3/2 暗褐色 V+VII=VII(底状)
  9. 10YR2/1 黒色 Vb=シルト質(均一)
  10. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
  11. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=粘着層
  12. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(均一)
  13. 7.5YR4/2 褐色 Vb=Vb(均一)
  14. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(互層)
  15. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=Vb(均一)
  16. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=粘着層
  17. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(互層)
  18. 10YR5/4 にごい黄褐色 Vb=Vb(均一)
  19. 10YR2/2 暗褐色 Vb=VII(底状)

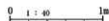
TP-123



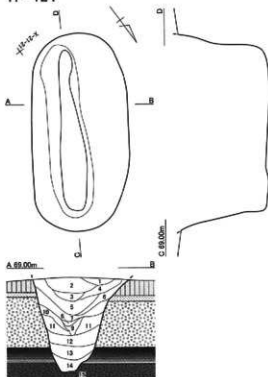
- TP-123
1. 10YR2/2 暗褐色 Vb=V(均一)
  2. 10YR5/4 にごい黄褐色 Vb=VII(均一)
  3. 10YR2/3 暗褐色 Vb=シルト質(φ5) (均一)
  4. 10YR3/1 暗褐色 Vb=VI=VII(均一)
  5. 10YR5/4 にごい黄褐色 VI=VII=Vb(均一)
  6. 10YR2/1 黒色 Vb=VII(均一)
  7. 10YR4/4 褐色 VI=VII(底状)

8. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=粘着層
9. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(底状)
10. 7.5YR4/6 褐色 Vb=VII=Vb(底状)
11. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=VII(均一)
12. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=VI=VII(均一)
13. 10YR2/2 暗褐色 Vb=VII(均一)

図III-33 TP-121 ~ 123 平面及び断面図



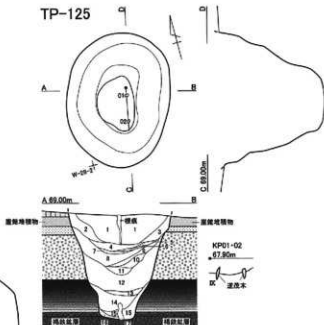
TP-124



TP-124

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(φ2)塊状
2. 7.5YR5/6 明褐色 Vb(φ5)均一→VI(塊状)
3. 10YR4/4 褐色 Vt=Vt(φ5)塊状
4. 10YR2/1 黒褐色 Vt+Vb=Vb(φ2)塊状
5. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
6. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vt(塊状均一)
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vt+Vb=Vb(ブロック状)
8. 10YR2/1 黒色 Vb=Vt(均一)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vt=Vt(均一)
10. 10YR4/2 灰黄褐色 Vb=Vt(均一)
11. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb=Vt(均一)
12. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vt=Vt(均一)
13. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
14. 10YR7/8 黄褐色 Vb=Vt(均一)
15. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vt(均一)

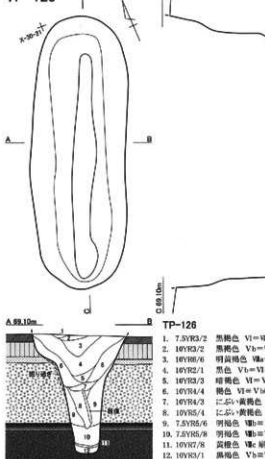
TP-125



TP-125

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(φ5)塊状
2. 10YR6/4 にぶい黄褐色 Vt=Vt(ブロック状)
3. 10YR7/4 にぶい黄褐色 Vt=Vt(ブロック状)
4. 10YR1/7/1 黒色 Vb=Vt(ブロック状)
5. 10YR7/3 にぶい黄褐色 Vt=Vt(ブロック状)
6. 10YR2/1 黒褐色 Vb=Vt=Vb(φ2)塊状
7. 10YR7/6 明黄褐色 Vb=Vt(均一)
8. 10YR6/2 灰黄褐色 Vb=Vb(φ2)均一=Vt(ブロック状)
9. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vt(ブロック状)
10. 10YR5/1 暗灰色 Vb=Vt=Vb(均一)
11. 10YR2/1 褐色 Vb=Vt(均一)
12. 10YR7/8 黄褐色 Vb=Vt(均一)
13. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(φ5)均一
14. 10YR7/6 明黄褐色 Vb=Vt(均一)
15. 10YR3/1 黒褐色 V=Vb(グライム/ブロック状)
16. 7.5YR6/8 棕色 Vb=Vt(均一)
17. 7.5YR2/3 暗褐色 V=Vb(塊状) 柱礎

TP-126



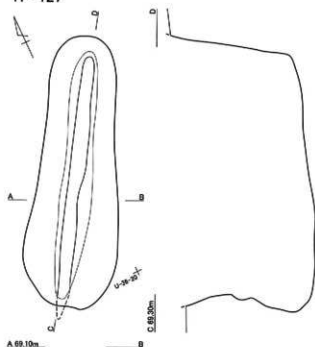
TP-126

1. 7.5YR3/2 暗褐色 Vt=Vt(φ5)均一
2. 10YR3/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)
3. 10YR6/6 明黄褐色 Vb=Vb(ブロック状)
4. 10YR2/1 黒色 Vb=Vt=Vb(φ2)均一
5. 10YR3/2 暗褐色 Vt=Vt=Vb(φ2)均一
6. 10YR4/4 褐色 Vt=Vt(ブロック状)
7. 10YR4/2 にぶい黄褐色 Vt=Vt(均一)
8. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Vt=Vt=Vb(φ5)均一
9. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(ブロック状)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vt(均一)
11. 10YR7/8 黄褐色 Vb=Vt(均一)
12. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)

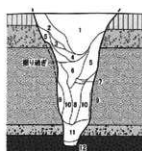
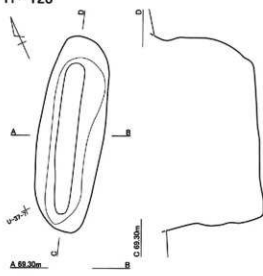
図Ⅲ-34 TP-124～126 平面及び断面図

0 1 : 40 1m

TP-127

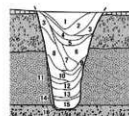


TP-128



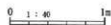
TP-127

1. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vl=Vlc(皮状)
3. 7.5YR4/4 褐色 Vb+Vb(皮状)
4. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
5. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(均一)
6. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vb+c(均一)
7. 10YR3/3 暗褐色 Vb+Vb(均一)
8. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb+d=Vb(均一)
9. 7.5YR4/3 褐色 Vb+c+d=Vb(均一)
10. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb+d+c 剥落層
11. 7.5YR4/4 褐色 Vb+d=Vb(均一)
12. 10YR3/4 暗褐色 Vb=Vb(均一)



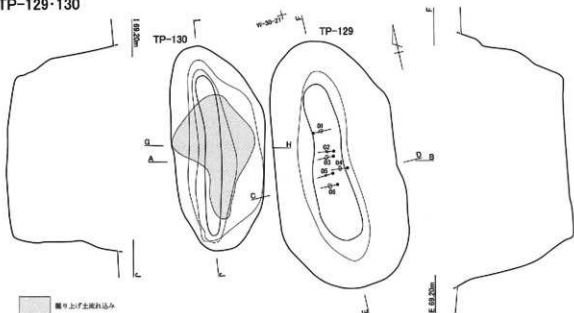
TP-128

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR3/3 暗褐色 Vb-Vl=Vb(均一)
3. 10YR4/4 褐色 Vl=Vb-Vb(皮状)
4. 10YR3/4 暗褐色 Vb-Vl=Vb(皮状)
5. 10YR2/1 黒色 Vb=Vl=Vb(均一)
6. 7.5YR5/6 明褐色 Vl=Vb-Vb(ブロック状)
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb=Vb(ブロック状)
8. 7.5YR5/8 明褐色 Vb 剥落層
9. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
10. 7.5YR5/3 にぶい褐色 Vb=Vb(ブロック状)
11. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
12. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb=Vb(均一)
13. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb=Vb(均一)
14. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
15. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb(ブロック状)
16. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)

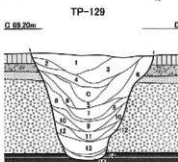
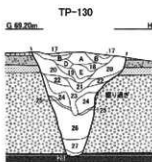
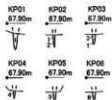
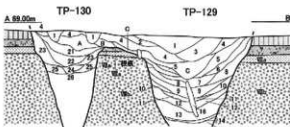


図III-35 TP-127・128 平面及び断面図

TP-129・130



盛り上げ土埋れ込み



TP-129, KP01~06

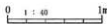
- 1. 10YR7/4 にぶい黄褐色 Vb=V(均一)
- 2. 10YR3/1 黒褐色 Vb=IX(均一)
- 3. 10YR1/4 褐色 Vb=VI=VIIa-b(均一)
- 4. 2.5Y5/1 黄灰色 V=IX(均一)
- 5. 2.5Y4/1 黄灰色 V=IX(均一)
- 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 Vb=V(均一)

TP-130

- A. 5YR1/6 赤褐色 Vb=VIIa-b(ブロック状) 盛り上げ土埋れ込み
- B. 5YR4/2 にぶい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状) 盛り上げ土埋れ込み
- C. 5YR1/4 にぶい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状) 盛り上げ土埋れ込み
- E. 5YR1/6 赤褐色 Vb=VIIa-b(ブロック状) 盛り上げ土埋れ込み
- F. 10YR3/2 黒褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 18. 10YR3/2 暗褐色 Vb=VI-VIIa-b(均一)
- 19. 10YR3/2 黒褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 20. 10YR4/3 にぶい黄褐色 VI=VI-VIIa-b(均一)
- 21. 10YR5/3 にぶい黄褐色 VI=VIIa-b(均一)
- 22. 10YR5/4 にぶい黄褐色 VI=VIIa-b(均一)
- 23. 10YR5/6 黄褐色 VI=VIIa-b(均一)
- 24. 5YR1/6 赤褐色 Vb=IX(均一)
- 25. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=V(均一)
- 26. 7.5YR1/4 暗褐色 Vb=V(均一)
- 27. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb=V(均一)
- 28. 7.5YR6/4 にぶい褐色 Vb=VIIa-b(均一)

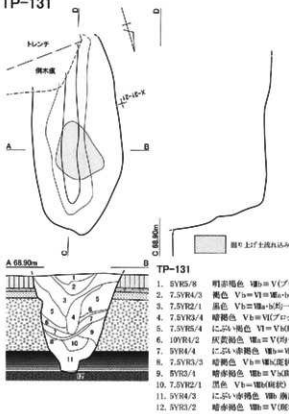
TP-129

- C. 10YR3/4 暗褐色 Vb=VIIa-b(均一) 盛り上げ土埋れ込み
- 1. 10YR2/1 黒色 Vb=IX(均一)
- 2. 10YR1/4 褐色 Vb=VI=VIIa-b(均一)
- 3. 10YR3/2 暗褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 4. 10YR3/2 暗褐色 Vb=VI-VIIa-b(均一)
- 5. 7.5YR5/4 にぶい褐色 V=VI-VIIa-b(均一)
- 7. 10YR3/4 暗褐色 Vb=VI=VIIa-b(均一)
- 8. 5YR1/4 にぶい赤褐色 Vb=Vb(ブロック状)
- 9. 7.5YR4/3 褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 10. 5YR1/4 にぶい赤褐色 Vb=IX(均一)
- 11. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=VI-VIIa-b(均一)
- 12. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 13. 5YR1/6 赤褐色 Vb=VIIa-b(均一)
- 14. 5YR5/4 にぶい赤褐色 Vb=V(均一)
- 15. 7.5YR2/1 黒色 V=VIIa-b(均一) しまりなし
- 16. 7.5YR2/1 黒色 V=VIIa-b(均一) しまりなし

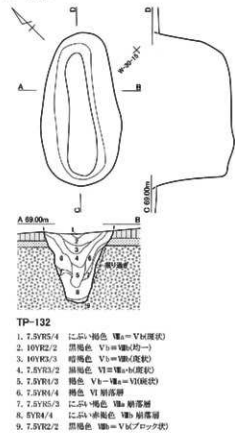


図Ⅲ-36 TP-129・130 平面及び断面図

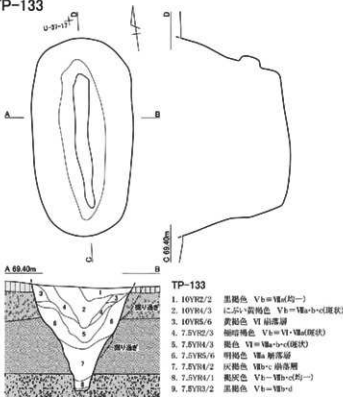
TP-131



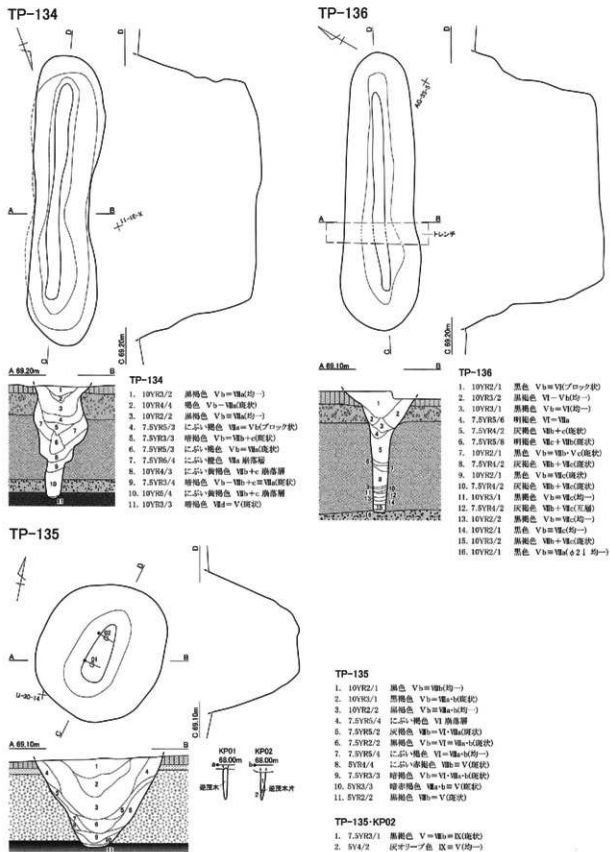
TP-132



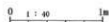
TP-133



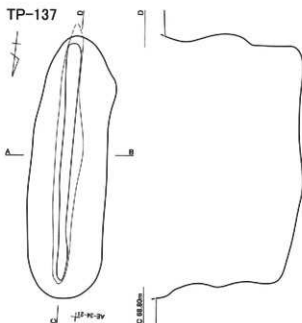
図Ⅲ-37 TP-131～133 平面及び断面図



図Ⅲ-38 TP-134～136 平面及び断面図

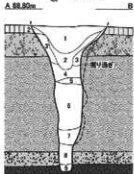






TP-137

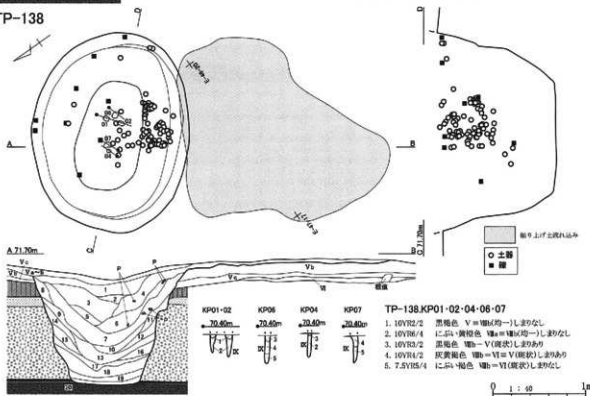
1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR4/2 に近い黄褐色 Vb=Vc=Vb(シルト岩均一)
3. 10YR4/6 褐色 V1-Vb=Vc(均一)
4. 10YR3/2 暗褐色 Vc=シルト岩=Vb(均一)
5. 10YR5/4 に近い黄褐色 Vb=c=Vc(均一)
6. 10YR3/2 黒褐色 Vc=Vb(均一)
7. 10YR5/2 灰黄褐色 Vb=Vc(均一)
8. 10YR7/1 灰白色 Vb=Vb(均一)
9. 10YR4/1 暗灰色 Vc=Vb(均一)



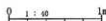
TP-138

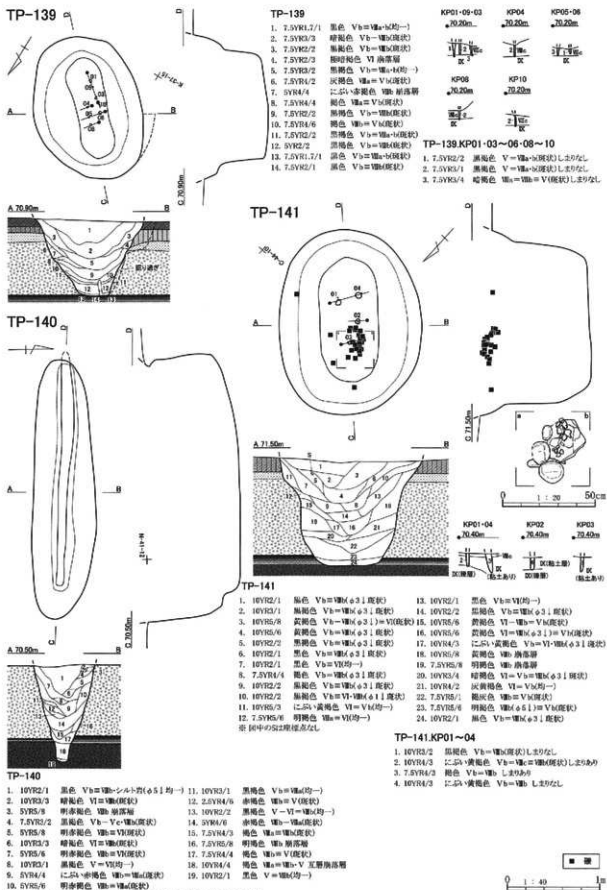
1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(φ3↓均一)
2. 10YR3/2 暗褐色 Vb=V1=Vb(φ3↓均一)
3. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(φ10↓均一) 層り上げ土流れ込み
4. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(φ10↓均一) 層り上げ土流れ込み
5. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(φ5↓均一) 層り上げ土流れ込み
6. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(φ5↓均一) 層り上げ土流れ込み
7. 10YR2/1 黒色 Vb=V1(均一)
8. 10YR3/2 暗褐色 V1=Vb(均一)
9. 10YR5/2 灰黄褐色 V1=Vb(均一)
10. 10YR4/2 灰褐色 V1=Vb=Vb(ブロック状)
11. 10YR2/2 黒褐色 Vb=V1=Vb(φ3↓均一)
12. 7.5YR4/6 褐色 Vb=V1=Vb(均一)
13. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vb=V1=Vb(均一)
14. 10YR3/3 暗褐色 Vb=V1=Vb(ブロック状)
15. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V1=Vb(ブロック状)
16. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(ブロック状)
17. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(φ5↓均一)
18. 7.5YR4/6 褐色 Vb=Vb=V1(均一)
19. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V1(均一)
20. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)

TP-138

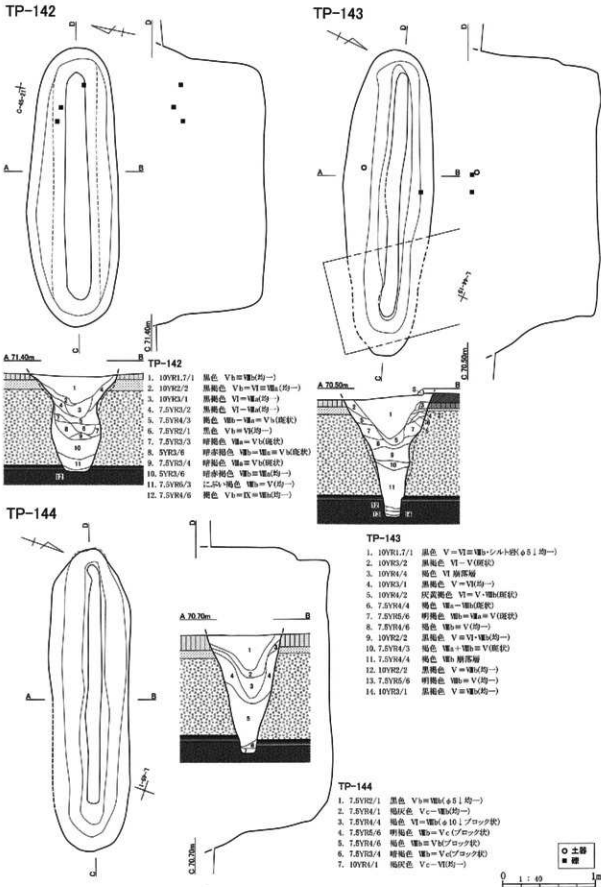


図Ⅲ-39 TP-137-138 平面及び断面図

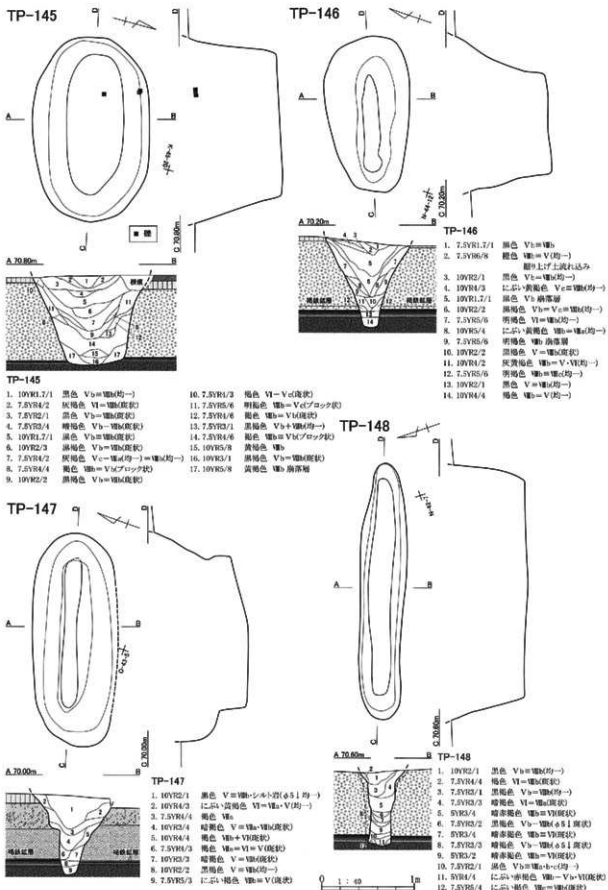




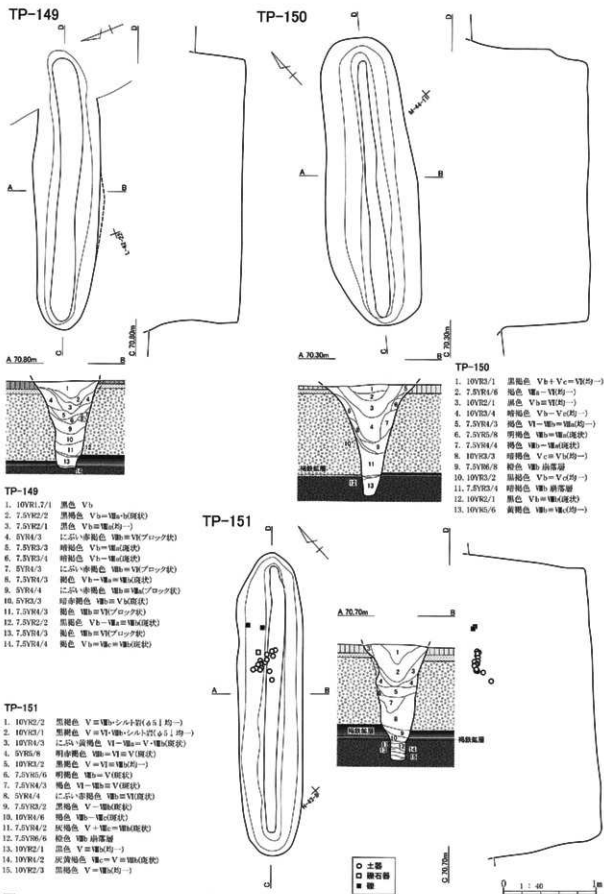
図Ⅲ-40 TP-139~141 平面及び断面図



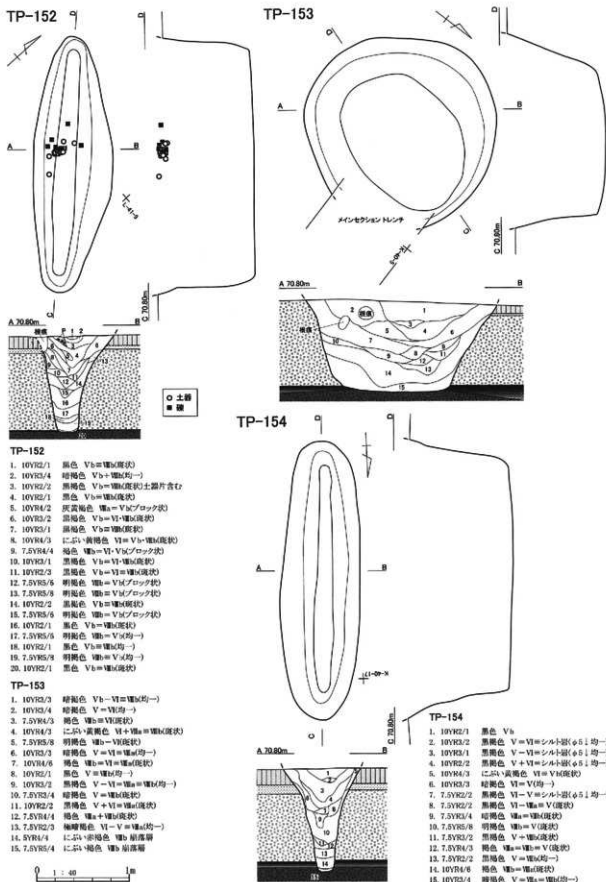
図III-41 TP-142 ~ 144 平面及び断面図



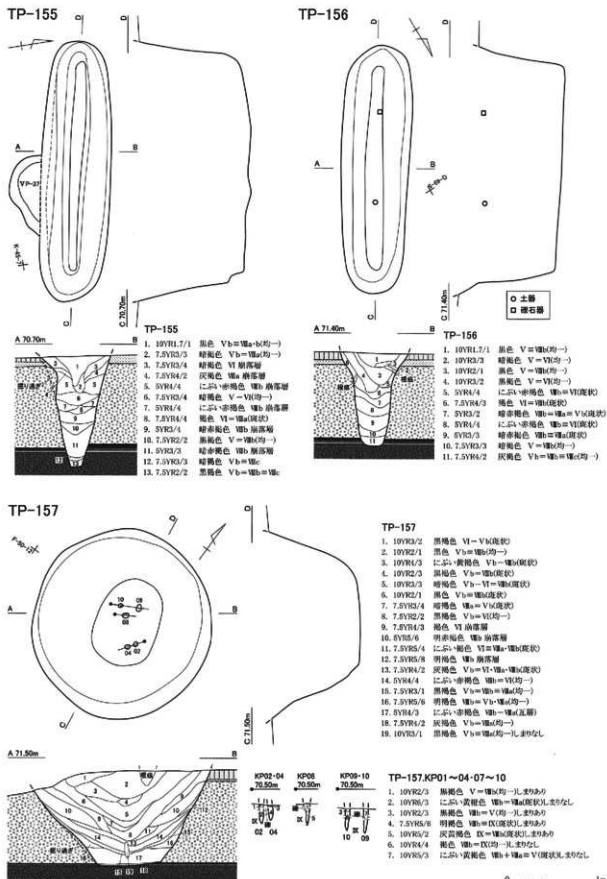
図Ⅲ-42 TP-145～148 平面及び断面図



図Ⅲ-43 TP-149～151 平面及び断面図

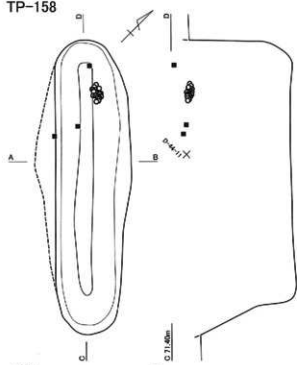


図Ⅲ-44 TP-152～154平面及び断面図



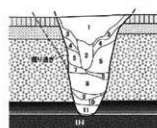
図Ⅲ-45 TP-155～157 平面及び断面図

TP-158



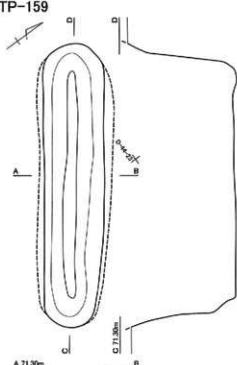
A 0.71.60m

B TP-158



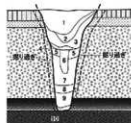
1. 10YR1.2/1 黒色 Vb
2. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)
3. 7.5YR3/2 暗褐色 Vb=VI
4. 7.5YR4/1 暗灰色 Vb=Vb(均一)
5. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
7. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(皮状)
8. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
10. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
11. 7.5YR5/4 赤い・褐色 Vb=Vb(皮状)
12. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(均一)

TP-159



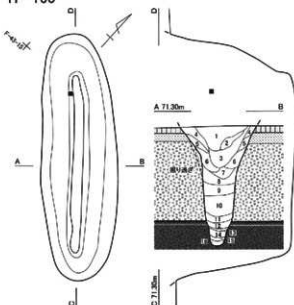
A 0.71.30m

B TP-159



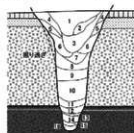
1. 10YR1.7/1 黒色 Vb
2. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)
3. 7.5YR1/2 灰褐色 Vb=V(皮状)
4. 7.5YR1/1 暗灰色 Vb=Vb(均一)
5. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
6. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)
7. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
8. 7.5YR2/1 褐色 Vb=Vb(均一)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(皮状)
10. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(均一)

TP-160



A 0.71.30m

B TP-160

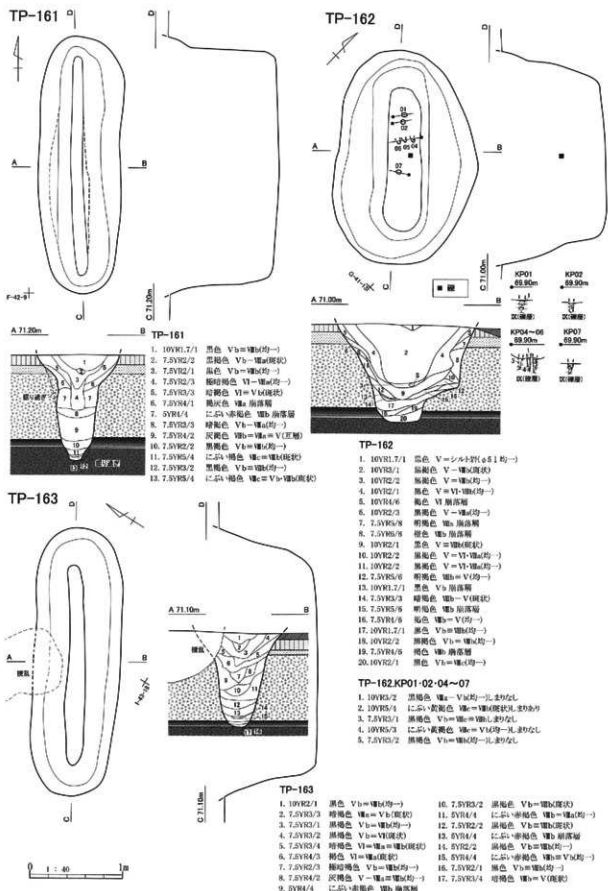


1. 7.5YR2/1 褐色 Vb=Vb(均一)
2. 5YR2/3 暗赤褐色 Vb=V(皮状)
3. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均一)
4. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=V(皮状)
5. 5YR3/3 暗赤褐色 Vb=Vb(均一)
6. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
7. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(皮状)
8. 5YR4/3 赤い・赤褐色 Vb=Vb(皮状)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)
10. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
11. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(皮状)
12. 5YR4/4 赤い・赤褐色 Vb=Vb(均一)
13. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(皮状)
14. 5YR5/6 赤褐色 Vb=Vb(皮状)
15. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(皮状)
16. 7.5YR5/4 赤い・褐色 Vb=Vb(皮状)

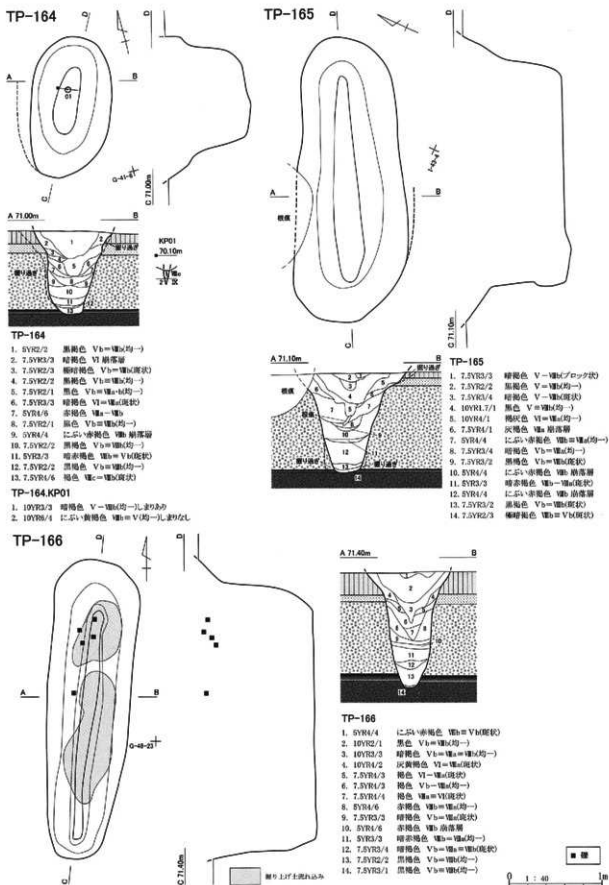


図Ⅲ-46 TP-158～160 平面及び断面図

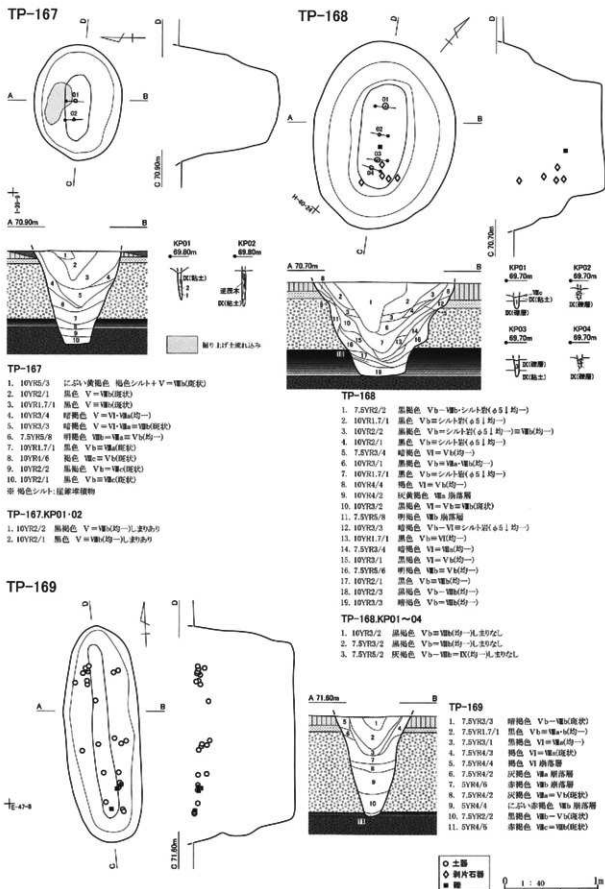




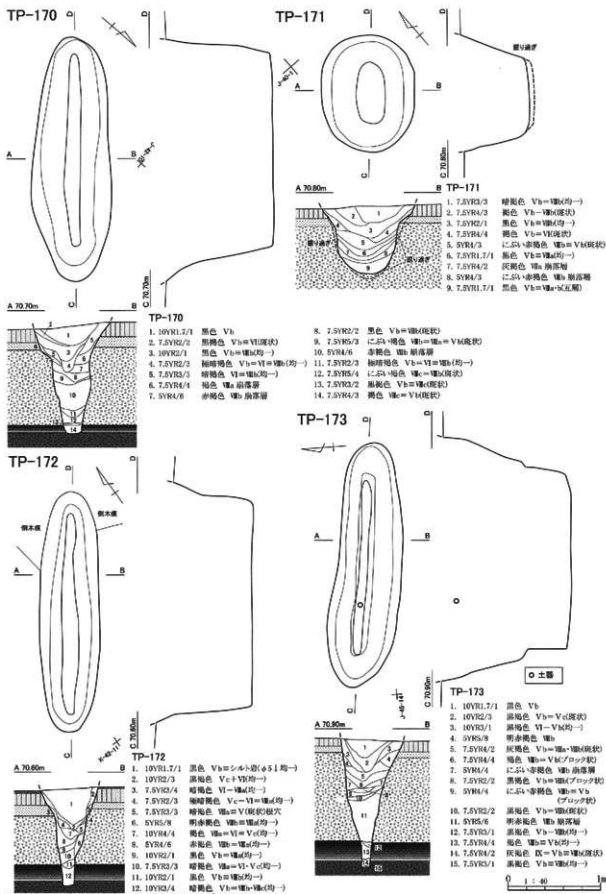
図III-47 TP-161～163平面及び断面図



図Ⅲ-48 TP-164 ~ 166 平面及び断面図

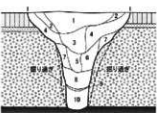
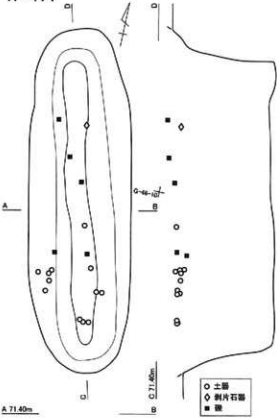


図Ⅲ-49 TP-167～169 平面及び断面図



図III-50 TP-170～173平面及び断面図

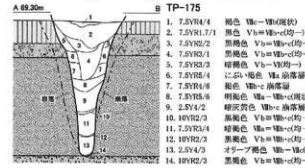
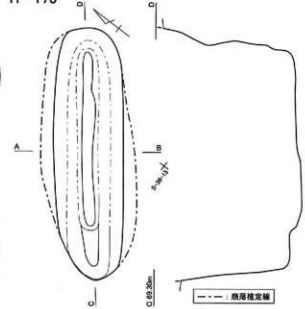
TP-174



TP-174

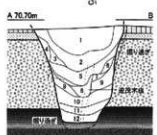
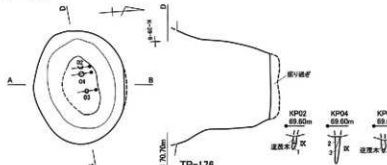
1. 10YR2/1 黒色 Vb=シムト(φ5)
2. 10YR3/2 黒褐色 Vb=V(均一)
3. 10YR2/2 黒褐色 Vb=V(均一)
4. 10YR3/4 暗褐色 Vt=Vb=V(均一)
5. 7.5YR3/2 暗褐色 Vb=Vb=V(均一)
6. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(均一)
7. 5YR5/6 明赤褐色 Vb=V(均一)
8. 5YR2/3 暗赤褐色 Vb=V(均一)
9. 10YR2/1 黒色 Vb=V(均一)
10. 7.5YR4/3 褐色 Vb=V(均一)

TP-175



1. 7.5YR4/4 褐色 Vb=V(均一)
2. 7.5YR1/1 黒褐色 Vb=V(均一)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=V(均一)
4. 7.5YR3/1 暗褐色 Vb=V(均一)
5. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=V(均一)
6. 7.5YR5/4 にぶい褐色 Vb=V(均一)
7. 7.5YR4/6 褐色 Vb=V(均一)
8. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=V(均一)
9. 2.5Y/2 暗灰黄色 Vb=V(均一)
10. 10YR2/3 暗褐色 Vb=V(均一)
11. 7.5YR3/4 暗褐色 Vb=V(均一)
12. 10YR2/3 暗褐色 Vb=V(均一)
13. 2.5Y/3 オリーブ褐色 Vb=V(均一)
14. 10YR2/3 暗褐色 Vb=V(均一)

TP-176



1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb=シムト(φ5) (均一)
2. 10YR1/1 黒色 Vb=シムト(φ5) (均一)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=V(均一)
4. 5YR4/6 赤褐色 Vb=V(均一)
5. 10YR1/1 黒色 Vb=V(均一)
6. 10YR2/3 暗褐色 Vb=V(均一)
7. 5YR4/6 赤褐色 Vb=V(均一)
8. 10YR4/4 褐色 V=V(均一)
9. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=V(均一)
10. 10YR2/1 黒色 Vb=V(均一)
11. 7.5YR3/4 暗褐色 V=V(均一)
12. 10YR2/1 黒色 Vb=V(均一)

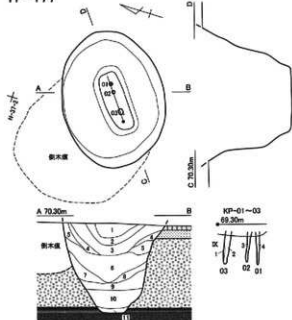
TP-176.KP02~04

1. 2.5Y/2 暗褐色 Dk=Vb(均一)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 Vb=Vb(均一) 2.5Y/L
3. 10YR3/1 暗褐色 Vb=Vb(均一) 2.5Y/L



図三-51 TP-174 ~ 176 平面及び断面図

TP-177



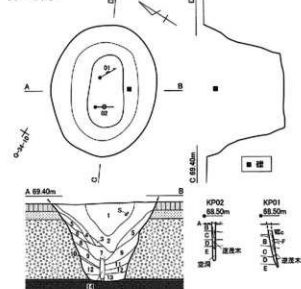
TP-177

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
2. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=Vt・Vb(均一)
3. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
4. 10YR2/1 黒褐色 Vt+Vb=Vb(底状)
5. 7.5YR6/8 棕色 Vb=Vb(底状)
6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vt・Vb(底状)
7. 5YR5/6 明赤褐色 Vb=Vb(底状)
8. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Vt=Vb(底状)
9. 7.5YR2/1 黒色 Vb=Vb=Vb(均一)
10. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(底状)
11. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均一)

TP-177.KP01~03

1. 10YR1/4 棕色 Vb=Vb(均一)孔多あり
2. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)孔多なし
3. 10YR1/3 にぶい黄褐色 Vb=Vb(均一)孔多あり
4. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vb(底状)

TP-178



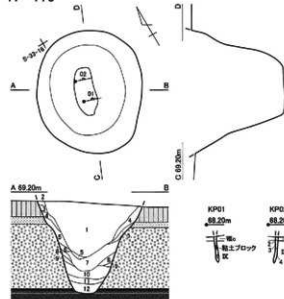
TP-178

1. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
2. 10YR2/1 黒色 Vb(均一)=シルト状(φ5均一)
3. 10YR3/4 暗褐色 Vc=Vb=Vb(均一)
4. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(底状)
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vt=Vb(底状)
6. 7.5YR4/3 褐色 Vt=Vb(均一)
7. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vc(均一)
8. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Vb(均一)
9. 5YR4.5 赤褐色 Vb=Vb(均一)
10. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(底状)
11. 7.5YR4.6 褐色 Vb=Vb(均一)
12. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均一)
13. 7.5YR3/2 黒褐色 Vb=Vt・Vb(均一)
14. 10YR3/1 黒褐色 Vb(底状)

TP-178.KP01~02

- A. 10YR2/2 黒褐色 泥状層
- B. 5B5/1 青灰色 粘土
- C. 5B4/1 暗青灰色 細砂
- D. 5B4/1 暗青灰色 粘土
- E. 5B4/1 暗青灰色 細砂
- F. 10YR2/2 黒褐色 泥状層

TP-179



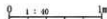
TP-179

1. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均一)
2. 7.5YR4/2 赤褐色 Vt=Vb(底状)
3. 7.5YR2/1 黒色 Vb+Vc(底状)
4. 7.5YR4/2 赤褐色 Vt=Vb(均一)
5. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(底状)
6. 7.5YR4/4 暗褐色 Vb=Vb(底状)
7. 7.5YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)
8. 7.5YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(底状)
9. 7.5YR3/3 暗褐色 Vt=Vb(底状)
10. 5YR4/4 にぶい赤褐色 Vb=Vb(底状)
11. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)
12. 7.5YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(底状)

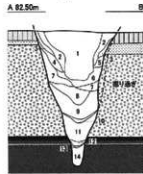
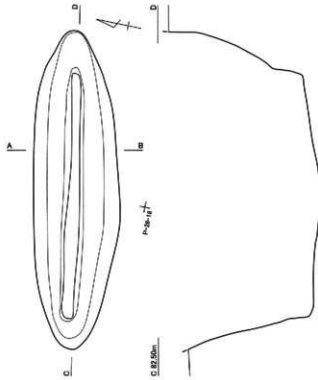
TP-179.KP01~02

1. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vb(均一)孔多なし
2. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均一)孔多なし
3. 10YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均一)孔多なし
4. 10YR2/3 黒褐色 Vb=Vb(均一)孔多なし

図III-52 TP-177~179平面及び断面図

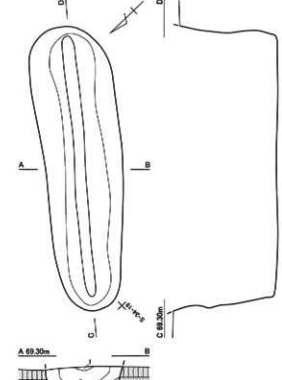


TP-180



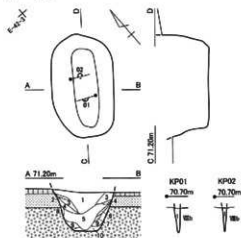
- TP-180**
1. 10YR2/1 黒色 Vb=シルト質=塊状(均一)
  2. 10YR2/3 黒褐色 Vc=Vt=Vb(均一)
  3. 10YR5/6 黄褐色 Vt=塊a(均一)
  4. 7.5YR4/6 暗褐色 Vt=塊a=塊b(均一)
  5. 7.5YR5/8 暗褐色 塊b=Vt(均一)
  6. 10YR4/4 暗褐色 塊b=塊a(塊状)
  7. 5YR4/8 赤褐色 塊b(片状)
  8. 10YR3/3 暗褐色 Vb=塊a+b(塊状)
  9. 5YR4/8 赤褐色 塊b=Vb(塊状)
  10. 10YR2/1 黒色 Vb=Vt(均一)
  11. 7.5YR5/8 暗褐色 塊b=Vb(均一)
  12. 10YR5/4 にぶい黄褐色 X=塊b(均一)
  13. 10YR3/3 暗褐色 Vb=塊b(均一)
  14. 10YR5/3 にぶい黄褐色 X=塊b(均一)

TP-181



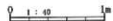
- TP-181**
1. 10YR4/4 暗褐色 Vb+塊a=塊b(均一)
  2. 10YR2/1 黒色 Vb=塊b(均一)
  3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 Vb+塊a(塊状)
  4. 7.5YR3/2 暗褐色 Vb=塊a(塊状)
  5. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vt=塊a(塊状)
  6. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=塊b=塊a(塊状)
  7. 7.5YR4/4 暗褐色 塊b=Vb(塊状)
  8. 5YR3/2 暗赤褐色 塊b=Vb=塊a(塊状)
  9. 7.5YR2/2 暗褐色 Vb=Vt=塊a+b(均一)
  10. 5YR3/2 暗赤褐色 塊b=Vb=塊a(均一)
  11. 7.5YR4/4 暗褐色 塊b=Vb(均一)
  12. 7.5YR2/1 黒色 Vb=塊a(塊状)

TP-182

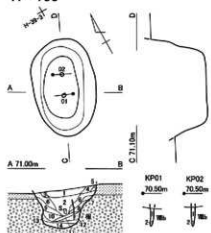


- TP-182**
1. 7.5YR2/1 暗褐色 Vb=塊b(均一)
  2. 10YR3/1 黒褐色 Vb=Vt(均一)
  3. 10YR2/3 黒褐色 Vt=Vb(塊状)
  4. 10YR3/4 暗褐色 塊a=Vb(ブロック状)
  5. 7.5YR2/1 黒色 Vb=塊b(均一)
  6. 10YR2/3 暗褐色 塊a=Vb(均一)
  7. 7.5YR2/1 暗褐色 Vb=塊a(塊状)
  8. 7.5YR3/4 暗褐色 塊b=Vb(ブロック状)
  9. 7.5YR4/6 暗褐色 塊b=Vb(ブロック状)
  10. 10YR2/2 暗褐色 Vb=塊a+b(均一)
- TP-182.KP01-02**
1. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb=塊a(塊状)

図Ⅲ-53 TP-180～182 平面及び断面図



TP-183



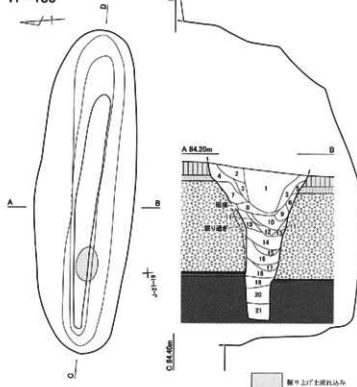
TP-183

1. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均)→
2. 10YR2/3 暗褐色 Vb-Vb(均)→
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vt=Vt(均)→
4. 10YR3/2 黒褐色 Vb=Vb(均)→
5. 10YR4/4 に近い黄褐色 Vb=Vb(均)→
6. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均)→
7. 7.5YR3/6 赤褐色 Vt=Vt(均)→
8. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
9. 10YR4/4 褐色 Vt=Vt(均)→
10. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→
11. 10YR2/2 黒褐色 Vb=Vb(均)→
12. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均)→
13. 7.5YR5/6 明褐色 Vb=Vb(均)→
14. 7.5YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→

TP-183.KP01・02

1. 7.5YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均)→
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vb=Vb(均)→

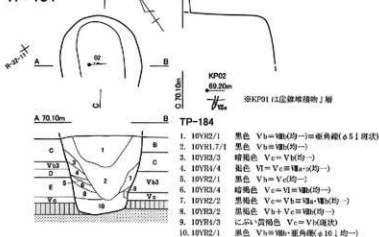
TP-185



TP-185

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→
2. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均)→
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vt=Vt(均)→
4. 10YR2/3 暗褐色 Vt=Vt(均)→
5. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vt=Vt(均)→
6. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
7. 7.5YR5/6 明褐色 Vt=Vt(均)→
8. 10YR2/2 暗褐色 Vt=Vt(均)→
9. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vt=Vt(均)→
10. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均)→
11. 10YR4/4 褐色 Vt=Vt(均)→
12. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→
13. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
14. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
15. 10YR1/1 暗褐色 Vb=Vb(均)→
16. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
17. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(均)→
18. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
19. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(均)→
20. 7.5YR5/8 明褐色 Vb=Vb(均)→
21. 10YR2/3 暗褐色 Vb=Vb(均)→

TP-184

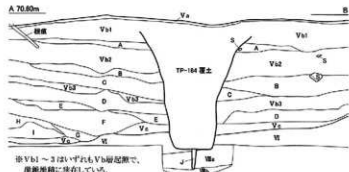


TP-184

1. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→
2. 10YR1.7/1 黒色 Vb=Vb(均)→
3. 10YR2/3 暗褐色 Vt=Vt(均)→
4. 10YR4/4 褐色 Vt=Vt(均)→
5. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→
6. 10YR3/4 暗褐色 Vt=Vt(均)→
7. 10YR2/2 暗褐色 Vt=Vt(均)→
8. 10YR2/2 暗褐色 Vb+Vc=Vb(均)→
9. 10YR4/3 に近い黄褐色 Vc=Vc(均)→
10. 10YR2/1 黒色 Vb=Vb(均)→

TP-184.KP02

1. 10YR2/2 暗褐色 Vb=Vb(均)→



※Vb1～3はVb1のVb層起層で、崖線地縁に伏在している。

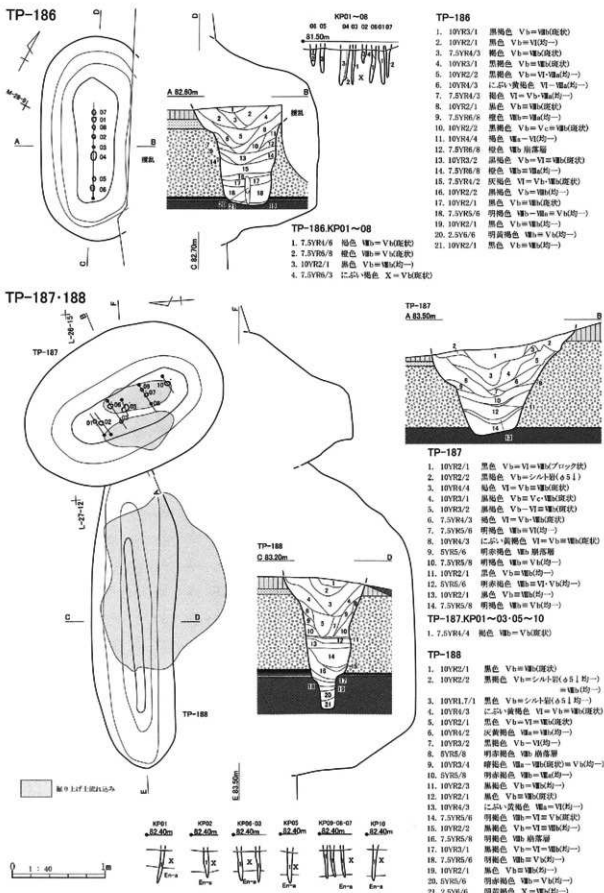
TP-184 崖線堆積物層

- A. 7.5YR3/3 暗褐色 Vb=Vb(均)→
- B. 7.5YR4/3 褐色 Vb=Vb(均)→
- C. 7.5YR4/4 褐色 Vb=Vb(均)→
- D. 5YR4/4 に近い赤褐色 Vb=Vb(均)→
- E. 7.5YR4/6 赤褐色 Vt=Vt(均)→
- F. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
- G. 7.5YR5/3 に近い褐色 Vt=Vt(均)→
- H. 5YR3/4 に近い赤褐色 Vt=Vt(均)→
- I. 5YR4/6 赤褐色 Vb=Vb(均)→
- J. 7.5YR4/2 灰褐色 Vb=Vb(均)→

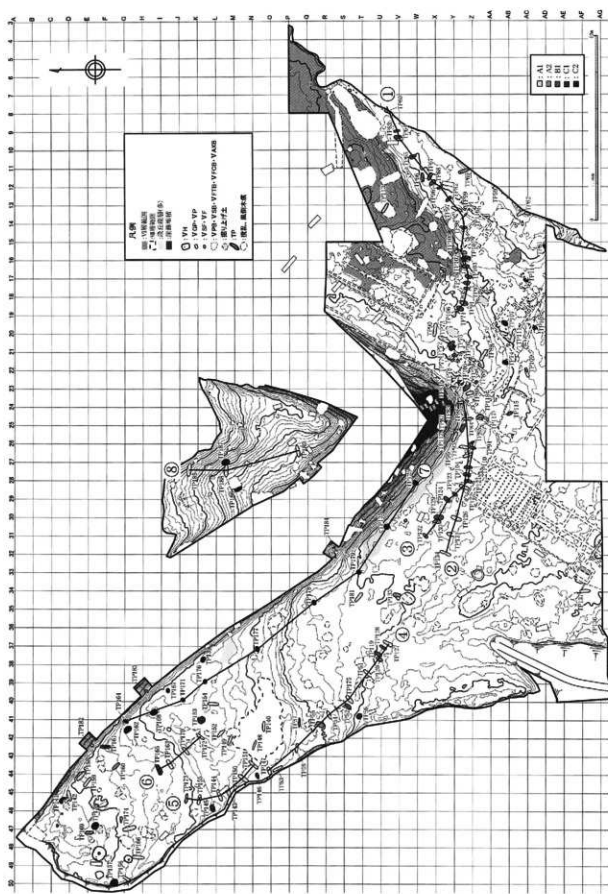
図Ⅲ-54 TP-183～185 平面及び断面図

0 1 : 40 1m



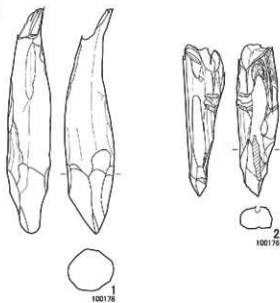


図Ⅲ-55 TP-186 ~ 188 平面及び断面図

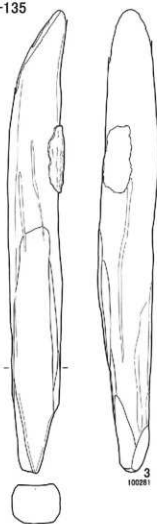


図III-56 V層ピット配列図

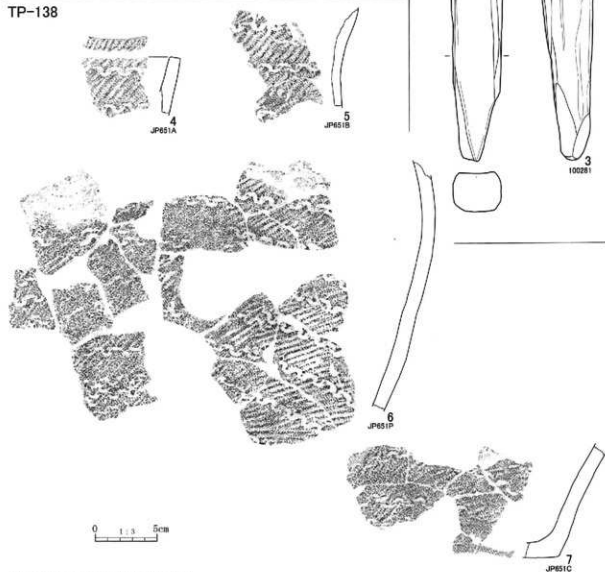
TP-125



TP-135

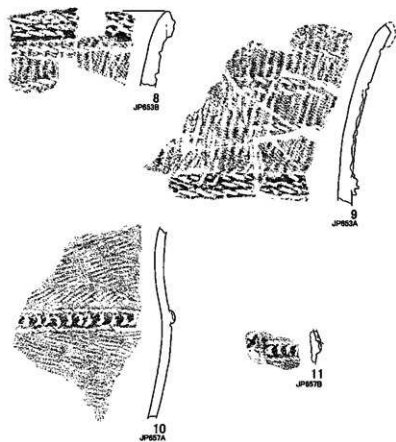


TP-138

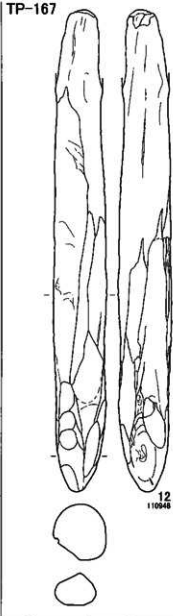


図Ⅲ-57 Tピット出土遺物(1)

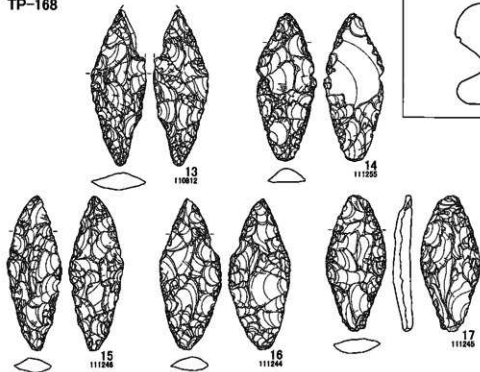
TP-151



TP-167



TP-168

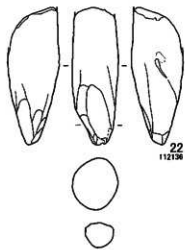
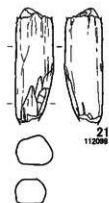


図Ⅲ-58 Tピット出土遺物(2)

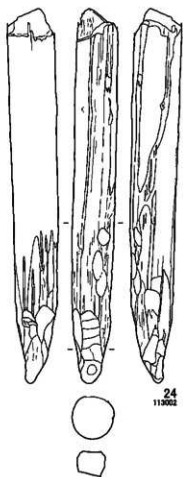
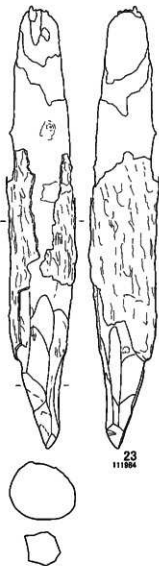
TP-169



TP-176



TP-178



0 1:3 5cm

図III-59 Tピット出土遺物(3)

## 第6節 集中出土遺物

### 1. 土器集中

今回報告する土器集中は平成26年度の2カ所、平成27年度の5カ所、平成28年度の14カ所の合計21カ所である。うち、VPB-32・34・35は同一個体であったため実際は19カ所となる。また、同一集中区内で複数の時期が混じるため、出土土器の種類は地点数と異なる。土器はⅢ群B2類が1、Ⅲ群B3類が1、Ⅳ群A1類a種が9、Ⅳ群A2類が8、Ⅳ群B1類が1カ所である。包含層で出土する土器はⅢ群土器が主体であるが、全体的には後期初頭も多いことがわかる。分布については調査区全体に散在する形で検出しており、VPB-18がTP-57とVPB-22がVGP-30と重複関係にあり、いずれも土器集中が新しい。また、掲載した土器については小破片資料で、殆どの集中が微細図の記録も出来ないほどであったため、器形の判別できる資料を中心に掲載している。以下に詳細を記す。

VPB-17 (図Ⅲ-60 69-1~4 図版 56-1・2 70-1~4)

位置：T-41区 規模：112×88cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 本集中は調査区西側縁辺部のVb層上位を掘り下げている際に比較的まとまった状態で土器片を検出した。周辺を精査したところ土器以外に遺物は出土しなかったために、土器集中であると判断し付番して平面の記録を行い調査終了とした。土器の微細図については2cm以下の図化は行わず座標点のみの記録とした。(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-69-1~4 図版 70-1~4) 1~3はⅣ群A1類a種の同一個体である。口縁部から胴部にかけての同一の破片は他にもあるが、細片と剥落が著しく復元には至らなかった。胎土には砂粒が多く含まれ、硬質に焼成されている。1は幅広の貼付帯がみられる口縁部で、口唇部は隅丸角状に整形される。口唇部、口縁部ともに0段多条RL斜行縄文が施されている。2・3は異原体羽状縄文がみられる胴部片である。4は砂粒の混入がやや少なく、別個体とした。Ⅳ群A1類a種の破片で、地文施文後に胴部貼付帯を加え、その上にも0段多条RL斜行縄文が施されている。(高橋)

VPB-18 (図Ⅲ-60 69-5・6 図版 56-3・4 70-5・6)

位置：P-40・41区 規模：174×98cm 検出層位：VbU

**確認・調査** Vb層上位を掘り下げたところ、P-40区で土器が一部重なるほど密に出土した。周囲のグリッドからは殆ど遺物が出土していないことから、土器集中であることを想定し同一レベルで分布を確認した。本集中は最初に出土したところが最も集中する箇所であり、現場段階で同一個体と判断できた土器の範囲を土器集中として付番した。平面の記録後に遺物を取り上げて調査終了とした。なお、本集中の下層にはTピット(TP-57)を検出しているが、土器の垂直分布図はほぼ水平であるため完全に埋没してからの所産になる。(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-69-5・6 図版 70-5・6) 5・6はⅣ群A1類a種の同一個体である。口縁部と胴部は接合していないが、推定で口縁部から胴部上半まではほぼ直立し、胴部下半に向かって次第にすばまっていく器形は捉えられる。5の口縁部片は幅の狭い貼付帯が施され、0段多条RL斜行縄文が施されている。口唇部は角状でほぼ平滑に調整されている。6は胴部で、上位に貼付帯が1条施される。地文は口縁部貼付帯上から胴部上半にかけて0段多条RL斜行縄文、下半は異原体羽状縄文で、胴部貼付帯を施した後に0段多条RL斜行縄文を施文している。内

面はナデ調整されており、破断面は平行組織が顕著である。 (高橋)

VPB-19 (図Ⅲ-60 69-7~14 図版 56-5~7 70-7~14)

位置: AA・AB-15・16区 規模: 472×348 cm 検出層位: VbL

**確認・調査** AB-15区でVb層上位を掘削中、土器片がまとまって出土した。遺構の有無と遺物の広がりを確認するため、周囲をVb層下位まで掘り下げたところ、直径約3m内で3~5cm程の土器片が集中して出土した。土器片はAA-15区西端まで広がり、この範囲までを土器集中とした。その後、遺物の精査、検出写真の撮影、出土地点の記録、取り上げの順に調査を進めた。なお、出土土器の大部分が細片であったため、出土状態の微細図は作成していない。

(山戸)

**出土遺物** (図Ⅲ-69-7~14 図版 70-7~14) 7~11はIV群A2類土器で、7・8と9~11がそれぞれ同一個体である。7は幅の狭い口縁部の貼付帯片で、角状の口唇部にやや太めの原体による縄文が施されている。8は胴部片で地文に異原体羽状縄文を施文し、低平な貼付帯上にRL斜行縄文を施す。色調は黄灰褐色で胎土には多量の砂粒が含まれ、焼成は堅緻だが表面はやや風化が進んでいる。9は7よりやや幅広いの貼付帯が付された口縁部である。口唇部は角状の内削ぎ気味でやや太めの原体による斜行縄文が施されている。貼付帯直下には縄端による刺突が施される。10は胴部片で、地文と結縛痕が認められる。11は平底で底部から外傾して立ち上がり、地文は底部付近まで及ばない。9~11は淡橙褐色で焼成は良好だが、とくに10・11では表裏、破断面ともに摩耗がみられる。剥片石器は図示した2点が出土した。12は基部が不明瞭な石鏃で、最大幅から先端に向かって薄くなる。13は左側縁に内湾した急角度の刃部を持つコンケイブ・スクレイパー。上端部にも微細剥離が認められる。14は側縁及び端部を利用したたき石で、浅い敲打痕が連続して認められる。砂岩製である。 (土器: 高橋 石器: 矢野)

VPB-20 (図Ⅲ-61 70-15~23 図版 56-8 70-15~23)

位置: AA-14区 規模: 404×316 cm 検出層位: VbM

**確認・調査** AA-14区でVb層上位を掘削中、直径約2mの範囲内で土器が比較的密集する地点を2ヵ所検出したため、土器集中として調査を行った。土器片は3~5cmの小片が主体的であり、精査段階で5~15cmの礫片がほぼ同レベルで出土した。比較的大きい礫片は土器集中の中でも南東側に集中する傾向がみられる。写真撮影のための精査をした段階で、主体となるIV群A2類土器に加えて、IV群A1類a種、III群B3類の土器が数点確認されたが、同一範囲出土遺物で掲載した。その後、遺物の出土地点を記録し、取り上げたところ、やや下位からも土器片が出土したため、それらも土器集中として取り上げた。なお、大部分が細片であったため、微細図は作成していない。

(山戸)

**出土遺物** (図Ⅲ-70-15~23 図版 70-15~23) 15~17はIII群B3類a種である。15は肥厚する口縁部片で、やや風化がみられる。押引文が2段加えられ、肥厚帯直下には円形刺突文の痕跡が僅かに認められる。16は斜行縄文が施された胴部片である。17は推定底径11cmの平底の底部片で、立ち上がりがやや張り出す。18・19はIV群A2類土器で、いずれも口縁部直下に幅広いの貼付帯を有する。口唇部は18が角状、19が隅丸角状に整形され口唇部にも同一原体で縄文が施文されている。19の口縁貼付帯は上端で折り返されており、貼付帯幅が不均一で一部途切れ、粗雑な作りである。貼付帯直下には縄端による刺突がやや深めに加えられ、内面に僅か

な突起が認められる。地文は太めの斜行縄文で、やや横走気味に施文されている。

剥片石器は図示した3点が出土した。20は基部が明瞭な石鏃である。最大幅では断面がレンズ状になる。21は石鏃に分類した。両側縁の剥離で断面は菱形に近くなる。機能部に磨滅は認められない。22は不定形剥片の縁辺部に連続した剥離が認められるためR.Fとした。上端部には岩屑面が残る。23は折損した扁平の直角礫を素材とするたたき石で、敲打とそれに伴う剥離が認められる。

(土器：高橋・石器：矢野)

VPB-21 (図Ⅲ-61 70-24~26 図版 57-1 71-24~26)

位置：AE・AF-29区 規模：216×116cm 検出層位：VbM

確認・調査 AE-29区でVb層を掘削中、直径約2m範囲内で土器が密集する地点を2ヵ所検出したため、土器集中として捉え、調査を行った。土器片は表裏面が剥離しているものや細片が主体であった。分布範囲を確認後、基底面確認のトレンチを設定し、遺物の取り上げを行った。調査段階において、集中を構成する土器は同時期であることが判明していた。なお、2cm以下の土器片は範囲を記録した後、一括して取り上げた。

(山戸)

出土遺物 (図Ⅲ-70-24~26 図版 71-24~26) 24~26はIV群A1類a種の同一個体である。

破片は表裏が剥落したものが多く、器形を推定できるほどの接合はできなかった。24はやや幅広い貼付帯をもつ口縁片だが、表面の大部分は剥落している。口唇部は内削ぎの切り出し状で、内面と同じく平滑に調整されている。25は内側が剥落した口縁部貼付帯の一部で、RL斜行縄文が施されている。26は外傾して立ち上がる胴部片で、低平な貼付帯が1条認められ、地文は異原体羽状縄文が縦方向に施文されている。

(高橋)

VPB-22 (図Ⅲ-4 70-27-28 図版 57-2・3 71-27-28)

位置：Z-32・33区 規模：92×71cm 検出層位：VbM・VbL

確認・調査 Z-32区でVb層上位を掘削中、5~10cmの土器片がまとまって出土した。土器の範囲を確認するため周囲をVb層下位まで掘り下げたところ、細かい破片も含めた土器片が密に分布していたので、これらを土器集中とした。また、土器集中の下位には大型の円形黒色ブランを確認したため、土器集中の断面と合わせて短軸トレンチで確認を行った。その結果、下位に土坑墓(VGP-30)を確認したが、本集中はVGP-30が完全に埋没した段階で遺棄されているため、関連性がないと判断し単独の土器集中とした。セクション図を記録した後、出土地点を記録し取り上げた。なお、本集中からは多量の土器片が出土しているが、細片が主体であるため3cm以下の土器片については範囲を実測した後、一括して取り上げた。

(山戸)

出土遺物 (図Ⅲ-70-27・28 図版 71-27・28) 27・28は同一個体のIV群A2類土器である。多数の破片がまとまって出土したもので接合に努めたが、剥落や小破片も多く、器形を復元するには至らなかった。27は丸味を帯びた隅丸角状の口唇部に幅の狭い貼付帯が1条巡る。口唇部には縄文と棒状工具で押圧したような浅い刻みが1ヵ所認められる。貼付帯直下には竹管状工具で斜め下方から突き上げた円形刺突文が配されている。28は比較的大きく接合できた胴部片で、剥落した部分も多いが地文が異原体羽状縄文で、上にLR斜行縄文を施文した幅広い貼付帯を1条巡らせている。色調は橙褐色を呈する。

(高橋)

VPB-23 (図Ⅲ-62 70-29~32 図版 57-4 71-29~32)

位置：R・S-18・19区 規模：228×180cm 検出層位：VbU・VbM



**確認・調査** S-18区でVb層上位を掘削中、同一個体と思われる5~10cmの土器片がまとまって出土した。土器集中の範囲を確認するため、集積地点の中央部付近にトレンチを設定し、断面を確認しながら、Vb層下位まで慎重に掘り下げた。トレンチ断面から、土器はⅢ群B2類がVb層中位から主体的に出土していることを確認した。その後、出土状態の微細図、断面図を記録し、遺物の取り上げを行った。

(山戸)

**出土遺物** (図Ⅲ-70-29~32 図版 71-29~32) 29~31はⅢ群B2類の同一個体である。復元に至っていないが、口縁部から底部まで全体的な器形がほぼ捉えられる。29は口縁部で小さな波状を呈すると思われる。内面は剥落しているが地文は細いLR斜行縄文が口唇部、口縁部に施される。口縁部には現存6本の横走沈線文が施され、上から2段目は断続的に施文されたと思われる。30は直線的に外傾して立ち上がる胴部片で底部へと続く。31は平底で底径は11.3cm程である。底側面下端まで0段多条斜行縄文が施されている。

礫石器は1点出土しており32はほぼ球形を呈した玄武岩製のたたき石である。両面を残し素材礫の縁辺を細かい敲打で丸く整形し、部分的に痕痕と稜が認められる。敲打の細かさなどから使用の結果ではなく、意図的に球形にしたものと思われる。(29~31:高橋 32:宮崎)

**VPB-24** (図Ⅲ-62 71-33~36 図版 57-5 71-33~36)

位置: H-45区 規模: 187×125cm 検出層位: VbU・VbM

**確認・調査** グリッド単位でV層を掘り下げていると、H-45区で土器のまとまりを検出した。同一個体の分布を確認しながら範囲を確認していくとH-45-20区が最も密度が高く、北西から南東に細長く広がっていた。密度が濃い範囲は土器片が縦や斜めの出土状態であった。(奈良)

**VPB-24 出土遺物** (図Ⅲ-71-33~36 図版 71-33~36) 33~35はIV群A1類A種の同一個体の土器である。33は低平な貼付帯上に0段多条RL斜行縄文を施す。地文は0段多条異原体羽状縄文。34は重複縄文、35は0段多条RL斜行縄文が施される。35は現存する文様帯の幅が狭く、上下で羽状構成をなす可能性がある。

剥片石器は2点出土し1点を図示した。36はサイド・スクレイパーで、岩層面が残る剥片の左側縁部に連続した剥離が施されている。

**VPB-24・27 出土遺物** (図Ⅲ-71-37~40 図版 71-37~40) VPB-27と接合した破片をVPB-24・27としてここで掲載する。37~40はIV群A1類A種の同一個体であり、口縁部から胴下半部まで貼付帯を配する。口縁部直下には狭い無文帯が1条巡る。貼付帯上には0段多条LR斜行縄文を施す。地文は0段多条の異原体羽状縄文のほか胴中央部・底側縁には重複縄文が施される。胎土には砂粒を中量含み口縁部破片以外は内面が剥落している。37には補修孔がみられる。

(土器:宮塚 石器:矢野)

**VPB-25** (図Ⅲ-63 71-41~44 図版 57-6・7 72-41~44)

位置: E-45区 規模: 214×158cm 検出層位: VbU

**確認・調査** V層を掘り下げていると、礫とともに小さな土器片が比較的まとまって出土した。この集中域に限ったことではないが、平成28年度の調査区は包含層に出土する土器が少ないため、分布範囲の線引きは比較的明瞭である。土器は細片が多く、殆ど図化せず座標点を記録して取り上げた。また、部分的に低い層位から出土する土器も認められるが、根などの影響と考えられる。

(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-71-41~44 図版 72-41~44) IV群 A2 類に含まれる。41 は口唇部・口縁部・内面に RL 斜行縄文が施され、施文後に表面をナデつけている。口縁部には縦位の縄側面圧痕文がみられる。42 は地文と同じく貼付帯上に 0 段多条 LR 斜行縄文を施している。43・44 は同一個体で、43 には 0 段多条異原体羽状縄文、44 は底側縁まで LR 斜行縄文が施されている。

(宮塚)

**VPB-26** (図Ⅲ-63 72-45・46 図版 57-8 58-1 72-45・46)

位置：C-45 区 規模：142×88 cm 検出層位：VbU

**確認・調査** C-45 区の Vb 層上位で比較的大きな土器片のまとまりを検出した。この地点には VIIb バミス (Ta-d バミス) が多く認められ、下位に T ビット (TP-141) を検出している。土器の基底面を確認するために全体を Vb 層中位まで掘り下げたが、ほぼ Vb 層上位の同一レベルで水平に出土した。本集中はこうした出土状態から T ビットの埋没後に遺棄されたものと思われる。

(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-72-45・46 図版 72-45・46) IV群 A2 類に含まれる 45・46 は同一個体。剥落が激しく、口縁部から胴部上半にかけてのみ接合した。実測図①部分では口唇部がやや内湾気味に直立し、胴部は外傾する。口縁部から胴部にかけて段状の貼付帯、さらに縦位の貼付帯をもつ。貼付帯上には 2 条 1 対の L 原体縄側面圧痕文、縦位貼付帯の施されない部分にもやや離れて 2 個 1 対の L 原体縄側面圧痕文が施される。46 にも縦位の貼付帯と 2 条 1 対の側面圧痕文がみられる。

(宮塚)

**VPB-27** (図Ⅲ-63 71-37~40 図版 58-2 71-37~40)

位置：H-47 区 規模：162×110 cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 調査区西側の段丘縁辺付近で検出した。土器は小規模なまとまりで、点数も少ないが、周囲に遺物が出土していないことから集中遺物として掲載している。この地点は下位に古い倒木痕があるため土層の色調が褐色を呈している。土器集中は倒木痕より新しい。

**出土遺物** VPB-24 で記載。

(奈良)

**VPB-28** (図Ⅲ-64 72-47~50 図版 58-3・5 73-47~50)

位置：I-46・47 区 規模：108×70 cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 調査区西側の段丘縁辺付近で検出した。土器の分布は東西に約 2m、南北に 0.7 m と細長い分布範囲であった。基底面確認のため、土器を台状に残し全体の分布を確認したところ、西側は比較的大きな破片で東側は細片であった。地文から別個体と判断できたため、それぞれに集中個体番号を付番して調査した。本集中は器表面の剥落や細片が多いため殆どを座標単点で取り上げている。

(奈良)

**出土遺物** (Ⅲ-72-47~50 図版 73-47~50) 全て IV 群 A1 類 a 種に相当する。47・48 は同一個体で口縁部に細い貼付帯、胴部に 3 段の貼付帯を施す。地文は 0 段多条 RL 斜行縄文で、貼付帯上にも施文されている。内面は平滑なナデが施されている。48 は 47 より下位に位置する破片であるが、0 段多条異原体羽状縄文が施されるため、全体の文様構成は胴部上半の貼付帯、下位は斜行または羽状構成になっていることがわかる。49・50 は同一個体片で、49 は地文と貼付帯上に 0 段多条 RL 斜行縄文が施される。50 は底側縁付近で 0 段多条異原体羽状縄文が施される。

(宮塚)

## VPB-29 (図Ⅲ-64 73-51-52 図版 58-6 73-51-52)

位置：I-45・46区 規模：200×132cm 検出層位：VbU

**確認・調査** この集中はVPB-31の東側約2.5m地点に出土している。土器自体は細片が多く密な分布ではないが、周辺に遺物が出土していないことから遺物集中とした。一度取り上げた後、下位からは同一個体の細片が出土したが、土坑などのプランは認められなかった。

(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-73-51-52 図版 73-51-52) 51はIV群A2類に分類され、直立からやや内湾して立ち上がる。口唇部は隅丸角状を呈し、地文と同様の0段多条LR斜行縄文が施され、口縁部直下には縄端刺突文が施される。52はたたき石で棒状素材の片面中央付近に敲打痕が密集し浅く窪む。

(土器：宮塚 石器：宮崎)

## VPB-30 (図Ⅲ-65 73-53~55 図版 58-7 59-1 73-53~55)

位置：F-41・42区 規模：258×202cm 検出層位：VbU

**確認・調査** グリッドごとに包含層を掘り下げていると、調査区東側段丘崖裾付近に土器がまとまって出土した。この集中は殆ど細片で、土器片自体も器表面、裏面の剥落が著しいため全て座標点で取り上げ、1cm以下のものについては範囲内で一括取り上げを行った。遺物は斜面裾が水平になったところに集中範囲が広がり、段丘崖には分布域を広げていないため、高位段丘面との関連性は認められない。

(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-73-53~55 図版 73-53~55) 53~55はIV群A1類a種に分類される同一個体破片である。53は内面が剥落しているがかろうじて口唇部が残る。54は口縁部直下の貼付帯、55は胴部破片である。口唇部には0段多条RL斜行縄文、53は口縁部直下の貼付帯上に0段多条RL斜行縄文、54はやや幅広いの貼付帯に0段多条LR斜行縄文が見られ、棒状工具で斜め下方からの刺突文が認められる。内面が剥落しているので貫通しているかどうかは不明であるが、孔の断面形状から貫通していない刺突文と思われる。55の貼付帯上は0段多条RL斜行縄文、地文はLR斜行縄文が施され羽状構成をなす。

(宮塚)

## VPB-31 (図Ⅲ-64 73-56~59 図版 58-3・4 73-56~59)

位置：I-46区 規模：202×90cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 先述したVPB-28の東側に広がる土器集中。口縁部片が多く出土し、同一レベルでポイント類も認められる。先述したようにVPB-28とは地文が異なるため別個体と判断して調査した。

(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-73-56~59 図版 73-56~59) 56はIV群A1類a種に分類される。切り出し状の口縁部断面をもち、口唇と貼付帯上には0段多条RL斜行縄文、地文は0段多条LR斜行縄文が施文される。段状の貼付帯が2段見られ、その下端にO1刺突文がそれぞれ巡る。

剥片石器はポイント類4点が集中範囲の北側に比較的まとまって出土した。図示した3点は石槍に分類され、すべて被熱している。57は左右非対称の石槍で、図の正面左側の逆刺が丸味を帯びており、基部端に転蹠面が残る。58は菱形、59は木葉形で、58は尖頭部に向かって薄くなる。59は基部に微細剥離が集中する。器体は僅かに反り、最大幅の部位が最も薄くなるが、両端は断面レンズ状の断面をもち、比較的厚手となる。

(土器：宮塚 石器：矢野)

VPB-32・34・35 (図Ⅲ-65・66 73-61 図版 59-2・5~7 73-61)

〔VPB-32〕位置：F-47区 規模：128×88cm 検出層位：VbU

〔VPB-34〕位置：F-46・47区 規模：160×25cm 検出層位：VbU

〔VPB-35〕位置：F-46・47区 規模：58×34cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 調査区北西側から検出した。本集中が出土する地点はVPB-32、34、35が近接しており、分布は連続しているようにも見えたが、それぞれにまとまりがあったので3ヵ所に分けて記録を行った。このF-46区周辺は土器集中の北西側にVH-17、北東にはTP-138の掘り上げ土が分布しており非常に遺構密度の濃い地点である。土器は点数的にはVPB-32が最も密集しているが、殆どが1cm以下の細片で、図化できるほど大きな個体は出土していない。こうした細片で出土する土器集中の多くはIV群A1類が多く、胎土に砂粒を多く含む要因から器表面の剥落や細片化が生じたものと思われる。(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-73-61 図版 73-61) わずかに接合した破片から、図示できるものはVPB-34から出土した61のみである。IV群A2類に分類され、外傾する隅丸角状の口縁部を持つ。口唇部は0段多条LR斜行縄文、口縁部には横走気味の0段多条LR斜行縄文の上に縄端刺突文が施される。(宮塚)

VPB-33 (図Ⅲ-66 73-60 図版 59-3・4 73-60)

位置：D-46区 規模：86×42cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 調査区北西側の包含層を掘り下げたところ、楕円形の範囲に土器がまとまって出土した。先述した土器集中と同じく、両面の剥落と細片が多く、比較的大きな破片のみ図化してそれ以外は単点のみの記録とした。(奈良)

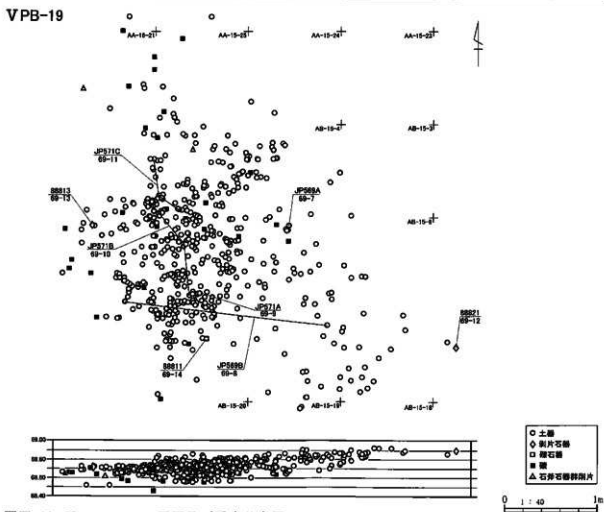
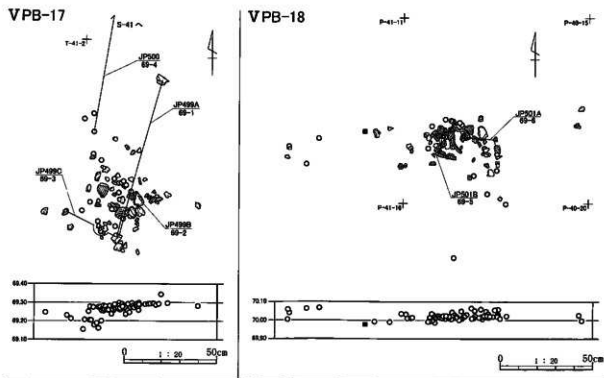
**出土遺物** (図Ⅲ-73-60 図版 73-60) 60はIV群A2類に分類され、やや内湾気味に直立する口縁部を持つ。口唇部・口縁部貼付帯上・貼付帯下位に0段多条LR斜行縄文が施される。(宮塚)

VPB-36 (図Ⅲ-66 74-62 図版 59-8 60-1 74-62)

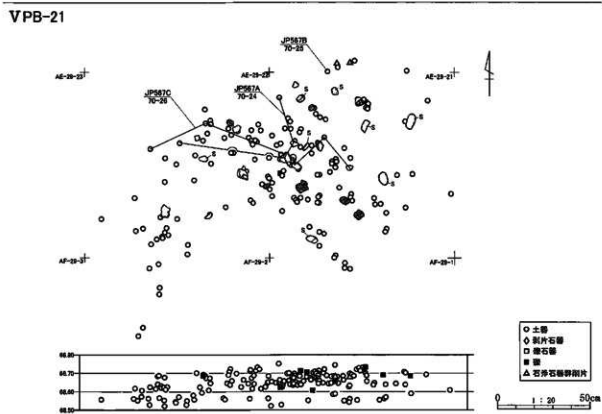
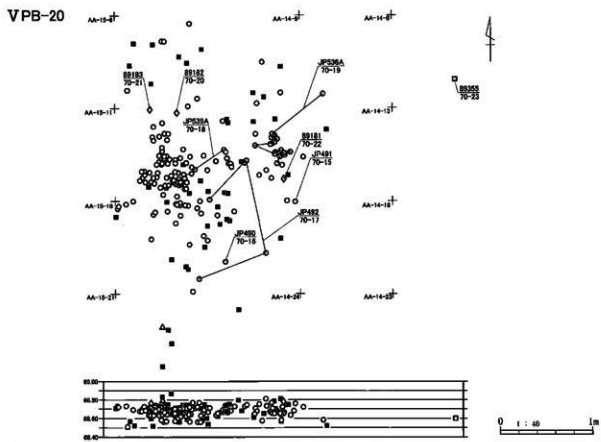
位置：H・I-44区 規模：22×20cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 調査区北西側で出土した。西側にはVPB-24、28、29、31が分布しており、周辺は比較的遺物がまとまって出土する地点である。本集中は他の土器集中とは出土状態が異なり、比較的原型をとどめた土器片が4分の3程円形に巡って、立った状態で出土した。このような状態から埋設土器の可能性が考えられ半載して断面確認を行った。その結果、土器は口縁部を下にした倒立状態であった。この土器に伴う掘り込みは確認できなかったため単独の土器集中として調査した。微細図を記録した後、土器内部の土壌を観察したが基本土層と同一のものであると判断した。(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-74-62 図版 74-62) 62はIV群B1類に属する。山形小突起を4ヵ所(3ヵ所は現存)配する。口唇部は角状を呈し、0段多条LR斜行縄文を施文し、施文後ナデによって平滑に仕上げている。口縁部は一部横走るLR斜行縄文、内面口縁部にLR横走縄文・ナデが施される。(宮塚)

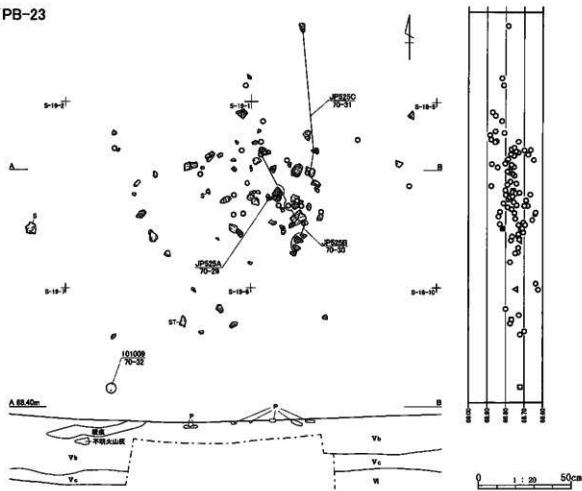


図Ⅲ-60 VPB-17～19 平面及び垂直分布図

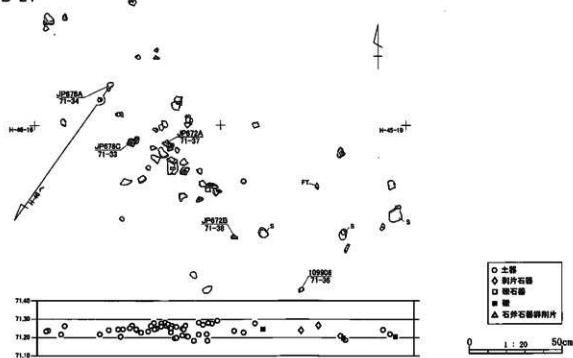


図Ⅲ-61 VPB-20・21 平面及び垂直分布図

VPB-23

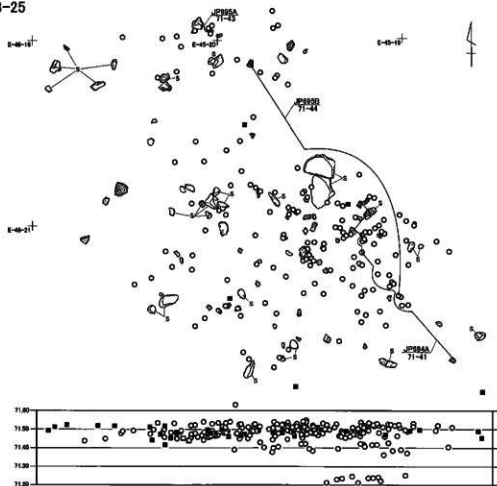


VPB-24

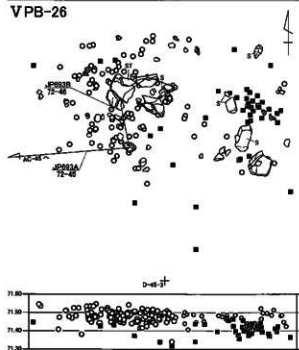


図Ⅲ-62 VPB-23・24 平面・断面及び垂直分布図

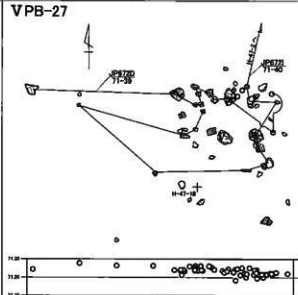
VPB-25



VPB-26



VPB-27



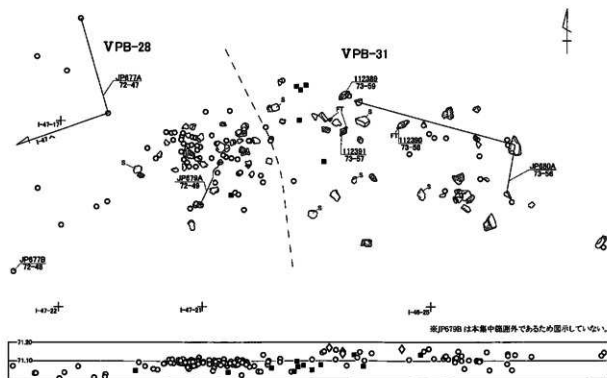
- 土器
- ◇ 削片石器
- 礫石器
- 礎

0 1 : 20 50cm

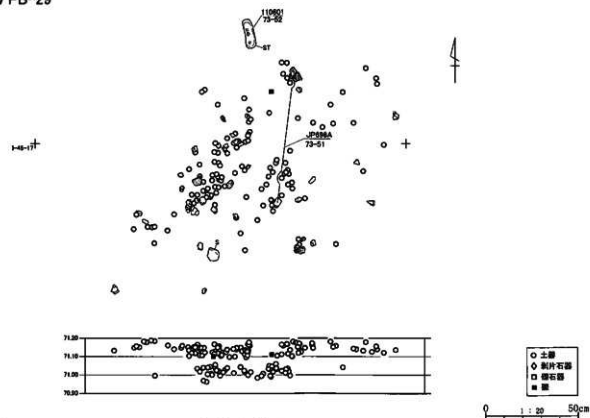
図Ⅲ-63 VPB-25 ~ 27 平面及び垂直分布図



VPB-28・31

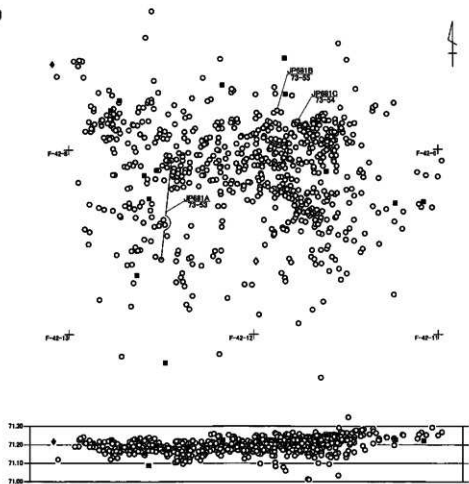


VPB-29

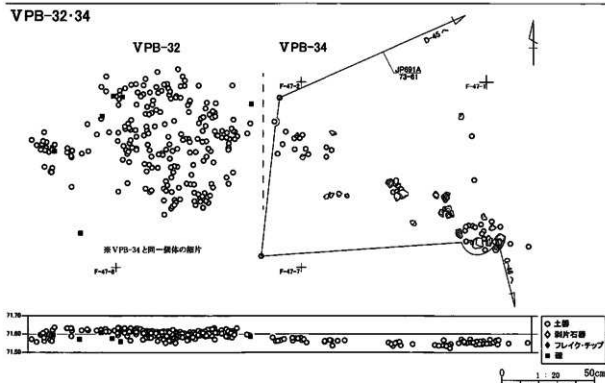


図Ⅲ-64 VPB-28・29・31 平面及び垂直分布図

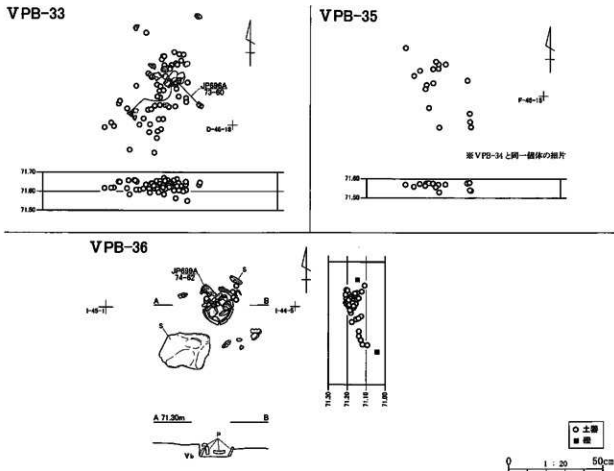
VPB-30



VPB-32・34



図Ⅲ-65 VPB-30・32・34 平面及び垂直分布図



図Ⅲ-66 VPB-33・35・36 平面・断面及び垂直分布図

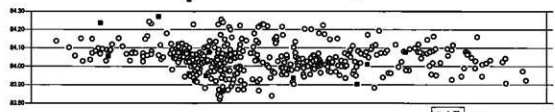
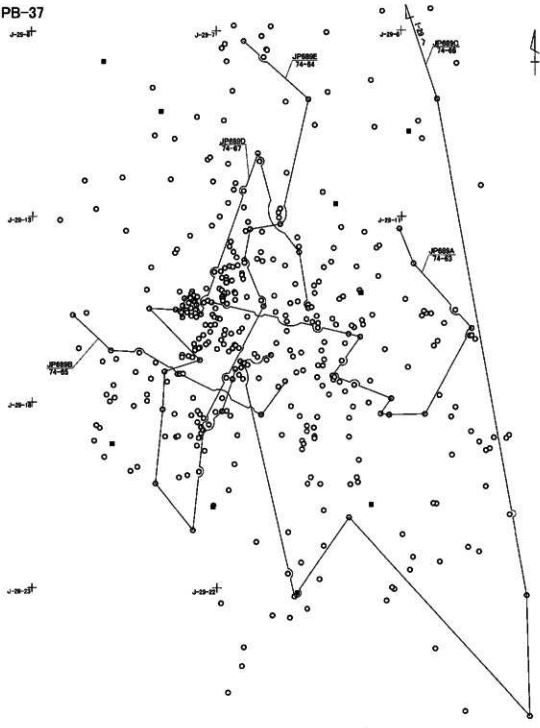
## VPB-37 (図Ⅲ-67 74-63~67 図版 60-2・3 74-63~67)

位置：J-29区 規模：403×202 cm 検出層位：VbU

**確認・調査** 高位段丘面北側をグリッドごとに掘り下げたところ、Vb層上位で口縁部を含む土器が約4m×2mの広範囲に分布していた。疎らでまとまりがなく殆どが細片資料であったが、分布する土器が同一レベル、同一個体片であったことから土器集中として調査した。写真撮影後、一度遺物を取り上げて面的に掘り下げたところ、下位には比較的大きな破片が出土した。全ての遺物を取り上げて調査終了とした。(奈良)

**出土遺物** (図Ⅲ-74-63~67 図版 74-63~67) 63~67はIV群A1類a種に分類される同一個体。63・64は口縁部で細い貼付帯とその下に段状の貼付帯を有する。更に口唇部から縦位貼付帯を2段目の貼付帯に達するまで付され、小突起を有する。この縦位貼付帯頂部には中空工具による円形刺突文が施される。口縁部直下には貼付帯下に斜め下方から0I刺突文が施文される。口唇部、口縁部貼付帯(縦・横)には0段多条LR斜行縄文が施文され、段状をなす幅広い貼付帯にも0段多条LR斜行縄文が施される。65・66は胴部片で65から胴部上半まで貼付帯が巡り、胴中央部から下半部にかけて、0段多条LR斜行縄文が施文されるが、これに加えて、結縛痕や縦回転によって羽状構成をなす部分も認められる。67は底部で底部側面には指頭による圧痕が残されている。(宮塚)

VPB-37



図Ⅲ-67 VPB-37 平面及び垂直分布図

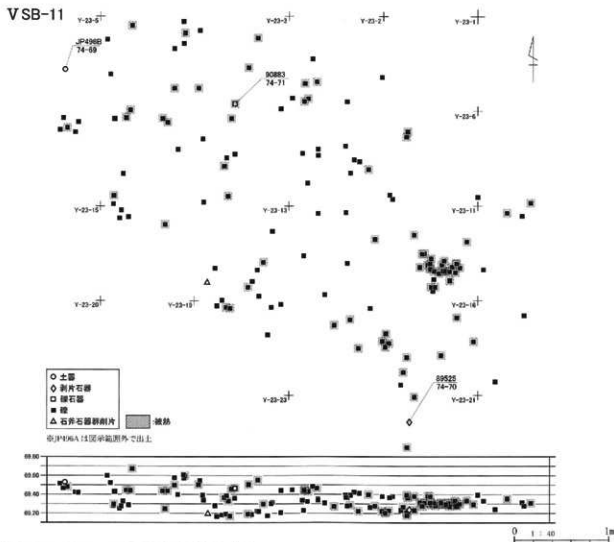
2. 礫集中

VSB-11 (図Ⅲ-68 74-68~71 図版 60-4・5 74-68~71)

位置：X・Y-23区 規模：584×308 cm 検出層位：VbU

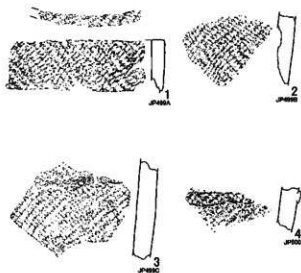
**確認・調査** 北側段丘崖裾のVb層上位を調査中、段丘崖の裾に多量の礫が出土した。段丘崖裾はもともと段丘礫に混じって自然礫も多く出土している。こうした礫が特に集中している範囲にVSB-10~12を付番し、それぞれの範囲を記録して遺物の取り上げを行った。しかし一次整理の段階で礫の形状や出土状態を検討した結果、大部分は段丘礫と判断しVSB-10と12は欠番とした。その中でX・Y-23区のVSB-11とした礫集中は出土礫の半数以上が被熱しており人為的なものと捉えられたためここで報告する。調査はVb層下位まで掘り下げた時点でこぶし大より大きな礫の輪郭を記録した後、写真撮影、取り上げを行い調査終了とした。本集中は被熱礫が主体で破片数は多いが、被熱による破損個体が含まれており実際の個体数は少ない。

(宮崎)

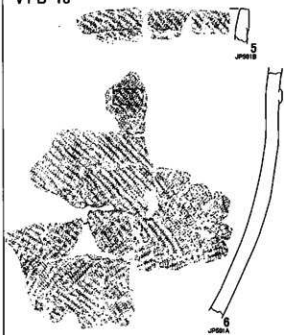


図Ⅲ-68 VSB-11 平面及び垂直分布図

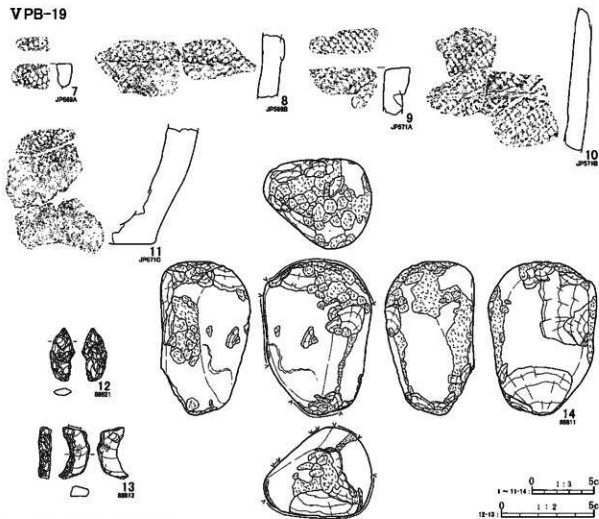
VPB-17



VPB-18

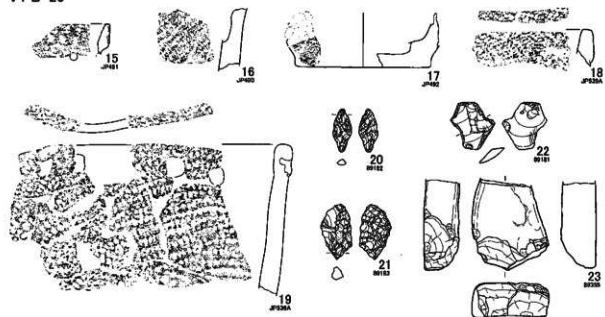


VPB-19

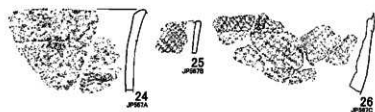


図Ⅲ-69 VPB 出土遺物(1)

VPB-20



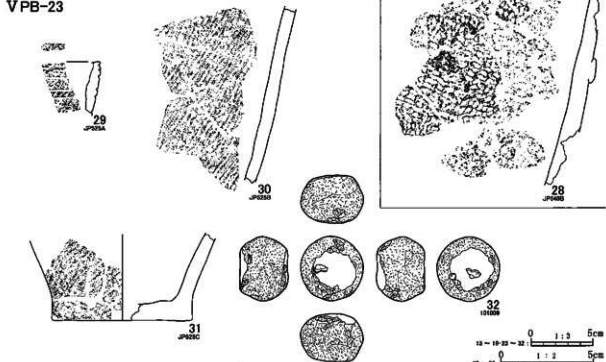
VPB-21



VPB-22



VPB-23

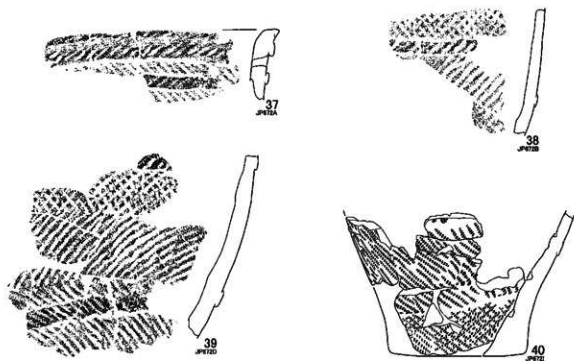


図Ⅲ-70 VPB 出土遺物(2)

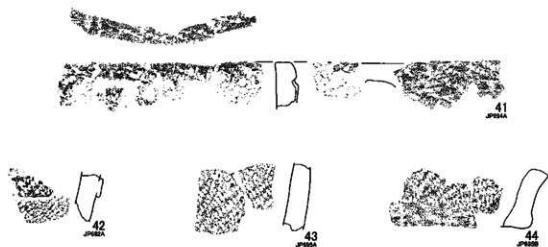
VPB-24



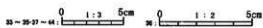
VPB-24・27



VPB-25

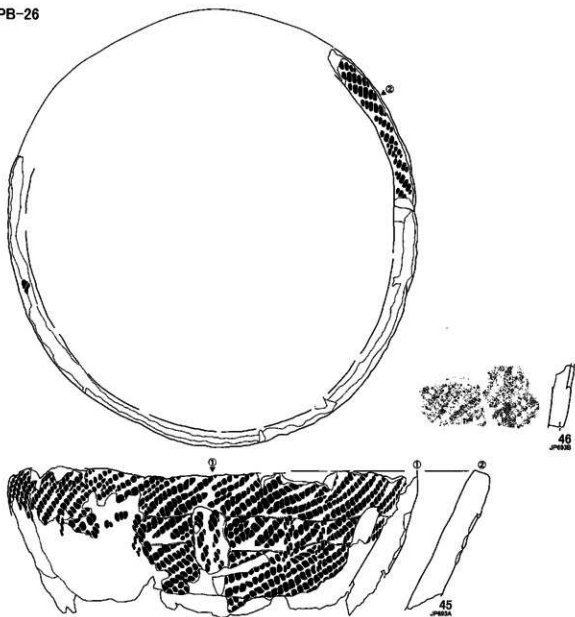


図Ⅲ-71 VPB 出土遺物(3)

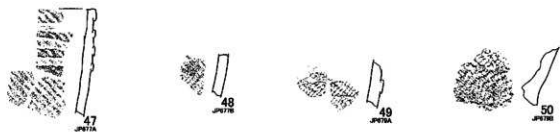




VPB-26



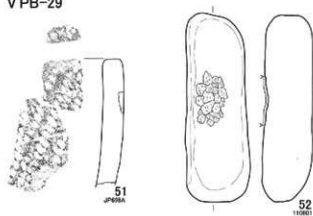
VPB-28



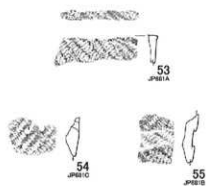
0 1:3 5cm

図Ⅲ-72 VPB 出土遺物(4)

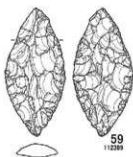
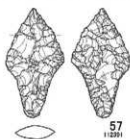
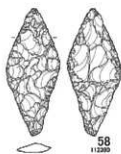
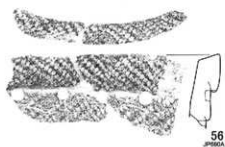
VPB-29



VPB-30



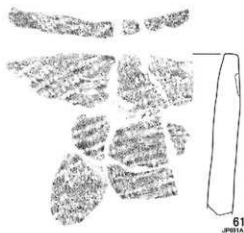
VPB-31



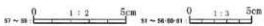
VPB-33



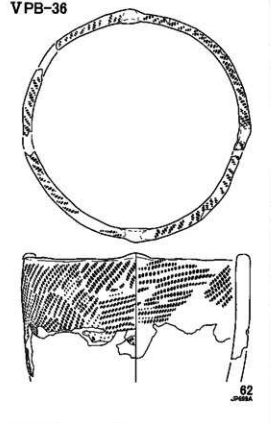
VPB-34



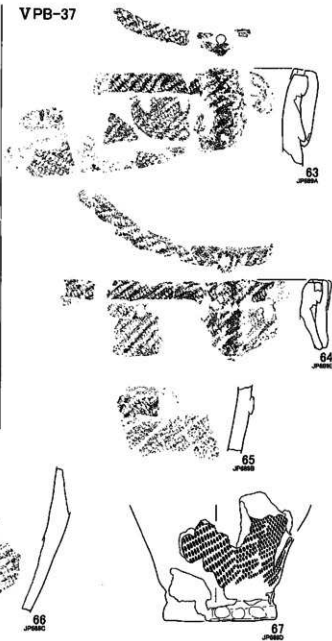
図Ⅲ-73 VPB 出土遺物(5)



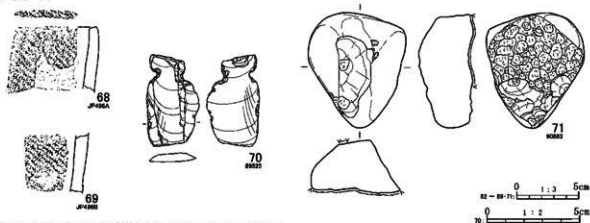
VPB-36



VPB-37



VSB-11



図Ⅲ-74 VPB 出土遺物 (6)・VSB-11 出土遺物

**出土遺物** (図Ⅲ-74-68~71 図版 74-68~71) 本集中からは土器片、剥片石器、礫石器、礫、剥片各1点と礫131点が出土している。68・69はIV群B2類手稲砂山式段階に位置づけられる比較的薄手の土器である。68は礫集中範囲外の包含層から出土したもののだが、69と同一個体であるため、合わせて掲載している。ともに色調は暗茶褐色で、胎土には砂粒のほか繊維も少量含まれる。焼成は良好で、破断面では平行組織が観察できる。0段多条斜行縄文施文後に器面をなでつけ、表裏に指頭圧痕が残されている。68はやや内湾する平縁の口縁部で、口唇部は内削ぎ気味の隅丸角状につくられ、0段多条RL斜行縄文が施されている。69は胴部片である。70は剥片石器でA4類に分類したナイフ・スクレイパー類。素材剥片に深い抉りを持つつまみを作成しているが周縁の調整痕は疎らである。71はII B3類のたたき石である。断面が台形状を呈した三角形の素材礫の頂点付近と側縁稜、上下端部に剥離と敲打痕が認められる。

(土器：高橋 石器：宮崎)

### 3. 剥片石器集中

#### VFTB-01 (図Ⅲ-75-79 図版 60-6-7 75)

位置：Y-20区 規模：200×156cm 検出層位：VbU・VbM

**確認・調査** Y-20区のVb層上位を調査中、両面調整石器を主体とする剥片石器が複数個体出土する範囲を確認した。本集中範囲の中でも3点が重なり合って出土した地点を中心に十字ベルトを設定し、出土層位の確認と周辺の精査を行った。その結果、Vb層上位から中位にかけて、200×156cmの範囲に両面調整石器8点(2点は接合)、ポイント類4点、石錐1点の計13点の剥片石器を検出した。分布状態は疎らだが出土層位がほぼ同一面であること、これまでの調査でショロマ1遺跡では両面調整石器はほとんど出土していないことから剥片石器集中とした。また断面では掘り込み等が確認されず、周辺からフレイク・チップがほとんど出土していないことから、完形品として本遺構内に持ち込まれたものと思われる。(宮崎)

**出土遺物** (図Ⅲ-79 図版 75) 1~4は石槍に分類した。1・2は基部が明瞭で基部端が平らになる。断面形については最大幅でいずれもレンズ状になる。3は表面右側の逆刺が不明瞭で左右非対称となる。4は基部側の両側縁が内湾し、基部が張り出す石槍である。つまみ付きナイフとも分類可能であるが、平面形が左右対称で先端が尖ること、断面形もレンズ状で、尖頭部周辺に刃部の磨滅がみられないことから石槍と分類した。同様の石器は北海道西部で多くみられ、縄文前期を主体とする寿都町寿都3遺跡(寿都町教育委員会1979)や洞爺湖町入江遺跡(洞爺湖町教育委員会2007)などで出土している。5は石錐で柄と機能部の区別が不明瞭で棒状を呈する。機能部は磨滅しており、回転に伴う擦痕が観察できる。6~12は両面調整石器である。6~9は片面に全面加工され、裏面は縁辺のみで主剥離面を大きく残すため、断面形状が半円状になる。10~14は両面調整であるが、剥離方向が一定ではなく縁辺の微細剥離も連続していない。断面形状は凸レンズ状になる。11は両端に岩屑面が残り素材長軸を最大限に利用していることがわかる。12は上端に階段状の剥離と縁辺に潰れが認められる。7・11・12は表面の稜に磨滅がみられる。大きさは6~7cmの小型(6~10)と10~11cmの大型(11・12)に分類でき、小型はさらに、長短比1.9前後の長楕円形(6~8)、長短比1.5前後の円に近い楕円形(9・10)の2タイプに分けられる。石材はすべて黒曜石である。(矢野)

## VFTB-02 (図Ⅲ-75 80-1~11 図版 60-8 61-1 76-1~11)

位置: V-20 区 規模: 92×24 cm 検出層位: VbU

**確認・調査** 調査区東側段丘崖裾の V-20 区を調査中、Vb 層中位で長軸約 20 cm の狭い範囲で小型の剥片石器がまとまって出土した。遺物を中心にベルトを設定し土層の確認を行ったが掘り込みは認められなかった。遺物はポイント類の他に R.F.U.F とごく僅かにフレイク・チップが出土している。石材は赤井川産の黒曜石が主体である。約 50 cm 北側でも U.F が 1 点出土しており、同一の石材であったことから本集中に含めた。(宮崎)

**出土遺物** (図Ⅲ-80-1~11 図版 76-1~11) 1~5 はポイント類で、1・2 は基部が明瞭、3~5 は基部が不明瞭である。1 は鎌身部両側に抉りがみられる。基部は欠損しているが逆刺が左右非対称に作出されている。2 は片面調整であるが、表面に稜を持ち断面は三角形を呈する。3 は最大幅のある部位で最大厚を測り、断面は凸レンズ状を呈する。4 は鎌身部の角度が異なり左右非対称であるが、再調整の剥離は認められない。5 の鎌身部は薄く、表面右側に新しい剥離があることから、再調整の可能性がある。6~11 は U.F・R.F に分類したもので、側縁の一部に剥離が認められる。6 以外は岩屑面を残す。石材は全て黒曜石で、3・4 は球顆を多く含むことから赤井川産であると考えられる。(矢野)

## VFTB-03 (図Ⅲ-75-80-12~16 図版 61-2 76-12~16)

位置: H-45 区 規模: 4×3 cm 検出層位: VbL

**確認・調査** VPB-24 を調査中、約 70 cm 南東の H-45 区で、剥片石器 5 点が重なり合って出土した。現場では包含層出土として出土状態の写真撮影を行い、遺物を取り上げ調査終了とした。本集中については整理の段階で周囲に剥片石器がほとんど出土していないことから、1 つの集中と捉え VFTB-03 とした。出土地点が縄文時代後期初頭の土器が出土している VPB-24 と近接しており、これに関連した可能性が高い。(宮崎)

**出土遺物** (図Ⅲ-80-12~16 図版 76-12~16) 12 は基部が明瞭な、表面に急角度の刃部が作出される石鎌で断面が凸レンズ状を呈する。13~16 は基部が不明瞭で、15・16 の基部は粗い剥離、16 は側面観がやや湾曲するなど未製品の可能性が考えられる。13 は全体的に均質な器厚で断面凸レンズ状を呈する。14 は基部右側に素材形状が残り断面は歪な台形状となる。(矢野)

## 4. フレイク・チップ集中

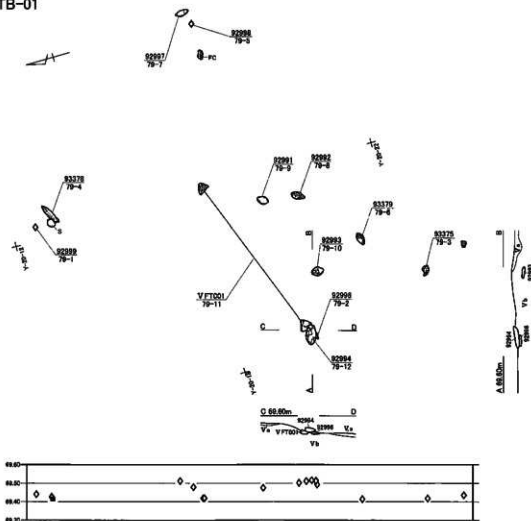
## VFCB-05 (図Ⅲ-76 80-17 図版 61-3 76-1-17)

位置: D・E-47・48 区 規模: 578×260 cm 検出層位: Vc

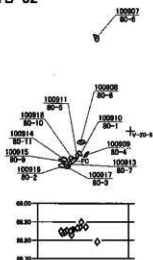
**確認・調査** VF-34 を調査中、焼土の周囲から長軸 2~3cm のフレイク・チップが疎らに出土した。調査は Vc 層まで掘り下げ、遺物の分布範囲を確認した。出土状態の写真撮影、取り上げを行って終了した。VH-17 と一部重複するが、本集中の主体部ではないため新旧関係は不明。ただ、垂直分布ではほぼ水平で覆土に流れ込んだ形跡が認められない。

**出土遺物** (図Ⅲ-80-17 図版 76-1-17) 17 は IV 群 A1 類 b 種の胴部片で、地文は縦回転の RL 斜行縄文である。胎土に白色岩片を含む。(奈良)

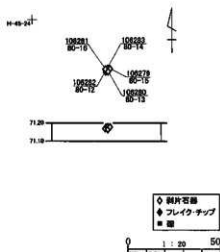
VFTB-01



VFTB-02



VFTB-03



図Ⅲ-75 VFTB-01～03 平面・断面及び垂直分布図

VFCB-06・07 (図Ⅲ-77 図版 61-4・5)

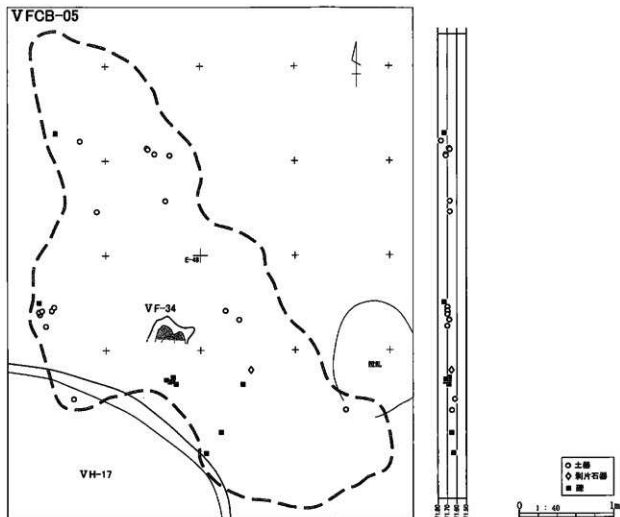
[VFCB-06] 位置: B・C-46・47区 規模: 253×170 cm 検出層位: V bL

[VFCB-07] 位置: C・D-46・47区 規模: 94×75 cm 検出層位: V bU

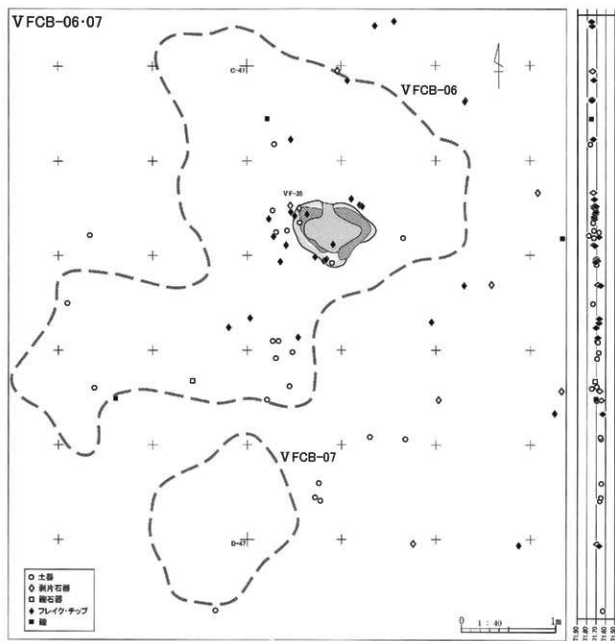
**確認・調査** V層包含層を掘り下げている際、調査区の一番北側の縁辺部付近でフレイク・チップが散在していた。フレイク・チップの一部が被熱していたため、下位に焼土の可能性を考え周辺の広がり、更に掘り下げを行った。本集中の広がり、南北にかけて不整形に広がり、分布密度からVFCB-06と07に分けて記録を行った。本集中に含まれる遺物については被熱した資料も認められ、VFCB-06範囲内のほぼ中央付近から焼土(VF-35)を1ヵ所検出しているため関連する遺構と考えられる。

**出土遺物** VF-35で掲載。

(奈良)



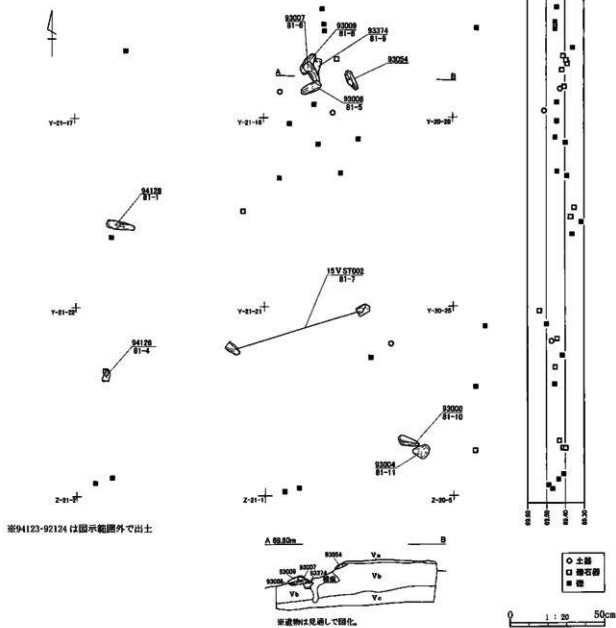
図Ⅲ-76 VFCB-05 平面及び垂直分布図



図Ⅲ-77 VFCB-06-07 平面及び垂直分布図

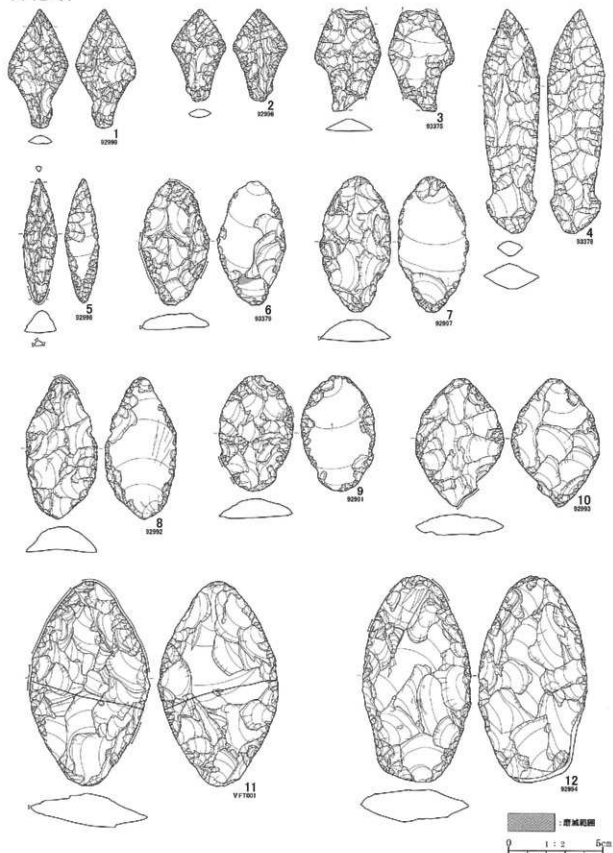


VAXB-01 周辺 (Vb 層上位面)



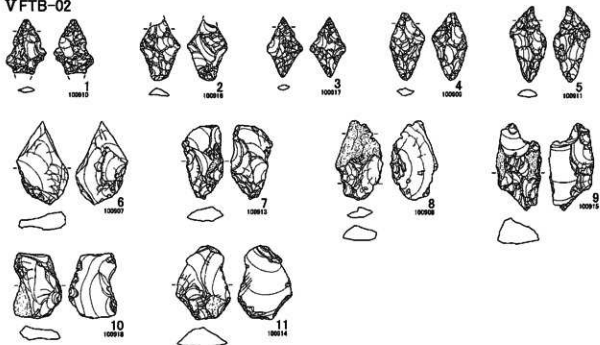
図Ⅲ-78 VAXB-01 周辺平面・断面及び垂直分布図

VFTB-01

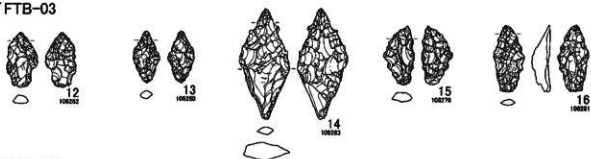


図Ⅲ-79 VFTB-01 出土剥片石器

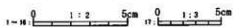
VFTB-02



VFTB-03



VFCB-05



図Ⅲ-80 VFTB・VFCB 出土遺物

## 5. 石斧集中

VAXB-01 (図Ⅲ-78 81 図版 61-6 76-2-1~11)

位置: Y-20・21区 規模: 222×194 cm 検出層位: VbU/VbM

**確認・調査** Va層調査中に石斧が重なって出土した地点を検出した。周辺を精査すると、石斧・石斧未成品が径2mの範囲でさらに出土したため、VAXB-01と付番して調査を進めた。

石斧・石斧未成品は北側でまとまっているが、それ以外はまばらに分布している。写真撮影・記録して調査を終了した。

**出土遺物** (図Ⅲ-81 図版 76-2-1~11) 1は青色片岩製のA1類に分類される石斧。片刃で裏面は刃部のみ研磨されている。2はA2類に分類した緑色泥岩製の両刃の石斧で両面の刃部に使用痕と思われる線条痕が残る。3はA3類に分類した緑色泥岩製の丸のみ形石斧で全面研磨されている。刃部には浅いが明瞭な窪みが認められ、左傾する擦痕が残る。4はB1類に分類した緑色片岩製の石斧未成品。器体中央部より欠損している。5・6はB2類に分類した緑色泥岩製の石斧未成品。5は正面下部、6は正面上半部に転礫面を残し、剥離面で覆われており、敲打痕は見られない。7・8はC類に分類される石斧未成品。7はドレライト製で左側縁に敲打痕を残し、正面は転礫面が大きく残る。8は右側縁に連続した剥離痕が見られ、両面に転礫面を大きく残す。9は石材が緑色泥岩で素材形状も扁平で縦長であることからD類に分類した石斧素材である。10はI B1類に分類したたたき石で、1側縁に擦切り痕を残す石斧未成品を転用したものの。下端の後縁部に使用痕が残る。11はII B2類に分類したたたき石で、側縁後縁部と両端に敲打痕・擦痕を残す。時期は石斧の形態から縄文時代中期末葉から後期前葉と考えられる。(宮塚)

## 第7節 V層包含層出土遺物

### 1. 土器 (図Ⅲ-82~89 図版 77~84)

本遺跡の樽前cテフラ下層のV層遺物包含層からは縄文時代早期後葉から後期末葉にかけての縄文土器が5,359点出土している。主体となる時期は縄文時代中期後葉から後期前葉にかけての時期である。平成27年度は高橋と山戸が、平成28年度は山戸が主体となり出土地点、文様、胎土、焼成などの要素を中心に可能な限り個体識別を行い、個体番号を付した。報告書掲載にあたっては口縁部文様帯、胴部の地文の個体全体の構成や特徴を記述するため、同一個体片を複数点掲載している。(高橋)

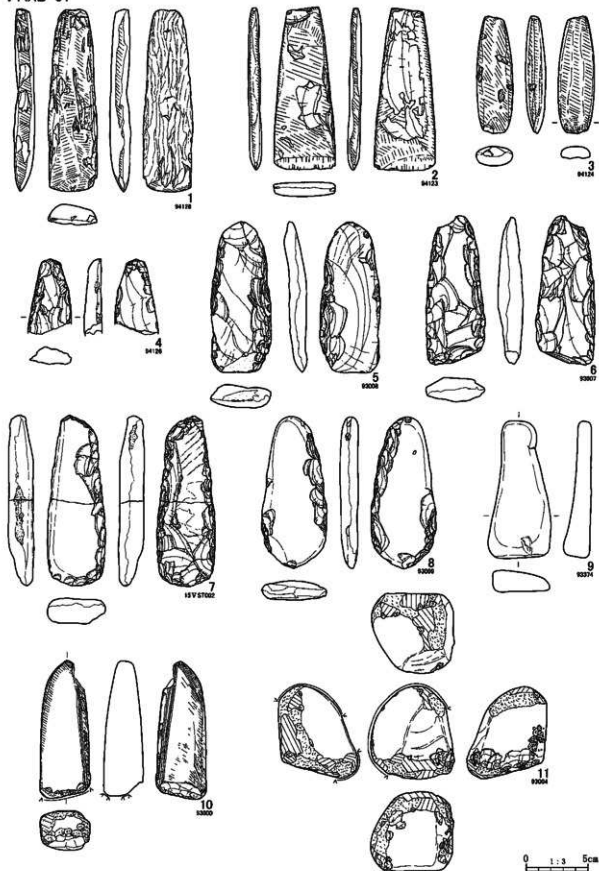
#### I群 B3類 (1~4)

縄文時代早期後葉の中茶路式土器に相当する。いずれも微塵級線文が見られ、1は結束第1種羽状縄文、2は短縄文、3はRL斜行縄文、4は燃糸文が施される。いずれも胎土には砂粒を少量から多量含むが、4は石英粒を多量に含む富良野盆地系土器である。

#### II群 B2類 (5~7)

本群は縄文時代前期後葉~末葉の円筒土器下層c式・d式土器に相当する。5は平縁の口縁部で、口唇は丸状である。口唇部には縄の刻み、口縁部には異なる原体による縄線文が施されている。6は胴部片で、縄線文と絡条体圧痕文が、7は縦位に条痕文が施文される。いずれも内面はミガキ調整が施され、胎土は繊維を少量から微量含んでおり、7には海綿骨針も混入している。

V AXB-01



図Ⅲ-81 V AXB-01 出土礫石器

## II群 B3類 (8-9)

本群は植苗式土器に相当する土器群である。8は口唇部がやや外削ぎの角状となる。口唇部には羽状縄文が、口縁部は0段多糸異原体羽状縄文に破線状LR原体側面圧痕が3条認められる。9は胴部で直前段合攪りが施文されている。いずれも胎土に繊維を少量から微量含む。

## III群 A1類 (10)

本群は縄文時代中期前半の円筒土器上層a式・b式土器に相当する。口縁部の突起破片である。貼付帯は突起に沿う形と水平方向に付され、撚糸圧痕文が貼付帯に直交して施される。また、突起間にも撚糸文圧痕文がみられる。内面が残存しているところではミガキ調整が認められる。

## III群 B1類 (11)

本群は縄文時代中期後半の天神山式土器に相当する。やや外傾する胴部片で、横位の貼付帯上には断続的に3~4条の細い横走沈線文が施文され、地文は異原体羽状縄文が施される。内面はヘラナデ調整が施される。

## III群 B2類 a種 (12~36)

本群は縄文時代中期後葉の柏木川式土器に相当する。胎土には後続する北筒式土器(III群 B3類)より繊維が多く含まれる傾向がある。粒径2mm以上の石英結晶を含む富良野盆地系土器に該当するものは出土しなかった。器形は波状口縁になるもの(12~14・19)、平縁(15~18・20・23・24・28・29)があり、口縁部はやや外傾するもの(13~19・23・29)、ほぼ直立するもの(12)、やや外反・外反するもの(20・24・28)がある。口唇部は隅丸角状(12・15・18~20・28・29)、角状(13・14・17・23)、丸状(16・24)のものがある。12~14は山形突起に垂下する縦の貼付帯、24は2個1対の山形小突起を有する。

口唇部には12にR斜行縄文、13・14にLR斜行縄文、15に押し文、17に突引文(外)、18・19に突引文(内)、24は突起頂部に縄の刻み、28はLR原体の刺突が施される。

口縁部には先述したように12~14・24は突起から垂下する縦位貼付文が認められる。12は貼付帯上に縄原体の押圧と思われる窪みと、両側に中空工具による円形刺突文が3カ所、R原体の側縁圧痕、斜行縄文が施される。13・14はいずれも棒状貼付文後に地文を施文しており、内面も同一原体で施文している。24は突起から垂下する2条の貼付帯を挟むように口縁部直下と胴部に横環する貼付帯が付され、貼付帯上及び貼付帯間に0段多糸LR原体側面圧痕文が施されている。15は少なくとも4段、16は1段の押し文が施される。17~20は沈線文を施すもので、18・19は口唇部と同じ工具で施文している。21・22は20と同一個体で、21は貼付帯上に刺突文が連続して施されている。また、21の破片上部には沈線文がみられるため沈線文下に貼付帯が巡る構成となる。23は口縁部の薄い貼付帯に貫通小孔を密に並列させる特徴的な資料である。25・26は胴部であるが、地文以外に25は横位および縦位から斜位へ屈折する突引文が加えられており、施文の手法が天神山式土器に近く古手の可能性がある。26は24と同じく縦横の貼付帯上と胴部にLR原体側面圧痕が、27は低い貼付帯に平行沈線文的な短刻線が施されており地文や胎土に繊維を含むことから本群に含めた。28・29は地文縄文のみであるが29は指頭圧痕で器表面に凹凸がみられる。30~33は胴部で、結束第1種LR斜行縄文(30)、斜行縄文(31・33)が施される。32は緩く撚ったRL原体の絡糸体回転文と考えられる。34~36は底部。34は平底で側面が張り出し、底部変換点が丸状になる。35は平底で側面から直立して立ち上がり、

変換点は隅丸角状になる。36 はやや上げ底で内面中央部に突起が認められる。

### Ⅲ群 B2 類 b 種 (37)

本群は道南系の大安在 B 式に相当するもの。37 は地文が絡条体回転文で同心円とそれに繋がる沈線文、縦方向の懸垂文が認められる。

### Ⅲ群 B3 類 a 種 (38~55・63~70)

本群は縄文時代中期末葉の北筒式土器に相当する。本群は大きく在地系土器 (38~55) と富良野盆地系土器 (63~70) に分けて図を構成した。器形は全て平縁で口縁部が直立するもの (41~43・48・67・69)、外傾するもの (63~66・68)、外反するもの (38~40・45・47・49) がみられる。口唇部形態は外削ぎ (38)、隅丸角状 (48・63・64・67)、丸状 (39・41~43・47・66・68) などで、38・40・42・45 は肥厚帯がみられる。47・64~66 は口縁部直下に隆帯を付しており、成形の指頭圧痕が顕著に残され、隆帯の一部が潰れて隅丸角状になる。

口唇部には円形刺突文 (63)、棒状工具の突引文 (64)、半截竹管内側の突引文 (66) が施される。口縁部には半截竹管内側の突引文 (38・39)、半截竹管内側の押引文 (40・43)、ヘラ状工具の押引文 (42)、縄端による押引文 (41) に竹管状工具を用いた円形刺突文 (38・39・41・48・66~68)、棒状工具を用いた円形刺突文 (40・42・43・45・47) が施される。口縁部の OI 円形刺突文は概ね 10 mm 未満 (41・42・45・48・64・68) と 10 mm 以上 (38~40・43・47・66・67) に線引きを行っても在地、非在地の差は認められない。これらの胴部文様は 38~40・42~45 が斜行縄文を地文としている。46 は 45 と同一個体の底部で、底部変換点を指頭圧痕によって成形している。47 は口縁部に隆帯を横環しており、その上下を指頭圧痕により成形し円形刺突文を配しているが、粗雑で隆帯の幅も一定ではない。地文に綾絡文が認められるのが柏木川式土器に比較的多くみられる要素で、本資料は古手の可能性がある。41 は器表面の風化が著しいが R 無節が羽状構成に施される。44・49~55 は胴部で 44 は細めの貼付帯に半截竹管状工具の内側による押引文が密に施されたもの。49~51 は地文に結束第 1 種羽状縄文が施され、49 は 3 段の断続的な貼付帯に刺突文が加えられた過年度との接合資料である。52 は原体端部に結縛痕を顕著に表すもの。53 は R 斜行縄文を地文としている。54・55 は地文が横走気味の撚糸回転文で構成される資料であり、過年度調査で VH-13 から出土した資料と同一個体である。地文がやや特徴的であるが、管見の限り、余市町ゴッペ貝塚遺跡 (道埋文 1991) で類例が確認できた。胎土に混じる白色岩片も地域性を示す可能性があり、今後検証が必要である。63~70 は石英を多量に含む富良野盆地系土器で、先述したが 64~66 は口縁部に隆帯が見られ 64・65 は隆帯上に斜行縄文、66 は突引文が施される。69 は円形刺突文下位に横走沈線文が認められる。70 は張り出しがなく外傾して立ち上がる。

### Ⅲ群 B3 類 b 種 (56~62)

本群は縄文時代中期末葉のノダツブⅡ式、煉瓦台式土器に相当する。全体の出土数も少なく本遺跡においては客体的資料である。56・57 は同一個体であるが、口縁部は斜行縄文、胴部は横走縄文となる。58 は横位に 2 条 1 対の LR 原体側面圧痕が施文される。60・61 は隆起帯が認められ、60 は浅いが連続した円形刺突文が施される。本群はいずれも 0 段多条原体を用いて地文施文しており、内面はミガキが認められ、58・60 は特に入念である。胎土にも砂粒のほか 56~58 には白色岩、59・61・62 には石英結晶を含み在地の土器と異なる様相を示す。

## IV群A1類a種(71~110)

本群は縄文時代後期初頭から前葉にかけての余市式土器群のうち古段階に分類されるもので、40点を図示した。そのうち石英結晶粒を多量に含む富良野盆地系土器は3個体掲載した。

口縁部貼付帯については、これまで23~30mmのものを幅広の貼付帯1Aとし、15mm程度を細めの貼付帯1Bとして分けてきた。今回もこの基準に従っているが、中間的なものについては、18mm以上を1Aに含め、出土土器属性表に記載した。文様構成について貼付帯が多段に配されるもの、これらに円形刺突文が施されるもの、口縁部直下に幅広のナデがみられるもの、富良野盆地系土器に大きく分けて掲載した。

71~79は多段の貼付帯で構成される個体で、口唇部形態はいずれも隅丸角~角状を呈する。72は過年度との接合資料で口唇部に中空工具による円形刺突文が連続して施文される。73は貼付帯が段状になるが器表面調整や胎土から本群に含めた。74・75は貼付帯上に縄線文が施され、71・76・77は貼付帯直下に無文帯を形成するが、71は無文帯形成後に貼付帯を施している。77~79は同一個体で多段構成であることがわかる。地文は胴部下半まで文様構成がわかるものでは異原体羽状縄文(71・77~79)がみられ、73は口唇部直下に重複縄文が僅かに認められるが、それ以外は0段多条の斜行縄文が施される。

80~87は円形刺突文を伴うもの。80・81・85・86は幅広の貼付帯を有し、直下に円形刺突文を施している。83は口縁部に幅広の横走沈線文で区画しており、その上に円形刺突文を施している。口唇部直下には指頭様の浅い押圧がみられ、口縁部がやや外反するため91~93と同じ様相が認められる。口唇部には本群で唯一斜行縄文を施文しており、刺突文も下方からのため他の土器と様相が異なる。87は口縁部貼付帯が一部段状になり、2段の刺突文を巡らせる。胴部下半まで貼付帯が巡る多段構成であるため本群で掲載する。地文は先述した0段多条の斜行縄文が主体であるが、80は斜行縄文、86は重複縄文が施文される。

円形刺突文は83以外器面に対し垂直方向に施文され、中空工具によるもの(81・85)と棒状工具によるもの(86・87)の両者がある。88は口縁部だけの資料で幅広の貼付帯のみ確認できる。89・90は同一個体で口縁部貼付帯の地文は縄間が広く若干器表面にナデ調整を施す。90は貼付帯が縦横に施文され、破片上部に無文帯が認められる。91~94(93・94は同一個体)は口縁部が外反または張出す形状になる。93は指頭圧痕により地文縄文が潰れている。95~103は胴部で95~100は異原体羽状縄文で構成されている。100は貼付帯が非常に薄く、手で触ると僅かな膨らみが確認できる。101は重複縄文。104~107は底部で104・105は変換点が隅丸角状で直立した後、緩やかに外傾して立ち上がる。106・107は比較的直立して立ち上がり、107は底部中央に貫通孔が認められる。

108~110は富良野盆地系土器で、108・109の口縁部貼付帯は幅広で薄く、直下に円形刺突文が施される。刺突文はいずれも浅く、中空工具を用いており内側に膨らみがみられる。本群に属する富良野系土器は、過年度報告と同様、地文は斜行縄文で、頸部から胴部に貼付帯が付加された例はみられない。色調は黒褐色で焼成は良好である。口縁部貼付帯直下に円形刺突文が配されるものは、在地系で6例(80・81・83・85~87)、富良野盆地系でも2例(108・109)で、在地系では掲載例の35%程度。一方、富良野盆地系では、過年度の調査例も参照すると60%以上あり、円形刺突文を有する比率が格段に高い傾向が認められる。



## IV群 A2 類 (111~116)

本群は縄文時代後期初頭から前葉にかけての余市式土器群のうち、余市式新段階、タブコブ式古段階に相当するものである。前段階のIV群 A1 類 a 種に比してやや厚手で、成形がやや粗略な印象を受けるものが多く、縄文の施文も粗い傾向がみられる。色調は青みを帯びた灰褐色や灰橙褐色を呈するものが多い。

111 は過年度報告したものと接合し、ほぼ形が復元できた小型の鉢形土器である。厚手で、ややいびつだが、口縁は平縁で、口唇部形態は丸状。平底の底部から立ち上がる胴部は緩やかなカーブを描いて外傾する。地文はLR斜行縄文だが、施文が浅く判別できないところが多い。112・113 は同一個体で口縁部 (112) にはやや低平で幅広い貼付帯が付され、棒状工具による円形刺突文が一部貼付帯に重なるようにして施文される。口唇部は角状で、地文と同じLR斜行縄文が施されている。113 は口縁部下に続く破片で、地文施文後に横位と縦位の貼付帯の剝離痕が色調の変化で認められる。114 はやや幅の狭い貼付帯をもつ比較的薄手の口縁片で、口唇部に貼付帯の段差が僅かに残る。貼付帯上と胴部には器表面ナデ調整のためか、縄間が広い複節の縄文が施される。115 は口唇部が隅丸角状で両面と口唇部を同一原体で施文している。116 は厚手の胴部で、下方がより厚く底部に近い破片と思われる。地文は太めの異原体による羽状縄文が施されている。胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好だが、表裏ともにやや風化が進んでいる。

## IV群 B2 類 (117)

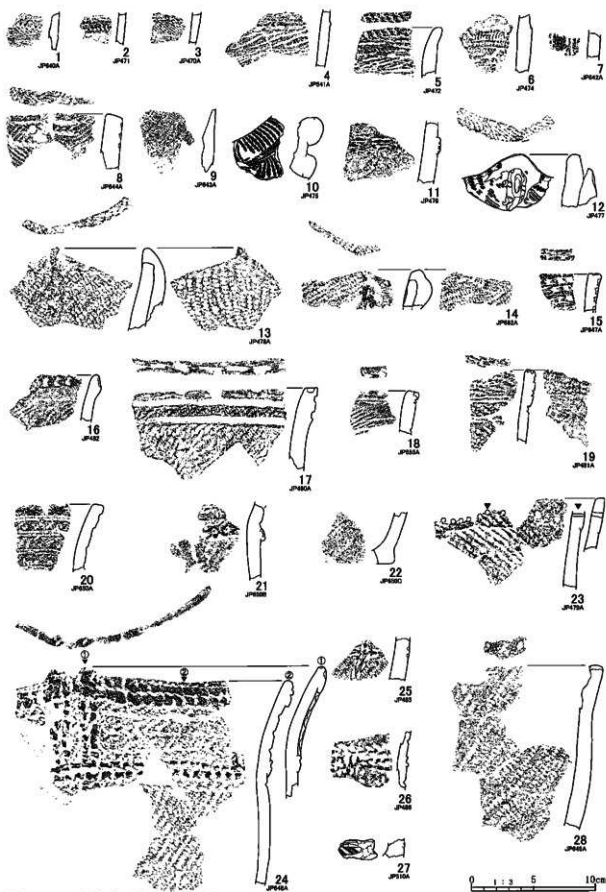
本群は縄文時代後期前葉の手稲砂山式段階相当。117 は過年度分と合わせて胴部上半の3分の1近くまで復元されている。胴部はほぼ直立し、口縁部がやや内湾する。平縁で、隅丸角状の口唇部は外側へやや張り出す。地文のRL斜行縄文は口唇部にも施されている。施文後の器表面は撫でられ、内面もヘラナデにより調整され、表裏ともに部分的に指頭圧痕が残されている。胎土には砂粒のほか少量の繊維も含まれ、平行組織の発達がみられる。

## IV群 D1 類 (118・119)

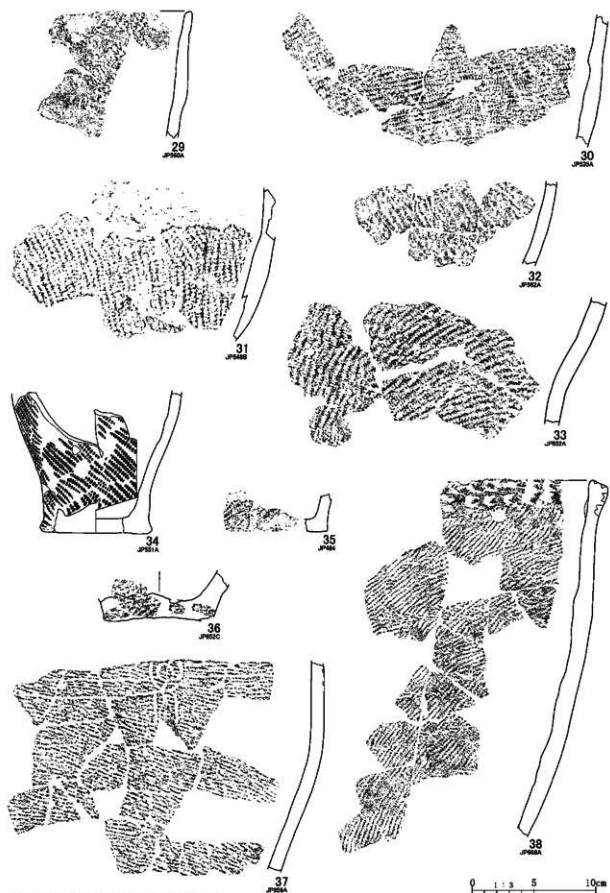
本群は縄文時代後期後葉の堂林式に相当する。118 は深鉢形土器の口縁部片。口唇部は切り出し状で、口縁部は波状をなし、やや内湾して僅かに外傾する。地文はLR斜行縄文で、平行して横走する現存3条の浅い沈線文が施文される。胎土に砂粒を含み、焼成は堅緻である。119 は底部から胴部まで復元できた薄手の深鉢形土器である。僅かに上げ底を呈する底部は径5.2cm程で外傾する胴部に比して小さいため不安定である。胴部上半にかけて輪積痕が認められる。地文の斜行縄文は底側部まで一面に施されるが、ナデ調整が加えられて縄文の節はやや潰れる。内面はやや粗めだが横位に磨かれ、ほぼ平滑である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。地文が羽状縄文ではないことから、堂林式の新しい段階のものと考えられる。

## 土製品 (120)

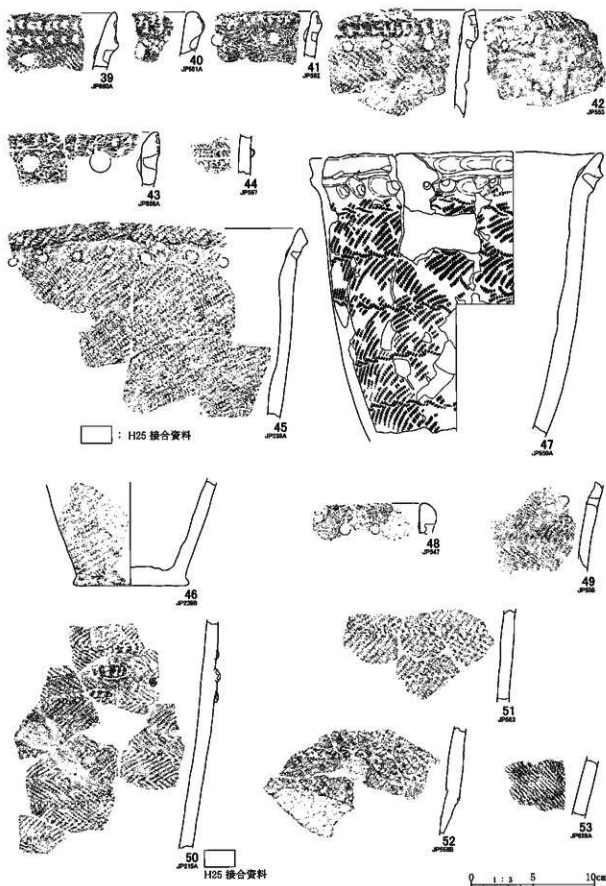
本資料は土器片の縁辺をややいびつだが、円形に成形しているため土製品とした。土器片の時期はⅢ群 B2 類で、地文はLR斜行縄文。胎土に繊維を少量含む。今回出土した資料の中で土器片を加工したものは1点のみである。 (1~62: 山戸 63~120: 高橋 奈良加筆)



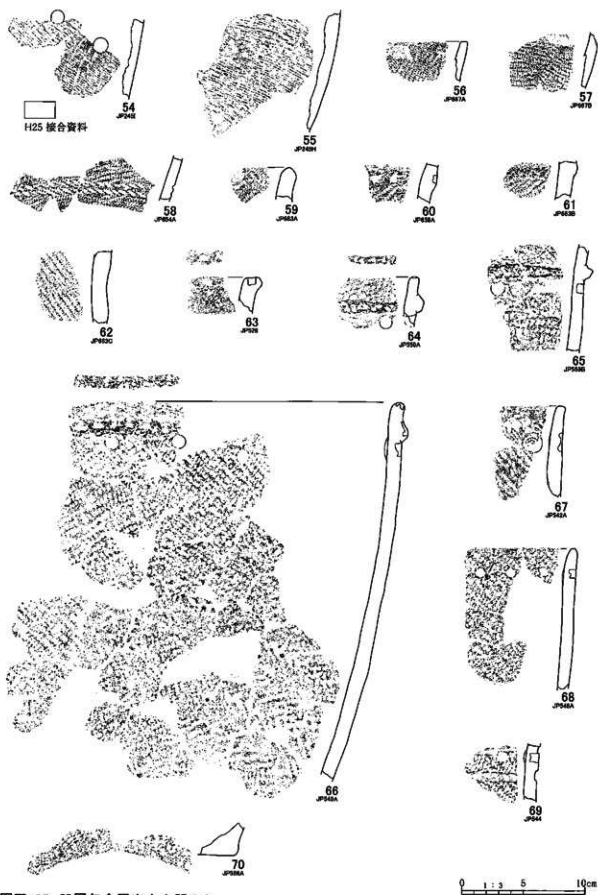
図Ⅲ-82 V層包含層出土土器(1)



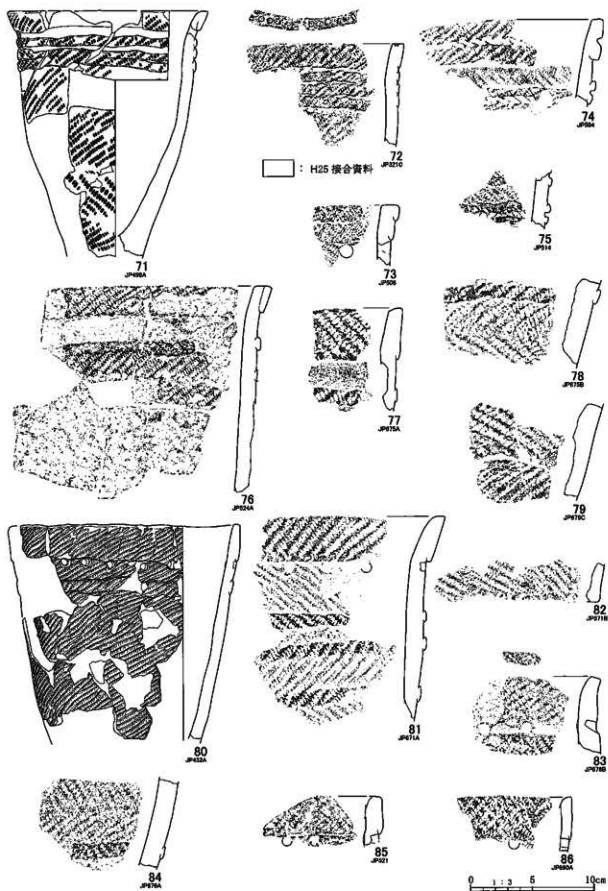
図Ⅲ-83 V層包含層出土土器(2)



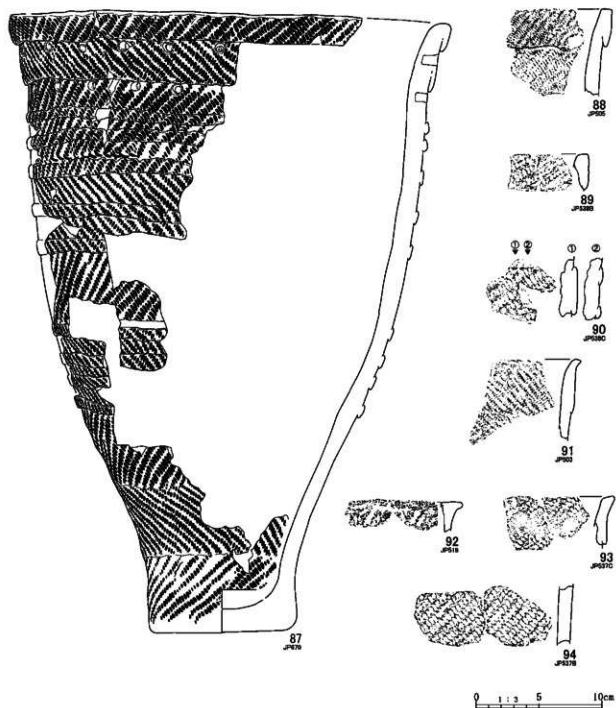
図Ⅲ-84 V層包含層出土土器(3)



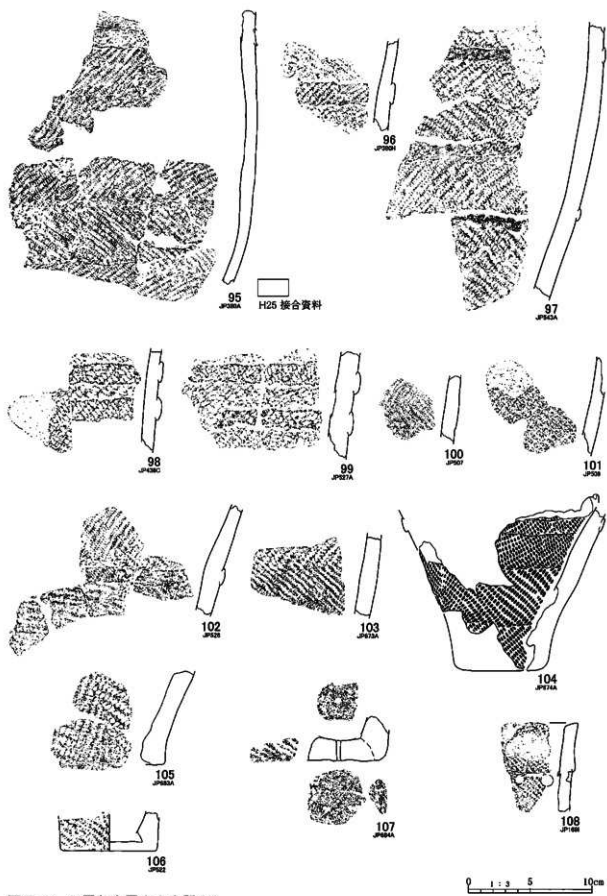
図Ⅲ-85 V層包含層出土土器(4)



図Ⅲ-86 V層包含層出土土器(5)

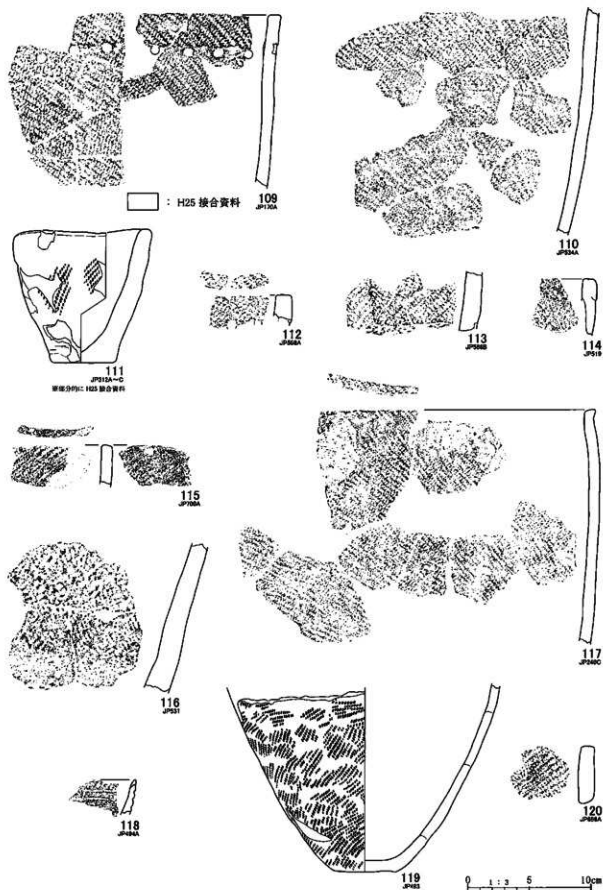


図Ⅲ-87 V層包含層出土土器(6)



図Ⅲ-88 V層包含層出土土器(7)





図Ⅲ-89 V層包含層出土土器(8)

## 2. 剥片石器 (図Ⅲ-92~94 図版 85~87)

包含層から出土した剥片石器はポイント類 249 点、石錐 14 点、ナイフ・スクレイパー類 124 点、両面調整石器 5 点、その他 184 点が出土している。そのうち 76 点を図示した。

使用された石材は黒曜石が主体で、それ以外の石材は、頁岩、メノウ質頁岩、メノウ、チャート、珪化岩で、わずかに 15 点のみである。フレイク・チップも 1,929 点出土しているが、黒曜石以外の石材はわずかに頁岩が 3 点で、製品として搬入され、本遺跡では加工されていなかったことが想定される。

### ポイント類

#### 石錐 (1~24)

平成 26~28 年度の調査で出土した石錐は A1 類が 6 点、A2 類が 23 点、A3 類が 59 点、A4 類が 22 点である。

1~3 は A1 類、4・5 は A2a 類、6・7 は A2b 類、8 は A2c 類、9~15 は A3a 類、16~20 は A3b 類、21~24 は A4 類に分類される。

1 は五角形、2・3 は木葉形をなし、3 の裏面には素材の主刺離面を残す。4・5 は薄い作りの平基で、5 は左右の逆刺の長さが異なる。6・7 は凹基、断面は凸レンズ状をなす。8 は円基で基部に向かって薄く仕上げられている。9~20 は基部と錐身部が明瞭に分けられる「有茎錐」である。9~15 は基部端が尖るもの、16~20 は基部端が尖らないものに分類した。13・14・19・20 は錐身部が基部に比べて短い。錐身部の微細剥離は再加工による可能性が高い。20 の錐身部は極端に短く、基部の大きさから推定すると、大型のポイントから再加工されたことが考えられる。21・22 は明瞭な基部を持たない石錐に分類した。22 は裏面からのやや急峻な剥離によって作られており、やや高い稜線を持つ。23 は平面形が菱形をなし、錐身部に微細剥離がみられ、再加工したことが伺える。24 の正面には大きく転礫面を残す。

#### 石槍・石銛 (25~38)

出土した石槍・石銛は B1 類が 42 点、B2 類が 31 点、C 類が 66 点である。25~30 は B1a 類、31~33 は B1b 類、37・38 は C 類に分類される。

25 は裏面からの急角度な剥離で仕上げられており、半円状の断面を呈する。基部も同様に裏面からの最終調整で断面は凸レンズ状をなす。26 は尖頭部が裏面から、基部が表面からの剥離が最終剥離である。いずれも急峻な角度で 26 は尖頭部を欠損している。27・28 は長い尖頭部を持ち、薄く作出している。26・27 共に、尖頭部は錯交剥離、26 の基部は表面からの剥離、27 の基部は錯交剥離で仕上げられている。29 は尖頭部・基部共に側縁から錯交剥離がみられる。30 は基部を大きく欠損しており、尖頭部・基部共に裏面からの剥離によって最終調整されている。31・32 は逆刺が左右非対称で、31 は裏面に大きく素材の主刺離面を残し、尖頭部は裏面からの剥離、基部は錯交剥離、32 は尖頭部・基部共に錯交剥離によって仕上げられている。33 は両面に素材の原剥離面を残し、大型の横長素材であったことがわかる。尖頭部は錯交剥離、基部は表面からの剥離によって仕上げられている。34 は柳葉形の大型の石錐と思われるが、長軸長 4 cm を超えるので、本類に分類した。やや薄手で、表裏共に並列剥離が残る。35 は木葉形をなし、尖頭部は錯交剥離、基部は表面からの剥離によって成形され、断面は凸レンズ状をなす。36 の尖頭部は粗い剥離面を残し、細部調整は行われていない。基部は錯交剥離によって断面が平行



図Ⅲ-90 V層包含層土器接合線図 I～Ⅲ群



図III-91 V層包含層土器接合線図 IV群

四辺形をなす。37 は被熱しており、粗い剥離のままである。38 は尖頭部と両面に岩屑面を残す。側縁一部に細部調整がみられるが、全周していない。

#### 石錐 (39~44)

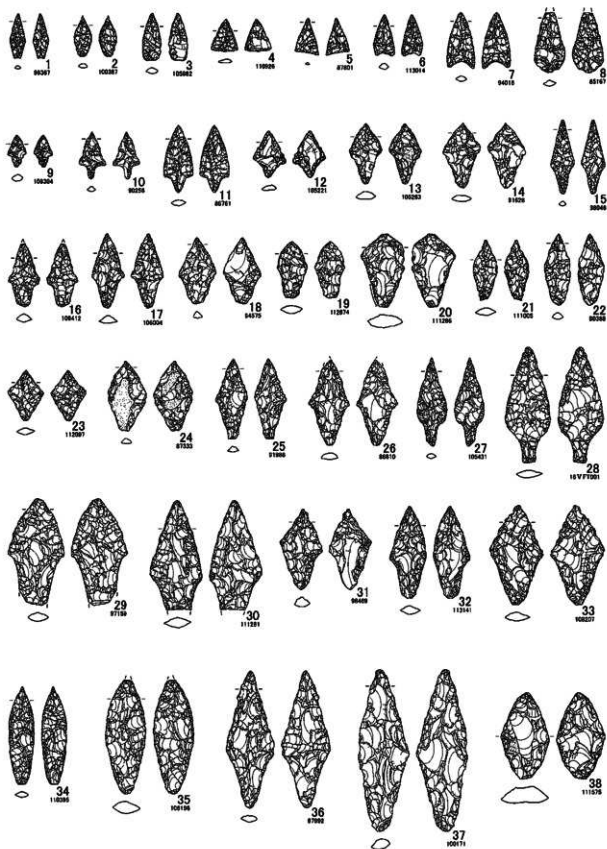
出土した石錐はA類1点、B類2点、C類2点、D類3点、E類6点である。39 はA類、40 はB類、41・42 はD1類、43・44 はE類に分類される。

39 は断面三角形の剥片素材に機能部を作出したもので、素材の主剥離面の打点は岩屑面である。40 は小型の両面調整石器の基部に機能部を作出したもので、明瞭な並列剥離を残し、裏面右側に急峻な細部調整を施しているが、磨滅痕は認められない。41・42 は棒状タイプで両端に機能部を備えた石錐で両端が磨滅している。43・44 はポイント類から転用した石錐。43 は側縁部にも磨滅痕が及んでいる。

#### ナイフ・スクレイパー類 (45~71)

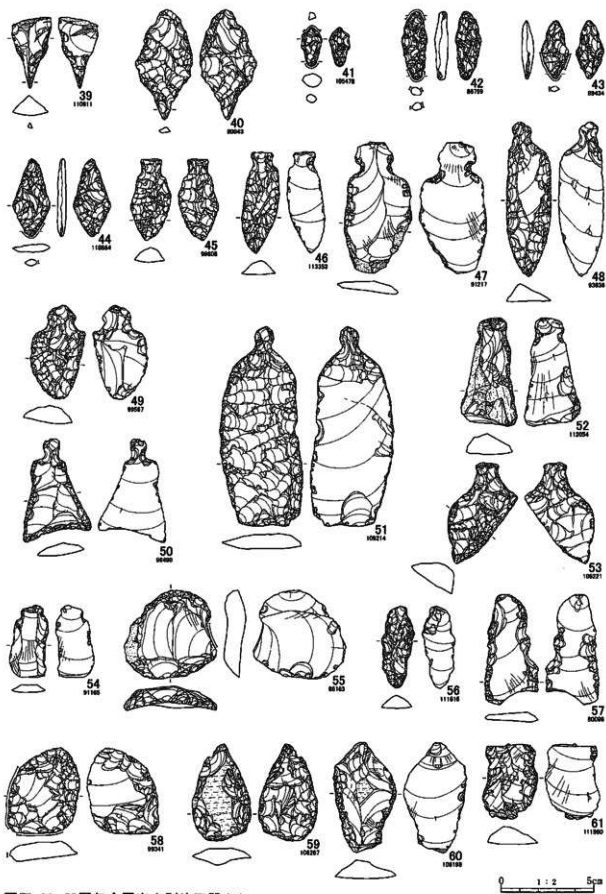
出土したナイフ・スクレイパー類は、A類が31点、B類が5点、C類が76点、D類が12点でE類は出土しなかった。45~52 はA1類、53 はA2類、54 はA4類、55 はB2類、58~62 はC1類、63~71 はC2類に分類される。

45 は両面調整で、素材の一端を折り取り、つまみ部を設けている。刃部は裏面からの剥離によって作出されており、急峻な角度をなす。46 は頁岩製で縦長の素材を用いている。片面加工で、長い並列剥離が稜線上まで届いている箇所もある。断面は45同様、半円形をなす。47 は大型の反った縦長剥片を素材としており、岩屑面を残す。刃部の剥離は左側縁に集中しているが、右側縁にも剥離痕が認められる。48 は頁岩製の縦長剥片を素材としている。刃部の作出は左側縁が急峻な角度をなすが、右側縁上半部は角度が浅い。下端部は両側縁共に同様な角度で刃部が作出されている。49 は刃部側の端部に打点を持つ剥片を素材としており、裏面には大きなバルブアスカーを残している。刃部はすべて裏面からの加工で、右側縁が直線状、左側縁が弧状をなす。50 は頁岩製で幅広い縦長剥片を素材としている。3辺に刃部を作出し、下端部の刃部はノッチ状をなす。51 は大型の縦長剥片を素材とする「松原型」(秦 1991) のつまみ付きナイフ。裏面右側縁を打点として、表面左から並列剥離に近い長い剥離痕によって、器厚を減している。刃部はやや急峻な剥離によって表面右側縁に作出されているが、左側縁にも微細剥離がみられる。52 は断面三角形の剥片を素材として岩屑面を残している。刃部は表面右側縁に作出されている。53 は表面右側縁に急峻な角度で刃部が作出されている。左側縁は成形剥離痕のままであるが、わずかに使用痕と思われる微細剥離がみられる。54 は下端部にヒンジフレクターを残す縦長剥片を素材としている。刃部の作出は見られず、使用痕と思われる微細剥離が残されている。55 はラウンド・スクレイパーに近い形態を持つ。岩屑面のある部位では明瞭な刃部作出剥離がみられないため、上下に刃部を持つエンド・スクレイパーとした。56 は反った縦長剥片を素材としたサイド・スクレイパー。表面左側縁は剥離が稜線上に届いているが、右側縁は剥離が短い。57 は縦長剥片の両側縁に刃部を作出したものの。右側縁は鋸歯状をなす。58 は表面右側縁と左側縁上半に刃部を設けたサイド・スクレイパー。左側縁下半と下端部稜線は磨滅している。59~61 は岩屑面を残す。59 は両面、60・61 は片面加工で、刃部の作出は粗雑である。62 は節理のある黒曜石製の縦長剥片を素材としており、節理のない部位に刃部を作出している。

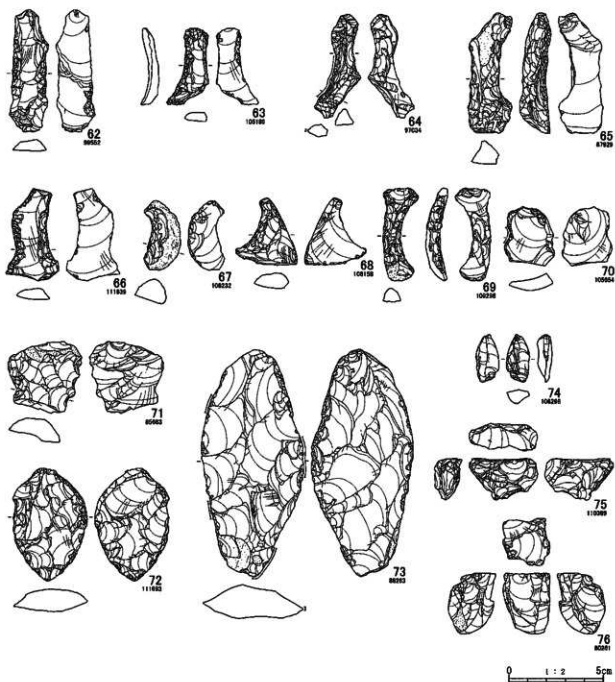


0 1:2 5cm

図Ⅲ-92 V層包含層出土剥片石器(1)



図Ⅲ-93 V層包含層出土剥片石器(2)



図Ⅲ-94 V層包含層出土剥片石器(3)

63～71はコンテップ・スクレイパーに分類した。63は2辺に、64は同様に2辺に裏面から刃部を作出する剥離がみられるが、64の1辺には刃部作出前に打面調整のための剥離痕がみられる。65は分厚い縦長剥片を素材としており岩屑面を残す。左側縁の刃部は直線的でやや鋸歯状をなす。66は頭部を折り取った縦長剥片を素材としており、抉りの下、左側縁下端には尖状の突起部を作出している。剥片下端部にも使用痕と思われる微細剥離が残されている。67～69は1辺に抉りを入れたもの。67は岩屑面を大きく残す。69は当初2辺に抉りを作出していたが、表面右側縁からの打面再生剥離によって大きく刃部を剥離されており、刃部の再生はなされていない。70・71は剥片の一部に抉りを入れたもの。71の刃部は鋸歯状をなす。



### 両面調整石器 (72・73)

平成 26～28 年度の調査では 5 点出土した。72 は小型、73 は大型の木葉形をなす。72 の表面右側縁上半部には微細剥離痕がみられる。73 の両側縁部は稜線が潰れている。両面調整石器が集中して出土した VFTB-01 に近接した地点から出土しており、当該以降に関連する可能性も考えられる。

### ピエス・エスキーユ (74)

平成 26～28 年度の調査では 4 点出土した。図示した上端を打面として使用している。下端からの剥離痕も残されており、下端も打面として使用されていた可能性も考えられる。

### 石槌 (75・76)

平成 26～28 年度の調査では 10 点出土した。75 は 1 面、76 は 3 面の剥片剥離作業面を残す。76 にはわずかな打面調整剥離痕が残されているが、75 にはそれがみられない。(矢野)

## 3. 礫石器・石製品 (図Ⅲ-95～109 図版 88～94)

包含層からは礫石器 753 点と石製品 16 点、石棒 1 点が出土した。礫石器の内訳は石斧 213 点、たたき石 313 点、すり石 16 点、石鋸 1 点、砥石 40 点、石錘 1 点、線状痕のある礫 8 点、滑沢面のある礫 5 点、台石 48 点、石皿 16 点、加工痕のある礫 92 点である。ただし、この中で接合されたものが相当数あるため実際の個体数は少なくなる。3 ヶ年の出土礫石器の石材は石斧を除き、砂岩が大部分を占め、わずかに安山岩、花崗岩、玄武岩等が含まれる。石製品については滑石製の垂飾が 7 点のほか、砂岩製で多面体の擦面をもつものが 8 点、用途不明で今後検討が必要と思われる玄武岩製のものが 1 点出土している。

このうち礫石器 97 点、石製品 10 点、石棒 1 点を図示した。

### 石斧 (1～27)

石斧は破片のため分類不能の個体を除き、完成品が 62 点、未成品が 43 点出土している。そのうち 27 点を図示したが、平成 13 年度出土資料 1 点も関連資料として掲載している。分類は完成品を A 類とし短冊形と撥形、丸のみ形、剥片を利用したもの、欠損品に細分している。未成品はほぼ礫皮を残さず、研磨・剥離・敲打調整により完成品に近いものを B 類、調整痕は認められるが半分以上の礫皮を残すものを C 類、調整痕は認められないが石斧素材礫と思われるものを D 類とした。

1～7 は短冊形の石斧である。1 は断面が厚く丸みを帯びた形状で、基部には転磨面を残す。刃部を中心に研磨調整は丁寧だが、中央から基部にかけて敲打と剥離痕も大きく残る。刃部に使用等の潰れは認められない。2 は全体的に粗い研磨調整を施しており、両面の基部側に剥離が残る。また正面の折損部には連続した剥離が認められ、折損後の転用を意図したことも考えられる。3 は両側縁全体に敲打痕を残し、両面の研磨調整は粗く、裏面は自然面や剥離の窪みが残る。刃部付近はやや丁寧に研磨されているが中心付近に刃こぼれが認められる。4 は小型で薄い素材を用いたもの。正面と刃部付近に部分的な研磨が施されているのみで、側縁の剥離以外は自然面が残る。刃部には使用による線条痕が認められる。5 は全体的に研磨調整されているが剥離の凹凸が目立つ。刃部の研磨は入念で鋭角である。使用痕は認められない。6 は左側縁の両面に擦り切り痕を残す。全面研磨しているが中心部が厚く全体的に歪んだ形態をして

おり、折損部付近に集中して剥離痕が認められることから、厚みを減じるための剥離調整段階で折損したと思われる。7は断面が厚くかまぼこ状を呈する。左側縁部には敲打痕が比較集中しており、裏面には自然面の窪みがみられる。刃部に使用痕は認められないが左側が大きく剥離されている。8～12は撥形の石斧。8は薄く断面が隅丸方形になる。全体的に丁寧な研磨調整を施し、刃部裏面は急角度の稜が形成される。正面の刃部には使用による縦の線条痕が明瞭に認められる。9は小型で基部側に最大厚をもつ。右側縁には研磨後の剥離、敲打痕がみられ、刃部先端には使用による線条痕が認められる。10は刃部を大きく欠損しているが、全体的に丁寧な研磨で成形される。刃部には磨滅と刃こぼれが認められる。11は擦痕が明瞭で全体に研磨しているが、基部端から右側縁付近は素材面の窪みで礫面を残す。刃部には使用による磨滅と線条痕が認められる。12は小型で長軸長が5.5cmである。全体に入念な研磨を施し刃部に向かって明瞭な稜を作出しているが、素材が砂岩であるためか刃縁は鋭利ではなく実用品とは考えにくい。13は丸のみ形石斧の刃部片。平成13年度の出土資料であるが、未掲載であったため今回掲載する。資料は胴部中心付近で折損しているが、刃部側は挟り部分も含めて入念に研磨されている。刃部の挟りは長軸に対して左傾する研磨で、刃縁は使用による複数の剥離が認められる。14は剥片素材を利用した小型の石斧で、右側縁は剥離で成形しており、部分的に研磨している。15～19は欠損品。15は基部片で両側縁を擦り切り技法で折り取り、両面ともほぼ平坦になるまで入念に研磨している。16～19は基部側が欠損したもの。16は薄く扁平な断面形状となる。全体に研磨されているが裏面と折損部付近に剥離痕が残る。刃部幅は狭く急角度に作出される。17は丸刃で刃縁は両面からの入念な研磨で尖るが、磨滅等の痕跡は認められない。18は全体に丁寧な研磨調整を施しており、刃部は緩やかな角度で作出されている。折損部分に敲打と剥離が認められることから折損後に転用した可能性がある。19は全体に研磨調整が施されるが、剥離による窪みにまでは研磨が及んでいない。刃部は入念に研磨されているが、細かい刃こぼれが認められる。18・19は残存する形状から短冊形と思われる。20～27は未成品。20・21は横長の剥片素材を利用したもの。20は素材の形態を利用して両面の刃部、右側縁全体と左側縁に部分的な研磨調整を施している。一部、刃部を作出しているが、礫面を多く残しているため本群に含めた。21は外周全体を剥離と敲打で成形している。刃部付近に部分的な滑沢面が認められるため、柔らかい対象物に対して使用していた可能性が考えられる。22は素材のほぼ全面に剥離が及び短冊形に近い段階まで成形が進んでいる。23は破片を利用して、両側縁に連続した剥離調整で形状を整えているが、刃部は作出していない。24はもともと撥形に近い扁平な自然礫を素材としている。剥離調整は裏面に集中し、厚さを減じている。25～27は素材の半分以上に礫面を残しているもの。25・26は敲打中心で成形しているが、25は敲打前に横方向の研磨が顕著に認められる。26は剥片素材で断面三角形の頂点と両側縁に剥離と敲打調整を施している。27は横長の剥片を利用して縁辺部に剥離を連続させて成形している。刃部は折損面の敲打・剥離から図上の下端部を意図していたと思われる。刃部調整においては1・4～8・10・16・17が片刃、2・3・9・11・12・14・18～20が両刃である。石材は4・5・9・13・17・22が青色片岩製、12は砂岩製、それ以外は緑色泥岩製である。

## たたき石 (28~68)

たたき石は素材の形状と敲打痕の位置で細分を行っている。また、分類では 900 g 以上は便宜的に石皿、台石としたが、敲打位置などでたたき石と考えられるものはここで並列して記載している。28~30 は I A2 類で、28 は断面三角形を呈し両側縁を使用している。右側縁は素材形状が凸状で、敲打痕が集中する。29・30 は端部に敲打と剥離が認められる。31~33 は I A3 類。31 はやや厚手、32 は薄い扁平礫を素材として両面に密集した敲打痕があり、それぞれ単位ごとに集中して敲打痕が残る。端部にもわずかな敲打が認められるが顕著ではない。33 は基本的には縁辺敲打が主体であるが、敲打により両面に大きな剥離が及んでいる。34・35 は I B2 類で角柱状を呈する礫を素材としたもの。34 は両側縁と両端に敲打が連続している。縦方向の割れは欠失した破片があることから下端部の敲打が要因と思われる。35・36 は重量から台石に分類されるが、敲打位置からたたき石としての使用が考えられ、ここで掲載する。35 は両端の厚みが異なり、下端部の細い方に集中した敲打痕がある。36~38 は I B3 類。36 は正面に疎らな敲打痕がみられるが、下端部に敲打が集中していることから手持ちの使用と考えられる。37 は両面と左側縁に密集した深い敲打痕が認められる。38 は二等辺三角形形状を呈した礫を素材とする。両面の先端付近に敲打痕がみられ、正面の敲打は剥離に切られている。下端部の剥離に明瞭な敲打痕はみられない。39~51 は平面形が方形から不整形で幅広のものである。このうち 41・44 についても重量で台石に分類されるが、敲打位置などからたたき石としての使用が考えられ、ここで掲載する。39 は不整形な垂角礫素材で、主に正面上側に敲打痕が縦方向に密集してみられる。40 は扁平な方形礫の両面上側に、敲打による円形状の窪みが認められる。41 は大型の扁平礫を素材としているが、敲打は 4 辺の稜に沿って認められるためたたき石として利用していたと思われる。42・43 は端部に敲打痕が集中しているもので、43 は両端と左側縁に敲打後の擦痕がみられ、部分的に稜が形成されている。44 は大型の方形礫を素材としているが、縁辺の角に敲打、剥離がみられるためたたき石としての使用が考えられる。45 は左上端部のみに敲打痕が密集している。46 は扁平垂角礫の破片を素材とする。自然面の左側縁と右側破断面に連続した敲打痕と剥離が認められる。47 は擦り切り痕のある破損した石斧の基部を転用したもの。下端の破断面に敲打が認められる。48・49 は不整形の垂角礫を素材としたもので 48 は左側縁に剥離と敲打が連続しており、正面と裏面も敲打痕が集中する。49 は左右側縁稜から下端部にかけて剥離と敲打痕がある。50 は不整形で厚みがある素材。縁辺の敲打は断面でわかるように窪みが顕著であるが、裏面の敲打は浅く広範囲にみられる。51 は両面にそれぞれ 2 単位の密集した敲打痕がみられる。52~65 は II B 類の厚みのある方形~不整形礫を素材としたもの。52・53・56・65・67 は便宜上台石に分類されるが、敲打位置などからたたき石と考えられここで記載する。52 は破損していた大型礫で長軸 29cm を測る。下端部に複数の剥離と敲打痕が認められることから手持ちでの使用と考えられる。53 も同様に大型礫を素材としているが、両端の稜に沿って剥離と敲打痕がある。54 は丸みを帯びた礫の左側縁から上端部、右側縁にかけてほぼ連続した敲打と剥離痕がある。55 は断面がカマボコ状を呈しており、頂部から下部端の稜に沿って密な敲打痕がある。56 は大型礫を素材としているが、両端及び左側縁に密集した敲打痕があるためたたき石としての機能が考えられる。57 は長軸約 6cm と小型で、正面中央から下端にかけて剥離と敲打痕がある。58 は左側縁に擦り切り痕が認められ、石斧を転用したものと思われる。

両端部に細かい敲打痕が集中しているが、上端には部分的に敲打後の擦痕が認められる。59は平面形が三角形を呈したものの。片面を全面的に使用している。60は不整形の礫を素材とし、正面頂部付近と下端部近くに剥離と敲打痕がみられ、裏面は直線状にほぼ連続した敲打痕がある。61は破断した礫を素材としたもの。正面の中央に深い敲打痕があり、右上から右側縁にかけて敲打と剥離痕が連続する。破断面に沿って敲打と剥離がみられることから完形品とした。62は破片2点を接合したものの。厚みのある素材礫の側縁稜に沿って敲打と剥離がみられる。特に剥離は上下に大きくみられ、部分的に中心近くまで及ぶ。63は平面形が楕円形を呈し、両端を中心に敲打痕がみられる。両端と右側縁は敲打後に稜を形成する擦痕がわずかに認められる。64は厚みのある素材礫の全面に敲打痕があり、特に裏面が顕著に窪む。65は素材の両面中心部に密集した敲打痕が認められるが、側縁にも敲打痕がみられ、たたき石としての機能も考えられる。66はⅢA類。偏平な楕円形礫の両端部を使用しているが、下端部の方が顕著である。67・68はⅢB類。67は大型で厚みのある楕円形礫を素材としたもの。両側縁と両端部にややまとまった敲打痕がみられることから、たたき石の機能が考えられる。68は小型で球形のたたき石。全面を細かく敲打しており、意図的に球形にしていると思われる。たたき石に分類したが、球形にすることが本来の目的ならば別の用途も考えられる。たたき石の石材は43・47・58が緑色泥岩、63・68が玄武岩、66・67が花崗岩で、それ以外は砂岩である。

#### すり石 (69~76)

69はA類。断面三角形の稜に沿って両面から連続した剥離調整を施した後、長軸方向の擦痕が認められる。70・71はC類。70は偏平な方形礫の下面に敲打、剥離後の擦痕が認められる。71は礫片を素材としたもの。両面の破断面付近は剥離と敲打で調整している。下面の擦痕は長軸方向に緩やかな弧を描くが、左側までには達していない。72~76はD類の北海道式石冠である。72~74は全面に敲打調整を施した完形品。72・73は頂部がやや尖ったもので全面を丁寧な敲打調整で成形している。いずれも把握部には使用による磨滅が認められる。すり面は縁辺まで及び断面は弧状を呈する。72はすり面全体に付着物が広がり、73は擦痕以前の敲打痕が残る。石材は72が緑色化した玄武岩、73が角閃石安山岩製である。74は頂部が丸いタイプのもの。使用中または調整中に欠損したと思われる右側面には敲打調整を施し再利用している。把握部の溝は器体に対して斜めである。砂岩製である。75と76は北海道式石冠の未成品としたもの。75は扁平の円礫を半割し側縁に敲打調整を施したもので、破断面に調整痕は認められない。厚真町では産出しない多孔質安山岩製で搬入品と思われる。76は大型の亜角礫で2点が接合したものの。破断面には連続した敲打と剥離痕が認められ半割したと考えられる。左側縁には敲打痕の集中がみられる。半割した時の形状から未成品に加えたが75の調整とは密度が異なり疎らである。砂岩製である。

#### 石鏝 (77)

77は板状礫の一辺にU字形のすり面がみられるため石鏝とした。すり面はやや左傾しており、正面側に幅約2mmの並行する1本の溝がある。砂岩製である。

#### 砥石 (78~83)

78は破片を接合したものの。平面形が台形状の板状礫を素材としたもので複数の単位の擦痕が認められる。中央がごく緩やかに窪む。79は厚みのある不整形の亜角礫を素材とする。片面が

欠損している。正面には2単位の使用痕が長軸上にみられ、それぞれ僅かに窪んでいる。80はいわゆる四面砥石で、右側面以外は複数単位の砥面が形成される。81~83は長方形の板上礫を素材としたもので同一個体と思われるが、接合に至っていない。推定では81の破断面側に83が接合し、裏面に82が接合すると思われ、両面と左側縁の使用が考えられる。81の正面には浅く窪む砥面があり、左側縁もきめ細かい擦痕が認められる。裏面に当たる82も使用しているが自然面の凹凸がなくなるほどではない。

#### 石錘 (84)

84は長軸4.4cmの小型の石錘。長軸方向の両側縁に剥離で抉りを作出しているが右側は顕著ではない。左側縁稜にはわずかに潰れが認められる。砂岩製である。

#### 滑沢面のある礫 (85・86)

85はやや厚みのある亜角礫を素材としたもの。大きく欠損しているが残存している表面に滑沢面がみられる。86は長軸が32cmを測る大型の方形礫を素材としており、正面中央の下部寄りにわずかな滑沢面がある。共に砂岩製である。

#### 線条痕のある礫 (87・88)

87は棒状礫を素材とする。上端側の正面には太く明瞭な線条痕が数本と斜めに1本あり、下側は両面にやや細い線条痕がまとまって認められる。88は小型の礫を素材としたもので下側が欠損し、両面に数本の細い線条痕がみられる。裏面の敲打痕は破断面にかかるため折損した原因と思われる。

#### 石皿 (89~91)

89は角柱状の大型礫を素材としたもの。正面の使用はごく部分的だが、右側面は長軸方向に面的なすり面がみられる。90は大型の方形礫を使用しているが大きく欠損している。破断面付近に弱いすり面がみられ、その周囲に部分的な敲打痕がある。91は角柱状の礫を素材としたもの。欠損しているが重さは5,000gを超える。正面に縦長のすり面が見られ、両側縁と上端に連続した剥離と敲打痕が認められることから台石としての利用も考えられる。共に砂岩製である。

#### 台石 (92~94)

92は接合資料で下端部は欠損している。正面の上側に狭い範囲で密集した敲打痕がみられる。93は不整形の亜角礫を素材として正面中央付近から放射状気味に敲打痕がみられ、これに付随して剥離が伴う。94は断面がコマボコ状を呈した亜角礫を利用。敲打範囲は正面中央付近のみである。すべて砂岩製である。

#### 加工痕のある礫 (95~97)

95は礫片の3側縁に剥離主体の加工がみられる。96は扁平で縦長な礫の両側縁に連続した剥離がみられる。97は扁平な素材礫の破断面に連続した剥離調整を施したもののだが裏面には及んでいない。いずれも砂岩製である。

#### 石製品 (98~106)

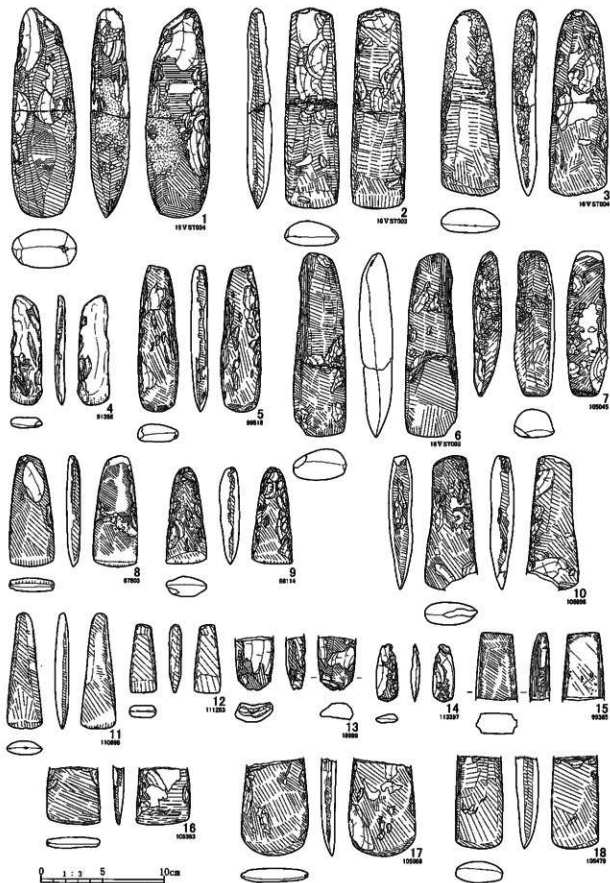
98~102は垂飾である。98~101は断面形が方形を呈し、ほぼ全面に研磨が施される。98は研磨が粗く擦痕が残る。中心には両面から穿孔しており紐ずれの痕跡はない。99は多面を形成し部分的に粗い擦痕が残る。中心よりやや上に両面から穿孔している。紐ずれは認められない。

裏面左上に斜めの穿孔痕があり半円状に抉れており、別な垂飾品からの再加工も考えられる。100 は正面のミガキは入念であるが両側縁と上下面、裏面は擦痕が残る。裏面は一部欠損しており、正面に2ヵ所、上面に1ヵ所穿孔途中の孔がみられる。101 は左側面と上下面には明瞭な稜を作出しているが右側面は丸みを帯びる。全面に丁寧な研磨調整を施すが薄く擦痕が認められる。102 は管状を呈し、裏面を欠損している。上部より下に向かうにつれて直径が大きくなり、雫形になる。研磨はしているが部分的な擦り残しがある。垂飾はすべて滑石製である。

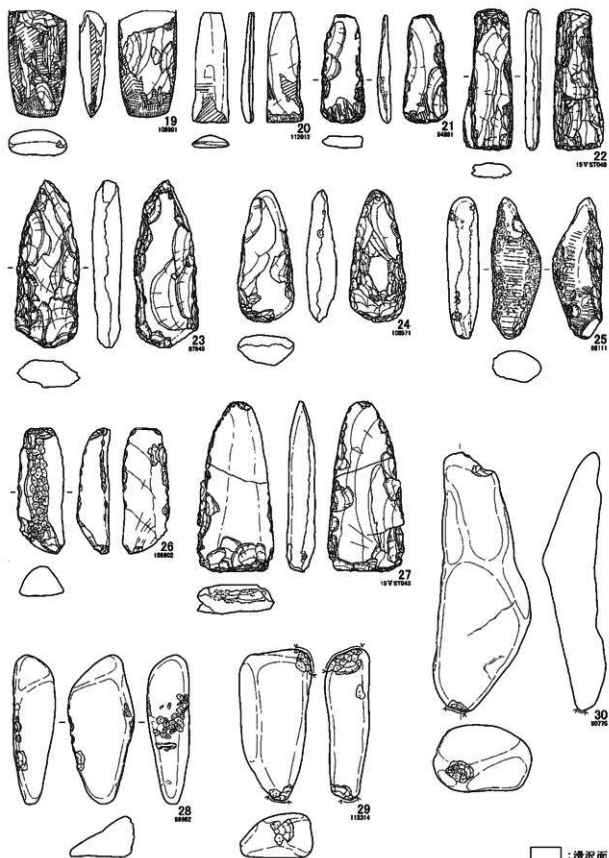
103~106 は厚真町で石製品と捉えて報告している多面体にすり面を持つものである。砂岩製で素材礫のほぼ全面に擦り調整を施すものが多い。103 は断面が方形を呈し、両面に複数単位で擦り調整を行っている。104 は平面が三角形状を呈したものの。各面に複数単位で丁寧な擦り調整を施している。105 は縦長で両先端部が尖る形状を呈している。擦り調整は全体的に施しているが右側縁と正面下部にかけて浅い敲打痕が残る。106 は平面が棒状を呈している。主に側縁に敲打調整を施した後、5面に擦り調整を施したものの。緩やかに弧を描く正面下部には浅い擦痕が認められる。107 は玄武岩製で扁平な楕円形礫を素材とし短軸両端に剥離と敲打、長軸方向に敲打調整で深い抉りを作成しているもの。今回、石製品として報告したが、たたき石として利用された可能性もある。厚真町ではこのような石器等の出土例が過去に無く、これと類似した函館市ハマナス野遺跡で報告されている安山岩製の資料を実見したが、石材や形態、製作工程から異質なものと印象を受けた(南茅部町教育委員会1992)。今後、本町だけでなく他市町村でもこのような遺物の出土例がないか注意して性格等を検討していきたいと考えられる。

#### 石棒 (108)

長軸380mmを測る砂岩製の板状礫の破片を素材としたもので3面には自然面が残る。3側縁稜には敲打と剥離調整を施し、下面全面にも敲打痕が認められる。石棒は本町のオニキシベ5遺跡で1点の出土例があるが、道南地方で多く出土する石棒と同様、敲打調整後に研磨調整し上下端部を皿状に窪ませる形状のもので、今回掲載したものと形状が異なる。しかし、製作途中である可能性も考えられ、石棒として掲載した。(宮崎)

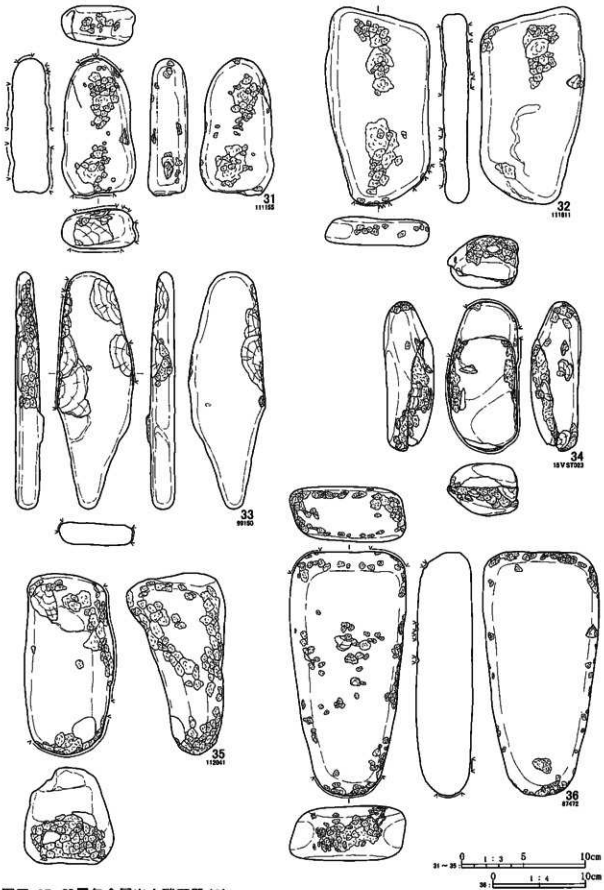


図Ⅲ-95 V層包含層出土礫石器(1)

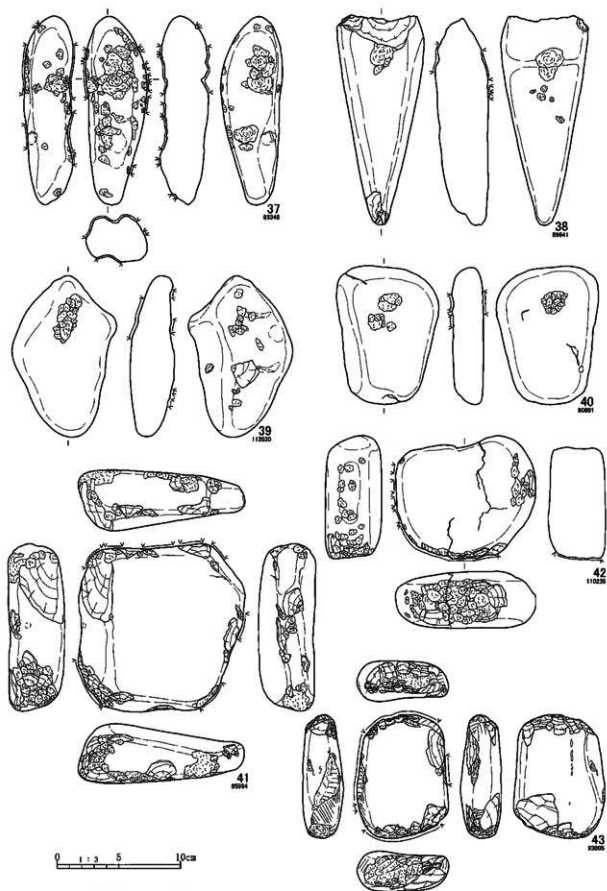


図Ⅲ-96 V層包含層出土礫石器(2)

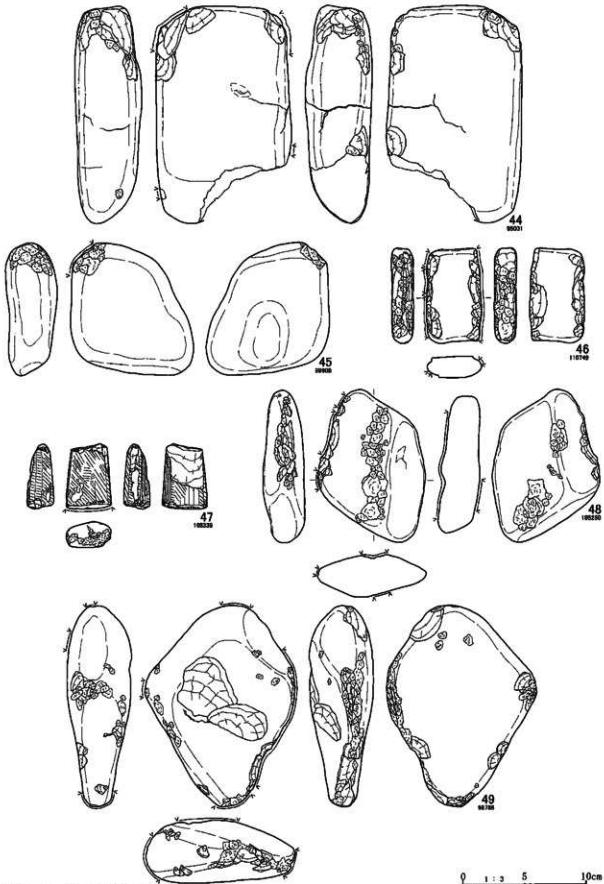




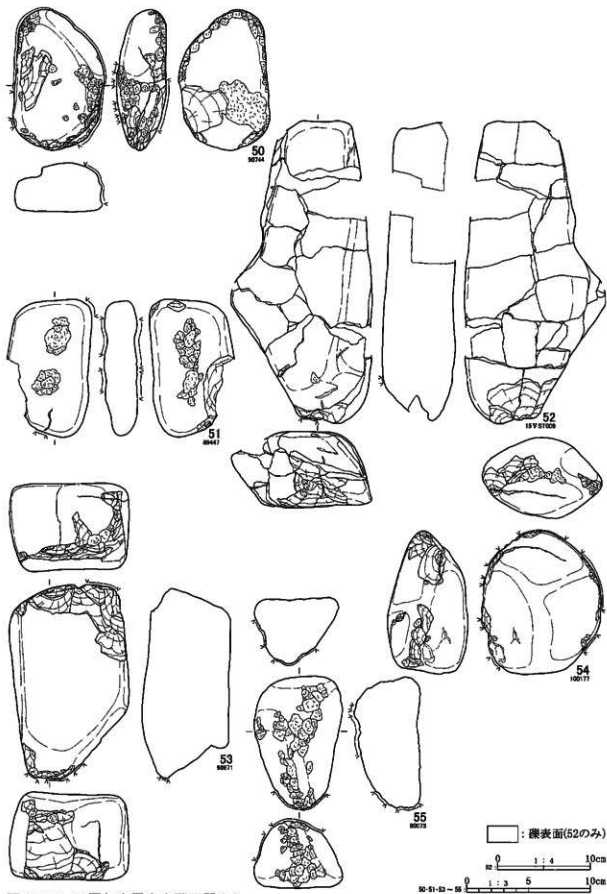
図Ⅲ-97 V層包含層出土燧石器(3)



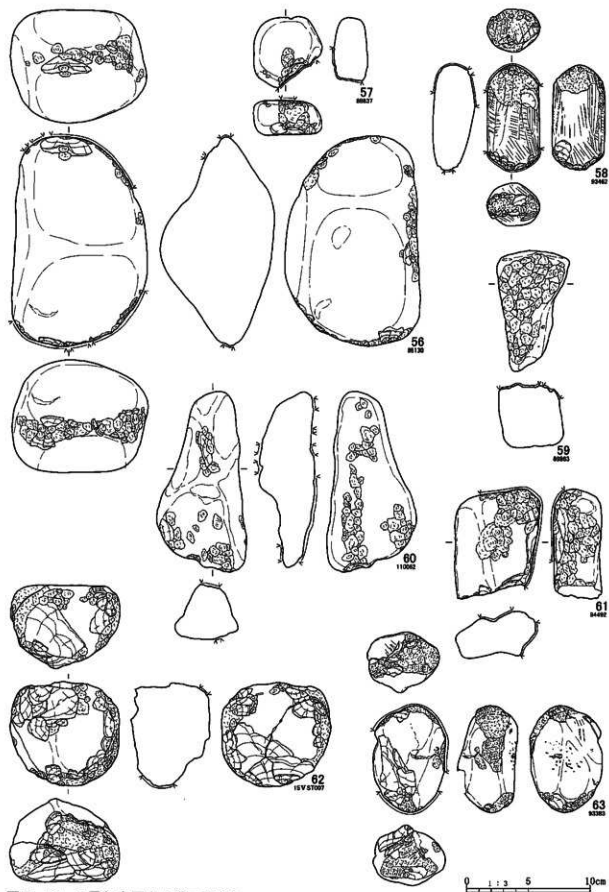
図Ⅲ-98 V層包含層出土礫石器(4)



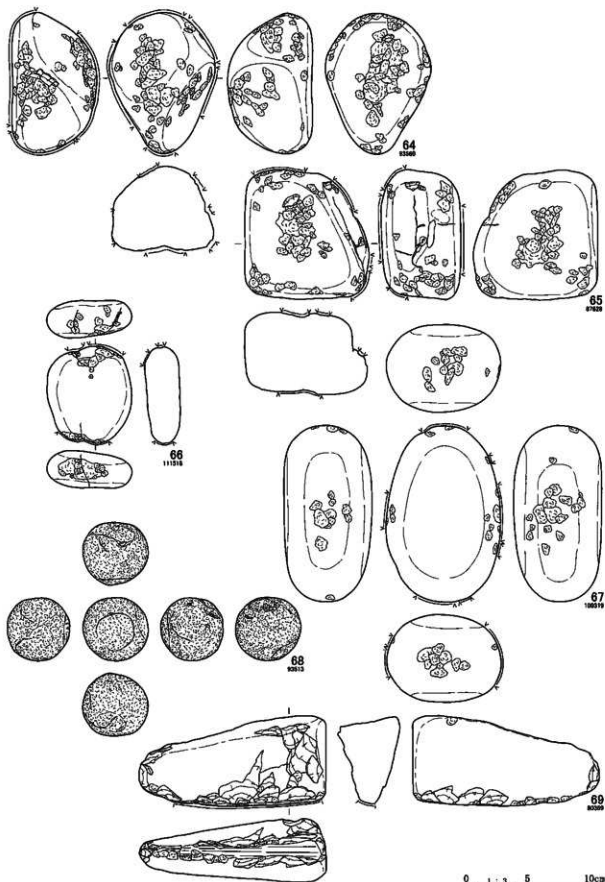
図Ⅲ-99 V層包含層出土燧石器(5)



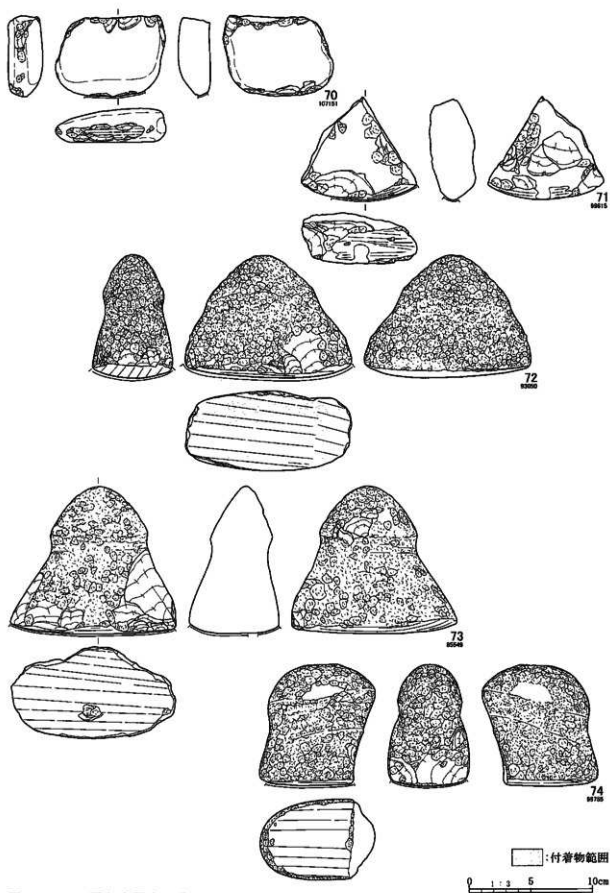
図Ⅲ-100 V層包含層出土石石器(6)



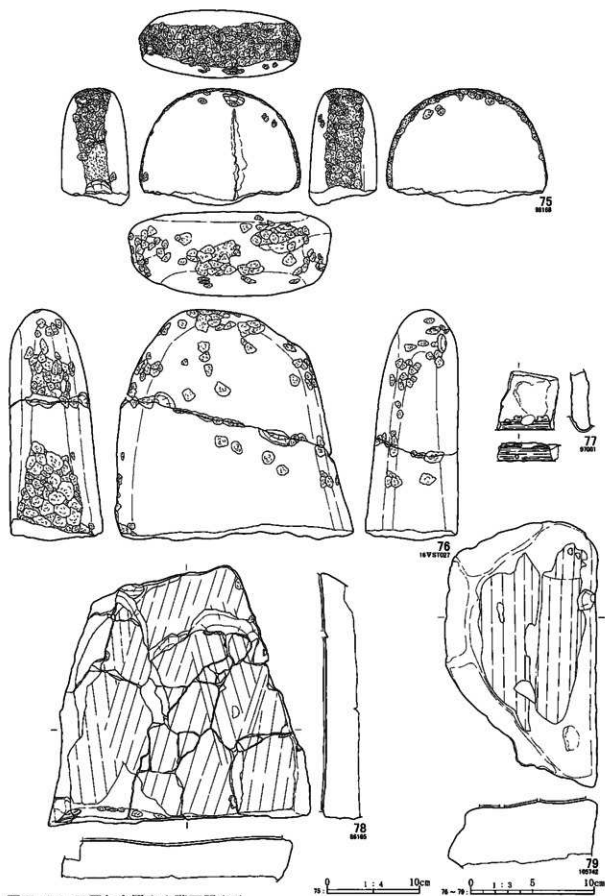
図Ⅲ-101 V層包含層出土石器(7)



図Ⅲ-102 V層包含層出土礫石器(8)

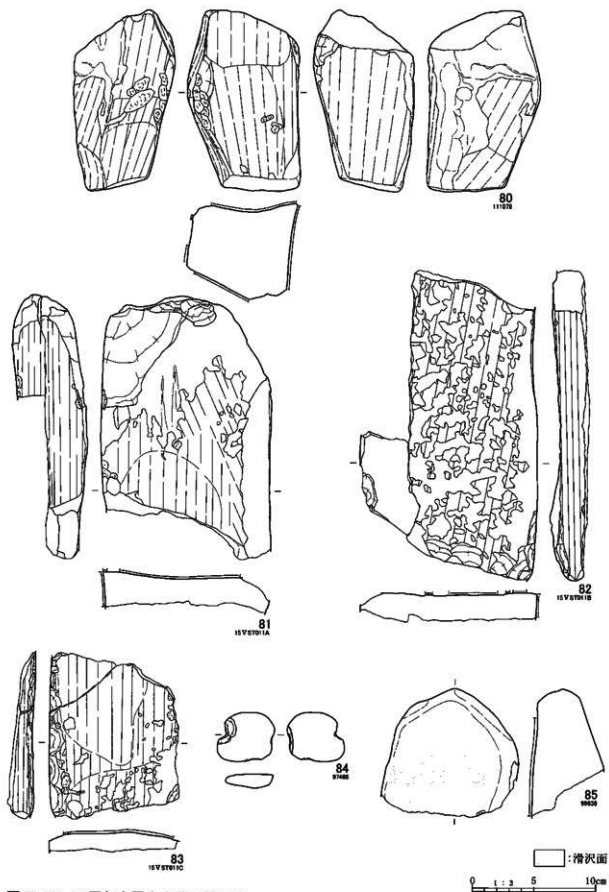


図Ⅲ-103 V層包含層出土礫石器(9)

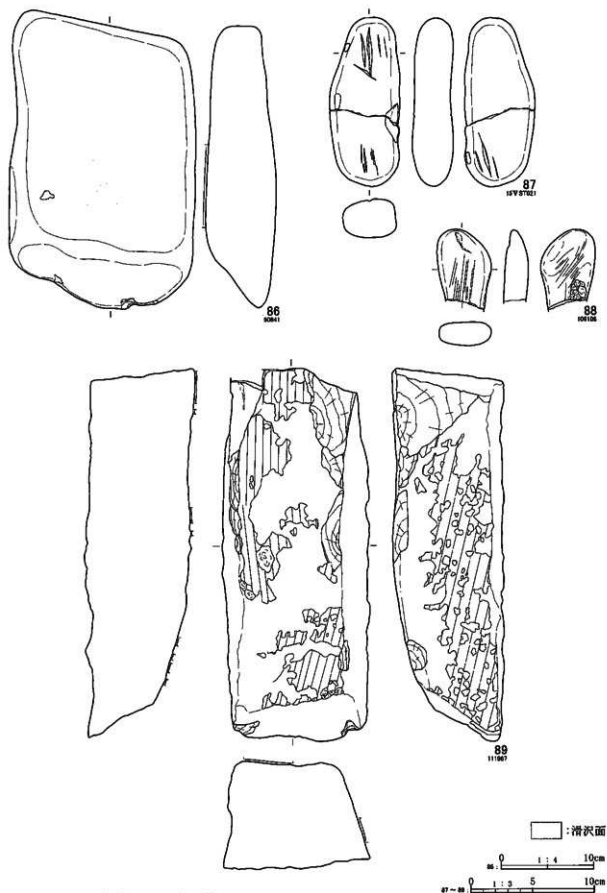


図Ⅲ-104 V層包含層出土礫石器(10)

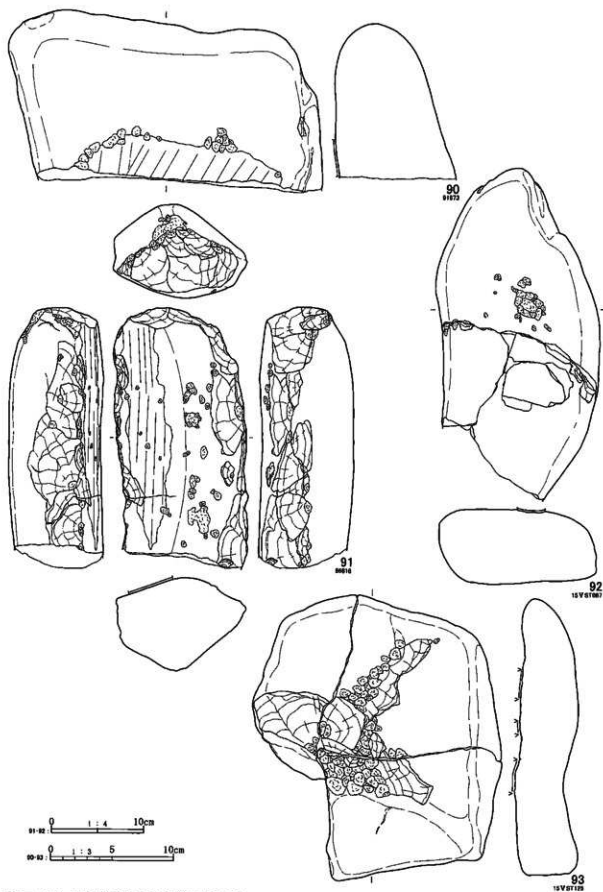




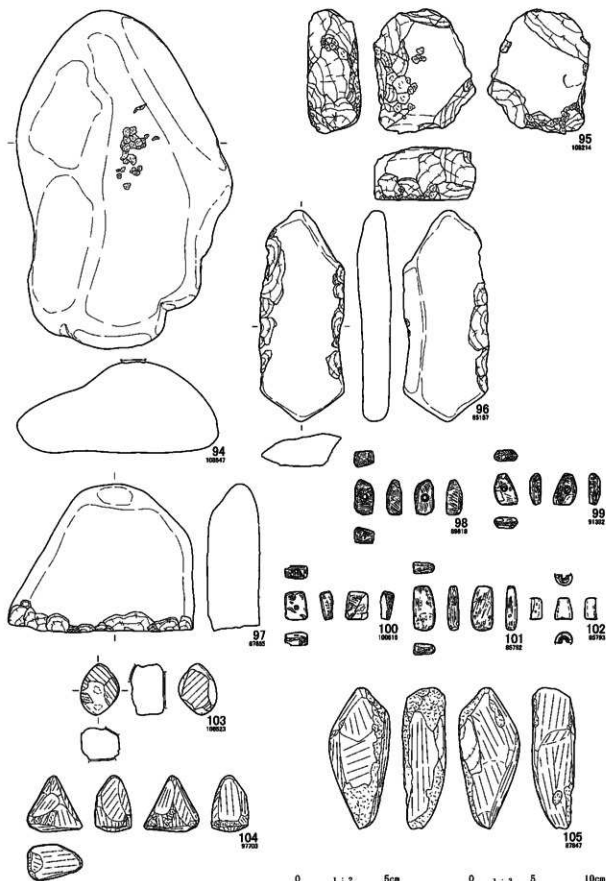
図Ⅲ-105 V層包含層出土礫石器(11)



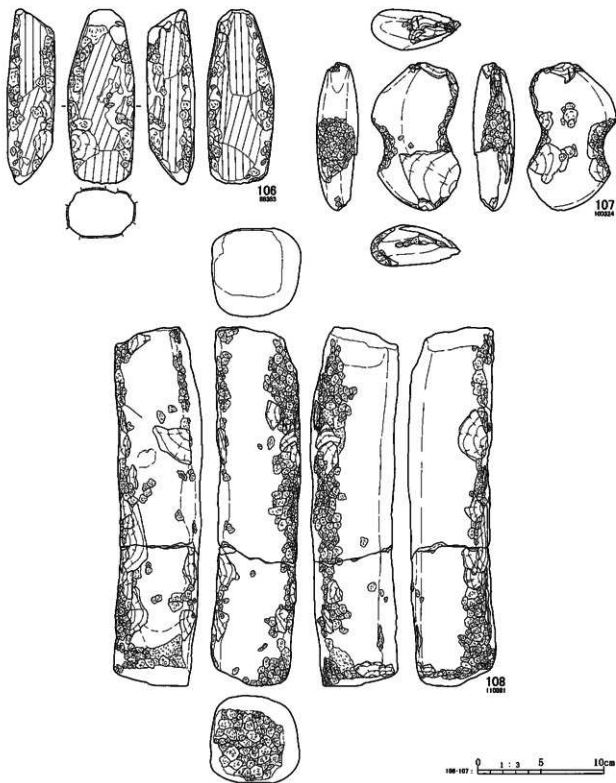
図Ⅲ-106 V層包含層出土礫石器(12)



図Ⅲ-107 V層包含層出土礫石器(13)



図III-108 V層包含層出土礫石器(14)



図Ⅲ-109 V層包含層出土石器(15)

## 第8節 まとめ

厚幌ダム建設に伴う発掘調査では平成14年から28年の15年間で計22遺跡を調査しており、後期旧石器時代から近世初頭アイヌ文化期までの遺跡が幅広く調査されている。中でも厚真川本流と支流の合流点に面する上幌内モイ遺跡、ワチャラセナイ遺跡、ショロマ1遺跡の3遺跡については遺構、遺物数から拠点的な遺跡と考えられる。

縄文時代は前期後半に遺跡数が増加し、ワチャラセナイ遺跡には長軸10mを超える大型住居跡4軒を含む竪穴式住居跡が13軒、土坑墓が33基、シカの歯を主体とした「シカ塚」が見つかり、内陸での生業を知る手がかりの一つとなった。さらに、ショロマ1遺跡でも大型住居跡3軒を含む同時期の竪穴式住居跡10軒を検出した。縄文時代前期以降は後期初頭の余市式土器が多く出土し、同時期の住居跡も見つかっている。縄文時代の代表的な遺構はTピットが挙げられる。本町は海岸部の遺跡でもTピットの検出は多いが、厚幌ダム遺跡群では報告されている数だけで、933基検出（厚幌1遺跡の導水路発掘分含む）しており、これに道埋文センターの上幌内5遺跡の約300基やオニキシベ3遺跡を加えると優に1,000基を超えることになり、まさにシカに支えられた地域であることがわかる。

本地域に大きな集落が形成されていく要因として考えられるのは、厚幌地区が山間部の行き止まりではなく、内陸ルートで流通・交易を行っていたことが明らかとなったためである。これは、後続する各時代に残された遺跡を考える上で重要な成果となり得た。

内陸ルートを示す遺物については「富良野盆地系土器」が第一に挙げられる。この土器は胎土に大粒の石英粒を含み、土器の色調が黒褐色から赤褐色を呈する特徴があり、在地系の土器群と胎土がまったく異なる。上幌内モイ遺跡ではこの点に着目し、粘土に含まれる鉱物を富良野地方の十勝溶結凝灰岩の風化粘土と推定して分析、報告を行っている（町教委2004）。富良野盆地系土器の存在は内陸ルートを示す証拠となり、本町でも中・下流域の遺跡では出土頻度が低くなる。これら土器のルートについては、本流に注ぐ支流がいわゆる「道」となって合流点に大きな遺跡を形成した要因となったと考えられる。この「道」についてはアイヌ語の「ル」の付く地名からもその存在が推定されている。

その後、本地域は擦文文化中期後半から遺構・遺物が次第に多く検出されるようになり、中世アイヌ文化期に至ってはワチャラセナイチャシ跡など象徴的な遺構が構築されている。

擦文文化中期後半においては、上幌内モイ遺跡で儀礼場跡（集中区1及び2 付編5・6）、円形周溝遺構、擦文土器を伴ったシカの上顎歯列が集中して出土する（集中区35）地点など儀礼に関わる遺構が検出され、アイヌ文化期に続く事例として注視されている。

さらに土坑墓も1基検出されており、副葬品に擦文土器や金属製品のほか黒曜石の転礫が出土している（付編2-1）。黒曜石の転礫は上幌内モイ遺跡の集中区1や2に認められ、後述する中世アイヌ文化期でオニキシベ2遺跡の4号墓（付編3-1）、上幌内2遺跡の5号墓（町教委2016）にも出土する。また、黒曜石以外に特徴的な遺物として銅鉤が出土している。銅鉤は上幌内モイ遺跡の集中区1と2から融解した状態で出土し、ショロマ4遺跡でも擦文文化後期の集中区1（付編7）から出土している。銅鉤は擦文文化期、黒曜石は擦文文化後期から中世アイヌ文化期にかけて儀礼に用いられる「モノ」として挙げられる。また、これら儀礼に関わる遺物以外にも羽口、スラグ、スケールなど鍛冶関連遺物や、道内最古の火打石（付編8-1）と

その破片が焼土から出土するなど、当該期においては既に本州から技術的交流があったことが明らかとなっている。

中世・近世初頭アイヌ文化期においては、先述したヲチャラセナイチャシ跡の内郭に検出した焼土より炭化種子のAMS年代測定を行い、13世紀代の結果を得ているため現段階では道内最古級のチャシ跡となる。この時期においても本地域は、擦文文化からアイヌ文化期の遺構を検出し、中でも土坑墓に関しては、上幌内モイ遺跡の擦文墓(ⅢGP-03)を含めると18基検出している。

中世アイヌ文化期とした年代から土坑墓は、ヲチャラセナイ遺跡に2基(ⅢGP-02は付編2-2)、オニキシベ2遺跡に4基(ⅢGP-04は付編3-1)、上幌内2遺跡に4基、上幌内3遺跡に1基(ⅢGP-02は付編4-2)、ショロマ4遺跡に1基(ⅢGP-01は付編3-2)の合計12基検出している。これら中世アイヌ墓の年代は全てを時系列に並べるのは難しいが、まとまって土坑墓を検出した遺跡を比較すると上幌内2遺跡が古く、オニキシベ2遺跡が新しい。層位的所見はほぼ同じであるが、副葬品から得たAMS年代測定結果や墓標穴の有無で前者が13世紀代、後者が14世紀前半に位置づけられる。この中世土坑墓に関しては、殆どが段丘縁辺部に構築されるという共通性をもつが、頭位方向が遺跡によって異なるという特徴もある。

近世初頭アイヌ文化期は、上幌内モイ遺跡で近世初頭の土坑墓3基を検出しており、いずれも頭位方向は東側で墓標穴を伴う。ⅢGP-01は蝦夷太刀や骨製の中柄・骨鏃などで(付編1-1)、ⅢGP-02は鉄鍋が出土するなど(付編1-2)性別によって副葬品内容も顕著に異なってくる。同時期の土坑墓としては上幌内2遺跡のⅢGP-03(町教委2016a)、上幌内3遺跡のⅢGP-01(付編4-1)が挙げられ土坑墓の構築形態に共通性が認められる。遺物については、Ta-bテフラ直下からは少なくなり、永楽銭、寛永銭や煙管といった資料は厚真川中流域の遺跡から出土する傾向がある。これは、縄文時代以来続いた内陸ルートの交易・交流が、近世以降により下流域、つまり海岸部に移行していった結果と思われる。

しかし、近世以降本地域から遺構がなくなったわけではなく、近現代においては上幌内3遺跡で掘立柱の平地式住居跡や建物跡1軒を検出している(道埋文2016)。また、オニキシベ4遺跡でも建物跡や土坑のほか炭窯跡も検出しており(町教委2014a)、本地域も近現代以降、現代に至るまで脈々と営みが続いていたことがわかる。

本地域ではこうした多くの遺構を検出しているが、特に擦文からアイヌ文化期の交易、交流が明らかとなってきており、当時としては貴重であった鉄鍋(付編8-2)も土坑墓以外から多く出土する。もちろん交易で得るための対価として、何らかの「モノ」がなければこれだけの遺物は出土しない。発掘調査から分かる範囲でその対価として挙げられるのは、縄文時代以降、遺跡から遺存体として多く出土する「シカ」である。現在もこの地域はシカが多く生息しており、内陸ルートの「道」と「シカ」などが本地域に拠点的な遺跡を残した要因と強く感じる。

(奈良)

表Ⅲ-1 V層遺構群一覽表(1)

遺構名	燔属時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考	遺構名	燔属時期	規模(cm)		グリッド	層位	付属・関連遺構	備考
		長軸	短軸							長軸	短軸				
VH-17	縄文時代	394	354	E-47-48	Vc	HP01/PT01 HP01-02-04	石鏡跡	TP-90	縄文時代	360	86	W-19-20/ X-19	VI	-	
VGP-30	縄文時代	316	304	Y-Z-32-33	VI	-	VFP-22跡	TP-91	縄文時代	226	126	Y-18	VI	-	
VP-31	縄文時代	128	38	AB-12-14	VI	-	-	TP-92	縄文時代	158	84	Y-17	VI	-	
VP-32	縄文時代	100	74	S-9	VI	-	-	TP-93	縄文時代	246	86	Y-26	VI	-	
VP-33	縄文時代	(44)	42	S-10	VI	-	-	TP-94	縄文時代	206	88	Y-2-25	VI	-	
VP-34	縄文時代	94	72	V-30	VI	-	-	TP-95	縄文時代	284	82	Y-26	VI	-	
VP-35	縄文時代	98	66	S-6	Vc	-	-	TP-96	縄文時代	090	78	X-11-12	VI	-	
VP-37	縄文時代	91	66	K-45	VI	-	TP-105.29跡	TP-97	縄文時代	318	58	X-Y-13	VI	-	
VP-38	縄文時代	236	195	C-48	VI	-	-	TP-98	縄文時代	216	70	Y-14	VI	-	
VP-39	縄文時代	133	93	I-41	VI	-	-	TP-99	縄文時代	332	72	Y-2-13	VI	-	
VSP-04	縄文時代	38	36	S-6-7	Vc	-	-	TP-100	縄文時代	322	94	Y-15	Vc	-	
VP-31	縄文時代	50	31	AB-16	VbL	-	-	TP-101	縄文時代	250	150	Y-15-16	VI	-	
VP-32	縄文時代	151	114	AD-25	VbL	-	-	TP-102	縄文時代	206	108	Y-16	VI	-	
VP-33	縄文時代	52	25	AD-32	VbL	-	-	TP-103	縄文時代	194	88	Y-16-17	VI	-	
VP-34	縄文時代	39	(25)	E-48	VbL	VPCB-05	-	TP-104	縄文時代	198	84	Y-27	VI	-	
VP-35	縄文時代	88	66	C-46	VbM	VPCB-06	-	TP-105	縄文時代	162	124	Y-22	VI	-	
VP-36	縄文時代	57	49	C-45	VbM	-	-	TP-106	縄文時代	(106)	66	X-Y-18	VI	-	TP-106.29跡
VP-37	縄文時代	54	42	G-48	VbL	-	-	TP-107	縄文時代	190	124	AA-19	VI	KP01-02	遺残未定
VP-38	縄文時代	48	21	F-47	Vc	-	-	TP-108	縄文時代	158	112	AC-19	VI	KP01-02	
TP-51	縄文時代	272	86	T-38	VI	-	-	TP-109	縄文時代	270	76	AB-21/ 22/AC-22	VI	-	
TP-52	縄文時代	(216)	112	S-40	VI	-	-	TP-110	縄文時代	226	76	Y-27	VI	-	
TP-53	縄文時代	292	72	O-43	VI	-	-	TP-111	縄文時代	386	114	AB-19-20	VI	-	
TP-54	縄文時代	250	86	R-40	VI	-	-	TP-112	縄文時代	284	86	X-Y-25	VI	-	
TP-55	縄文時代	226	132	Q-41	VI	-	-	TP-113	縄文時代	296	74	U-12-13	VI	-	
TP-56	縄文時代	162	132	S-40	VI	-	-	TP-114	縄文時代	152	86	AB-16-17/ AC-17	Vc	KP01-03	
TP-57	縄文時代	254	42	P-40-41	VI	-	-	TP-115	縄文時代	158	82	AA-AB-24	VI	-	
TP-58	縄文時代	362	58	P-42	VI	-	-	TP-116	縄文時代	226	110	Y-13	VI	-	
TP-59	縄文時代	(126)	82	AA-11-12	VI	-	-	TP-117	縄文時代	(266)	86	Z-24	VI	-	TP-116.29.30
TP-60	縄文時代	(188)	64	U-7-8	VI	-	-	TP-118	縄文時代	212	86	Z-24	VI	-	TP-117.29
TP-61	縄文時代	174	98	AC-AD-15	Vc	KP01-02	-	TP-119	縄文時代	206	94	T-U-37	VI	-	
TP-62	縄文時代	288	86	AB-13	VI	-	-	TP-120	縄文時代	196	86	T-U-37	VI	-	
TP-63	縄文時代	178	62	U-8-9	VI	-	TP-64.29跡	TP-121	縄文時代	218	78	Y-27-28	VI	-	
TP-64	縄文時代	198	98	U-V-9	VI	-	TP-65.29.30	TP-122	縄文時代	284	94	Y-28	VI	-	
TP-65	縄文時代	194	74	V-10	VI	-	-	TP-123	縄文時代	154	74	X-Y-28	VI	-	
TP-66	縄文時代	250	76	W-11	VI	-	-	TP-124	縄文時代	214	106	X-28-29	VI	-	
TP-67	縄文時代	218	114	W-11	VI	-	-	TP-125	縄文時代	144	112	Y-27-28/ W-28	VI	KP01-02	遺残未定
TP-68	縄文時代	306	106	W-11	VI	-	-	TP-126	縄文時代	294	102	X-Y-29-30	VI	-	
TP-69	縄文時代	(280)	84	Y-11	VI	-	-	TP-127	縄文時代	286	100	U-36-37	VI	-	
TP-70	縄文時代	(192)	(96)	Y-17	Vc	-	-	TP-128	縄文時代	206	70	T-U-36-37	VI	-	
TP-71	縄文時代	206	118	Y-18	Vc	-	-	TP-129	縄文時代	286	124	W-X-29-30	VI	KP01-06	TP-128.29.30
TP-72	縄文時代	224	96	X-20	VI	-	TP-75.29.30	TP-130	縄文時代	218	98	W-X-30	VI	-	TP-128.29.30
TP-73	縄文時代	342	110	X-20	Vc	-	-	TP-131	縄文時代	(172)	94	X-30	VI	-	
TP-74	縄文時代	162	118	AA-21	VI	KP01-02	-	TP-132	縄文時代	150	84	W-30-31	VI	-	
TP-75	縄文時代	196	122	X-Y-20	Vc	-	TP-72.29跡	TP-133	縄文時代	208	106	U-V-34	VI	-	
TP-76	縄文時代	190	92	X-Y-21	Vc	-	-	TP-134	縄文時代	308	76	X-31-32	VI	-	
TP-77	縄文時代	228	94	X-Y-21	Vc	-	-	TP-135	縄文時代	150	132	U-30	VI	KP01-02	遺残未定
TP-78	縄文時代	(164)	96	X-Y-22	VI	-	TP-105.29跡	TP-136	縄文時代	298	86	AP-AG-35-36	VI	-	
TP-79	縄文時代	260	118	Y-22-23	Vc	-	-	TP-137	縄文時代	282	84	AB-AP-33-34	VI	-	
TP-80	縄文時代	222	98	Y-2-23	Vc	-	-	TP-138	縄文時代	212	170	E-46-47	VbL	KP01-02-04- 06-07	土器出土
TP-81	縄文時代	178	92	X-Y-22-23	VI	-	-	TP-139	縄文時代	160	116	K-37	VbL	KP01-03-04 ~06-08~10	
TP-82	縄文時代	178	80	X-12	Vc	-	-	TP-140	縄文時代	280	66	N-41	VI	-	
TP-83	縄文時代	312	58	Y-23	VI	-	-	TP-141	縄文時代	198	153	C-45	VbL	KP01-04	VFP-26跡
TP-84	縄文時代	294	56	Y-24	VI	-	TP-86.29.30	TP-142	縄文時代	300	100	C-D-44-45	VI	-	
TP-85	縄文時代	180	62	Y-25-26-27	VI	-	-								
TP-86	縄文時代	234	44	Y-24	VI	-	TP-84.29.30								
TP-87	縄文時代	230	102	Y-24-25	VI	-	-								
TP-88	縄文時代	142	110	Z-22	VI	KP01-02	-								
TP-89	縄文時代	338	90	Z-20-21	VI	-	-								





表Ⅲ-4 VH付属土坑属性表

探図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	調査面規模(cm)		坑底面規模(cm)		深さ (cm)	長軸 方向	調査 面長 短比	坑底 面長 短比	出土 遺物	備考	
					調査面 /坑底面	長軸	短軸	長軸	短軸							
Ⅲ-3	16-3-4	VH-17	PT01	E-48	VI	楕円形/ 楕円形	66	50	44	34	16	N-42° E	1.3	1.3	-	

表Ⅲ-5 VH-17柱穴属性表

探図 番号	図版 番号	遺構名	柱穴規模(cm)			傾き (度)	タイプ	備考
			上端	下端	深さ			
Ⅲ-2	16-5-6	HP01	12	2	31	0	打込み	
Ⅲ-2	16-7-8	HP02	10	0	20	7	打込み	
Ⅲ-2	16-9-10	HP04	10	0	15	1	打込み	

表Ⅲ-6 VGP・VP属性表

探図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査 層位	平面形	調査面規模 (cm)		坑底面規模 (cm)		深さ (cm)	長軸 方向	調査 面長 短比	坑底 面長 短比	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸					
Ⅲ-4	17-1~5	VGP-30	Y-2-32-33	VI	円形/円形	316	304	220	220	76	N-36° E	1.0	1.0	
Ⅲ-5	17-6-7	VP-31	AB-13-14	VI	楕円形/長楕円形	128	38	112	24	46	N-87° E	3.4	4.7	
Ⅲ-6	18-1-2	VP-32	S-9	VI	楕円形/楕円形	100	74	88	48	52	N-83° E	1.4	1.8	
Ⅲ-5	18-3-4	VP-33	S-10	VI	-/-	(44)	42	(24)	14	66	N-90° E	(1.0)	(1.7)	
Ⅲ-5	18-5-6	VP-34	V-30	VI	楕円形/楕円形	94	72	70	40	32	N-44° W	1.3	1.8	
Ⅲ-5	18-7-8 20-1	VP-35	S-6	Vc	楕円形/楕円形	98	66	74	38	42	N-20° E	1.5	1.9	
Ⅲ-6	19-1~3	VP-37	K-45	VI	楕円形/楕円形	91	66	75	49	14	N-69° E	1.4	1.5	
Ⅲ-6	19-4-5	VP-38	G-48	VI	楕円形/楕円形	236	195	208	173	22	N-28° E	1.2	1.2	
Ⅲ-6	19-6-7	VP-39	I-41	VI	楕円形/楕円形	135	93	88	40	37	N-14° E	1.5	2.2	

表Ⅲ-7 VSF・VF属性表

探図 番号	図版 番号	遺構名	グリッド	調査面 層位	平面形	規模(cm)			灰・骨片 の有無	備考
						長軸	短軸	厚さ		
Ⅲ-7	20-1-2	VSF-04	S-6-7	Vc	方形	38	36	8	-	石組炉
Ⅲ-7	20-3-4	VF-31	AB-16	VbL	不整形	50	31	7	-	
Ⅲ-7	20-5-6	VF-32	AB-25	VbL	不整形	151	114	17	-	
Ⅲ-7	20-7-8	VF-33	AD-32	VbL	不整形	52	25	5	-	
Ⅲ-8	21-1-3	VF-34	E-48	VbL	不整形	39	(25)	7	-	
Ⅲ-8	21-2-4	VF-35	C-46	VbM	不整形	88	68	10	-	
Ⅲ-8	21-5-7	VF-36	C-46	VbM	楕円形	57	49	7	-	
Ⅲ-8	21-6-8	VF-37	G-48	VbL	不整形	54	42	7	-	
Ⅲ-8	21-9-10	VF-38	F-47	Vc	楕円形	48	21	5	-	







表Ⅲ-9 VPB・VSB・VFTB・VFCB・VAXB属性表

挿図番号	図版番号	遺構名	グリッド	層位	平面形	規模(cm)		被熱の有無	備考
						長軸	短軸		
Ⅲ-60	56-1・2	VPB-17	T-41	VbU	不整形	112	88	-	
Ⅲ-60	56-3・4	VPB-18	P-40・41	VbU	不整形	174	98	-	
Ⅲ-60	56-5~7	VPB-19	AA・AB-15・16	VbL	不整形	472	348	-	
Ⅲ-61	56-5・8	VPB-20	AA-14	VbM	不整形	404	316	-	
Ⅲ-61	57-1	VPB-21	AE・AF-29	VbM	不整形	216	116	-	
Ⅲ-4	57-2・3	VPB-22	Z-32・33	VbM/ VbL	不整形	92	71	-	
Ⅲ-62	57-4	VPB-23	R・S-18・19	VbU/ VbM	不整形	228	180	-	
Ⅲ-62	57-5	VPB-24	H-45	VbU	不整形	187	125	-	
Ⅲ-63	57-6・7	VPB-25	E-45	VbU	不整形	214	158	-	
Ⅲ-63	57-8・58-1	VPB-26	C-45	VbU	楕円形	142	88	-	
Ⅲ-63	58-2	VPB-27	H-47	VbU	不整形	162	110	-	
Ⅲ-64	58-3・5	VPB-28	I-46・47	VbU	不整形	108	70	-	
Ⅲ-64	58-6	VPB-29	I-45・46	VbU	不整形	200	132	-	
Ⅲ-65	58-7・59-1	VPB-30	F-41・42	VbU	不整形	258	202	-	
Ⅲ-64	58-3・4	VPB-31	I-46	VbU	不整形	202	90	-	
Ⅲ-65	59-2	VPB-32	F-47	VbU	不整形	128	88	-	
Ⅲ-66	59-3・4	VPB-33	D-46	VbU	不整形	86	42	-	
Ⅲ-65	59-5・6	VPB-34	F-46・47	VbU	不整形	160	25	-	
Ⅲ-66	59-5・7	VPB-35	F-46・47	VbU	不整形	58	34	-	
Ⅲ-66	59-8・60-1	VPB-36	H-I-44	VbU	円形	22	20	-	
Ⅲ-67	60-2・3	VPB-37	J-29	VbU	不整形	403	202	-	
Ⅲ-68	60-4・5	VSB-11	X・Y-23	VbU	不整形	584	312	有	
Ⅲ-75	60-6・7	VFTB-01	Y-20	VbU/ VbM	不整形	200	156	有	
Ⅲ-75	60-8・61-1	VFTB-02	V-20	VbU	不整形	92	24	-	
Ⅲ-75	61-2	VFTB-03	H-45	VbL	不整形	4	3	-	
Ⅲ-76	61-3	VFCB-05	D・E-47・48	Vc	不整形	578	260	有	
Ⅲ-77	61-4	VFCB-06	B・C-46・47	VbL	不整形	253	170	有	
Ⅲ-77	61-5	VFCB-07	C・D-46・47	VbU	不整形	94	75	有	
Ⅲ-78	61-6	VAXB-01	Y-20・21	VbU/ VbM	不整形	222	194	-	

表Ⅲ-10 V層遺構出土土器属性表(1)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考					
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底径	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面							
VSF-04																
Ⅲ-9-6	67-6	489A	ⅢB3a	VSF-04	VbL	1	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外反- 丸状・やや肥厚/ほぼ 直立	押引文(内)-ナゲ+押引 文2段(内)・0段多条LR斜 行縄文・O形形刺突文 /0段多条LR斜行縄文 ・結縄痕	砂粒多量 繊維微量						
						1					1					
Ⅲ-9-7	67-7	489B	ⅢB3a	VSF-04	2	1	胴部	やや外傾	結束第1種0段多条LR 斜行縄文	砂粒多量 繊維微量						
Ⅲ-9-8	67-8	570	ⅢB3a	VSF-04	2	1	胴部	やや外傾	0段多条LR斜行縄文	砂粒多量 繊維微量	表面風化					
VF-31																
Ⅲ-9-14	67-14	487	ⅢB3a	VF-31	VbM	1	胴部	やや外傾	0段多条LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量						
Ⅲ-9-15	67-15	488	ⅢB3a	VF-31	VbM	1	胴部	やや外傾	0段多条LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量						
TP-138																
Ⅲ-57-4	68-1	651A	ⅢB2a	TP-138	VbU	1	口縁部	波状-外反-隅丸角状	0段多条LR斜行縄文-結 束第2種0段多条LR斜行 縄文-ミダキ(縦位・入念)	細砂粒中量 繊維微量						
						2					頸部	外反-湾曲(弓状)	結束第2種0段多条LR 斜行縄文	細砂粒中量 繊維微量	内面剥落	
Ⅲ-57-5	68-2	651B	ⅢB2a	TP-138	VbU	1	頸部 屈曲部	外反-湾曲(弓状)	結束第2種0段多条LR 斜行縄文	細砂粒中量 繊維微量	内面剥落					
						1						胴部	張り出し	結束第2種0段多条LR 斜行縄文-ミダキ (縦位・粗縁)	細砂粒中量 繊維微量	器表而 風化顯著
Ⅲ-57-6	68-3	651P	ⅢB2a	E-46	VbM	1	胴部	張り出し	結束第2種0段多条LR 斜行縄文-ミダキ (縦位・粗縁)	細砂粒中量 繊維微量	器表而 風化顯著					
						1						胴部	張り出し	結束第2種0段多条LR 斜行縄文-ミダキ (縦位・粗縁)	細砂粒中量 繊維微量	器表而 風化顯著
Ⅲ-57-7	68-4	651C	ⅢB2a	TP-138	VbL	2	胴部 下半 ~底部	外反/外傾-隅丸角状 -平底	結束第2種0段多条LR斜 行縄文/無文-無文- ナゲ(平滑)	細砂粒中量 繊維微量 焼鉄藍粒						
						1					胴部	外反/外傾-隅丸角状 -平底	結束第2種0段多条LR斜 行縄文/無文-無文- ナゲ(平滑)	細砂粒中量 繊維微量 焼鉄藍粒		
TP-151																
Ⅲ-58-8	68-5	653B	ⅢB2a	VPB-25	VbU	1	口縁部	平縁-外反-丸状	貼付帯+LR縄線文(3条1 対)-LR原体側面圧痕 (2段)-0段多条LR縦走縄 文-ヘラナゲ(粗縁)	細砂粒中量 繊維微量	TP-151 掲載					
						1						胴部	平縁-外反-丸状/ 直立?	貼付帯+LR縄線文(3条1 対)-LR原体側面圧痕 (3段)-0段多条LR縦走縄 文-ヘラナゲ(粗縁)	細砂粒中量 繊維少量	
						1						胴部 上半- 下半	細く括れる-緩く 膨らむ	LR斜行縄文(横走気味)- 隆起帯+弧状LR原体側 面圧痕+LR縄線文・RL斜 行縄文(横走気味)- ヘラナゲ	砂粒 やや多量	
Ⅲ-58-10	68-7	657A	ⅢB3b	TP-151	1	1	胴部 上半- 下半	細く括れる-緩く 膨らむ	LR斜行縄文(横走気味)- 隆起帯+弧状LR原体側 面圧痕+LR縄線文・RL斜 行縄文(横走気味)- ヘラナゲ	砂粒 やや多量						
Ⅲ-58-11	68-8	657B	ⅢB3b	N-43	VbL	1	胴部 下半	ほぼ直立	隆起帯(縦位・縦位交点)+ 弧状LR原体側面圧痕+ LR縄線文・RL斜行縄文 (横走気味)	砂粒 やや多量	内面剥落					
TP-169																
Ⅲ-59-18	69-15	645A	ⅢB2a	TP-169	1	1	口縁部	平縁-外反-山形小突 起-丸状	貼付帯+LR縄線文(2条1 対)-0段多条LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量						
						1					口縁 突起部	外反-山形小突起(2個 1対・やや肥厚)-丸状	刺突文-0段多条LR 斜行縄文	砂粒少量 繊維微量		
Ⅲ-59-19	69-16	646B	ⅢB2a	E-47	VbM	1	口縁 突起部	外反-山形小突起(2個 1対・やや肥厚)-丸状	刺突文-0段多条LR 斜行縄文	砂粒少量 繊維微量						
Ⅲ-59-20	69-17	646A	ⅢB2a	TP-169	1	1	口縁- 胴部 上半	平縁-外反-角状(外 側ぎ・やや肥厚)	LR縄線文+刺突文 -0段多条LR斜行縄文 /0段多条LR斜行縄文	砂粒少量 繊維微量						
						1					胴部 上半	平縁-外反-角状(外 側ぎ・やや肥厚)	LR縄線文+刺突文 -0段多条LR斜行縄文 /0段多条LR斜行縄文	砂粒少量 繊維微量		

表Ⅲ-10 V層遺構出土土器属性表(2)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
VPB-17											
Ⅲ-69-1	70-1	499A	IVa1a	VPB-17	VbU	3	口縁部	平縁・直立-角状	0段多条RL斜行縄文-貼付帯1A+0段多条RL斜行縄文-ナデ	砂粒多量 バミス少量 角礫微量	一部内面 剥落
Ⅲ-69-2	70-2	499B	IVa1a	VPB-17	VbU	1	胴部	やや外傾	具原体羽状縄文	砂粒多量 バミス少量 角礫微量	内面剥落
Ⅲ-69-3	70-3	499C	IVa1a	VPB-17	VbU	3	胴部	やや外傾	具原体羽状縄文	砂粒多量 バミス少量 角礫微量	一部内面 剥落
Ⅲ-69-4	70-4	500	IVa1a	VPB-17 S-4I	VbL	1	胴部	やや外傾	0段多条LR斜行縄文・ 貼付帯2+0段多条 LR斜行縄文	砂粒中量	
					VbU	1					
VPB-18											
Ⅲ-69-5	70-5	501B	IVa1a	VPB-18	VbU	4	口縁部	平縁・ほぼ直立-角状	ナデ-貼付帯1B+0段 多条RL斜行縄文/0段多 条RL斜行縄文-ヘラ ナデ	砂粒中量 至角礫少量	平行組織
Ⅲ-69-6	70-6	501A	IVa1a	VPB-18	VbU	18	胴部 上半~ 下半	ほぼ直立~外傾	貼付帯2+0段多条RL斜 行縄文・0段多条具原体 羽状縄文-ヘラナデ	砂粒中量 至角礫少量	平行組織
VPB-19											
Ⅲ-69-7	70-7	569A	IVa2	VPB-19	VbU	1	口縁部	平縁・直立-角状	LR斜行縄文-貼付帯1B +LR斜行縄文	砂粒多量	内面剥離
Ⅲ-69-8	70-8	569B	IVa2	VPB-19	VbU	1	胴部	ほぼ直立	貼付帯2+RL斜行縄文・ 具原体羽状縄文	砂粒多量	表面やや 風化
					VbM	1					
Ⅲ-69-9	70-9	571A	IVa2	VPB-19	VbM	2	口縁部	平縁・直立-角状	LR斜行縄文-貼付帯1B +LR斜行縄文・縄端 刺突文・LR斜行縄文	砂粒多量	表面・内面 一部剥落
Ⅲ-69-10	70-10	571B	IVa2	VPB-19	Vc	1	胴部	やや外傾	LR斜行縄文・結縛痕	砂粒多量	内面一部 剥落
					VbU	1					
					VbM	1					
Ⅲ-69-11	70-11	571C	IVa2	VPB-19	VbU	4	胴部 下半~ 底部	外傾-やや張り出し・ 角状-平底	LR斜行縄文/無文/無文	砂粒多量	内面一部 剥落
VPB-20											
Ⅲ-70-15	70-15	491	ⅢB3a	VPB-20	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾	肥厚帯+押し引文(内2段) ・円形刺突文	砂粒中量 繊維少量	表面やや 風化 内面剥落
Ⅲ-70-16	70-16	490	ⅢB3a	VPB-20	VbU	1	胴部	やや外傾	LR斜行縄文	砂粒中量	内面一部 剥落
Ⅲ-70-17	70-17	492	ⅢB3a	VPB-20	VbU	4	底部	外傾-やや張り出し・ 角状-平底	無文(ナデ)	砂粒中量 繊維少量	表面・内面 一部剥落
Ⅲ-70-18	70-18	539A	IVa2	VPB-20	VbU	2	口縁部	平縁・直立-角状	RL斜行縄文-貼付帯1A +RL斜行縄文	砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-70-19	70-19	536A	IVa2	VPB-20	VbU	17	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外傾- 隅丸角状	LR斜行縄文+ナデ-貼 付帯1A+縄端刺突文・LR 斜行縄文/LR斜行縄文 (横走気味)	砂粒中量 至角礫微量	表面・内面 一部剥落
				AA-14	VbM	1					
VPB-21											
Ⅲ-70-24	71-24	567A	IVa1a	VPB-21	VbM	2	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外傾-内削 ぎ切り出し状/ほぼ直 立	ナデ-貼付帯1A(器表面 剥落)-ナデ	砂粒多量 礫微量	表面剥落
					VbL	1					
					AE-21	1					
Ⅲ-70-25	71-25	567B	IVa1a	VPB-21	VbM	1	口縁部	平縁・やや外傾	ナデ-貼付帯1A+ RL斜行縄文	砂粒多量	内面剥落
Ⅲ-70-26	71-26	567C	IVa1a	VPB-21	VbM	5	胴部	やや外傾	貼付帯2+LR斜行縄文・ 具原体羽状縄文(縦)	砂粒多量 礫微量	内面剥落
				VbL	1						



表Ⅲ-10 V層遺構出土土器属性表(3)

挿図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
VPB-22											
Ⅲ-70-27	71-27	540A	ⅣA2	VPB-22	VbM	3	口縁部	平縁・直立-隅丸角状 (内削)	LR斜行縄文+刻み- 貼付帯1B+LR斜行縄文・ 円形刺突文(斜め)・ LR斜行縄文	砂粒中量	
Ⅲ-70-28	71-28	540B	ⅣA2	VPB-22	VbM	13	胴部 上半~ 下半	やや外傾	異原体羽状縄文・ 貼付帯2+LR斜行縄文	砂粒中量	表面一部 剥落
VPB-23											
Ⅲ-70-29	71-29	525A	ⅢB2a	VPB-23	VbM	1	口縁部	小波状・やや外傾 -角状	0段多条LR斜行縄文- 0段多条LR斜行縄文・ 横走比羅文	砂粒・ 繊維少量	内面剥落
Ⅲ-70-30	71-30	525B	ⅢB2a	VPB-23	VbM	3	胴部	外傾	0段多条LR斜行縄文 -ヘラナデ	砂粒・ 繊維少量	
Ⅲ-70-31	71-31	525C	ⅢB2a	VPB-23 S-18	VbM KR	5 1	胴部 下半~ 底部	外傾-角状-平底	0段多条LR斜行縄文 -ヘラナデ	砂粒・ 繊維少量	
VPB-24											
Ⅲ-71-33	71-33	678C	ⅣA1a	VPB-24	VbU VbL	1 1	胴部 下半	外傾	貼付帯2+0段多条RL 斜行縄文・0段多条異原体 羽状縄文-ナデ(平滑)	砂粒多量	
Ⅲ-71-34	71-34	678A	ⅣA1a	VPB-24 H-46	VbU Vc	1 1	胴部 上半	直立	重複縄文	砂粒多量	
Ⅲ-71-35	71-35	678B	ⅣA1a	G-48	VbU	1	底部 側面	外傾	0段多条RL斜行縄文	砂粒多量	風化顯著 外傾接合
VPB-24・27											
Ⅲ-71-37	71-37	672A	ⅣA1a	VPB-24 (H-45)	VbU	7	口縁~ 胴部 上半	平縁・やや外反- 角状(やや内削ぎ状) /直立	貼付帯1A+0段多条LR 斜行縄文+横位無文帯 (凹帯状)/貼付帯2+ 0段多条LR斜行縄文・ 0段多条RL斜行縄文	砂粒中量	補修孔
Ⅲ-71-38	71-38	672B	ⅣA1a	VPB-24 H-45	VbU Vc	4 2	胴部 上半	直立	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・重複縄文・ 0段多条LR斜行縄文	砂粒中量	内面剥落
Ⅲ-71-39	71-39	672D	ⅣA1a	VPB-27 (H-47)	VbU	11	胴部 下半	外傾(内湾気味)	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・重複縄文・0段 多条異原体羽状縄文・ 貼付帯2+0段多条 RL斜行縄文	砂粒中量	内面剥落
Ⅲ-71-40	71-40	672I	ⅣA1a	VPB-27 H-47	VbU VbL	18 1	胴部 下半 ~底部	外傾/直立-隅丸角状 -平底	貼付帯2+0段多条RL 斜行縄文・0段多条異原体 羽状縄文-重複縄文	砂粒中量	内面剥落
VPB-25											
Ⅲ-71-41	72-41	694A	ⅣA2	VPB-25	VbU	8	口縁部	平縁・直立-隅丸角状	RL斜行縄文+ナデ-RL 側面圧痕・RL斜行縄文+ ナデ-RL斜行縄文	砂粒多量	破断面: 平行組織
Ⅲ-71-42	72-42	682A	ⅣA2	C-45	VbL	1	胴部 上半	やや外傾	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・0段多条RL 斜行縄文-ナデ(平滑)	砂粒中量	外傾接合
Ⅲ-71-43	72-43	695A	ⅣA2	VPB-25	VbU	2	胴部 下半	外傾	0段多条異原体羽状縄文 -ナデ(平滑)	砂粒多量	
Ⅲ-71-44	72-44	695B	ⅣA2	VPB-25	VbU	2	底部	外反~直立-隅丸角 状-平底	LR斜行縄文	砂粒多量	内面剥落

表Ⅲ-10 V層遺構出土土器属性表(4)

検出 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
VPB-26											
Ⅲ-72-45	72-45	693A	IVA2	VPB-26	VbU	14	口縁- 胴部 上半	平縁・直立(口唇部や やや内湾気味)- 隅丸角状/外傾	0段多条LR斜行縄文- 貼付帯(段状)+0段多条 LR斜行縄文/貼付帯(段 状)+0段多条LR斜行縄文 +原体側面圧痕(2個1対) +擬位貼付帯+原体側面 圧痕文(2条1対)	砂粒極多量	
Ⅲ-72-46	72-46	693B	IVA2	VPB-26	VbU	2	胴部 上半	外傾	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・貼付帯2(擬位) +LR原体側面圧痕 (2条1対)	砂粒極多量	内面剥落
VPB-28											
Ⅲ-72-47	73-47	677A	IVA1a	VPB-28	VbL	2	口縁- 胴部 上半	平縁・直立-角状/ 外傾	貼付帯1A・貼付帯2+ 0段多条RL斜行縄文・ 0段多条LR斜行縄文- ナダ(平滑)	砂粒多量	
Ⅲ-72-48	73-48	677B	IVA1a	I-47	VbU	1	胴部 下半	外傾	0段多条異原体羽状縄文 -ナダ(平滑)	砂粒多量	
Ⅲ-72-49	73-49	679A	IVA1a	VPB-28	VbU	2	胴部 上半	直立	貼付帯2+0段多条RL 斜行縄文・0段多条異原体 羽状縄文	砂粒多量	
Ⅲ-72-50	73-50	679B	IVA1a	J-46	VbU	1	底部 側面	直立~外反	0段多条異原体羽状縄文	砂粒多量	
VPB-29											
Ⅲ-73-51	73-51	698A	IVA2	VPB-29	VbU	2	口縁- 胴部 上半	平縁・直立(やや内湾 気味)-隅丸角状/ 直立	0段多条LR斜行縄文- 0段多条LR斜行縄文・ 縄端刺突文	細砂粒 極多量	
VPB-30											
Ⅲ-73-53	73-53	681A	IVA1a	VPB-30	VbU	1	口縁部	平縁・直立-隅丸角状	0段多条RL斜行縄文- 貼付帯1A+0段多条LR 斜行縄文	砂粒多量	内面剥落
Ⅲ-73-54	73-54	681C	IVA1a	VPB-30	VbU	1	胴部	直立	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・円形刺突文 (棒状工具・斜め下方)	砂粒多量	内面剥落
Ⅲ-73-55	73-55	681B	IVA1a	VPB-30	VbM	1	胴部 上半	直立	貼付帯2+0段多条RL・ LR斜行縄文・ 0段多条LR斜行縄文	砂粒多量	内面剥落
VPB-31											
Ⅲ-73-56	73-56	680A	IVA1a	VPB-30	VbU	3	口縁部	平縁・外反 一切出L状(内削ぎ)	0段多条RL斜行縄文- 貼付帯1B+0段多条RL 斜行縄文・O円形刺突文・ 貼付帯(段状)+0段多条 LR斜行縄文・O円形刺突 文-ナダ(平滑)	砂粒多量	外傾接合
VPB-33											
Ⅲ-73-60	73-60	696A	IVA2	VPB-33	VbU	5	口縁- 胴部 上半	平縁・やや内湾 -隅丸角状/直立	0段多条LR斜行縄文- 貼付帯1A+0段多条LR 斜行縄文/0段多条LR 斜行縄文	砂粒極多量	
VPB-34											
Ⅲ-73-61	73-61	691A	IVA2	VPB-34	VbU	2	口縁- 胴部 上半	平縁・外傾-隅丸角状 /外傾	0段多条LR斜行縄文- 縄端刺突文・0段多条LR 斜行縄文(横走気味)	砂粒多量	
				D-45	VbL	1					
				E-44	VbM	1					
				F-47	VbU	2					
				G-46	VbL	2					

表III-10 V層遺構出土土器属性表(5)

博図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
VPB-36											
Ⅲ-74-62	74-62	699A	IVB1	VPB-36			口縁～ 胴部 上半	平縁・山形小突起 一角状	0段多条LR斜行縄文 +ナデ-LR斜行縄文 (一部横走)+ナデ -LR横走縄文+ナデ	砂粒極多量	
VPB-37											
Ⅲ-74-63	74-63	689A	IVA1a	VPB-37			口縁～ 胴部 上半	平縁・小突起・外反 一角状(外向き)/直立	円形刺突文(突起頂部)・0 段多条LR斜行縄文-貼 付帯1A・縦位貼付帯+0 段多条LR斜行縄文+円 形刺突文/貼付帯2+0段 多条LR斜行縄文+O円 形刺突文(斜め下方)・0段 多系異原体羽状縄文	砂粒少量	外傾接合
Ⅲ-74-64	74-64	689E	IVA1a	VPB-37			口縁～ 胴部 上半	平縁・小突起・外反 一角状(外向き)/直立	円形刺突文(突起頂部)・ 0段多条LR斜行縄文-貼 付帯1A・縦位貼付帯+ 0段多条LR斜行縄文+ 円形刺突文/貼付帯2+ 0段多条LR斜行縄文+ O円形刺突文(斜め下方)	砂粒少量	外傾接合
Ⅲ-74-65	74-65	689B	IVA1a	VPB-37			胴部	外傾	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・0段多条LR 斜行縄文	砂粒少量	外傾接合
Ⅲ-74-66	74-66	689C	IVA1a	VPB-37			胴部	外傾	0段多条LR斜行縄文 (結縛痕)	砂粒少量	内面剥落
Ⅲ-74-67	74-67	689D	IVA1a	VPB-37			胴部 下半 ～底面	外傾/張り出し(屈曲) -隅丸角状-平底	0段多条LR斜行縄文(一部 縦回転羽状)/無文・指頭 圧痕(成形痕)	砂粒少量	外傾接合 内面剥落
VSB-11											
Ⅲ-74-68	74-68	496A	IVB2	Y-27	VbM	2	口縁部	平縁・やや内湾- 隅丸角状/やや外傾	0段多条RL斜行縄文- 0段多条RL斜行縄文+ ナデ-ナデ	砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-74-69	74-69	496B	IVB2	VSB-11	VbU	1	胴部	やや外傾	RL斜行縄文+ナデ -ナデ	砂粒中量 繊維少量	表面一部 剥落 平行組織
VFCB-05											
Ⅲ-80-17	76-1-17	654B	IVA1a	VFCB-05	VbL	1	胴部 下半	外傾	LR斜行縄文(縦回転)	砂粒中量 白色岩片	

表Ⅲ-11 V層遺構出土遺物属性表(1)

採回 番号	図版 番号	銅体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構/ グリッド	規格(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-9-1	67-1	-	11096	ポイント類	A3②	4	VH-17	27.8	11.7	3.2	0.9	Obs.	完形
Ⅲ-9-2	67-2	-	11092	ポイント類	C	4	VH-17	(23.5)	16.7	6.4	(2.1)	Obs.	先端部欠
Ⅲ-9-3	67-3	-	111957	加工痕のある礎	-	3	VH-17	160.0	89.0	41.2	520.0	Sa.	完形
Ⅲ-9-4	67-4	VFT 004	100155 100175	ナイフ/スクレイパー類	A2a	VbL 4	AC-33 VGP-30	(40.9)	23.4	7.4	(6.7)	Obs.	欠損
Ⅲ-9-5	67-5	-	100173	ナイフ/スクレイパー類	A5	3	VGP-30	(23.4)	23.1	7.8	(3.0)	Obs.	欠損
Ⅲ-9-6	67-9	-	89517	ポイント類	B1b	Vc	VSP-04	46.7	25.4	6.8	5.4	Obs.	完形
Ⅲ-9-10	67-10	-	89511	ポイント類	B1	Vc	VSP-04	(39.8)	26.3	7.0	(4.2)	Obs.	基部欠
Ⅲ-9-11	67-11	-	89514	ナイフ/スクレイパー類	C1b	Vc	VSF-04	(40.8)	(22.6)	3.2	(2.9)	Obs.	欠損・転磨面あり
Ⅲ-9-12	67-12	-	89510	U.F	-	Vc	VSF-04	35.8	31.1	5.7	4.7	Obs.	欠損・岩屑面あり
Ⅲ-9-13	67-13	-	89513	石斧	A2	Vc	VSF-04	120.0	43.0	7.9	69.1	Si-Sch	完形
Ⅲ-67-1	67-16	-	100178	遊茂木	-	9	TP-125	181.5	39.6	33.4	-	W.	
Ⅲ-67-2	67-17	-	100176	遊茂木	-	9	TP-125	122.8	32.3	32.1	-	W.	
Ⅲ-67-3	67-18	-	100281	遊茂木	-	9	TP-135	372.6	45.5	45.5	-	W.	
Ⅲ-68-12	68-9	-	110948	遊茂木	-	9	TP-167	388.5	44.0	45.0	-	W.	
Ⅲ-68-13	69-10	-	110812	ポイント類	B2	1	TP-168	(84.2)	29.1	10.4	(20.9)	Obs.	先端欠
Ⅲ-68-14	69-11	-	111255	ポイント類	C	2	TP-168	72.0	22.0	7.5	19.0	Obs.	完形・未成品・付着物・転磨面あり
Ⅲ-68-15	69-12	-	111246	ポイント類	C	1	TP-168	82.0	28.0	11.0	20.7	Obs.	完形・未成品
Ⅲ-68-16	69-13	-	111244	ポイント類	C	1	TP-168	82.1	32.7	9.5	22.4	Obs.	未成品・先端部磨損
Ⅲ-68-17	69-14	-	111245	両面調整石器	-	1	TP-168	74.0	32.0	9.0	20.1	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-69-21	69-18	-	112099	遊茂木	-	9	TP-176	91.0	31.0	23.8	-	W.	
Ⅲ-69-22	69-19	-	112136	遊茂木	-	9	TP-176	109.0	37.0	41.0	-	W.	
Ⅲ-69-23	69-20	-	111984	遊茂木	-	8	TP-178	350.0	57.5	46.0	-	W.	
Ⅲ-69-24	69-21	-	113002	遊茂木	-	8	TP-178	298.0	36.0	37.0	-	W.	
Ⅲ-69-12	70-12	-	88821	ポイント類	A4	VbL	VPB-19	28.5	12.8	5.4	1.7	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-69-13	70-13	-	88813	ナイフ/スクレイパー類	C2b	VbU	VPB-19	27.2	11.0	5.7	2.7	Obs.	完形
Ⅲ-69-14	70-14	-	88811	たたく石	II B3	VbU	VPB-19	121.2	92.0	70.7	826.0	Sa.	完形・被熱
Ⅲ-70-20	70-20	-	89182	ポイント類	A3①	VbU	VPB-20	22.9	10.2	4.2	0.8	Obs.	完形
Ⅲ-70-21	70-21	-	89183	石鏝	D2	VbU	VPB-20	29.5	16.4	9.5	3.8	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-70-22	70-22	-	89181	R.F	-	VbU	VPB-20	26.6	23.5	5.6	2.5	Obs.	完形・岩屑面あり
Ⅲ-70-23	70-23	-	89355	たたく石	IV	VbM	VPB-20	(69.8)	55.6	28.4	(186.0)	Sa.	欠損・被熱
Ⅲ-70-32	71-32	-	101009	たたく石	III B	VbM	VPB-23	51.3	50.6	38.5	180.8	Bs.	完形
Ⅲ-73-36	71-36	-	109906	ナイフ/スクレイパー類	C1b	VbU	VPB-24	23.3	21.1	6.5	4.5	Obs.	完形・被熱
Ⅲ-73-52	73-52	-	110601	たたく石	I B1	VbU	VPB-29	154.0	52.3	41.0	480.0	Sa.	完形
Ⅲ-73-57	73-57	-	112391	ポイント類	B1b	VbU	VPB-31	58.2	31.2	9.4	10.6	Obs.	完形・被熱・転磨面あり
Ⅲ-73-58	73-58	-	112390	ポイント類	B2	VbU	VPB-31	67.0	28.0	7.1	11.1	Obs.	完形・被熱
Ⅲ-73-59	73-59	-	112389	ポイント類	C	VbU	VPB-31	68.6	31.9	7.5	15.7	Obs.	完形・未成品・被熱
Ⅲ-74-70	74-70	-	89525	ナイフ/スクレイパー類	A4	VbU	VSB-11	49.8	28.0	4.3	6.5	Obs.	完形
Ⅲ-74-71	74-71	-	90883	たたく石	II B3	VbU	VSB-11	91.1	77.6	42.7	372.0	Sa.	完形・被熱
Ⅲ-79-1	75-1	-	92999	ポイント類	B1a	VbM	VFTB-01	62.3	31.9	12.3	16.4	Obs.	完形
Ⅲ-79-2	75-2	-	92996	ポイント類	B1a	VbU	VFTB-01	47.9	28.1	7.1	8.0	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-79-3	75-3	-	93375	ポイント類	B1	VbM	VFTB-01	(53.7)	34.3	8.9	(15.3)	Obs.	先端欠・基部欠
Ⅲ-79-4	75-4	-	93378	ポイント類	B1b	VbM	VFTB-01	117.3	29.7	14.4	47.4	Sh.	完形
Ⅲ-79-5	75-5	-	92998	石鏝	D2	VbU	VFTB-01	64.9	17.3	11.9	12.0	Sh.	完形・磨擦顕著
Ⅲ-79-6	75-6	-	93379	両面調整石器	-	VbM	VFTB-01	64.9	35.7	10.4	20.6	Obs.	完形・転磨面あり・上端磨損あり
Ⅲ-79-7	75-7	-	92997	両面調整石器	-	VbU	VFTB-01	70.9	37.5	11.0	29.9	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-79-8	75-8	-	92992	両面調整石器	-	VbU	VFTB-01	74.7	37.7	11.9	33.1	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-79-9	75-9	-	92991	両面調整石器	-	VbU	VFTB-01	60.6	39.2	9.7	23.3	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-79-10	75-10	-	92993	両面調整石器	-	VbU	VFTB-01	67.5	46.7	10.1	32.9	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-79-11	75-11	VFT 001	92995 93377	両面調整石器	-	VbU VbM	VFTB-01	107.2	63.2	18.0	100.4	Obs.	完形・転磨面あり・磨減あり
Ⅲ-79-12	75-12	-	92994	両面調整石器	-	VbU	VFTB-01	108.5	56.7	17.0	117.2	Obs.	完形
Ⅲ-80-1	76-1-1	-	100910	ポイント類	A3	VbU	VFTB-02	(20.1)	20.0	4.5	(2.2)	Obs.	基部欠
Ⅲ-80-2	76-1-2	-	100916	ポイント類	A3b	VbU	VFTB-02	(31.7)	20.9	5.3	(2.9)	Obs.	先端欠
Ⅲ-80-3	76-1-3	-	100917	ポイント類	A4	VbU	VFTB-02	31.0	18.7	6.1	2.1	Obs.	完形
Ⅲ-80-4	76-1-4	-	100909	ポイント類	A4	VbU	VFTB-02	35.2	19.0	6.2	3.2	Obs.	完形
Ⅲ-80-5	76-1-5	-	100911	ポイント類	A4	VbU	VFTB-02	39.3	16.5	8.5	4.3	Obs.	完形・再調整品

表Ⅲ-11 V層遺構出土遺物属性表(2)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺構/ グリッド	規模(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-80-6	76-1-6	-	100907	U.F	-	VbU	VFTB-02	43.8	27.5	8.9	8.6	Obs.	完形
Ⅲ-80-7	76-1-7	-	100913	R.F	-	VbU	VFTB-02	39.5	20.7	7.8	5.9	Obs.	完形
Ⅲ-80-8	76-1-8	-	100908	R.F	-	VbU	VFTB-02	41.7	24.5	9.5	8.2	Obs.	完形・岩層面あり
Ⅲ-80-9	76-1-9	-	100915	R.F	-	VbU	VFTB-02	45.8	23.4	11.8	9.0	Obs.	完形・岩層面あり
Ⅲ-80-10	76-1-10	-	100918	U.F	-	VbU	VFTB-02	35.8	27.4	6.7	6.2	Obs.	完形・岩層面あり
Ⅲ-80-11	76-1-11	-	100914	U.F	-	VbU	VFTB-02	38.9	27.6	7.7	7.5	Obs.	完形・岩層面あり
Ⅲ-80-12	76-1-12	-	106282	ポイント類	A3b	VbL	VFTB-03	28.8	15.5	7.3	2.8	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-80-13	76-1-13	-	106280	ポイント類	A4	VbL	VFTB-03	27.1	13.7	5.6	1.9	Obs.	完形
Ⅲ-80-14	76-1-14	-	106283	ポイント類	B2	VbL	VFTB-03	57.3	24.3	9.8	9.8	Obs.	完形・転磨面あり
Ⅲ-80-15	76-1-15	-	106279	ポイント類	C	VbL	VFTB-03	32.1	15.1	5.2	2.4	Obs.	完形・未成品・転磨面あり
Ⅲ-80-16	76-1-16	-	106281	ポイント類	C	VbL	VFTB-03	34.8	15.2	8.8	3.8	Obs.	完形・未成品
Ⅲ-81-1	76-2-1	-	94128	石斧	A1	VbU	VAXB-01	147.0	38.5	15.6	156.0	Gr-Sch.	完形
Ⅲ-81-2	76-2-2	-	94123	石斧	A2	VbU	VAXB-01	131.1	49.8	10.8	115.6	Gr-Med.	完形
Ⅲ-81-3	76-2-3	-	94124	石斧	A3	VbU	VAXB-01	94.0	28.0	15.5	75.7	Gr-Med.	完形・丸のみ
Ⅲ-81-4	76-2-4	-	94126	石斧	B1	VbU	VAXB-01	(556.0)	(35.9)	13.2	(34.7)	Gr-Sch.	欠損・未成品
Ⅲ-81-5	76-2-5	-	93008	石斧	B2	VbM	VAXB-01	120.0	49.0	(13.5)	117.9	Gr-Med.	完形・未成品
Ⅲ-81-6	76-2-6	-	93007	石斧	B2	VbM	VAXB-01	118.5	47.6	19.1	136.3	Gr-Med.	完形・未成品
Ⅲ-81-7	76-2-7	15V ST002	94127 93010	石斧	C	VbU	VAXB-01	137.0	48.0	20.8	196.2	Dol.	完形・未成品
Ⅲ-81-8	76-2-8	-	93009	石斧	C	VbM	VAXB-01	122.6	51.6	14.4	151.2	Gr-Med.	完形・未成品
Ⅲ-81-9	76-2-9	-	93374	石斧	D	VbM	VAXB-01	111.1	50.7	22.7	168.6	Gr-Med.	完形・素材端
Ⅲ-81-10	76-2-10	-	93000	たたき石	I B1	VbM	VAXB-01	112.4	40.5	31.8	249.0	Gr-Med.	完形
Ⅲ-81-11	76-2-11	-	93004	たたき石	II B2	VbM	VAXB-01	75.0	68.0	64.3	490.0	Bs.	完形

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(1)

押印 番号	図版 番号	胴体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-82-1	77-1	640A	I B3	N-43	VI	1	胴部	外傾	微隆起線文・結束第1種 羽状縄文	砂粒少量 繊維微量	外傾接合
Ⅲ-82-2	77-2	471	I B3	S-41	Vc	1	胴部	やや外傾	微隆起線文・短縄文 -ナデ(横位)	砂粒中量	
Ⅲ-82-3	77-3	470A	I B3	S-40	VbL	2	胴部	やや外傾	微隆起線文・RL斜行縄 文-ナデ(横位)	砂粒中量	
Ⅲ-82-4	77-4	641A	I B3	J-27	VbL	2	胴部 下半	外傾	微隆起線文・懸糸文	砂粒極多量 石英結晶多量	富良野 盆地系
Ⅲ-82-5	77-5	472	II B2	U-20	VbM	1	口縁部	平縁・直立-丸状	縄刻文-縄線文 -ミガキ	砂粒・ 繊維少量	
Ⅲ-82-6	77-6	474	II B2	AC-23	VbL	1	胴部	直立	絡糸体圧痕文・縄線文 -ミガキ	砂粒・石英・ 繊維少量	表面一部 剥落
Ⅲ-82-7	77-7	642A	II B2	表採	表採	1	胴部	やや外傾	貝殻糸痕文(縦位) -ミガキ(入念)	砂粒中量 繊維微量 海綿骨針微量	
Ⅲ-82-8	77-8	644A	II B3	P-25	VbL	1	口縁部	平縁・外反- 切出し状(外削ぎ)	LR原体羽状縄文- LR原体側面圧痕(破線 状・3条)・0段多糸異原 体羽状縄文-ミガキ	砂粒微量 繊維少量	
						1					
Ⅲ-82-9	77-9	643A	II B3	S-30	VbM	1	胴部 上半	直立	0段多糸直前段合巻	砂粒中量 繊維微量	
Ⅲ-82-10	77-10	475	III A1	AA-23	VbL	1	口縁部	突起・直立-丸状	貼付帯+懸糸圧痕文・ 懸糸圧痕文-ミガキ	砂粒中量 石英少量	内面一部 剥落
Ⅲ-82-11	77-11	476	III B1	S-7	VbM	1	胴部 上半	やや外傾	貼付帯+横走沈線文 (半截竹管文内面・断続 的)・異原体羽状縄文- ヘラナデ	砂粒中量 繊維微量	
Ⅲ-82-12	77-12	477	III B2a	X-27	VbM	1	口縁部	波状・突起・ほぼ直立- 内削切り出し隅丸 角状	R斜行縄文-縦位貼付 帯+刺突文(中空)+R 原体? 押圧(縦)・LR原 体側面圧痕・R斜行 縄文	砂粒中量 繊維微量	表面一部 剥落
Ⅲ-82-13	77-13	478A	III B2a	AE-31	VbU	1	口縁部	波状・山形突起・ 外傾-一角状	LR斜行縄文-棒状貼 付文・LR斜行縄文-LR 斜行縄文(縦走気味)	砂粒中量 砂礫少量	
Ⅲ-82-14	77-14	662A	III B2a		I-46	1	口縁部	平縁・山形突起・外傾 -一角状	LR斜行縄文-棒状貼 付文・LR斜行縄文-LR 斜行縄文(横走気味)	細砂粒中量 繊維微量	
						1					
Ⅲ-82-15	77-15	647A	III B2a	F-45	Vc	1	口縁部	波状?・外傾- 隅丸角状	押引文(内) -押引文(内)	砂粒中量 繊維微量	
Ⅲ-82-16	77-16	482	III B2a	AB-18	Vc	1	口縁部 -胴部 上半	平縁・やや外反- 丸状/ほぼ直立	押引文(内)/ LR斜行縄文-ナデ	砂粒中量	
Ⅲ-82-17	77-17	480A	III B2a		U-40	1	口縁部 -胴部 上半	平縁-やや外傾- 角状/やや外傾	突引文(外)-結束第1 種斜行縄文・横位沈 線文(2条)-ヘラナデ	砂粒中量 繊維少量	内面一部 剥落
						1					
Ⅲ-82-18	77-18	655A	III B2a	L-43	VbL	1	口縁部	平縁・外反- 隅丸角状	突引文(内 半截竹管) -横走沈線文(半截竹管 内面)・0段多糸LR斜 行縄文-ミガキ	細砂粒中量 繊維微量	
Ⅲ-82-19	77-19	481A	III B2a	U-30	VbM	1	口縁部 -胴部 上半	波状・やや外傾- 隅丸角状	突引文(内)-横走沈線 文(内)-RL斜行縄文- RL斜行縄文 (横走気味)	砂粒少量 繊維微量	
Ⅲ-82-20	77-20	650A	III B2a	D-46	VbL	2	口縁部	平縁・外反- 隅丸角状	横走沈線文・0段多糸 LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量	同一個体押 印: TP:38上9 2点出土

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(2)

棟号 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺情名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-82-21	77-21	650B	ⅢB2a	D-45	VbU	1	頸部 屈曲部	屈曲(やや強い弓状)	横走沈線文/貼付帯+ 刺突文(竹管状工具) ・0段多糸LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量	
				F-45	VbU	1					
Ⅲ-82-22	77-22	650C	ⅢB2a	G-44	VbU	1	底部	外傾一直立- 隅丸角状-平底	0段多糸LR斜行縄文	砂粒中量 繊維中量	
Ⅲ-82-23	77-23	479A	ⅢB2a	AC-16	VbL	4	口縁部 上半	平縁・やや外傾- 角状/ほぼ直立	貼付帯+貫通小孔・ RL斜行縄文/RL斜行縄 文-ヘラナデ	砂粒中量 繊維少量	
				AC-17							
Ⅲ-82-24	77-24	648A	ⅢB2a	D-44	VbL	9	口縁- 胴部 上半	平縁・外反・山形小突 起(2個1対)-丸状	縄刻み(突起頂部)- 貼付帯(横位・突起下縦 位)+0段多糸LR原体 側面圧痕(横位・縦位)・ 0段多糸LR原体側面圧 痕(3条)・0段多糸LR斜 行縄文/0段多糸LR原 体側面圧痕(1条)・0段 多糸LR斜行縄文-ヘラ ナデ(粗縁)	細砂粒中量 繊維微量	
				F-48	VbU	4					
Ⅲ-82-25	77-25	485	ⅢB2a	S-7	VbU	1	胴部	やや外傾	突引文(内・横位・縦位 ~斜位)・0段多糸LR 斜行縄文-ミガキ	砂粒少量	
Ⅲ-82-26	77-26	486	ⅢB2a	V-30	VbM	1	口縁部 ~胴部 上半	ほぼ直立	貼付帯(横・縦)+ LR原体側面圧痕 -LR斜行縄文	砂粒少量 繊維少量	表面風化
Ⅲ-82-27	77-27	510A	ⅢB2a	Y-11	Vc	1	胴部	ほぼ直立	貼付帯+短縁線・0段 多糸RL斜行縄文- ヘラナデ	砂粒中量 繊維少量	
Ⅲ-82-28	77-28	649A	ⅢB2a	H-45	VbU	1	口縁- 胴部 上半	平縁・やや外反- 隅丸角状/やや弓状 に張る	刺突文(LR原体)- LR斜行縄文/LR斜行 縄文-ヘラナデ(粗縁)	細砂粒中量 繊維少量	
				I-44	KR	1					
Ⅲ-83-29	78-29	560A	ⅢB2a	I-45	VbL	1	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外傾- 隅丸角状/やや内屈	LR斜行縄文・指頭圧痕 /無文帯-ナデ-ナデ	砂粒中量 繊維中量	表面・内面 一部剥落
				U-12	VbL	1					
Ⅲ-83-30	78-30	535A	ⅢB2a	U-29	VbU	1	胴部	やや外傾	結束第1層LR斜行縄文 -ヘラナデ(横位)	砂粒中量 繊維中量	
				U-29	VbM	8					
Ⅲ-83-31	78-31	548B	ⅢB2a	W-17	VbU	8	胴部	外傾	RL斜行縄文(縦走気味) -ヘラナデ	砂粒中量 繊維微量	表面・内面 一部剥落
				W-18	VbL	1					
Ⅲ-83-32	78-32	562A	ⅢB2a	X-18	VbU	3	胴部	やや外傾	絡糸体回転文?	砂粒中量	
				X-19	VbU	2					
Ⅲ-83-33	78-33	652A	ⅢB2a	E-46	VbL	1	胴部 下半	外反	0段多糸LR斜行縄文- ナデ(平溝)	細砂粒中量 繊維微量	
				E-47	VbM	6					
Ⅲ-83-34	78-34	551A	ⅢB2a	X-10	VbU	1	胴部 下半- 底部	外傾/張り出し-丸 状-平底	0段多糸RL斜行縄文 /0段多糸RL斜行縄文 -無文	砂粒中量 繊維少量	表面やや 風化
				Y-10	VbU	2					
Ⅲ-83-35	78-35	484	ⅢB2a	W-11	Va	1	底部	直立-隅丸角状- 平底	LR斜行縄文-無文	砂粒中量	
				AB-14	VbU	2					
Ⅲ-83-36	78-36	652C	ⅢB2a	E-46	VbL	11	底部	外傾-隅丸角状- やや上げ底(内面中 央部突起)	0段多糸LR斜行縄文 -無文	細砂粒中量 繊維微量	
				F-46	VbL	1					
Ⅲ-83-37	78-37	656A	ⅢB2b	VPB-37	VbU	1	胴部 下半	膨らむ	同心円文・連続沈線文・ 懸垂文(3条1対)・絡糸 体回転文-ミガキ (30ヶ所・粗縁)	砂粒中量 繊維微量	二次被熱 片接合
				VF-36	VbL	1					
				C-45	VbU	6					
				C-46	VbU	5					
				VbM	3						
I-47	VbL	1									

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(3)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-83-38	78-38	668A	ⅢB3a		E-46	VbU	1	口縁～ 胴部 下半	平縁・やや外反- 切出し状(外削ぎ 肥厚)/直立/外傾	突引文(内 半截竹管)- 突引文(内 半截竹管)- O円形刺突文(竹管状 工具)-LR斜行縄文/LR 斜行縄文(縄縁結締結 節回転文)-成形時輪 積み痕凹凸縞着/LR斜 行縄文(縄縁結締結節 回転文)	砂粒多量 繊維微量
					F-45	VbU	1				
						VbL	2				
						VbU	1				
					F-46	VbL	3				
						VbC	1				
	VbU	1									
	VbL	1									
	G-46	VbU	1								
		VbL	1								
		VbU	2								
		VbL	1								
		VbU	1								
		VbL	1								
		VbU	1								
Ⅲ-84-39	79-39	660A	ⅢB3a	N-37	VbL	1	口縁部	平縁・外反-丸状	突引文(内 半截竹管)- O円形刺突文(竹管状 工具)-R斜行縄文	砂粒 やや多量 繊維微量	
Ⅲ-84-40	79-40	661A	ⅢB3a	F-47	VbU	1	口縁部	平縁・外反- 平埴・肥厚(外削ぎ)	ナデ-押引文(内 半截 竹管)-O円形刺突文-R 斜行縄文-ヘラナデ (平埴)	砂粒中量 繊維微量	
Ⅲ-84-41	79-41	552	ⅢB3a	AA-14	VbM	1	口縁部	平縁・直立-丸状	肥厚帯+押引文(縄縁 による)-円形刺突文R 無節(羽状構成)- ナデ	砂粒中量	
Ⅲ-84-42	79-42	553	ⅢB3a	AA-16	VbU	1	口縁部 ～胴部 上半	平縁・直立-丸状 /やや外傾	肥厚帯+押引文(ヘラ 状工具・2段)-R斜行 縄文・円形刺突文-R 斜行縄文/R斜行縄文	砂粒・ 繊維少量	表面・内面 一部剥落
Ⅲ-84-43	79-43	558A	ⅢB3a		Z-13	Va	1	口縁部	平縁・直立-丸状	押引文(内 半截竹管 状)-2段・円形刺突文 ・結締痕-ヘラナデ	砂粒中量 繊維少量
					Z-14	VbU	1				
					Z-12	VbU	1				
Ⅲ-84-44	79-44	557	ⅢB3a	AB-16	VbM	1	胴部	やや外傾	LR斜行縄文・貼付帯+ 押引文(内 半截竹管状) -ナデ	砂粒中量	
Ⅲ-84-45	79-45	239A	ⅢB3a		AB-16	VbM	1	口縁部 ～胴部	平縁・外反-外削ぎ (肥厚)/やや外傾	肥厚帯+LR斜行縄文・ O円形刺突文-ナデ /LR斜行縄文・結締痕・ ナデ-指頭圧痕・ナデ	砂粒中量 繊維微量
					AC-16	Vb	2				
					AD-16	Vc	1				
					AE-16	VbU	1				
					AF-16	KR	1				
Ⅲ-84-46	79-46	239B	ⅢB3a	AC-16	VbL	6	胴部下 半～ 底部	外傾/張り出し・角状 -平底	LR斜行縄文・ナデ- 指頭圧痕	砂粒中量 繊維微量	表面・内面 一部剥落
Ⅲ-84-47	79-47	550A	ⅢB3a		KR		1	口縁部 ～胴部 下半	平縁・やや外反- 丸状/やや外傾	ナデ-無文帯(指頭 痕)-隆帯-O円形刺突 文+指頭圧痕/LR斜行 縄文・綾絡文	砂粒中量 珪円礫少量
					AB-18	VbL	9				
						Vc	3				
						VbU	6				
					AB-19	VbM	3				
	VbL	1									
Ⅲ-84-48	79-48	547	ⅢB3a	AB-18	VbU	2	口縁部	平縁・直立-隅丸状	O円形刺突文 (竹管状工具)	砂粒多量	表面一部 剥落
Ⅲ-84-49	79-49	556	ⅢB3a	AF-15	VbU	1	胴部	やや外反/やや外傾	2段結束第1種羽状縄 文・円形刺突文	砂粒中量 繊維微量	内側一部 剥落
Ⅲ-84-50	79-50	215A	ⅢB3a		AC-19	VbM	1	胴部上 半～ 下半	やや外傾	2段結束第1種羽状縄 文・貼付帯(3段)+ 刺突文(ヘラ状工具) -ヘラナデ(横位)	砂粒中量
					AB-20	VbL	1				
					AB-19	VbU	1				
					AF-21	Vc	1				
					AH-19	VbU	1				
					AH-19	VbL	1				
Ⅲ-84-51	79-51	563	ⅢB3a	AB-19	VbL	4	胴部	やや外傾	2段結束第1種羽状 縄文	砂粒中量	
Ⅲ-84-52	79-52	558B	ⅢB3a	AE-14	VbL	3	胴部	やや外傾	R斜行縄文・結締痕	砂粒中量 繊維少量	表面・内面 一部剥落
					Vc	1					
Ⅲ-84-53	79-53	659A	ⅢB3a	F-47	VbU	1	胴部 下半	外傾	R斜行縄文	砂粒 やや多量 繊維微量	



表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(4)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面		
Ⅲ-85-54	79-54	245I	ⅢB3a	Z-13 AJ-19	VbL	1	胴部	外傾	縹糸回転文 (横走気味)-ナデ	砂粒少量 白色岩片中量	補修孔 内面 剥落
Ⅲ-85-55	80-55	245H	ⅢB3a	W-11	1	2	胴部	外傾	縹糸回転文(横走 気味)-ナデ	砂粒少量 白色岩片中量	TP-68露土 上位 内面 剥落
Ⅲ-85-56	80-56	667A	ⅢB3b	F-48	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾一 角状	ミガキ-0段多糸LR 斜行縄文-ミガキ(横)	砂粒中量 白色岩片	外傾接合
Ⅲ-85-57	80-57	667B	ⅢB3b	L-37	VbU	1	胴部	やや外傾	0段多糸RL横走 縄文(縦)	砂粒多量 白色岩片	外傾接合
Ⅲ-85-58	80-58	654A	ⅢB3b	C-46	VbM	1	胴部 下半	外傾	0段多糸LR原体側面圧 痕(横位2条1対・縦位1 条確認)-0段多糸LR斜 行縄文-ミガキ(入念)	砂粒中量 白色岩片	
						2					
Ⅲ-85-59	80-59	663A	ⅢB3b	M-43	VbU	1	口縁部	平縁・やや外反 一隅丸尖状	0段多糸異原体羽状 縄文-ミガキ	砂粒多量 石英結晶中量	
Ⅲ-85-60	80-60	658A	ⅢB3b	H-46	VbL	1	胴部 下半	外反	陸起帯+刺突文(棒状 工具)-0段多糸LR斜行 縄文-ミガキ(入念)	細砂粒少量	
Ⅲ-85-61	80-61	663B	ⅢB3b	H-49	Vc	1	胴部 下半	外傾	陸起帯(断面三角形状) +0段多糸異原体羽状 縄文-ミガキ	砂粒多量 石英結晶 中量	
Ⅲ-85-62	80-62	663C	ⅢB3b	N-43	KR	1	胴部 上半	やや外反	0段多糸RL斜行縄文- ミガキ(弱い)	砂粒多量 石英結晶中量	
Ⅲ-85-63	80-63	526	ⅢB3a	AC-23	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾一 隅丸角状(やや外側 に張り出す)	円形刺突文/ RL斜行縄文-ナデ	砂粒中量 石英中量	富良野盆 地系
Ⅲ-85-64	80-64	559A	ⅢB3a	AC-20	VbU	1	口縁部	平縁・やや外傾一 隅丸角状	突引文(外・棒状工具)- LR斜行縄文(横走気 味)-陸起帯+LR斜行 縄文・無文帯・円形 刺突文-ナデ	砂粒中量 石英中量 雲母微量	富良野盆 地系
Ⅲ-85-65	80-65	559B	ⅢB3a	AB-20	VbU	2	胴部 上半	やや外傾	LR斜行縄文・陸起帯+ LR斜行縄文・無文帯・ 円形刺突文/LR斜行 縄文(横走気味)	砂粒中量 石英中量 雲母微量	富良野盆 地系
						1					
Ⅲ-85-66	80-66	549A	ⅢB3a	AA-13	VbL	1	口縁部 -胴部 下半	平縁・やや外傾一 丸状/外傾	突引文(内・半截竹管 状)-陸起帯+突引文 (内・半截竹管)-O円形 刺突文(竹管状工具)・ 2段結束第1種羽状縄 文/2段結束第1種羽状 縄文	砂粒多量 石英多量 雲母微量	富良野盆 地系
						2					
						2					
						23					
Ⅲ-85-67	80-67	542A	ⅢB3a	Y-25	Vc	2	口縁部 -胴部 上半	平縁・ほぼ直立一 隅丸角状/直立	ナデーR斜行縄文・O円 形刺突文(竹管状工 具)-ナデーR斜行縄文	砂粒多量 石英中量	富良野盆 地系
Ⅲ-85-68	80-68	546A	ⅢB3a	AB-16	VbU	3	口縁部 -胴部	平縁・やや外傾一 丸状/直立	O円形刺突文(竹管状 工具)・RL斜行縄文/ RL斜行縄文	砂粒中量 石英多量 雲母微量	富良野盆 地系
						1					
						1					
						1					
Ⅲ-85-69	80-69	544	ⅢB3a	U-10	VbU	1	胴部 上半	ほぼ直立	円形刺突文・RL斜行 縄文・横走沈線文	砂粒中量 石英多量 雲母微量	富良野盆 地系
Ⅲ-85-70	80-70	566A	ⅢB3a	V-19	VbU	2	底部	外傾一隅丸角状一 平底	RL斜行縄文-ナデ	砂粒多量 石英多量	富良野盆 地系内面 剥落
Ⅲ-85-71	80-71	498A	ⅣA1a	V-10	VbU	11	口縁部 -底部 側面	平縁・やや外傾一 隅丸角状/ほぼ直立 /外傾	ナデー貼付帯1B+ LR斜行縄文/無文帯・ 貼付帯2・LR斜行縄文 /2段異原体羽状縄文	砂粒中量	内面やや 風化
						2					
						1					
						2					

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(5)

押図 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリッド	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-底面- 底側面-内面-内面		
Ⅲ-86-72	80-72	321C	IVA1a	AC-26	Vc	1	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外傾一 角状/直立	円形刺突文-貼付帯 1A-貼付帯2+0段多条 LR斜行縄文-ナデ/0 段多条LR斜行縄文	砂粒多量	
				AE-23	VbU	1					
Ⅲ-86-73	81-73	508	IVA1a	V-33	VbU	1	口縁部	平縁・ほぼ直立一 角状	ヘラナデ-段状貼付文 +重複縄文・0段多条 RL斜行縄文-ヘラナデ	砂粒多量	補修孔
Ⅲ-86-74	81-74	504	IVA1a	X-13	VbL	2	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外反一 隅丸角状/やや外傾	ナデ-貼付帯1A+LR 斜行縄文・縄線文/ 0段多条RL斜行縄文- 貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・縄線文	砂粒多量	平行組織
Ⅲ-86-75	81-75	514	IVA1a	AD-34	VbM	1	胴部	やや外傾	RL斜行縄文・貼付帯2 (上)+LR斜行縄文・LR 縄線文・貼付帯2(下) +RL斜行縄文・RL・LR 縄線文-ヘラナデ	砂粒中量	平行組織
Ⅲ-86-76	81-76	524A	IVA1a	AB-35	Va	2	口縁部 ~胴部	平縁・やや外反一 角状/直立	ヘラナデ-貼付帯1A+ 0段多条LR斜行縄文・ 無文帯/0段多条LR斜 行縄文・貼付帯2+0段 多条LR斜行 縄文-ヘラナデ	砂粒多量	表面剥落 多し 平行組織
				AA-30	VbM	1					
				AE-28	VbL	3					
				W-31	Vc	1					
Ⅲ-86-77	81-77	675A	IVA1a	I-29	VbL	1	口縁~ 胴部 上半	平縁・やや外反一 角状	貼付帯1A+0段多条RL 斜行縄文・無文帯-ナ デ(平滑)/貼付帯2+0 段多条LR斜行縄文	砂粒中量	
				I-31	VbU	1					
Ⅲ-86-78	81-78	675B	IVA1a	I-31	VbU	1	胴部 下半	外傾	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・0段多条異原 体羽状縄文	砂粒中量	内面剥落
Ⅲ-86-79	81-79	675C	IVA1a	I-30	VbU	1	胴部 下半	外傾	0段多条異原体羽状 縄文	砂粒中量	内面剥落
					VbL	2					
Ⅲ-86-80	81-80	432A	IVA1a	AG-17	Va	1	口縁部 ~胴部	平縁・やや外傾一 隅丸角状/外傾	ナデ-貼付帯1A+L斜 行縄文・円形刺突文/ 貼付帯2+L斜行縄文 /L斜行縄文(ナデ) -ナデ	砂粒中量 歪角礫少量	
				AA-16-17							
				AB-18-19							
				AC-19	VbU	15					
				AG-17							
				Y-18							
				AB-19	VbM	3					
				AA-AB-19	VbL	4					
AA-16	Vc	2									
AB-19											
Ⅲ-86-81	81-81	671A	IVA1a	L-28	VbU	1	口縁~ 胴部 上半	やや外反一 角状(やや内削ぎ状) -直立	貼付帯1A+0段多条LR 斜行縄文・O円形刺突 文/異原体羽状縄文・ 貼付帯2+0段多条RL・ LR斜行縄文	砂礫(円礫) 多量	
					VbL	2					
Ⅲ-86-82	81-82	671B	IVA1a	K-29	VbL	4	底部	やや外傾一 隅丸角状-平底	0段多条RL斜行縄文	砂礫(円礫) 多量	内面剥落
Ⅲ-86-83	81-83	676B	IVA1a	F-46	VbL	1	口縁~ 胴部 上半	平縁・外反一 角状(外向き)/直立	0段多条RL斜行縄文- 0段多条LR斜行縄文・ 横位比縄文+O円形 刺突文(斜め下方)/ 0段多条RL斜行縄文	砂粒多量	外傾接合
Ⅲ-86-84	81-84	676A	IVA1a	F-46	VbL	1	胴部 下半	外傾(内湾気味)	貼付帯2+0段多条RL 斜行縄文・0段多条異原 体羽状縄文-ナデ (平滑)	砂粒多量	
Ⅲ-86-85	81-85	521	IVA1a	AA-37	VbL	2	口縁部	平縁・直立一角状	貼付帯1A+異原体羽 状縄文(縦)・O円形 刺突文	砂粒中量	内面剥落

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(6)

押号 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グリップ	層位	点 数	部位	器形等	文様	胎土	備考			
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面/ 底側面-底面-内面					
Ⅲ-86-86	81-86	690A	ⅣA1a	L-28	VbU	2	口縁部	平縁-外傾- 角状(内削ぎ状)	貼付帯1A+重複縄文・ O円形刺突文-LR斜行 縄文	砂礫(円礫) 多量	内面剥落			
Ⅲ-87-87	82-87	670A	ⅣA1a	P-26	VbU	10	口縁 ~ 底部	平縁・やや外反一切 出し状(内削ぎ)/直立 ~外傾(内湾気味)/ 直立-角状-平底	貼付帯1B・O円形刺突 文・0段多条異原体羽状 縄文/貼付帯2・0段多 条異原体羽状縄文- ナデ(平滑)/0段多条異 原体羽状縄文	砂礫中量				
												O-26	VbU	1
													Vbl	28
													Vc	2
													VbU	4
													VbM	8
													Vbl	14
													VbU	5
													Vbl	5
													KR	2
	VbU	5												
	Vbl	1												
	KR	1												
Ⅲ-87-88	82-88	505	ⅣA1a	AA-31	VbM	2	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外反- 角状/やや外傾	ナデ-貼付帯1A+LR 斜行縄文/0段多条LR 斜行縄文-ヘラナデ	砂粒多量				
Ⅲ-87-89	82-89	538B	ⅣA1a	Y-34	VbL	1	口縁部	平縁・直立- 隅丸角状	ナデ-貼付帯1A+ LR斜行縄文	砂粒中量	内面剥落			
Ⅲ-87-90	82-90	538C	ⅣA1a	Y-34	VbL	2	口縁部 下半~ 胴部 上半	直立	無文帯-貼付帯2(横位・ 2段)+貼付帯(縦位) +0段多条LR斜行縄文	砂粒中量	内面剥落			
Ⅲ-87-91	82-91	503	ⅣA1a	Q-41	KR	1	口縁部 ~胴部 上半	平縁・やや外反- 尖状(外側へ張り出 す)/やや外傾	ヘラナデ-貼付帯 1A(薄い)+RL斜行縄文 /異原体羽状縄文- ナデ	砂粒中量	平行組織			
Ⅲ-87-92	82-92	518	ⅣA1a	V-9	Vc	1	口縁部	平縁・ほぼ直立- 隅丸角状(外側に張 り出す)	ナデ-LR斜行縄文	砂粒中量	内面剥落 平行組織			
Ⅲ-87-93	82-93	537C	ⅣA1a	AA-13 Z-13	VbL	2	口縁部	平縁・やや外反- 内削ぎ切り出し状	ナデ-貼付帯1A+LR 斜行縄文・指頭庄瓦- ヘラナデ	砂粒多量	表面・内面 一部剥落			
Ⅲ-87-94	82-94	537B	ⅣA1a	AA-13 Z-13	VbL	2	胴部	やや外傾	LR斜行縄文- ヘラナデ	砂粒多量				
Ⅲ-88-95	83-95	380A	ⅣA1a	AA-21	Vc	1	胴部 上半~ 下半	ほぼ直立~外傾	無文帯-貼付帯2(剥 落)・異原体羽状縄文・ 結縛痕-ヘラナデ	砂粒多量	表面・内面 一部剥落 平行組織			
				VH-13	1	10								
Ⅲ-88-96	83-96	380H	ⅣA1a	VH-13	1	2	胴部	やや外傾	貼付帯2+LR斜行縄 文・異原体羽状縄文 -ヘラナデ	砂粒多量	平行組織			
				AC-22	VbU	1								
Ⅲ-88-97	83-97	543A	ⅣA1a	AB-20	VbU	4	胴部 上半~ 下半	やや外傾	貼付帯2(剥落・風化) ・0段多条異原体羽状 縄文・結縛痕-ヘラナ デ	砂粒多量	表面一部 剥落			
				W-39										
Ⅲ-88-98	83-98	438C	ⅣA1a	Z-17	VbU	2	胴部	やや外傾	貼付帯2+LR斜行縄 文・異原体羽状縄文- ヘラナデ	砂粒多量	表面一部 剥落			
Ⅲ-88-99	83-99	527A	ⅣA1a	Y-32	VbM	2	胴部	やや外傾	貼付帯2+0段多条LR・ RL斜行縄文・0段多 条異原体羽状縄文	砂粒多量・ 歪角礫中量	器質やや 脆弱 内面一部 剥落			
				Z-32										
Ⅲ-88-100	83-100	507	ⅣA1a	Z-11	VbL	1	胴部	やや外傾	貼付帯状(僅かに肥厚) ・0段多条異原体 羽状縄文	砂粒多量 繊維微量				
Ⅲ-88-101	83-101	509	ⅣA1a	W-12	VbU	2	胴部	やや外傾	重複縄文-ヘラナデ	砂粒中量	表面一部剥 落平行組織			
Ⅲ-88-102	83-102	528	ⅣA1a	AA-18	VbU	2	胴部	やや外傾	0段多条LR斜行縄文・ 貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・0段多条RL 斜行縄文-ヘラナデ	砂粒中量	貼付帯一部 剥落下半 やや風化			
				Y-20								VbM	1	

表Ⅲ-12 V層包含層出土土器属性表(7)

押固 番号	図版 番号	個体 名称	分類	遺構名/ グッド	層位	点数	部位	器形等		文様		胎土	備考
								口縁-口唇/胴部/ 底側面-変換点- 底面	口唇-口縁-内面/ 胴部-内面- 底側面-底面-内面	胎土	備考		
Ⅲ-88-103	83-103	673A	IVA1a	O-42	Vc	1	胴部	外傾	0段多条異原体羽状縄文-ナデ(平滑)			砂粒中量	
Ⅲ-88-104	83-104	674A	IVA1a	C-46	VbL	1	胴部 下半 ~底部	外傾/直立- 隅丸角状-平底	貼付帯2+0段多条LR 斜行縄文・0段多条異原 体羽状縄文-ナデ (平滑)	砂粒中量		内面一部 剥落VF- 35より上層 で検出	
						6							
						1							
Ⅲ-88-105	83-105	683A	IVA1a	J-30	KR	2	底部	直立~外反- 隅丸角状-平底	羽状縄文(縦面転施文・ 0段多条RL斜行縄文+ LR斜行縄文)	砂粒多量	内面剥落		
Ⅲ-88-106	83-106	522	IVA1a	V-33	VbU	3	底部	直立-隅丸角状- 平底	RL斜行縄文	砂粒中量	内面一部 剥落		
Ⅲ-88-107	83-107	684A	IVA1a	G-49	VbU	2	底部	外傾-丸状-平底	R斜行縄文-IO貫通孔 (焼成前)	砂粒中量	外傾接合		
Ⅲ-88-108	83-108	169I	IVA1a	AA-16	VbU	1	口縁部	平縁・ほぼ直立- 内削ぎ切り出し状	ナデ-RL斜行縄文+ 無文帯(指頭圧痕)/RL 斜行縄文・円形刺突文	砂粒・ 歪角礫少量 石英多量 雲母微量		富良野盆 地系 平行組織	
						1							
Ⅲ-89-109	84-109	170A	IVA1a		VbU	9	口縁部 ~胴部	平縁・ほぼ直立- 角状/ほぼ直立	ナデ-貼付帯1A+ 0段多条RL斜行縄文・ 円形刺突文/RL斜行縄 文-ナデ	砂粒中量 石英多量 歪角礫少量 雲母微量		富良野盆 地系 平行組織	
						2							
						10							
						1							
						1							
						1							
Ⅲ-89-110	84-110	534A	IVA1a	AA-18	VbL	10	胴部 上半~ 下半	やや外傾	0段多条RL斜行縄文 (ナデ)・結縛痕-ナデ	砂粒中量 石英多量 雲母微量		富良野盆 地系 平行組織	
						2							
						1							
						1							
Ⅲ-89-111	84-111	312C	IVA2	AC-AD- 19	VbM	3	口縁部 ~底部	平縁・やや内湾- 丸状/やや外傾/ やや外傾- 隅丸角状-平底	無文帯(ナデ)/LR斜行 縄文(浅い)	砂粒中量 歪角礫少量		表面風化・ 一部剥落	
						1							
						9							
Ⅲ-89-112	84-112	568A	IVA2	AC-19	VbU	1	口縁部	平縁・ほぼ直立- 角状	RL斜行縄文-貼付帯 1A+RL斜行縄文・円形 刺突文(棒状工具)- ヘラナデ	砂粒中量		内面一部 剥落	
						1							
Ⅲ-89-113	84-113	568B	IVA2	AC-19	VbM	3	口縁部 下半~ 胴部 上半	やや外傾	貼付帯2(縦位・横位と もに剥離)・LR斜行縄文 -ヘラナデ	砂粒中量	表面・内面 一部剥落		
Ⅲ-89-114	84-114	519	IVA2	Z-15	VbL	1	口縁部	平縁・ほぼ直立- 隅丸角状	貼付帯1B+RL斜行 縄文/RL斜行縄文	砂粒中量	内面剥落		
Ⅲ-89-115	84-115	700A	IVA2	D-45	VbU	1	口縁部	平縁・直立-隅丸 角状	0段多条LR斜行縄文- 0段多条LR斜行縄文- 0段多条LR斜行縄文	砂粒中量	平行組織・ 外傾接合		
Ⅲ-89-116	84-116	531	IVA2	Z-32	VbM	4	胴部	やや外傾	異原体羽状縄文	砂粒中量	表面・内面 やや風化		
Ⅲ-89-117	84-117	240C	IVB2	AG-AH- 21	VbU	2	口縁部 ~胴部	平縁・やや内湾- 隅丸角状/直立	RL斜行縄文(施文後ナ デ)-RL斜行縄文・指 頭圧痕-ナデ- ヘラナデ	砂粒中量 歪角礫 ・繊維少量		平行組織	
						4							
						2							
						2							
Ⅲ-89-118	84-118	494A	IVD1	X-13	VbU	1	口縁部	波状・やや内湾- 切り出し状(肥厚)	ヘラナデ-LR斜行縄 文・横走沈線文(3条) -ヘラナデ	砂粒中量			
Ⅲ-89-119	84-119	493	IVD1	W-11	Va	18	胴部 ~底部	外傾-丸状- 上げ底	LR斜行縄文(施文後ナ デ)-粗いミガキ	砂粒中量			
						14							
土製品													
Ⅲ-89-120	84-120	686A	ⅢB2a	H-43	VbU	1	胴部 下半	外反	LR斜行縄文	砂粒中量 繊維少量		二次被熱	



表Ⅲ-13 V層包含層出土剥片石器属性表(2)

標図 番号	図版 番号	個体 名称	遺物 番号	遺物名	分類	層位	遺標/ グリッド	規模(mm)			重量 (g)	材質	備考
								長軸	短軸	厚さ			
Ⅲ-93-61	86-61	-	111980	ナイフ・スプレイヤー部	C1b	Vb	K-46	39.2	27.2	9.2	11.6	Obs.	完形
Ⅲ-94-62	87-62	-	99552	ナイフ・スプレイヤー部	C1b	VbM	AC-35	64.2	19.8	9.5	10.4	Obs.	完形
Ⅲ-94-63	87-63	-	106189	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	VbU	K-45	41.8	14.7	5.3	4.2	Obs.	完形
Ⅲ-94-64	87-64	-	97034	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	VbU	Z-28	55.9	15.0	9.1	7.7	Obs.	完形
Ⅲ-94-65	87-65	-	87929	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	Va	U-11	63.9	23.6	14.9	19.1	Obs.	完形
Ⅲ-94-66	87-66	-	111639	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	VbU	N-24	45.7	26.6	7.2	7.1	Obs.	完形
Ⅲ-94-67	87-67	-	106232	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	Vc	E-49	35.3	16.4	10.4	7.1	Obs.	完形
Ⅲ-94-68	87-68	-	106158	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	VbU	E-49	34.7	29.3	9.4	8.2	Obs.	完形
Ⅲ-94-69	87-69	-	109298	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	VbU	C-46	48.5	16.5	7.7	5.7	Obs.	完形
Ⅲ-94-70	87-70	-	105654	ナイフ・スプレイヤー部	C2a	VbU	E-41	32.5	27.0	5.8	4.9	Obs.	完形
Ⅲ-94-71	87-71	-	85683	ナイフ・スプレイヤー部	C2b	Va	AA-14	39.7	37.1	14.5	19.8	Obs.	完形
Ⅲ-94-72	87-72	-	111693	両面調整石器	-	Vc	J-44	59.2	39.9	11.5	27.0	Obs.	完形
Ⅲ-94-73	87-73	-	88263	両面調整石器	-	VbU	Y-20	118.5	53.3	18.5	111.5	Obs.	完形・岩屑面あり
Ⅲ-94-74	87-74	-	106296	ピエス・エスケーユ	-	VbU	H-41	25.1	12.3	7.6	2.0	Obs.	完形
Ⅲ-94-75	87-75	-	110389	石核	-	VbL	D-46	36.2	22.6	13.3	9.8	Obs.	完形・被熱
Ⅲ-94-76	87-76	-	80261	石核	-	VbL	P-43	38.3	30.3	22.3	20.4	Obs.	完形・岩屑面あり







## 第IV章 自然科学的分析

### 第1節 ショロマ1遺跡における放射性炭素年代測定 (AMS 測定)

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安 昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtadidze・中村賢太郎

#### 1. はじめに

北海道厚真町に位置するショロマ1遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は、炭化種実2点と炭化材1点の計3点である。試料 No.1 (PLD-31289) は集中区5 (捨て場跡) の遺物集中 (礫周辺) から出土した炭化種実 (アズキ)、試料 No.2 (PLD-31290) は集中区6 (日常領域) の焼土から出土した炭化種実 (キハダ属)、試料 No.3 (PLD-31291) は集中区5 (捨て場跡) の遺物集中 (土器周辺) から出土した炭化材 (環孔材) である。試料 No.3 の部位は不明である。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31289	試料No.1 遺構: 遺物集中、集中区5(捨て場跡)、ⅢB-01(礫周辺) 層位: Ⅲb層下位 その他: FL_No.212	種類: 炭化種実 (アズキ、1点) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31290	試料No.2 遺構: 焼土、集中区6(日常領域)、ⅢP-29(灰層) 層位: Ⅲb層下位 その他: FL_No.226~229	種類: 炭化種実 (キハダ属、1点) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31291	試料No.3 遺構: 遺物集中、集中区5(捨て場跡)、ⅢB-01(土器周辺) 層位: Ⅲb層下位 その他: FL_No.206	種類: 炭化材 (環孔材) 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、図1に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年

較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代(yrBP)の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年年代範囲は95.4%信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 遺構番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年年代範囲	$2\sigma$ 暦年年代範囲
PLD-31289 ⅢB-01	-26.04 $\pm$ 0.32	392 $\pm$ 19	390 $\pm$ 20	1450-1485 cal AD (68.2%)	1444-1514 cal AD (83.1%) 1600-1618 cal AD (12.3%)
PLD-31290 ⅢF-29	-25.82 $\pm$ 0.34	926 $\pm$ 19	925 $\pm$ 20	1045-1099 cal AD (41.6%) 1120-1154 cal AD (26.6%)	1037-1159 cal AD (95.4%)
PLD-31291 ⅢB-01	-25.14 $\pm$ 0.32	366 $\pm$ 18	365 $\pm$ 20	1467-1515 cal AD (47.8%) 1599-1617 cal AD (20.4%)	1452-1524 cal AD (60.0%) 1572-1630 cal AD (35.4%)

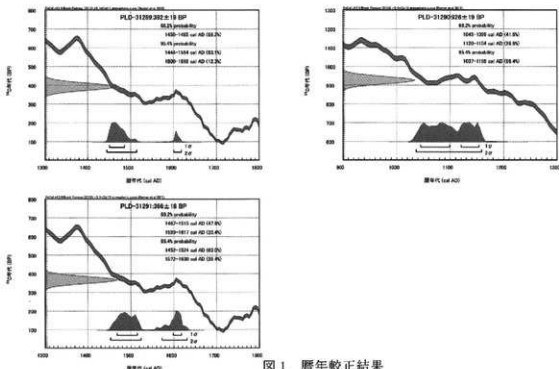


図1 暦年較正結果

## 4. 考察

以下、2 $\sigma$  暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。考古学的な文化期区分と暦年代範囲との対応関係については、臼杵・出穂編 (2005) を参照した。

集中区 5 (捨て場跡) の礫集中から出土した試料 No. 1 (PLD-31289 : アズキ炭化種実) は、2 $\sigma$  暦年代範囲が 1444-1514 cal AD (83.1%) および 1600-1618 cal AD (12.3%) であった。この年代は、15 世紀中頃～16 世紀前半および 16 世紀末～17 世紀前半で、アイヌ文化期に相当する。

集中区 6 (日常領域) の焼土から出土した試料 No. 2 (PLD-31290 : キハダ属炭化種実) は、2 $\sigma$  暦年代範囲が 1037-1159 cal AD (95.4%) であった。この年代は、11 世紀前半～12 世紀中頃で、擦文文化期に相当する。

集中区 5 (捨て場跡) の土器集中から出土した試料 No. 3 (PLD-31291 : 炭化材) は、2 $\sigma$  暦年代範囲が 1452-1524 cal AD (60.0%) および 1572-1630 cal AD (35.4%) であった。この年代は、15 世紀中頃～16 世紀前半および 16 世紀後半～17 世紀前半で、アイヌ文化期に相当する。

## 引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編 「日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

臼杵・出穂雅実編 (2005) 科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 平成 16 年度研究成果報告書. 50p, 札幌学院大学人文学部.

## 第2節 北海道勇払郡厚真町シヨロマ1遺跡の動物

高橋 理/千歳市埋蔵文化財センター

### はじめに

シヨロマ1遺跡は厚幌ダム建設にともなう平成27年度事前調査として、厚真町教育委員会によって発掘調査が行われた。調査面積は7,855 m<sup>2</sup>である。

今回の調査では擦文文化期の遺構から動物骨が回収された。

筆者に分析の機会を与えられた厚真町教育委員会各位に心より御礼申し上げます。

### 出土動物

今回分析を依頼された資料は擦文文化期の遺構に属するものである。本遺跡においては、住居跡や作業場跡からなる日常領域と、送り場跡などの儀礼空間である非日常領域が認識された。分析の対象となった動物はすべて日常領域の焼土遺構において、採取土壌に対するフローテーション法によって回収された。

出土した動物は二枚貝、サケ科魚類および哺乳類である。シカと同定できた例はなかった。

表1に回収された動物を遺構別に示している。それらは次のように分類、整理される。

#### 軟体動物門 Mollusca

二枚貝綱 Pelecypoda

翼形目 Pteriomorpha

タマキガイ科 Glycymeridae

エノタマキガイ *Glycymeris yessoensis*

#### 脊椎動物門 Vertebrata

条鰭綱 Actinopterygii

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

哺乳綱 Mammalia

### 若干のコメント

擦文文化期の焼土からフローテーション法によって若干の動物骨が回収された。

その主体は種不明の哺乳類である。これは平成25年度における同遺跡の発掘調査と同様の結果であり、その多くはシカに帰属すると推定される。また、同定されたのはサケ科魚類であるが、表に示すようにその数は決して多くない。

厚真地域の擦文文化期の遺跡ではサケ科、サケ属はごく少ない状況にある。近年の調査においてその出現頻度がやや高まった感はあるものの、自家消費以上のものとは考えられず、食料資源の基盤（さらに他地域との交易における交換物資）がシカであることに変わりはない。

以前指摘したように、本地域におけるサケ科魚類の不振は、河川における水質、水温（とその変動）、伏流水の有無と量などの点において、産卵床（イチャン）に適する環境がさほど整

っていなかったことによる可能性があるだろう。

エゾタマキガイの出土は特筆されるが、頂部穿孔について調査担当者は波によるローリングの結果と考えている。貝殻のみの遺跡への搬入であるが、その目的は不明である。

表1 平成27年度 ショロマ1遺跡動物遺体

No.	時期	遺構種別	遺構	FLT/遺物No.	層位	出土動物	部位	左右	数量	備考
1	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-26 (炭サンプル)	207-208	Ⅲc	サケ科 魚綱 non det. 哺乳綱 non det.	椎骨 鰭棘 部位不明		1 10 70	細片
2	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-26 (炭骨サンプル)	219	Ⅲc	エゾタマキガイ? 哺乳綱 non det.	殻片 部位不明		1 79	細片
3	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-27 (炭サンプル)	220	Ⅲc	哺乳綱 non det. 不明 sp.	部位不明 部位不明		4 1	
4	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-27 (炭骨サンプル)	209-210	Ⅲc	サケ科 魚綱 sp. 魚綱 non det. 哺乳綱 non det.	椎骨 椎骨 鰭棘 部位不明		3 1 3 45	
5	縄文	焼土 (日常領域)	集中区6 ⅢF-29 (燃焼面)	223-225	ⅢbL	サケ科 哺乳綱 non det.	椎骨 部位不明		1 34	
6	縄文	焼土 (日常領域)	集中区6 ⅢF-29 (灰層)	226-229	ⅢbL	サケ科 魚綱 non det. 魚綱 non det. 哺乳綱 non det.	椎骨 部位不明 鰭棘 部位不明		14 12 54	他に微細片
7	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-26 (燃焼面)	95814	1(ⅢbL)	エゾタマキガイ	右殻		1	殻頂部に欠損
8	縄文	焼土 (日常領域)	集中区4 ⅢF-26 (燃焼面)	95815	1(ⅢbL)	エゾタマキガイ	左殻		1	殻頂部に欠損

図版1



1 魚綱鰭棘



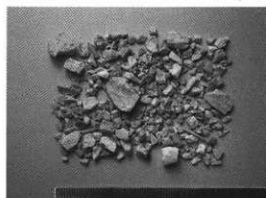
2 サケ科椎骨



3 哺乳綱



4 魚綱鰭棘



5 哺乳綱

### 第3節 厚真町シヨロマ1遺跡から検出された種子

北海道大学大学院文学研究科 高瀬克範

#### 1. 遺跡の位置と性格

遺跡の名称: シヨロマ1遺跡

所在地: 北海道勇払郡厚真町字幌内 93-1・2・3

発掘調査期間: 2015年5月14日～2015年10月31日

発掘調査面積: 7855 m<sup>2</sup> (平成27年度)

調査担当者: 奈良智法, 乾 哲也, 宮塚義人 (委託)

遺跡の立地: 厚真川とシヨロマ川の合流地点から約200m上流の両河川にはさまれた  
河岸段丘面

遺構の年代: 縄文時代 (V, VI層), 続縄文文化期 (III層), 擦文文化期 (III層)

#### 2. 検討対象

本稿で検討対象とする種子は、シヨロマ1遺跡で採取された土壌の水洗浮遊選別によって回収されたものである。ただし、縄文時代の包含層 (AE-15区) からえられた種子1点は、肉眼によって確認され、取り上げられたものである。土壌採取の対象は以下の通りである。

縄文時代 石組炉 (VSF-04), 焼土 (VF-31)

続縄文文化期 炭化物集中 (III CB-03), 土器集中 (III PB-04)

擦文文化期 焼土 (III F-26, 27, 29 灰層・燃焼面), 礫集中 (III SB-09),  
遺物集中 (III B-01)

筆者は、2016年1月7日に厚真町教育委員会より1次選別を経た試料を受領し、2016年2月15日に本報告とともにすべての試料を同教育委員会に返却した。この間、すべての試料を実体顕微鏡によって観察・同定するとともに、代表的な試料の写真撮影を行った。同定結果を第1表に、主要な種子の写真を図版1に示した。なお、継続性を考慮し、本報告の記載のスタイルは厚真町教育委員会が実施した発掘調査の種子同定をこれまで担当してきた吉崎周一氏と榎坂恭代氏 (吉崎・榎坂 2004, 榎坂 2007, 2009a, b, 2010a, b, 2011, 2013a, b, c, 2014a, b, c, d, e, 2015) による報告に可能なかぎり準拠した。

#### 3. 検出された植物種子

コナラ属 *Quercus* L. (図版1-25)

縄文時代の包含層 (AE-15区) から、ハンドピックにより縦に半分に分かれた子葉1点が出土した。子葉は楕円形を呈する。炭化した場合でも子葉表面には縦条がみえることが多いが、図版1-25の表面には通常みられないほどの深い縦皺がみられ、通常とはことなるプロセスで炭化した試料と考えられる。図版1-25の計測値は L14.70, B12.00, T(6.20)mm で、極端に細長くはないためコナラ *Quercus serrate* Thunb., カシワ *Quercus dentate* Thunb. のいずれかの可能性が高いが、子葉からではどちらの種か同定することはできない。

#### クルミ属 *Juglas* L. (図版 1-17)

縄文時代の石組炉 (VVF-04) から内果皮の破片 1 点が出土した。小片ではあるが、表面にクルミ属特有の不規則な凹凸が認められる。図版 1-17 の計測値は、L(3.50), B(3.30), T0.60mm である。クルミ属の内果皮としては厚さが薄い、本来のきわめて薄い部分の破片である可能性のほか、内面がざらついていることから剥落によって薄くなった可能性も残される。

#### タデ科 Polygonaceae (図版 1-13)

縄文時代の焼土 (VF-31) から完形の種子が 1 点出土した。瘦果の平面形には三角状紡錘形と扁平レンズ形のものなど多様な形態の種子が含まれるが、本遺跡からは 3 本の稜線が明確に確認される前者が出土した。図版 1-13 の計測値は、L2.80, B1.80, T1.60mm である。

#### モクレン科 Magnoliaceae (図版 1-14)

続縄文文化期の炭化物集中 (ⅢCB-03) から、9 点が出土した。すべて種皮片である。種子は腎臓状横槽円形を呈しておりやや扁平で、背面は円みがあり種皮表面は比較的平滑で光沢が弱い。今回の出土試料はすべて小破片のため詳細な分類はできないが、モクレン属のコブシ *Magnolia kobus* DC. もしくはホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. のどちらかである可能性が高い。図版 1-14 の計測値は、L(3.30), B(2.60), T0.30mm である。

#### マメ科 Fabaceae (図版 1-15, 26)

擦文文化期の礫集中 (ⅢSB-09), 遺物集中 (ⅢB-01) から各 1 点, 計 2 点が出土した。図版 1-15 の計測値は、L(3.40), B(2.40), T(2.65)mm である。破損しているが、小規模かつ円形にちかいヘソが確認される。種子のサイズは小さく扁平で、ハギ属 *Lespedeza* Michx. の可能性がある。図版 1-26 は半分が割れた状態で出土しており、破損によりヘソも確認できないが、サイズ・形態からマメ科と同定される。初生葉は残存していないが、アズキ *Vigna angularis* Ohwi et Ohayashi の可能性がある。図版 1-26 の計測値は、L(6.40), B(5.40), T(3.10)mm である。

#### キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版 1-11, 12)

縄文時代の焼土 (VF-31) および擦文文化期の焼土 (ⅢF-29) からそれぞれ 1 点の果実片が、続縄文文化期の炭化物集中 (ⅢCB-03) から種子片 2 点が出土した。果実は球形で内部に 5 つの小核があり、それぞれに 1 個の種子がある。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。図版 1-12 は種子片で、表面に特徴的な浅い凹みが確認され、キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と同定される。図版 1-11 は果実が水平方向に割れた破片で、内部には種子が抜け落ちた箇所と表面組織がのこる種子の一部の双方が確認できる。図版 1-11 の計測値は L4.40, B5.40, T(3.80)mm, 図版 1-12 の計測値は L(1.80), B(1.20), T0.20mm である。

#### ブドウ属 *Vitis* L. (図版 1-1~9)

続縄文文化期の炭化物集中 (ⅢCB-03) と擦文文化期の焼土 (ⅢF-26, ⅢF-29) から出土し

た。計20点が確認されたが、完形の種子はⅢF-29出土の1点のみで、他はすべて堅果の破片である。種子の平面形は広倒卵形で、背面は丸みを帯び、倒へら状の凹みがある。腹面の中央に稜があり、その両脇に針形の凹みがある。種子の形態学的特徴および北海道における分布から、ヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat もしくはエビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* と推定される。残存状況が比較的良好な種子の計測値は、図版1-1がL3.20, B3.00, T2.00mm, 図版1-5がL3.80, B(2.80), T(0.20)mm, 図版1-7がL4.80, B(2.60), T(0.20)mmである。

#### ミズキ属 *Cornus* L. (図版1-10)

捺文文化期の遺物集中(ⅢB-01)から核が1点出土した。偏球形で浅い縦溝があり、先に穴を有する特徴から、ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. と同定される。図版1-10の計測値は、L4.30, B3.40, T4.20mmである。

#### ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版1-16)

捺文文化期の焼土(ⅢF-29)から胚乳が1点出土した。平面形は広卵形で、全体の2/3ほどの長さのある楕円形の胚が認められる。図版1-16の計測値は、L1.55, B1.25, T0.90mmである。サイズは比較的大きく、平面形も横への膨らみが大きく球形に近づいている。比較的厚みがある点からみても、栽培型のヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno と考えられる。

#### 冬芽 Winter bud (図版1-27)

縄文時代の焼土(VF-31)から、1点が出土した。炭化によるダメージにより特徴的な構造をとらえることが難しく、現生標本との対比が困難であるためより詳細な同定はできなかった。図版1-27の計測値は、L6.70, B4.70, T2.75mmである。

#### 不明1 Unknown seeds 1 (図版1-18, 19)

標本との対比ができない試料を不明1とした。菌核と類似するものもあるが、必要に応じた解剖を通じて菌核ではないことを確認した。図版1-18の計測値は、L1.20, B1.10, T0.80mmである。図版1-19の計測値は、L(2.20), B(1.70), T(1.70)mmである。

#### 不明2 Unknown seeds 2 (図版1-20~22)

種子が受けたダメージが大きいため、同定できなかった試料を不明2とした。菌核と類似するものもあるが、必要に応じた解剖により菌核ではないことを確認した。図版1-20の計測値はL2.50, B2.20, T2.30mm, 図版1-21の計測値はL1.60, B1.50, T(1.30)mm, 図版1-22の計測値はL1.10, B1.10, T0.80mmである。

#### 菌核 Sclerotium (図版1-23, 24)

続縄文文化期の炭化物集中(ⅢCB-03)・土器集中(ⅢPB-04)から3点、捺文文化期の遺物集中(ⅢB-01)から1点が出土した。図版1-23の計測値はL(2.70), B(2.30), T(2.40)mm, 図版1-24の計測値はL(2.70), B(1.70), T(1.70)mmである。



## 不明炭化物 Unknown charred material

炭化材などの可能性ののこり、種子であることが確定できない炭化物を不明炭化物とした。

## 4. 若干のコメント

シヨロマ1遺跡(2015年整理分)から、コナラ属、クルミ属、タデ科、モクレン科、マメ科、キハダ属、ブドウ科、ミズキ属、ヒエ属の種子が確認された。出土量は少なく、破片となっている種子も多いが、同定結果は、縄文時代・統縄文文化期には堅果類をはじめとする野生植物が中心的に利用され、擦文文化期になると野生植物に加えて栽培植物が加わる植物利用をあらためて裏付ける内容となっている。確認された植物は、厚真町内のこれまでの発掘調査(吉崎・椿坂2004, 椿坂2007, 2009a, b, 2010a, b, 2011, 2013a, b, c, 2014a, b, c, d, e, 2015)で検出されてきた種の範囲内にある。ヒエ属は、サイズ・形態から栽培型と判断され、今回検出された植物のなかでは唯一の確実な栽培植物であるが、これまで厚真町内で検出されてきているヒエ属もすべて栽培型である。本稿において確認されたヒエ属は擦文文化期の遺構からの出土であり、時期的にも矛盾はない。

キハダはこれまで厚真町内の多くの遺跡で確認されているが、擦文文化期や中世アイヌ文化期以降の比較的新しい時期からの出土が多かった。縄文時代にさかのぼる可能性があるキハダはオニキシベ6遺跡から出土しているが(椿坂2014c)、今回の検討により縄文時代・統縄文・擦文文化期の多様な文化期を通じて出土することがあらためて示唆された。キハダは樹皮・木がさまざまな方法で利用されるが、果実もしぼって砂糖とともに煮詰めて練菓として利用されるという(柴田編1949:153)。アイヌ文化においても果実が食用・薬用に用いられるだけでなく、「最も尊い神へ捧げる木幣」をつくるための高貴な樹木でもある(知里1976:103-104)。遺跡から出土した種子によって、キハダは長期間にわたって利用されてきたことがわかってきているため、今後、その利用法が解明されていくことが期待される。

本稿の作成にあたって、厚真町教育委員会の乾哲也氏、奈良智法氏からは遺跡・出土資料について種々のご教示をいただいた。また、同定に際して、Project Seeds 考古植物研究会の椿坂恭代氏から多くの有益なご助言をいただいた。末筆ではあるが、お世話になった方々に篤くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 柴田桂太編1949『資源植物事典』北陸館。  
 知里真志保1976『知里真志保著作集 別巻I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』平凡社。  
 椿坂恭代2007「上幌内モイ遺跡から検出された植物遺体の中間報告」乾哲也・小野哲也・奈良智法編『上幌内モイ遺跡(2)』, pp. 301-317, 厚真町教育委員会。  
 椿坂恭代2009a「厚真町ニタツナイ遺跡から検出された植物種子」奈良智法・乾哲也・熊谷誠編『ニタツナイ遺跡(1)』, pp. 265-276, 厚真町教育委員会。  
 椿坂恭代2009b「上幌内モイ遺跡出土の植物種子について」小野哲也・天方博章・乾哲也編『上幌内モイ遺跡(3) 第2分冊』, pp. 29-42, 厚真町教育委員会。

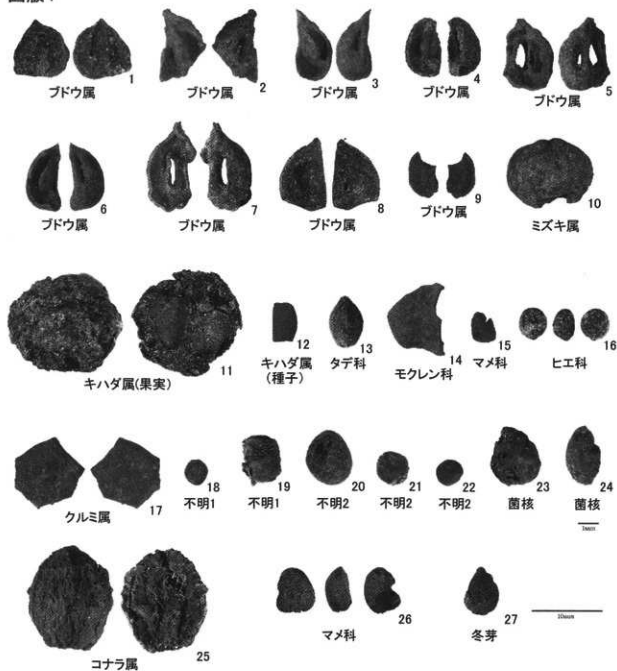
- 椿坂恭代 2010a「北海道勇払郡厚真町厚幌導水路事業調査遺跡出土の炭化種子」乾哲也・奈良智法・山田和史編『厚幌1遺跡(2) 幌内7遺跡(1)』, pp. 261-268, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2010b「北海道勇払郡厚真町厚幌導水路建設事業」奈良智法・乾哲也・山田和史編『幌内5遺跡(1) 富里2遺跡 ニタツプナイ遺跡(2)』, pp. 288-301, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2011「オニキシベ2遺跡から検出された植物種子」天方博章・小野哲也・乾哲也編『オニキシベ2遺跡』, pp. 327-335, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2013a「オニキシベ5遺跡から検出された植物種子」奈良智法・天方博章・乾哲也編『オニキシベ5遺跡』, pp. 159-160, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2013b「ヲチャラセナイ遺跡・ヲチャラセナイチャシ跡から検出された植物種子」天方博章・乾哲也編『ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡 第2分冊』, pp. 18-33, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2013c「厚真町ライカルマイ遺跡から検出された植物種子」荻野幸男・奈良智法・乾哲也編『ライカルマイ遺跡』, pp. 143-146, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2014a「厚真町ヲチャラセナイ遺跡から検出された植物種子」天方博章・宮崎美奈子・宮塚翔・中沢裕一・宮塚義人・乾哲也・奈良智法編『ヲチャラセナイ遺跡』, pp. 241-244, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2014b「オニキシベ4遺跡出土の植物種子」荻野幸男・松井昭・乾哲也・奈良智法編『オニキシベ4遺跡』, pp. 220-227, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2014c「オニキシベ6遺跡出土の植物種子について」岩橋由久・奈良智法・服部一雄・乾哲也編『オニキシベ6遺跡』, pp. 96-99, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2014d「シヨロマ3遺跡から検出された植物種子」乾哲也・長谷川徹・工藤肇編『シヨロマ3遺跡』, pp. 99-102, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2015a「厚真町シヨロマ1遺跡から検出された植物種子」奈良智法・乾哲也・宮塚義人・岩橋由久・宮崎美奈子・松井昭・服部一雄編『シヨロマ1遺跡』, pp. 372-378, 厚真町教育委員会。
- 椿坂恭代 2015「シヨロマ2遺跡から検出された植物種子」乾哲也・長谷川徹・工藤肇・大谷正芳編『シヨロマ2遺跡』, pp. 200-203, 厚真町教育委員会。
- 吉崎島一・椿坂恭代 2004「北海道勇払郡厚真町厚幌1遺跡から出土した炭化植物種子」乾哲也・小野哲也編『厚幌1遺跡』, pp. 241-256, 厚真町教育委員会。

第1表 出土種子等一覽

試料No. (発見No.)	時期	遺構種別	遺構名	層位	コナラ属 クルミ属 タデ科 カッサ科 マメ科 キハダ属 ブドウ属 ミズキ属 ヒユ属 冬芽 不明1 不明2 菌核 不明炭化物																			
					片 g	片 g	粒	片	片	片	種	子	果	実	粒	粒	粒	粒	粒	粒				
1	縄文	石臼	石臼	VI	1 (0.01)																			
2	縄文	焼土	V F-31	VbL		1			1			1	1		1	1		1		1	1	1	1	
11	縄文	包含層	AB-15区	VbM	1 (0.160)																			
3	続縄文	炭化物集中	IIIcB-03	IIIc		9		2	17			18	2											
4	続縄文	土器集中	III PB-04	IIIc								1	1											
5	焼文	焼土	III F-26	IIIc					1															
6	焼文	焼土	III F-27	IIIc									1											
7	焼文	礫集中	III SB-09	III bM				1																
8	焼文	遺物集中	III B-01	III bL				1				1												
9	焼文	焼土	III F-29 (灰層)	III bL				1	1	1														
10	焼文	焼土	III F-29 (築灰面)	III bL							1													

※焼灰行は炭化種子

図版1



[時期および遺構]

No.1・8・11・20: 擦文焼土(ⅢF-29)、No.2~8・12・14: 続縄文炭化物集中(ⅢCB-03)、No.9: 擦文焼土(ⅢF-26)、  
 No.13・18・22・27: 縄文焼土(VF-31)、No.15: 擦文礫集中(ⅢSB-09)、No.16・21: 擦文焼土(ⅢF-29)、  
 No.17: 縄文石組炉(VSF-04)、No.10・23・26: 擦文礫集中(ⅢSB-10)、No.19・24: 続縄文土器集中(ⅢPB-04)、  
 No.25: 縄文包含層(AE-15区)

## 第4節 ショロマ1遺跡石材同定

アースサイエンス株式会社 加藤孝幸 米嶋真由子

## 1. 石材同定結果

石材を肉眼、ルーペ、簡易実体鏡、マグネットを併用して観察した。堆積岩（礫岩～泥岩、火山砕屑岩など）については、以下の堆積岩の分類基準に基づいて、粒度表などを利用して細分した。

同定結果を表1に示す。また、ショロマ1遺跡より発掘された石材について、岩種とそれぞれの個数を表2に示す。

## ◆ 堆積岩の粒度階区分と命名 (Wentworth, 1922; Schmid, 1981)

通常の堆積岩と火山に由来する物質が多いときは、粒度階が異なることに注意が必要。

通常の堆積岩の分類

粒径 (mm)	非火山性砕屑物 (未固結)	(通常) 堆積岩
256	巨 礫	礫 岩
	大 礫	
	中 礫	
	細 礫	
2	極粗粒砂	砂 岩
	粗粒砂	
	中粒砂	
	細粒砂	
	極細粒砂	
(1/16) = 0.063	シルト	泥 岩
(1/256) = 0.004	粘 土	

(Wentworth, 1922による)

火山に由来する物質が多いときの分類

粒 径	火山砕屑物 (未固結)	火山性堆積岩 (=火砕岩)
64mm	火山岩塊 火山礫	火山角礫岩 凝灰角礫岩 集塊岩
	火山礫 (ラビリ)	火山礫凝灰岩
2 mm	粗粒火山灰	粗粒凝灰岩
$\frac{1}{16}$ mm (0.0625mm)	細粒火山灰	細粒凝灰岩

(Schmid, 1981による)

注：奥牧 (1979) は火山礫を径2~4mmとしている。

表1 石材同定結果(1)

委託 No.	遺物 番号	遺積/ 分層 グランド	遺物名	層位	分類	原質 (cm <sup>3</sup> )			同定結果	備考	
						長軸	短軸	厚さ			
1	Sh1	85309	S	AB-14	IIIc	-	-	15.0	緑灰色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。層位構造に沿って割断して調査し、	緑砂	
2	Sh1	85487	S	X-12	IIIbL	-	-	89.6	黒色で硬質過ぎ、灰白色の硬質物。灰白色を呈し、細粒状で、アレーナ小石、細砂を含む。石灰や長石の粒子が散在。	-	
3	Sh1	85222	S	Y-11	IIIbL	-	-	55.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
4	Sh1	91104	S	X-19	VbUJ	-	-	40.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
5	Sh1	99790	S	W-28	VbUJ	-	-	2630.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
6	Sh1	100272	S	T-19	VbL	-	-	(10940.0)	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
7	Sh1	86007	S	W-27	VbL	-	-	640.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
8	Sh1	87018	S	T-7	IIIc	-	-	25.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
9	Sh1	93210	S	Y-25	Vc	-	-	0184.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
10	Sh1	90054	S	Y-25	VbUJ	-	-	177.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
11	Sh1	90796	S	X-27	VbUJ	-	-	302.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
12	Sh1	90726	S	W-27	VbUJ	-	-	173.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
13	Sh1	89886	S	X-25	VbUJ	-	-	38.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
14	Sh1	92655	S	Y-25	VbL	-	-	100.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
15	Sh1	90885	S	S-21	VbL	-	-	92.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
16	Sh1	86872	S	W-27	VbL	-	-	90.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
17	Sh1	87861	S	AC-14	Va	-	-	28.1	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
18	Sh1	93078	S	V-18	VbL	-	-	22.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
19	Sh1	85984	S	AE-14	VbL	-	-	10.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
20	Sh1	87311	S	AC-14	Va	-	-	(2.0)	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
21	Sh1	91052	S	V38-12	VbUJ	-	-	(118.0)	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
22	Sh1	91695	S	AC-14	VbL	-	-	94.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
23	Sh1	88889	S	AB-15	VbUJ	-	-	51.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
24	Sh1	V-38-3-54	S	V-38	VbM	-	-	139.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
25	Sh1	100296	S	T-30	VbL	-	-	100.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	-	
26	Sh1	100616	SP	AB-31	Vc	21.7	17.0	9.6	2.0	暗褐色の硬質粘土質の硬質物(硬質物)の同定結果。石灰や長石の粒子が散在。	丸鏡 厚さ=100-100

表1 石材同定結果(2)

委託 通称 No.	遺物 分類 番号	種 別 区分	層位 グリッド	遺物名	風乾(mm)				分類	岩石名	記載	備考	
					長軸	短軸	厚さ	重量					
27	Sho1	SP	AE-15	VBJ	巻物	-	35.6	17.0	4.5	7.2	タラク(褐色)	暗緑灰色～褐色の斑状。透明感がある。一部は緑灰色が散在する可能性。自然性の強い。黒色のケムル岩脈が穿入し、タンカラン岩脈帯と交代する。	見所 図面-100-101
28	Sho1	SP	AC-13	VBL	巻物	-	24.8	17.0	8.7	5.3	タラク(褐色)	暗緑灰色。一部、褐色。透明感がある。表面はフェンス、自然性の強い。黒色のケムル岩脈が穿入し、タンカラン岩脈帯と交代する。	見所 図面-100-99
29	Sho1	SP	AC-19	VBJ	巻物	-	27.8	14.9	11.7	8.5	タラク(褐色)	緑色～灰色の斑状。透明感がある。表面はフェンス。	見所 図面-100-98
30	Sho1	SP	AF-28	VBL	巻物	-	(40.2)	21.6	10.6	(17.0)	タラク(褐色)	緑褐色。透明感がある。自然性の強い。黒色のケムル岩脈が散在し、タンカラン岩脈帯と交代する。	欠損
31	Sho1	SP	Y-12	VBJ	巻物	-	(26.9)	(27.9)	(15.6)	(26.0)	タラク(褐色)	暗褐色～暗緑褐色。一部に透明感がある。黒色。黒部のケムル岩脈が穿入し、タンカラン岩脈帯と交代する。	欠損
32	Sho1	SP	AC-14	VBJ	巻物	-	17.2	14.1	8.7	1.9	タラク(褐色)	暗褐色～暗緑褐色。一部に透明感がある。黒色。黒部のケムル岩脈が穿入し、タンカラン岩脈帯と交代する。	欠損 図面-100-102
33	Sho1	SP	5-6	IIIJ	巻物部分のみ巻物	-	71.6	36.1	25.4	66.0	緑褐色斑状	暗褐色～暗緑褐色。透明感がある。緑色の面状岩脈が認められる。淡緑褐色部は、解理面についてみれば巻物と見られる。	見所 図面-20-8
34	Sho1	SP	Y-20	VBL	Y25	D	132.7	96.3	64.9	1196.0	玉成岩(褐色針状)	緑灰色。淡黄褐色の赤石炭系が穿入。右表面は解理。黄緑色の緑石が若干多く生成。	見所 図面-100-72
35	Sho1	SP	Y-25	VBJ	たたき石	IV	(41.0)	(70.0)	35.2	(165.0)	玉成岩	灰色。巻物に巻物を含む。黒石によく付く。白色の方解石が散在する。	欠損
36	Sho1	SP	AB-23	VBJ	たたき石	IV	(56.3)	(86.9)	(45.9)	(295.0)	玉成岩(褐色針状)	暗灰色。または表面には褐色針状。黒色の緑部が多量生成。	欠損
37	Sho1	SP	Y-20	VBM	たたき石	III	78.9	66.0	64.3	4900.0	玉成岩(褐色針状)	暗褐色～暗緑褐色。緑石に交代した巻物を含む。一部に巻物のポイントが認められる。	欠損
38	Sho1	ST	AA-15	VBJ	たたき石	IV	(37.2)	58.3	38.4	(166.0)	はらわい岩(褐色針状)	暗緑褐色～黄白色の斑状。黄白色が散在した巻物。	欠損
39	Sho1	SP	0010-04127	ST	Y-0-21	VBJ	31.9	137.0	69.0	20.6	ドラッケン(褐色針状)	暗緑褐色。酸化面は黄褐色。ごく細かい片層状で認められる。長さ5mm。黒色の黒部を含む。神野古層帯に由来する可能性がある。	見所 図面 SV15702
40	Sho1	ST	Y-21	VBJ	31.9	A2a	147.0	36.5	15.6	156.0	龍岡石片岩	暗緑褐色および緑灰色の巻物。片層状で発達。神野古層帯に由来すると考えられる。	見所
41	Sho1	SP	Y-20	VBM	31.9	B	120.0	49.0	13.5	117.9	アオトナ	暗緑褐色。表面は赤褐色の巻物の砂～泥岩に考えられる。黒部の黒部が認められる。黒部は中～粗粒の巻物の砂～泥岩と交代する。	見所
42	Sho1	SP	Y-20	VBM	-	-	-	-	-	168.6	アオトナ	暗緑褐色。表面は赤褐色の巻物の砂～泥岩に考えられる。黒部の黒部が認められる。黒部は中～粗粒の巻物の砂～泥岩と交代する。	-
43	Sho1	ST	Y-33	VBL	加工面のみの巻物	-	71.3	63.2	33.8	170.0	シムト岩	暗緑褐色。黒化斑は黄褐色(最大幅15mm)。黒部はシムト岩で、黒部は緑褐色～暗緑褐色の巻物の砂を含む。また、黒色の炭質物を含む。黒部は炭質物を含む。	見所
44	Sho1	SP	Y-25	VBL	-	-	-	-	-	66.0	シムト岩	暗緑褐色。表面は赤褐色の巻物の砂～泥岩に考えられる。黒部の黒部が認められる。黒部は中～粗粒の巻物の砂～泥岩と交代する。	-
45	Sho1	SP	X-23	VBJ	-	-	-	-	-	217.9	聖徳岩	灰～暗灰色の巻物の巻物と赤褐色の砂～泥岩。わずかに黒部が認められる。黒部は中～粗粒の巻物の砂～泥岩と交代する可能性がある。	-
46	Sho1	SP	Y-26	VBJ	-	-	-	-	-	275.0	緑褐色砂岩	灰色。一部は黒化面によって黄褐色が認められる。赤褐色。炭質物で、ペラチオサイトの粒子を含む。また、黒色の炭質物を含む。黒部は炭質物を含む。	-
47	Sho1	SP	AC-16	VBJ	-	-	-	-	-	94.0	緑褐色砂岩	暗褐色。巻物に巻物を含む。黒部は炭質物を含む。	-
48	Sho1	SP	Y-26	VBJ	-	-	-	-	-	(79.0)	シムト岩	暗緑褐色。巻物に巻物を含む。黒部は炭質物を含む。	-
49	Sho1	SP	X-25	Vc	-	-	-	-	-	83.0	緑褐色斑状砂岩	黄褐色～暗灰色。大部分は黄褐色の巻物。黒石。中粒。黒部はシムト岩の巻物(約1～2mm程度)を含む。また、黒石は全体に散在する。	-
50	Sho1	SP	W-33	VBJ	-	-	-	-	-	23.0	緑褐色砂岩	暗褐色。表面は赤褐色の巻物の砂～泥岩に考えられる。黒部の黒部が認められる。黒部は中～粗粒の巻物の砂～泥岩と交代する。	-

表1 石材同定結果(3)

委託 No.	委託 番号	種 別	遺構/ ブツID	層位	遺物名	分類	規模(mm)			記 載	備考
							長さ	厚さ	重量		
51	Shel	86578	S	W-27	VIM	-	-	48.9	-	無彩色。塊状無磨理。白色の長石片が散在。まれに黒色の磨理物を含む。	-
52	Shel	94174	S	Y-26	Ve	-	-	102.8	-	緑灰色の長石や石英の中に、灰白色・不透明の斜長石片が多数散在。その色の散子は大型。チャート状。	緑鉄
53	Shel	87891-89479	S	AC-20	VJU	-	-	282.0	-	黄褐色。塊状無磨理。まれに厚1mm以下の黒色の磨理物を含む。	緑鉄 18V2045
54	Shel	92681	SP	Y-21	VJU	石製品	-	29.6	70.6	黄褐色。厚1mm程度の磨理面が多数。厚さ3mm程度の柱状の孔眼が散在。これらの孔の多い部分やその周辺の組織が顕微鏡下で観察される。	砂岩
55	Shel	90003	S	X-25	VJU	-	-	77.0	-	緑灰色の磨理面が散在。まれに厚1mm以下の黒色の磨理物を含む。多層状無磨理で、白色の長石片が散在。	-
56	Shel	87663	S	X-31	VJU	-	-	28.0	-	黄褐色。塊状無磨理。白色。厚角1-2mmの長石片が散在。また、黒色の泥状の粉片が散在。	-
57	Shel	50156-64865	S	AA-20	VIM-Ve	-	-	58.0	-	黄褐色。一部に黒褐色。塊状無磨理。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	緑鉄 18V2105
58	Shel	89627	S	AC-17	VJU	-	-	149.7	-	黄褐色。塊状で厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
59	Shel	96259	S	Y-23	VJU	-	-	259.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
60	Shel	87390	ST	Y-16	VJU	たたまぎ	IV	121.1	65.8	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	緑鉄
61	Shel	89088	SPC	X-19	VIL	-	-	66.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	穴
62	Shel	87524	ST	V-10	VJU	磁石	-	108.0	-	黄褐色。塊状無磨理。黒色の磨理物を含む。	磁片
63	Shel	96094	ST	Z-33	VJU	磁石片	-	124.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	磁片
64	Shel	87001	ST	AD-28	VIM	磁石	-	14.0	65.5	黄褐色。塊状無磨理。黒色の磨理物を含む。	磁片 図録-104-77
65	Shel	94486	S	Y-26	Ve	-	-	51.0	-	黄褐色。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。塊状無磨理。白色の長石片が散在し、厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
66	Shel	86437-98707-98713	S	AA-30	Ve-VIL	VIM	-	203.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	18V5110
67	Shel	96062	S	Y-26	VJU	-	-	123.1	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
68	Shel	87329	S	AD-28	VIM	-	-	26.4	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
69	Shel	97340	S	AD-27	VIM	石製品	-	125.4	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
70	Shel	96998	SP	AB-36	VIM	-	-	17.1	18.0	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	磁片
71	Shel	91191	S	X-19	VJU	-	-	359.8	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	緑鉄
72	Shel	96568	ST	AC-23	VIL	たたまぎ	IV	84.3	77.3	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	穴
73	Shel	93876	S	Y-23	VIL	-	-	213.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
74	Shel	97190	S	X-25	VIL	-	-	83.0	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-
75	Shel	91893-1	S	AB-26	VJU	-	-	61.2	-	黄褐色。厚約2mm程度。厚の不均一で磨理面の一部に非常に高率な酸化物が散在し、赤褐色。	-



表1 石材同定結果(4)

委託 No.	遊跡 名	遺物 番号	分類	遺構/ グランド	層位	遺物名	分類	規模(m <sup>2</sup> )		遺址	同定結果		備考
								長軸	短軸		岩石名	記載	
76	Shel	94855	SP	V-29	V3L	-	-	-	-	261.0	粗粒砂岩	暗灰色で塊状無層理。粒子は黒色泥岩の塊、チャート、火山岩(赤火山岩)塊。	-
77	Shel	89946	SP	Y-36	V4U	-	-	-	-	(100.0)	粗粒砂岩	緑褐色じり、黄褐色を呈し、層理あり。黒色泥岩などの細粒の塊を多量とする層理あり。	埋蔵
78	Shel	97766	SP	V-29	V4U	-	-	-	-	48.0	粗粒砂岩	緑褐色じり、暗灰色でチャートの層理では無層理。粒子は黒色泥岩の塊、チャート、花崗岩類などを含む。	-
79	Shel	94164	SP	Y-28	Vc	-	-	-	-	46.0	粗粒砂岩	灰白色で、粒径が200μm以下の内層に同時期と考えられるものを、層状は灰白色のモルタル物質により埋蔵。	-
80	Shel	94694	S	X-25	Vc	-	-	-	-	(514.0)	粗粒砂岩	暗灰色で塊状無層理。粒子は黒色の泥岩が目立ち、火山岩片を含む。	-
81	Shel	86016	SPC	AA-12	V4U	-	-	-	-	-	紫色片岩	灰色で、片理が明確。網層理の発達が目立つ。	-
82	Shel	89226	SPC	V3P-04	Vc	-	-	-	-	-	酸性凝結岩	暗灰色を呈する粗粒作用の塊に凝結岩、付加体凝結岩認められ、	-
83	Shel	91662	ST	AB-23	V4U	石片未成品	B	135.0	42.0	28.8	緑色片岩	緑灰色。網層理と付加体片理が顕著。	発芽
84	Shel	92306	ST	AC-17	V4L	石片	A1	95.0	29.0	11.5	粗粒砂岩	暗灰色色で細粒。文字が多少。	火災
85	Shel	96534	S	T-30	V4U	-	-	-	-	-	粗粒砂岩	暗灰色色。長石の粒子が多く、やや凝結岩。	-
86	Shel	97212	S	AD-28	V4M	-	-	-	-	-	石灰	黒色塊状で低層理。	-
87	Shel	97670	S	V-31	V4U	-	-	-	-	-	珪藻質凝結砂岩	灰色。塊状で低層理。黒水柱見出し。	-
88	Shel	97714	S	Z-30	V4U	-	-	-	-	-	はんれい岩	緑褐色。塊状で低層理。粗粒凝結岩。石英石は凝結岩心があるが、ともに凝結岩、石には斜状のクォーツ/四角石が生じる。	-
89	Shel	97754	S	U-29	V4L	-	-	-	-	-	酸性凝結岩	緑灰色。凝結。少量。凝結作用層理。	-
90	Shel	97850	S	X-28	V4U	-	-	-	-	-	珪藻質凝結岩	暗灰色。凝結で低層理。黒水柱あり。	-
91	Shel	97998	S	X-25	V4U	-	-	-	-	-	トラライト	暗灰色色。やや凝結だが、目立ってオプティック組織が顕著である。	-
92	Shel	97969	S	V-28	V4U	-	-	-	-	-	凝結頁岩	灰色凝結で、片理が顕著なため。	-
93	Shel	99892	ST	V-30	V4M	石片	A2	335.0	40.0	12.8	ホルンフェルス	暗灰色の粗粒状(〜粗粒砂岩)。赤褐色を呈する層状の網層理が生成。	埋片 凝結
94	Shel	101011	SPC	V39-23	V4M	-	-	-	-	-	ホルンフェルス	暗灰色を呈する片岩。層状は凝結岩か、トラライトと考えられる。アムが多少認められる。凝結岩に凝結岩と考えられる。(赤 黒色を呈するが、通常の黒色片岩とは考えにくい)	火災
95	Shel	94122 94137-95269	ST	Y-21	V4U	石片未成品	B	(139.0)	33.0	25.0	青色片岩	黒褐色を呈する片岩。層状は凝結岩か、トラライトと考えられる。アムが多少認められる。凝結岩に凝結岩と考えられる。(赤 黒色を呈するが、通常の黒色片岩とは考えにくい)	火災
96	Shel	94126	ST	V40B-01	V4U	石片未成品	-	33.0	13.2	34.7	緑色片岩?	暗褐色色。片理では凝結岩塊が、凝結岩凝結岩が生成している。片理層理が顕著。凝結岩凝結岩と考えられる。(赤 黒色に近い色を呈するが、通常の黒色片岩とは考えにくい)	埋片 埋蔵 90-21
97	Shel	94881	ST	AC-23	Vc	石片未成品	B	87.0	36.0	9.7	緑色片岩?	暗褐色色。片理では凝結岩塊が、凝結岩凝結岩が生成している。片理層理が顕著。凝結岩凝結岩と考えられる。(赤 黒色に近い色を呈するが、通常の黒色片岩とは考えにくい)	埋片 埋蔵 90-21

表2 同定された岩種と個数(シヨロマ1遺跡)

火成岩	個数	変成岩	個数	堆積岩①	個数	堆積岩②	個数	
流紋岩	1	ホルンフェルス	2	中礫岩	1	変形泥岩	1	
デイサイト	1	黒色片岩	1	細礫岩	5	チャート	1	
玄武岩	3	緑色片岩	3	極粗粒砂岩	2	赤色チャート	1	
石英斑岩	1	青色片岩	1	粗粒砂岩	6	酸性凝灰岩	3	
ひん岩	2	藍閃石片岩	1	中粒砂岩	4	火山礫凝灰岩	1	
ドレライト	1	タルク(滑石)	9	細粒砂岩	6	凝灰岩	2	
花崗岩	1	角閃岩	1	極細粒砂岩	15	溶結凝灰岩	1	
はんれい岩	1	アオトラ	2	シルト岩	3	珪藻質極細粒砂岩	1	
		蛇紋岩	1	泥岩	1	珪藻質泥岩	1	
		玄武岩(緑色岩化)	3			珪質頁岩	1	
		ドレライト(緑色岩化)	1			石炭	1	
		はんれい岩(緑色岩化)	1			珪化岩	1	
		ハイアロクラストイト (緑色岩化)	2					
計	11	計	28	計	43	計	15	
							合計	97

※ 着色したものは、付加体構成岩類である。

## 2. 各石材の供給源

石材の同定結果に基づき、それぞれの岩石の由来について地質学的な面から考察を行う。

### 2.1 シヨロマ1遺跡

#### (1) 火成岩類

火成岩類として流紋岩・デイサイト・玄武岩・石英斑岩・ひん岩・ドレライト・花崗岩・はんれい岩が認められた。玄武岩およびドレライト、はんれい岩のうち、緑色岩化を被っているものは変成岩類として分類した。火成岩類としたものは緑色岩化していない、比較的新鮮なものである。

緑色岩化の進んでいない玄武岩は、主に溶岩として道内各地に見られる。

安山岩は主に溶岩として道内各地に見られる。川端層などの礫岩中の礫として含まれていることもある。

緑色岩化の進んでいないはんれい岩は、岩体として見られる。はんれい岩の多くは日高変成帯やポロシリオフィオライト帯に分布するが、神居古潭帯にも少量認められる。これらは川端層などの礫岩中の礫としても存在する。

石英斑岩はデイサイト～流紋岩質の完晶質岩で、岩脈(あるいは貫入岩)と考えられる。粗粒な石英斑晶を含むことが多い。例えば、定山溪には新第三紀(おもに中期中新世)の古平層群に貫入するものがある。川端層など礫岩中の礫として認められることもある。

## (2) 変成岩類

変成岩類として、ホルンフェルス・黒色片岩・緑色片岩・青色片岩・藍閃石片岩・タルク（滑石）・角閃岩・アオトラ・蛇紋岩・玄武岩（緑色岩化）・ドレライト（緑色岩化）・はんれい岩（緑色岩化）・ハイアロクラスタイト（緑色岩化）の13種類が認められた。これらは、ホルンフェルス以外付加体構成岩類で、片岩類はその深部で形成されたもので、蛇紋岩とタルク（滑石）はマントルから上昇してきて、付加体の一部となったものである。これらは川端層などの礫岩中の礫として含まれていたものである可能性もある。

### 1) アオトラ

「アオトラ」は正式な岩石名でなく俗称である。玄武岩質の火山砕屑物が堆積してできた砂質-泥質の縞状互層で、変形作用は通常の片岩ほど強くない。緑色片岩相ないし青色片岩相の変成作用を受けている。神居古潭帯の礫平蛇紋岩の捕獲ブロックとして多量に見出される東・加藤（2012）。また、前川（2007）は「アオトラ」が、やや高压の緑色片岩相で形成されたとし、前川ほか（2015）は、それが礫平蛇紋岩体南側の礫平川流域に露頭が分布する（岩清水層群）ことを明らかにした。

### 2) タルク（滑石）・蛇紋岩

今回同定されたタルク（滑石）には、自形と考えられる「スピネル」を含むものが認められた。このようなタルク（滑石）は、ダンかんらん岩起源と考えられる。

蛇紋岩は東方の神居古潭帯に広く分布する。しかし、より西方の夕張市紅葉山から厚真川支流のショロマ川上流にかけての中新世の滝の上層分布域にも蛇紋岩の小岩体が分布する。

タルク（滑石）は、一般的に熱水変質作用を受けた蛇紋岩中や珪質のドロマイトが接触変成を受けた場所に生成する。北海道内では神居古潭帯中の蛇紋岩体に伴って産出することがある。また、松前町大鴨津川周辺に分布するものがあり、蛇紋岩体の一部を交代している。しかし、糸魚川など道外から運ばれた可能性も検討する必要がある。

### 3) 片岩類

片岩類として黒色片岩・青色片岩（藍閃石片岩）・緑色片岩が認められた。

黒色片岩は、砂質～泥質岩を原岩として形成された岩石であり、各地に見られる。例えば、ポロシリオフィオライト帯（日高変成帯西帯）の西縁部などに見られる。

青色片岩としたものの多くは藍閃石片岩で、非常に高压の条件で形成された岩石である。これらの多くは神居古潭帯の蛇紋岩が地下深部から運んで来た捕獲ブロックとして産する。厚真町の近傍では夕張岳やそれから続く、占冠西部地域の蛇紋岩メラランジュ中に産する。三石の蛇紋岩メラランジュ中にも知られている。

緑色片岩は幌加内～神居古潭峡谷地域や神居古潭帯蛇紋岩中の捕獲ブロックとして、あるいは東方のポロシリオフィオライト帯などに分布する。

## (3) 堆積岩類

### 1) 正常堆積物に由来する堆積岩

今回鑑定を行った石材では、礫岩・砂岩・シルト岩～泥岩・凝灰質岩・珪藻質砂岩～泥岩が認められた。これらは変形構造が認められず、非変形であることから付加体由来とは考えられない。

これらの供給源は、近傍に分布する滝の上層・川端層・軽舞層・荷葉層などの新第三紀層に求めることができる。これらのうち、川端層は中期中新世中期に堆積した地層で、砂岩や泥岩、礫岩などからなる地層である。川端層中には、凝灰岩が含まれる。凝灰質岩～泥岩についても、川端層に由来する可能性がある。また、比較的硬質で固結度が高いが付加体由来しないと考えられるものは、白亜紀の蝦夷累層群由来の可能性もある。

珪藻質の堆積岩は、例えば荷葉層に認められる。荷葉層は、新第三紀鮮新世に堆積した地層である。

細粒な粒子よりなるシルト岩～泥岩および細粒な砂岩などは、ルーベや簡易実体鏡を用いた肉眼観察では、構成粒子を観察することはできない。粗粒な中粒砂岩～中礫岩の一部には、構成粒子を同定できるものがあつた。同定された構成粒子は、黒色の泥岩・変形泥岩・チャート・石英・花崗岩類・凝灰岩・火山岩（安山岩を含む）などである。

## 2) 付加体構成岩類

堆積岩類のうち、変形泥岩・チャート・赤色チャート・酸性凝灰岩は付加体由来する岩石である。これらの岩石は一般に付加体で強く変形作用を受けた岩石である。付加体由来する岩石は、神居古潭帯やその周辺、イドンナップ帯に分布する。

## 3) 火山砕屑岩類

凝灰質泥岩・凝灰質シルト岩・火山礫凝灰岩・凝灰岩が認められた。これらは中新世の各地層中に時々含まれる。肉眼鑑定でのデータのみで産地を推定することは困難である。

## 4) 石炭

厚真町周辺に分布する地層のうち石炭を含むものは、函淵層群や滝の上層がある。石炭は、これらの地層に由来する可能性がある。

## 5) 珪質頁岩

硬質頁岩と区別するために用いる。地質学的に硬質頁岩と呼ばれている地質は渡島半島の八雲層やその相当層、あるいは道東などにも分布するが、これらの多くはパリパリと割れ易く、石器の石材としては、不適なものである。石器の石材として使用されているものは、一般の硬質頁岩とは明らかに異なり、加工し易い等方均質である。したがって、これをとくに「珪質頁岩」と呼ぶ。

珪質頁岩は少なくとも渡島半島では、中新世の八雲層やその相当層が貫入岩の接触変質を受けた場所のみ分布する。また、化学分析により、産地をある程度絞り込める可能性がある（森町教育委員会 編、2006）。

このような珪質頁岩は、変形の進んでいない泥岩（すなわち、付加体以外の）に貫入岩がある場所という条件があれば生成する。遺跡の周辺に良質の珪質頁岩は少ないが、軽舞層の硬質頁岩は一部珪質頁岩化する。

## 6) 珪化岩

珪化岩としたものは、石英を主体とする珪酸分(SiO<sub>2</sub>)が元の岩石を著しく交代した岩石である。すなわち、何らかの原岩を基にしているが、具体的には詳細不明のものである。今回の同定では色調が灰白色のものが認められた。珪化岩は火山活動に伴う熱水変質作用を受けた岩石であるので、原岩は火山周辺に分布する凝灰質岩などのことが多いと考えられる。

このような珪化岩は北海道では石狩低地帯以西の中新世～鮮新世の火山岩類分布地域に散在して分布する。また、火山活動のある地域であれば、その他の道内各地にも存在する可能性があり、産地の特定は困難である。

## 2.2 石材および遺跡周辺の河床礫・川端層礫岩の比較

遺跡周辺の河床礫および川端層の礫岩中の礫の調査を行った（アースサイエンス，2015）。これによると、河床礫は主に珪質頁岩、酸性凝灰岩、チャート、蛇紋岩、花崗岩類、緑色岩化玄武岩、アオトラ、めのうが認められた。また、川端層の礫岩中の礫は、付加体を構成していたと考えられる変形泥岩、変形砂岩、チャート、酸性凝灰岩が多い。その他、安山岩（～ひん岩）、花崗岩類、砂岩、凝灰岩などが認められる。蛇紋岩はこの露頭では認められなかったが、河原の転石としては認められる。蛇紋岩もまた、別の場所の川端層礫岩露頭には含まれている可能性がある。なお、ショロマ川の蛇紋岩転石は上流の滝の上層中に上昇した小蛇紋岩体由来するものも含まれると考えられる。

これら河床や川端層の礫岩中で認められた礫は、同定を行った石材にも認められる。このことから石材として利用された岩石の少なくとも一部は、遺跡周辺の河床や川端層の礫岩から採取された可能性がある。

### 引用文献(ABC順)

- アースサイエンス(株) (2015) : ショロマ1遺跡発掘事業 石材採取地分析委託業務 報告書。厚真町教育委員会。
- 加藤孝幸・新井田清信・高橋功二 (2003) : 下部中新統、滝の上層中の“蛇紋岩”。日本地質学会第110年学術大会，演旨，P66。
- 前川寛和 (2007) : 三内丸山遺跡出土の磨製石斧の岩石学的特徴と石材産地特定の可能性について。特別史跡 三内丸山遺跡 年報，10，15-27。
- 前川寛和・大塚和義・山本鋼志・合地信生 (2015) : 三内丸山遺跡出土の緑色磨製石斧の岩石学的特徴とその原産地。日本地質学会 第122年 学術大会，要旨。
- 松野久也・石田正夫 (1960) : 5万分の1地質図幅「早来」および同説明書。北海道開発庁，35p。
- 高橋功二・和田信彦 (1987) : 5万分の1地質図幅「穂別」および同説明書。北海道立地下資源調査所，40p。
- 高橋功二・谷口久能・渡辺 順・石丸 聡 (2002) : 5万分の1地質図幅「紅葉山」および同説明書。北海道立地下資源調査所，117p。
- 森町教育委員会 編 (2006) : 「茅部郡 森町 埋蔵文化財調査 報告書 鷲ノ木4遺跡 (分冊) 自然科学等による諸分析」，IV石質鑑定 (アースサイエンス(株))。

## 第5節 ショロマ1遺跡石材採取地分析

アースサイエンス株式会社 加藤孝幸 米島真由子

### 1. 内容

本業務で行った委託内容は以下の通りである。

#### (1) 期間

現地調査：平成27年11月7日(土)～8日(日)

礫の鑑定とまとめ：平成27年12月24日まで

#### (2) 対象地区

幌内地区の河川敷 8地点

#### (3) 現地調査の内容

1) 5地点について、河原に50m<sup>2</sup>のグリッドを組み、その中で考古学的な石材として使われる可能性がある石材で、cm単位のを任意に選び、礫種毎にカウントした。

2) 1地点(鬼岸辺川上流の川端層礫岩露頭)については礫のサンプリングを行った。

3) 他の2地点を含めて、これらと別に考古学的に興味深い礫を多量に採取した。

#### (4) 室内作業

##### 1) 露頭採取礫の鑑定

上述の鬼岸辺川上流の川端層礫岩露頭から採取した礫100個について、肉眼鑑定(ルーペ、実体鏡を併用)を行った。

##### 2) 河床礫の鑑定

河床礫は任意に採取しており、サンプル番号もないので、すべての礫について、肉眼鑑定を行い、個々の礫に布テープを張って直接岩石名を記入した。

#### (5) 成果品(報告書および礫の鑑定)

1) サンプリング礫の鑑定結果および供給源についてのコメント

2) 踏査の記録写真

3) サンプリング礫(岩石名付)

### 2. サンプリング位置

図1にサンプリング地点を示す。なお、No.2地点は河床礫の採取が不可能であったため、欠番とした。

### 3. 鑑定結果と供給源の推定

#### 3.1 床礫の現地鑑定

No.1(厚真川本流、厚真ダム直近下流側)、No.3(厚真川本流、ショロマ川合流点下流側)、No.9(ショロマ川中流)、No.5(ショロマ川下流：ショロマの滝)、No.7(鬼岸辺川、冷水ノ沢合流点上流側)の5地点において、それぞれ50m<sup>2</sup>のグリッドを組み、河床礫の肉眼鑑定を行った。これは、考古学的な石材として使われる可能性のある石材でcmオーダー(数cm～数

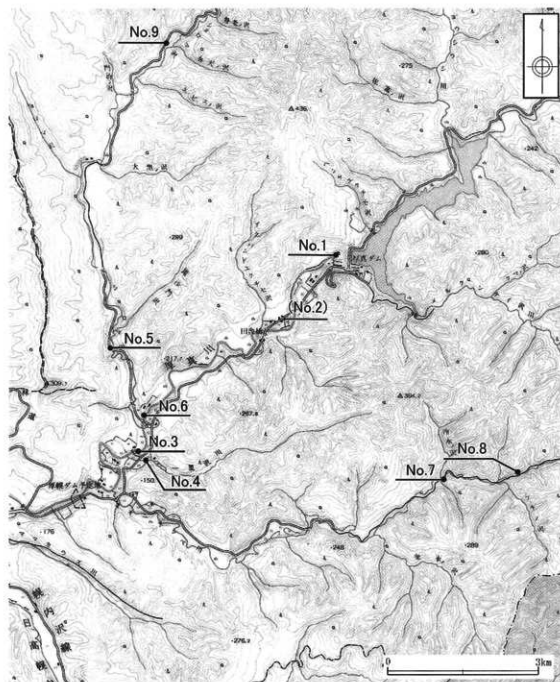


図 1. サンプルング地点

10cm)の礫を任意に選び、礫種毎にカウントしたものである。結果を図2に示す。なお、ここで「アオトラ」とした岩石名は通称である。礫石器などによく使用されるものである。火山砕屑性の砂岩・泥岩(凝灰質砂岩/泥岩)で、両者の互層が織状の堆積構造をつくる。片理は発達しないが、緑色片岩相程度の変成作用を受けており、緑色を呈する。

鑑定結果から以下のことが言える。

#### No.1 地点

高い頻度でチャート、安山岩(ひん岩)、はんれい岩類、花崗岩類が認められる他、新鮮な斜方輝石かんらん岩やダンかんらん岩の直径数10cmに及ぶ岩塊が認められた。これらは、神居古潭帯の岩内岳かんらん岩体(日高町)に分布するものと酷似する。おそらくダム工事に伴って、人為的に運ばれたものと考えられる。すなわち、他の礫種も現地性のものかどうか疑わしい。No.1地点の礫種は考古遺物の原産地を検討する根拠としては使えない。

#### No.3 地点

珪質頁岩が大部分で、蛇紋岩などを微量伴う。珪質頁岩は周囲に分布する軽舞層に由来すると考えられるが、良質のものではない。

#### No.9 地点

中新世の川端層の分布域で、礫岩も含む岩相が分布している。上流には同じく中新世であるが、川端層の下位の滝の上層が分布する。この滝の上層分布域には小規模な蛇紋岩体が分布する(加藤ほか、2003)。これらを反映して、蛇紋岩が散在するほか、川端層の礫岩に由来すると考えられる花崗岩類やチャートが少量認められた。

#### No.5 地点

大部分が周囲の分布する中新世の軽舞層に由来すると考えられる珪質頁岩である。石器の石材として使用に耐えるような良質のものではない。少量の蛇紋岩、酸性凝灰岩、石炭が認められる。

#### No.7 地点

珪質頁岩、酸性凝灰岩、チャート、蛇紋岩、花崗岩類、緑色岩化玄武岩、アオトラ、めのうなどが認められた。珪質頁岩以外は上流に分布する川端層の礫岩に由来すると考えられる。なお、珪質頁岩は石器の石材としては良質のものではない。

### 3.2 川端層礫岩の礫種鑑定

鬼岸辺川上流のNo.8地点には、斜面上に川端層の礫岩が露出している。この露頭から礫を100個+採取し、礫種鑑定を行った。結果を図3に示す。

これによると、付加体を構成していたと考えられる変形泥岩、変形砂岩、チャート、酸性凝灰岩が多い。その他、安山岩(～ひん岩)、花崗岩類、砂岩、凝灰岩などが認められる。蛇紋岩はこの露頭では認められなかったが、河原の転石としては認められる。蛇紋岩もまた、別の場所の川端層礫岩露頭には含まれているのであろう。

### 3.3 その他の礫の鑑定

上記以外に各地点で採取された礫については、すべて鑑定を行い、先に述べたように、各礫に直接岩石名を記入した。



サイト 番号	位 置		付 属 地 質 群										地 帯 岩					備 考	
	火 成 岩		夏 成 岩																
DA	AN	GR	GB	PD	SP	SP	GBS	GHY	AM	AO	SSH	ATF	GH	Col	AG	QR	Σ		
No.1	3	10	6	11	3	6	3	1	2	0	0	2	14	0	0	1	62	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
厚良川本流 下流(順)																			
No.2	4.8	16.1	9.7	17.7	4.8	9.7	4.8	1.5	3.2	0.0	0.0	3.2	23.6	0.0	0.0	1.6	100.0	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
厚良川本流 (シヨロマ川合流点下流(順))																			
No.3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	25	0	0	0	0	1	27	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
シヨロマ川合流 点下流(順)																			
No.9	0	0	1	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	16	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
シヨロマ川中流																			
No.5	0	0	0	0	6	2	0	0	6	0	7	1	6	1	0	0	61	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
シヨロマ川下流 (シヨロマ川合流点下流)																			
No.7	0	1	3	1	6	4	2	0	0	0	10	6	1	10	10	6	1	40	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。
鬼岸辺川 中上流(順)																			
No.8	0	0	2.5	7.5	2.5	0.6	10.0	5.0	0.0	0.0	2.5	25.0	15.0	0.0	2.5	2.5	100.0	夏成岩群は片麻岩、変成岩類、岩脈類、火成岩類等からなり、そのうち、片麻岩類、変成岩類、岩脈類は、それぞれ、単独で、構成岩として、認められる。	
鬼岸辺川 中上流(順)																			

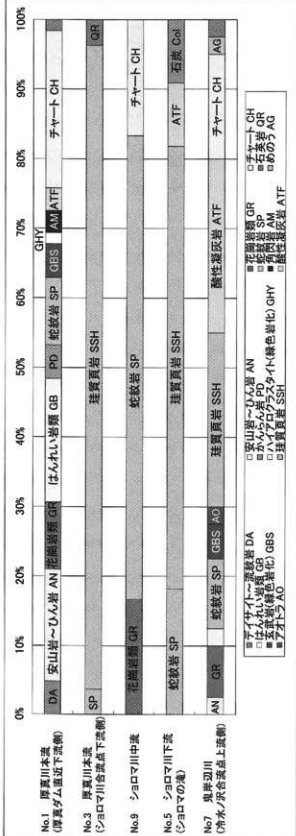


図 2. 鑑定結果 (厚良川・シヨロマ川・鬼岸辺川 01)

#### 4. 河床礫の供給源

今回の調査結果や地質図幅（松野・石田，1960；高橋・和田，1987；高橋ほか，2002）や加藤ほか（2003）を参考にすると、河床礫の供給源は、個々の地点でそれぞれ述べたが、全体として以下のように考えられる。

- ① 注目した礫のうち、珪質頁岩（珪化した泥岩）は、主として中新世軽舞層の硬質頁岩層に由来する。この硬質頁岩の一部が、熱水による珪化作用を受けたものである可能性が考えられる。
- ② その他大部分の礫は軽舞層の下位にある川端層の礫岩を構成していた礫が流出したものと考えられる。
- ③ シヨロマ川の蛇紋岩礫は川端層の礫岩に由来する可能性を否定できないが、その多さからみて、シヨロマ川上流域の滝の上層中に露出する小規模蛇紋岩体に主として由来するものであろう。
- ④ その他、石炭は滝の上層に含まれるので、この地層に由来した可能性が高い。  
また、新鮮なかんらん岩がNo.1地点で認められたが、このことは工事に伴って人間が運んだ石材が河床礫として存在することがあることに注意する必要があることを示している。

#### 引用文献(ABC順)

- 加藤孝幸・新井田清信・高橋功二（2003）：下部中新統，滝の上層中の“蛇紋岩”。日本地質学会第110年学術大会，演旨，P66.
- 松野久也・石田正夫（1960）：5万分の1地質図幅「早来」および同説明書。北海道開発庁，35p.
- 高橋功二・和田信彦（1987）：5万分の1地質図幅「穂別」および同説明書。北海道立地下資源調査所，40p.
- 高橋功二・谷口久能・渡辺 順・石丸 聡（2002）：5万分の1地質図幅「紅葉山」および同説明書。北海道立地下資源調査所，117p.

サイト 番号	位置	付加体構成岩類											堆積岩		合計
		— 火成岩 —											— 変成岩 —		
		デイサイト ～流紋岩	安山岩 ～ひん岩	花崗岩類	玄武岩	ホルン フェルス	変形泥岩	変形砂岩	酸性凝 灰岩	チャート	砂岩	泥岩	凝灰岩	石英岩	
		DA	AN	GR	BS	HF	TMS	TSS	ATF	CH	SS	MS	TF	QR	
No.8	標高	1	5	4	2	1	36	22	4	11	4	3	3	1	100
	鬼岸辺川上流	1.0	5.0	4.0	2.0	1.0	36.0	22.0	4.0	11.0	4.0	3.0	3.0	1.0	100.0

川礫層 礫岩中の礫のモード組成(個数比)

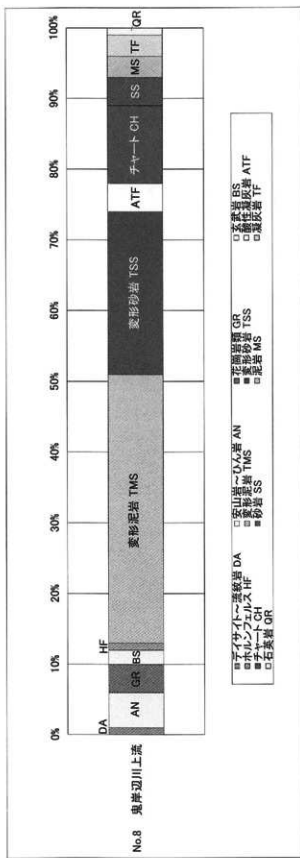


図 3. 鑑定結果 (鬼岸辺川 02)

表1 写真掲載石材サンプル一覧表

図版番号	採取地点	石材名	備考
1-3-7	厚真川本流上幌内3遺跡下	珪質頁岩	珪化の度合いは、やや弱い。少量の黒雲母が生成している可能性がある(ホルンフェルス化)。
1-3-9	厚真川本流上幌内3遺跡下	軽石凝灰岩	軽石の給源など、詳細は不明。
1-3-10	厚真川本流上幌内3遺跡下	蛇紋岩	-
1-4-1	一里沢	珪質頁岩	珪化の度合いは、やや弱い。少量の黒雲母が生成している可能性がある(ホルンフェルス化)。
1-4-3	一里沢	変斑れい岩	-
1-5-8	ショロマの滝	珪質頁岩	強珪化し、割れ目は貝殻状断口。
1-5-12	ショロマの滝	石炭	-
1-5-13	ショロマの滝	赤色チャート	-
1-5-16	ショロマの滝	石英斑岩	粗粒な石英の斑晶を含む。
1-5-22	ショロマの滝	緑色岩	原岩のドレライトが緑色岩化したもの。
1-5-22	ショロマの滝	緑色岩	前写真の拡大。原岩であるドレライトの放射状の組織が残る。
1-5-25	ショロマの滝	蛇紋岩	斜方輝石かんらん岩質。
1-5-26	ショロマの滝	緑色岩	原岩の火山砕屑性堆積岩が緑色岩化したもの。「アオトラ」。
1-5-27	ショロマの滝	花崗岩類	完晶質、粗粒。
1-5-29	ショロマの滝	石英片岩	-
2-7-14	オニキシベ川冷水沢 合流点	緑色岩	原岩のハイアロクラスタイト(水冷破砕岩)が緑色岩化したもの。
2-7-20	オニキシベ川冷水沢 合流点	ひん岩(～安山岩)	-
2-7-35	オニキシベ川冷水沢 合流点	メノウ	-
2-7-43・44	オニキシベ川冷水沢 合流点	アオトラ	-
2-7-58	オニキシベ川冷水沢 合流点	珪質頁岩	-
2-7-65	オニキシベ川冷水沢 合流点	細礫岩	-
2-7-65	オニキシベ川冷水沢 合流点	細礫岩	前写真の拡大。
2-7-76	オニキシベ川冷水沢 合流点	青色角閃石-石英片岩	-
2-8-104	オニキシベ川最上流	砂岩	-
2-8-120	オニキシベ川最上流	泥岩	珪化の度合いは弱い。
2-8-129	オニキシベ川最上流	礫岩(火山砕屑性)	-
2-9-4	ショロマ川最上流	ひん岩(～安山岩)	-
2-9-5	ショロマ川最上流	石英片岩	-
2-9-6	ショロマ川最上流	蛇紋岩	斜方輝石かんらん岩質。
2-9-10	ショロマ川最上流	蛇紋岩	-

図版1



No.3-7



No.3-9



No.3-10



No.4-1



No.4-3



No.5-8



No.5-12



No.5-13



No.5-16



No.5-22



No.5-22 拡大



No.5-25



No.5-26



No.5-27



No.5-29

石材サンプル(1)

図版2



No.7-14



No.7-20



No.7-35



No.7-43・44



No.7-58



No.7-65



No.7-65 拡大



No.7-76



No.8-104



No.8-120



No.8-129



No.9-4



No.9-5



No.9-6



No.9-10

石材サンプル(2)

## 第6節 厚真川上流域の地形面区分およびシヨロマ1遺跡に関する地質検討

アースサイエンス株式会社 岡 孝雄

2016年度のシヨロマ1遺跡の発掘調査に関する地質検討を行い、合わせて厚幌ダム建設地点周辺地域の地形面区分を行った。本報告のとりまとめにあたっては、「2014年度上幌内1遺跡発掘事業花粉分析委託業務」、報告者が独自に行った厚幌ダム周辺地域の地形・地質調査（2012～2016年）の成果などが盛り込まれている。以上の調査、検討を行うにあたり、厚真町・厚真町教育委員会の関係各位のご理解とご協力をいただいた。さらに、報告者が加わる石狩沖積低地研究会の関係各位にも、現地での地質検討などについて協力をいただいた。記して、感謝の意を表します。

以下に、「厚幌ダム建設地点周辺の地形面区分」および「シヨロマ1遺跡付近地形面区分と地質検討」に分けて記述する。

### 厚幌ダム建設地点周辺の地形面区分

#### 1. はじめに

厚幌ダム水没地域とその周辺について、室蘭建設管理部から提供されたダム工事前レーザー測量図（縮尺5,000分の1「厚幌ダム建設工事概要図」；等高線間隔1m）を基に地形面区分を行った。地形面区分の根拠は地形面の現河床からの比高、構成堆積物（段丘堆積物）の構成内容などであるが、特にその上半部を占めるローム・腐植土・火山灰層（風成層）中の火山灰（降下火山灰）はテフクロロジーの観点から重要であった。

具体的には対象区域を次の7区域に分け、地形面区分と根拠となる地形および地質の検討作業を行い、取りまとめを行った。①厚幌ダム堤体周辺とその下流（A区域）、②上幌内モイ遺跡・ヲチャラセナイ遺跡付近（B区域）、③鬼岸辺川流域（C区域）、④上幌内1遺跡～同3遺跡付近（D区域）、⑤シヨロマ1遺跡付近（E区域）、⑥シヨロマ2遺跡・同3遺跡付近およびシヨロマ川流域（F区域）、⑦厚真ダム下流域（G区域）。

ほぼ同様な内容は平成29年度 日本応用地質学会北海道支部ほか研究発表会講演要旨集で公表している（岡ほか、2017a）。

#### 2. 地形面区分と構成堆積物（段丘堆積物）

区域毎に上記のレーザー測量図を基に地形面区分作業を進め、地形面毎の構成堆積物について露頭柱状図集を作成した（アースサイエンス株式会社、2017）。区域毎の地形面区分図および柱状図集の全てを示すことは紙面に限られているので、代表的にA区域の地形面区分図および柱状図集を図2～4に示す。

地形面は下位より現河川氾濫原面、低位段丘面（T1）、中位段丘面1（T2）、中位段丘面2（T3）、中位段丘面3（T4）、高位段丘面（T5）に区別でき、その他、小扇状地形（沖積錐）および顕著な地すべり地形が認められる。小扇状地形は図2に示すようにT1～T2面上を含め形成中のものが主であるが、すでに形成が終わり微地形として地表に扇状地の形態が残る、言わば化石化したものもあり、そのようなものは点線囲みで表示した。なお、低位段丘面の中

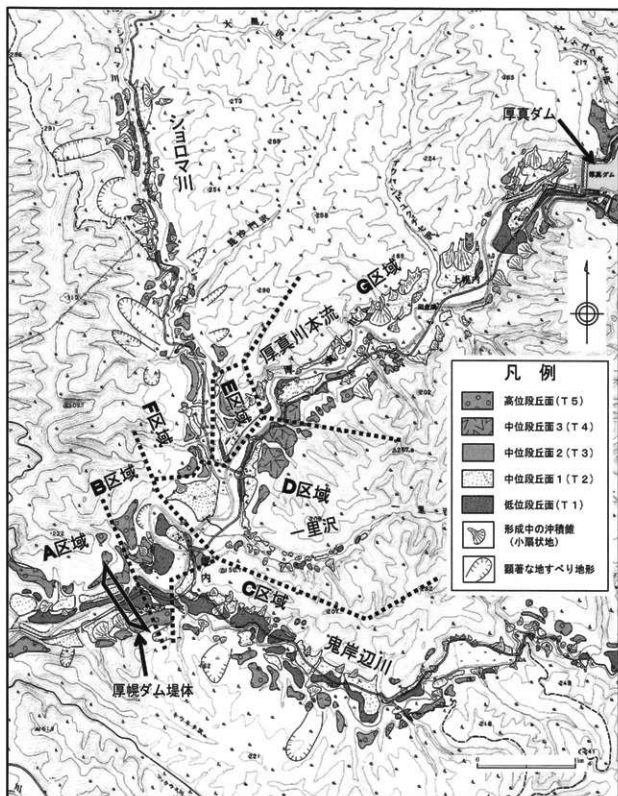


図1 厚真川上流域(厚樫ダム湛水区域とその周辺)の地形面区分

(国土地理院発行2.5万分の1地形図「厚真川上流」使用)



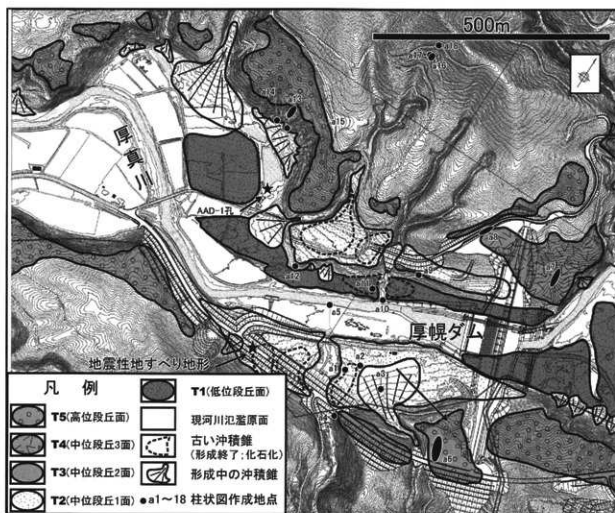


図2 厚幌ダム付近（A区域）の地形面区分と作成柱状図・スケッチの位置図

にはより新期の最低位段丘面（T0）が区別できる場合がある。地形面の特徴と構成堆積物について次に説明する。

#### （1）現河川氾濫原面

蛇行する現河道部分も含めるが、氾濫原面そのものは一般に現河床からの比高は2m程度で、構成堆積物は主に礫～砂礫で構成されるが砂泥互層をともなうこともある（図2・3のa5地点など）。A区域の旧河道箇所付近では泥炭地が存在しシートサンプラーにより泥炭試料が採取され、花粉分析などが行なわれている（図2・3のAAD-1孔；星野ほか，2015；岡ほか，2015）。

#### （2）低位段丘面（T1）

現河床からの比高は4～7m程度で、構成堆積物の主体は礫～砂礫であるが、最上部にTa-cとより新期の降下火山灰および腐植層をともなう（図2・3のa10・a11など）。面の形成時期（離水）はTa-c降灰より前で、7,000～8,000年前である。オニキシベ5遺跡付近などではTa-cを伴わず、これは最低位段丘面（T0）とすべきである。

### (3) 中位段丘面1 (T2)

現河床からの比高は一般に8~9mであるが、上流のG区域では10m以上に達する。構成堆積物は厚さが8m程度で、下半部は礫~砂礫を主体とし所により砂・泥をはさむ。上半部はTa-dと、より新期の降下火山灰、火山灰質ローム・腐植土などで構成されるが、Ta-d(スコリア質のTa-d1+軽石主体のTa-d2)の再堆積層をとめない、Ta-dの一次堆積層も剝削により消失する場合もある。このような再堆積層は厚真川中~上流域一帯にTa-dが1m前後と厚く降灰したため、その後の森林の荒廃・破壊を反映した現象を示すものと考えられる。具体的には、森林の荒廃・破壊により斜面から大量の土砂が河川に流出し、ダムアップ・河道移動などの急激な河川変動が生じたものと思われる。Ta-dの年代に関しては厚真川沿い富里中央および厚幌ダム建設区域内のヲチャラセナイ遺跡でのTa-d直下の火山灰質泥層中の腐植物あるいは木片のAMS<sup>14</sup>C年代測定結果から、8,700年前頃の年代が想定でき(岡ほか, 2017a; 天方ほか編, 2013)、地形面の形成時期(離水)はTa-d降灰前で、9,000年前頃であると見なされる。ただし、再堆積層の示す面の形成時期はTa-d降灰直後となる。

### (4) 中位段丘面2 (T3)

F地域などに限定的に分布が認められる。構成堆積物の内容はT2面とほぼ同様であり、同時期の傾斜した小扇状地そのものを示す可能性が高い。

### (5) 中位段丘面3 (T4)

現河床からの比高は一般に15m程度であるが、E地域付近では25m程度と高くなる。構成堆積物は厚さが6~10m程度、下部は礫~砂礫で、一部泥質部をとまう。中~上部はEn-aとより新期の降下火山灰、火山灰質ローム・腐植土などより構成され、En-a(スコリアに富む発泡不良軽石)の再堆積層をとめない、En-aの一次堆積層も剝削により消失する場合もある。再堆積層についてはTa-dの場合と類似の成因が考えられる。地形面の形成時期はEn-aの降灰時頃で、18,000年前頃(最終氷期最寒冷期; MIS 2)が想定できる。

### (6) 高位段丘面 (T5)

現河床からの比高は一般に30~40m前後である。構成堆積物は厚さが一般に10~10数mであるが、A区域のa13~15地点では23mと極めて厚い(図2・3)。下半部は礫~砂礫を主体とし、所により砂・泥をはさむ。上半部はKt-1?とより新期の降下火山灰、火山灰質ローム・腐植土などより構成される。地形面の形成時期(離水)はKt-1?降灰前で、45,000年前頃(最終氷期中頃; MIS 3)であると見なされる。

### (7) その他

1mコンターレーザー測量図を読み取ると、小扇状地地形(沖積錐)は細かなものまで含めてとらえることができる。現在、形成中の小扇状地地形は形成開始時期がT1面形成後で、T0面との関係が問題となるものもある。化石化した小扇状地地形は関連する各面の主要構成部を成す下半部礫層の堆積時に形成されたもので、図3のa12(作業道路切土)スケッチに示すように厚真川本流の河川堆積物に対して谷側面からの扇状地堆積物で、泥岩の角~亜角礫が主体となっている。等高線の乱れなどの特徴から顕著な地すべり地形が読み取れるが(図1のA・C・F区域)、これらは地震性の地すべりの可能性が高い。

### 3. 区域毎の環境変動を示す特徴的な地学的諸現象

#### (1) A区域

厚樫1遺跡においては西端に地すべり移動体とみられる小丘(マウンド)が発見された(図2; 乾ほか編著, 2004; 田近ほか, 2004; 2015)。山腹に位置する凹形斜面に堆積していたTa-d層がその起源とされ、移動体を覆う腐植土の<sup>14</sup>C年代からその発生はBP5,600年~BP3,500年とし、石狩低地東縁断層帯との関係に言及している。a16・17地点(凹形斜面)では2016年8月下旬の豪雨により崩壊が発生したが、崩壊源は上を覆う斜面堆積物であり、それはTa-dとその直下の火山灰質泥+Ta-d後のローム・腐植土・新期火山灰層で、9,000年の時間経過があることが分かった(図2・3のa-16・17)。ダム堤体北端の西側ではT4面段丘堆積物中のEn-a下位の堆積物中に断層活動に伴うと思われる変位が認められる(図4のa8)。同じく北東側にはT5面段丘堆積物を切る断層が斜面切り取り時に認められた。少なくともTa-d以降の堆積物には変位は生じていないようである。

#### (2) B区域

上幌内モイおよびヲチャラセナイ遺跡ではEn-a降灰後、上幌内モイ遺跡ではTa-d降灰後の斜面・河川変動を示す再堆積物が認められる(図4のb7・8)。ヲチャラセナイ遺跡の北側背後のT5面段丘堆積物を切る断層の存在が確認でき、A区域の場合と同様に、少なくともTa-d以降の堆積物には変位は生じていないようにとらえられた。ヲチャラセナイ遺跡の北側には地震性と思われる大規模地すべり地形が認められるが、その末端は厚真川本流により侵食を受け消失している。

#### (3) C区域

オニキシペ1・5遺跡ではシヨロマ1遺跡に類似のTa-d降灰後の斜面・河川変動を示す再堆積物が認められる。オニキシペ1遺跡の南側、同5遺跡の南西側、同3遺跡の南西側の斜面域では地震性と思われる大規模地すべり地形が認められる。オニキシペ5遺跡ではTa-d降灰後の地震動を示す地割れなどの小断層が、同3遺跡では北側斜面からTa-dを主体とした表層地すべり性の地震堆積物が認められる。

#### (4) D区域

上幌内1・同2遺跡ではTa-d降灰前の化石化した小扇状地形が認められる。シヨロマ4遺跡ではTa-d降灰後の斜面・河川変動を示す再堆積物(チャンネル状浸食谷含む)が認められる。

#### (5) E区域

シヨロマ1遺跡については後段で詳しく述べる。

#### (6) F区域

シヨロマ2・3遺跡については後段で詳しく述べる。シヨロマ川沿いには西岸側を主体に、地震性と思われる大規模地すべり地形が認められる。

#### (7) G区域

上幌内5遺跡ではT2面のTa-d下位の下半部礫層中に一部泥炭質泥が挟まれ、花粉分析の結果、寒冷な気候が示されており(星野ほか, 2017)、石狩沖積低地研究会が名古屋大学宇宙地球環境研究所年代測定部に依頼してAMS<sup>14</sup>C年代測定を試みた。その結果、12404~12072 cal. yBP (94.5%)—12249±95 cal. yBP (平均)—[NUTA2-24377]というヤンガードリアス期を示す年代値

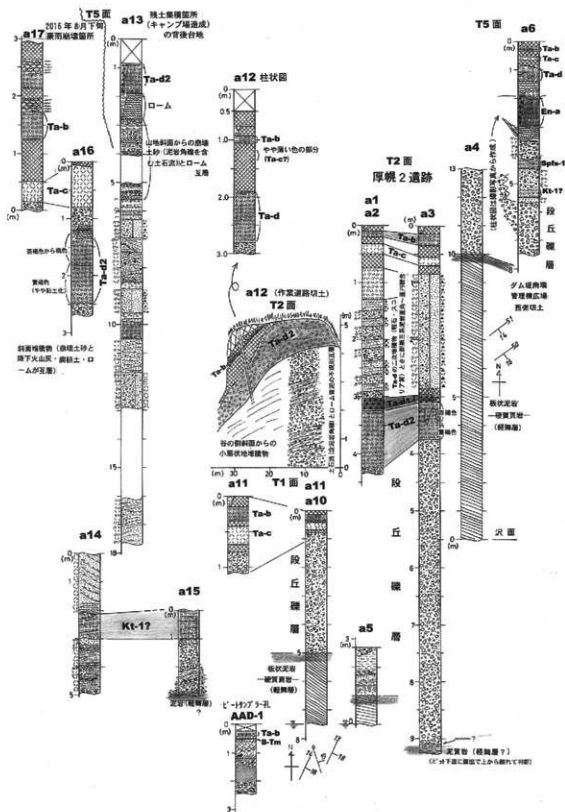


図3 A区域の柱状図・スケッチ集その1

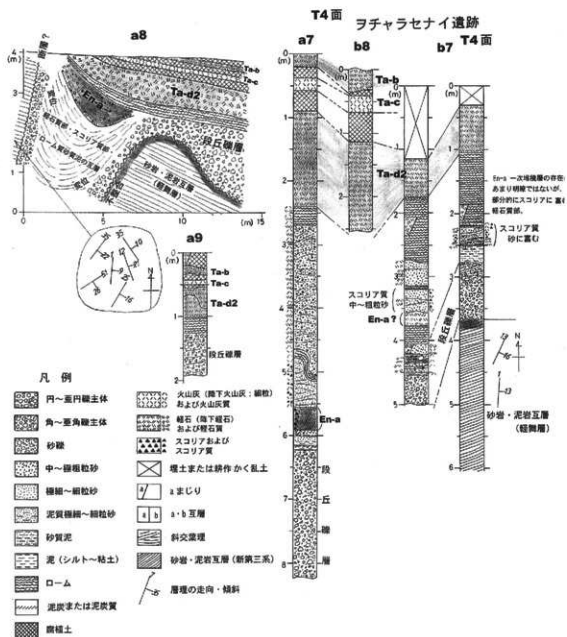


図4 A区域の柱状図・スケッチ集その2

を得ている (同研究会私信)。

4. 厚真川上流域の過去約6万年間の地学的環境変動 (地震活動・斜面変動・河川変動など)

厚真川上流域 (厚幌ダム建設地点とその周辺) の過去約6万年間の地震活動、降水などにもなう斜面変動および河川変動などの地学的環境変動が明らかになる (図5)。

①5万年前頃からそれ以前

T5面堆積物 (段丘礫層) は5万年前前後の厚真川流域の河川環境を示す。T5面より古い (高い) 段丘面とその付随堆積物は未発見であるが、本来存在していたはずである。もし現存していないとすれば、それは地殻変動が激しいために、既に剝蝕されて消失した可能性がある。逆に言えば、それは、本地域が地殻変動の激しいことの証拠となる。

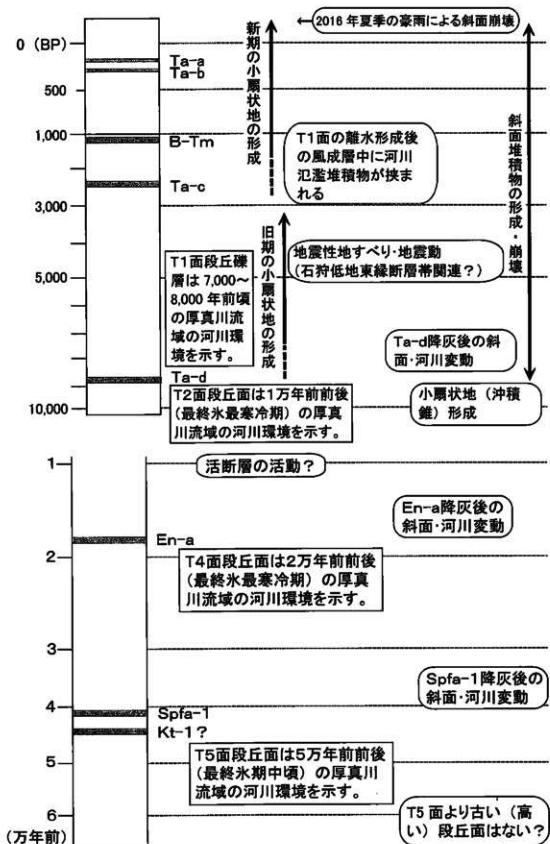


図5 厚真川上流域(厚樫ダム建設地点とその周辺)の過去約6万年間の地学的環境変動

②En-a 降灰前と En-a 降灰後の斜面・河川変動（最終氷期最寒冷期～末期；2 万年前前後）

T4 面段丘礫層は En-a 降灰前の河川環境を示す。上幌内モイ遺跡付近、ショロマ 1 遺跡、ワチャラセナイ遺跡などに見られる T4 面形成後（離水後）の En-a 二次堆積層（河川堆積物）は降灰後の環境変動を示す。

③Ta-d 降灰前の小扇状地（沖積錐）形成と河川環境（完新世初頭；1 万年前頃）

厚幌 1・2 遺跡とその北側、上幌内 1・2 遺跡、イクバンドユクチセ 2 遺跡などでは T2 面の Ta-d の下位に化石化した小扇状地（沖積錐）が形成されていることが、1m コンター詳細地形図から読み取れる。T3 面は Ta-d 以上の火山灰が重なることは T2 面と同様で、同時期の傾斜した小扇状地そのものの可能性がある（ショロマ 3 遺跡）。T2 面の段丘礫層そのものは同時期の厚真川本流堆積物であり、ヤングードリアス期を含む完新世初頭頃の河川環境を示す。

④Ta-d 降灰後の斜面・河川変動（8,700 年前；縄文時代早期）

ショロマ 1 遺跡、同 4 遺跡、オニキシベ 5 遺跡、同 1 遺跡などにおいて、T2 面形成後（離水）後に、主に Ta-d 由来の二次堆積層（河川堆積物）が重なる。これは、Ta-d の 1m 近い層の形成（降灰）が全域に生じ、それとともに森林植生が荒廃・破壊をこうむり、谷底・河川に大量の土砂（火山灰）が流出し、ダムアップ・河道などの移動が生じた。

⑤地震性地すべりなど直下型地震活動の影響（5,600 年前～3,500 年前—縄文時代前～後期および 1 万年前頃からそれ以前）

地震性地すべりの顕著なものは厚幌 1 遺跡地滑り移動体、ワチャラセナイ遺跡北側地滑り箇所、さらにショロマ川西岸側へ続く。厚幌 1 遺跡の地滑り移動体（小丘）を覆う腐植土の年代は 5,400 年前頃で、その少し前から以降に活動した可能性が高いが（田近ほか, 2015）、大規模な地すべりはこの時に一斉に発生した可能性も考えられる。石狩低地東縁断層帯の活動に関係した可能性もあるが、A・B 区域で見られる T5 面段丘堆積物を切る（変位させる）断層は活断層の可能性はある。これは少なくとも Ta-d 以上の堆積物は変位させていないようで、活動期は Ta-d 降灰以前が想定できるが詳細は不明である。古い大規模地すべり地形は鬼岸辺川南岸側およびショロマ川西岸側にも存在する。その他、地震動ともなう現象として小断層（オニキシベ 5 遺跡 Ta-d 再堆積物）、崩壊・小地すべりがオニキシベ 3 遺跡・同 4 遺跡・ショロマ 2 遺跡で認められる。

⑥T1 面形成後の河川氾濫（4,000 年前～3,000 年前頃；縄文時代後期）

オニキシベ 6 遺跡などで T1 面形成（離水）後の厚真川の氾濫の堆積物が認められる。

⑦新期の小扇状地（沖積錐）の形成（2,000 年前頃～現在）

T1・T2 面上および現河川氾濫原上に現在も形成中のものが大小様々に存在する。

⑧2016 年夏季の豪雨による斜面崩壊

これは、たまたま最近の発生がとらえられたものであるが、このような現象は時期を変えながら所々で発生してきたと考えられる。

⑨一般的な斜面堆積物

A 区域で発生した⑧の斜面崩壊に関連して明らかになったが、斜面堆積物は Ta-d 以上の火山灰・腐植土などを伴っており、場合によっては 9,000 年の時間経過が存在していることが分かった。

## シヨロマ1遺跡付近の地形面区分と地質検討

## 1. はじめに

本区域は厚真川とその主要な支流であるシヨロマ川が合流する部分で、Vの字状に両河川に挟まれる部分である。厚幌ダム関連遺跡でも主要な遺跡であるシヨロマ1遺跡が存在している。シヨロマ1遺跡の遺跡発掘調査は2013～2016年度の4年にわたって行われた。調査は2013年度が遺跡南部、2014・2015年度が同中部、2016年度が同北部について行われており、2013年度調査(南部)、2014・2015年度調査(中部)および2016年度調査(北部)に分けて説明する。地形面区分については、隣接のシヨロマ2遺跡・同3遺跡付近(F区域)と合わせて説明する(図6・7)。なお、シヨロマ1遺跡の2013年度調査(南部)発掘結果については奈良ほか編著(2015)、シヨロマ2遺跡のそれについては乾ほか編著(2015)、同3遺跡のそれについては乾ほか編著(2014)で報告書が取りまとめられており、その内容も吟味・検討を行った。

## 2. シヨロマ1遺跡とその周辺地域(E・F区域)の地形面区分とその構成堆積物

本区域の地形面は図1に示したように、下位より現河川氾濫原面、低位段丘面(T1)、中位段丘面1(T2)、中位段丘面2(T3)、中位段丘面3(T4)および高位段丘面(T5)に分けられる。その他、沖積錐(小扇状地)も認められる。沖積錐については、古いもので土砂の供給が断ち切れれば化石化したものと、新しいもので現在も形成中の活動的なものに分けられる。古いものは一般的にはT2～T4面において認められ、扇形の形態と構成する面堆積物中において厚真川など本流が運ぶ堆積物とは別に、谷側方斜面から供給の泥岩などの角～亜角礫の不淘汰層の存在が確認できるのはT1面と同時期以降またはT1面形成後から現在まで活動が続くものであり、広がりのあるT2面上において形成中のものもある。

## (1) E・F区域の地形面の特徴

現河川氾濫原面：厚真川・シヨロマ川は大きく蛇行して流れるが、その両岸に細長い分布がある。現河川氾濫原面そのもの地形的状況や付随堆積物を直接観察していないが、ダム工事用レーザー測量図(1mコンター)の読み取りから現河床からの比高は5m以下と見なされる。

低位段丘面(T1)：厚真川沿いやシヨロマ1遺跡の西縁などに狭長なわずかな分布がある。

中位段丘面1(T2)：シヨロマ1遺跡およびシヨロマ2遺跡は本面上に載り、両河川の両岸にまとまった分布がある。現河床からの比高は7～8m程度で、段丘堆積物中の上部の風成層(ローム・腐植)中にはTa-d以上の火山灰を挟む。シヨロマ1遺跡の北西側、シヨロマ2遺跡の西縁で活動的または古い扇状地地形が認められる。

中位段丘面2(T3)：シヨロマ川の西岸側に断続的だが比較的大きな分布が続く。付随堆積物(段丘堆積物)については下位の中位段丘面1(T2)に類似し区別が難しいが、斜面側に顕著に上昇することから、T2面に先行または同時期の小扇状地の面の可能性が考えられる。シヨロマ川河床からの比高は15～20m程度である。

中位段丘面3(T4)：シヨロマ1遺跡の北部、シヨロマ3遺跡の南側に小さな分布がある。段丘堆積物はShm1-12・13地点およびf4地点での観察から厚さは10m前後で、その中～上部は風成層(ローム・腐植)と火山灰で、En-a以上の火山灰を挟む。

高位段丘面(T5)：シヨロマ1遺跡の北側およびシヨロマ3遺跡の南側に比較的広い分布がある。現河床からの比高は35～40mである。



小扇状地地形（沖積錐）：沖積錐は数個存在するが、広がり幅は20mから100m程度と規模の大小がある。主にT2面上で形成中である。

## （2）ショロマ2・3遺跡付近（F区域南部）の各地形面の堆積物の特徴

図6に地質検討のための柱状図・スケッチ作成地点を、図7にショロマ1遺跡付近（E区域）、図8にショロマ2・3遺跡付近（F区域南部）のそれぞれ柱状対比図を示す。前者については3以降で検討するので、ここでは後者に限って述べる。

①ショロマ2遺跡付近はショロマ川西岸の河岸段丘（中位段丘面1；T2）を成す。南から南東へ下る小沢地形が存在し、発掘範囲はフック状の形態を成している。2013年度発掘の南半部については発掘報告書では南北12ライン、東西AEラインの2つの土層断面図が描かれ、Ta-d一次堆積層（Ta-d1+Ta-d2；Ⅶ層）の上位にTa-d由来の軽石・スコリア主体のTa-d二次堆積層（Ⅶ層）、漸移層（Ⅵ層）、黒色腐植土層（Ⅴ層）、Ta-c（Ⅳ層）が重なるとされる。このような状況はショロマ2遺跡の調査区西壁のスポット観察柱状図（W-15-09-05区）と半島上部尾根筋に沿う落とし穴遺構の土層柱状図（TP-26・22・20・12・06）を結んだ対比図にも示される（厚真町教育委員会 2015）。西壁部分についてはⅦ層が存在しないことが確認できる。スポット柱状図W-05区では倒木による地層の転倒が示されるが、Ta-cもこの転倒に巻き込まれており、Ta-c降灰後の現象と見るべきである。

②2014年度に発掘されたショロマ2遺跡北半分については発掘報告書では東西Mラインの土層断面図が描かれ、M-11区付近でのスポット的な掘り込み部を含めると、下位より段丘堆積物（Ⅸ層；厚さ約10m）、Ta-d一次堆積層（Ta-d1+Ta-d2でⅦ層；最大1.1m）、Ta-d二次堆積層（Ⅶ層；10cm±）、漸移層（Ⅵ層）、黒色腐植土（Ⅴ・Ⅳ・Ⅲ・Ⅱ・Ⅰ層；Ta-c・Ta-b・Ta-aなどはさむ）の段丘堆積物のほぼ全体がそろった状態が示される。このラインの北側で、東からG・F・Eの3地点で写真撮影と柱状観察を行った（図8）。E地点は調査区内に取り込まれる小沢の最上流にあたるが段丘礫層（粗粒砂～砂礫）が顔を出し、この層より地下水の湧出が認められる。

③発掘報告書では北半分の西壁から北壁にかけての部分については、スポット観察柱状図が示される（W-06～10区；W-11～15区、N-01～04区）（厚真町教育委員会 2015）。これらではショロマ2遺跡のMライン層序のうち、Ta-d2のトップ付近から上位の部分が認められるが、Ta-d二次堆積層（Ⅶ層）はM-09区より西では発達しない。さらに、Ta-c（Ⅳ層）の上・下位に「地すべり堆積物」と称される含角礫堆積物（新第三系泥岩主体）が挟まれるが、特に地すべり土塊などは認められないことから、土石流堆積物と見なすのが適当である。北壁部分のA～Dの4地点と西壁南部のH～Lの5地点で柱状図作成と写真撮影に基づき検討を行った（図8）。H地点（W-09区とW-10区の間点）では、Ta-c直下の含角礫層B1層+B2層の存在が明瞭である。さらに、最上部ではTa-b・cの軽石を含む腐植質土のサイクルが2重に重なり、背後斜面からの表層地すべりの可能性がある。これらは発掘調査報告書では地滑り堆積物とされる。I・J地点（W-08区とW-09区の間）でもほぼ同様である。L地点（W-06区とW-07区の間点）では、H・I・J地点とほぼ同様であり、最上部に2重のサイクルが認められる。特に上のサイクルは厚さが50cm以上に達し、Ta-cとTa-dの中間部以上の部分がすべり重なっているように捉えられる。W-05・07・10区地点付近では倒木層や、地すべり性崩壊層（泥岩ブロック・角礫部）の存在が明らかである。

④シヨロマ2遺跡東側の河崖(段丘崖)露頭f1地点(図6・8)では、中段段丘面1(T2)堆積物として下位より、i)新第三系軽舞層泥岩優勢の砂岩・泥岩互層(河床より5m弱高)、ii)段丘礫層(厚さ0.8m程度;不淘汰砂礫)、iii)火山灰質細粒砂層(0.8m;褐色~灰褐色火山灰質ローム・最上部泥質)、Ta-d1(10cm+;褐色腐れ軽石)で、河床から段丘面トップまでの比高は9mあまりである。

⑤Ta-d二次堆積層(VII層)は洪水堆積層とされるが、シヨロマ1遺跡調査区に切り込むように入る小沢を中軸として調査区の北東角と南半部の東壁を除く部分に分布している。シヨロマ川本流の堆積物というより、Ta-d降灰による側方斜面部環境変化を反映した側方からの大規模土石流的な堆積物と考えられる。

⑥シヨロマ3遺跡がのる段丘面はその南東端ではシヨロマ川河床からの比高は18m程であり、北側のシヨロマ2遺跡の段丘面(T2)よりは10m弱の段差がある。上位の付替の新林道への作業道沿いに大きな切土が出現し、シヨロマ3遺跡の段丘の全体像の把握が可能となった(図8のf2・f3地点)。下位よりi)新第三系軽舞層(路面より4.5m±高まで厚さ3m±、泥岩優勢砂岩・泥岩互層)、ii)段丘礫層(厚さ3.5m~5m±、新第三系泥岩角~亜角礫で最大計30cm、15cm±主体)、iii)軽石まじり火山灰質砂質泥層(10cm±)、iv)Ta-d(0.8m±、Ta-d1+Ta-d2)、v)火山灰質ローム層(45cm±、いわゆる漸移層で上へ暗褐色化)、vi)腐植土層(0.3m±、暗褐色・火山灰質)、vii)Ta-c(15cm±)、viii)腐植土層(0.4m±、中間にTa-b、5cm±はさむ、

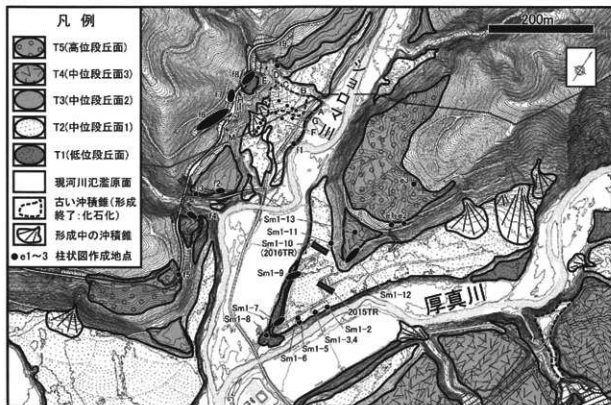


図6 シヨロマ1遺跡付近(E区域)およびシヨロマ2遺跡・同3遺跡付近(F区域)の地形面区分図

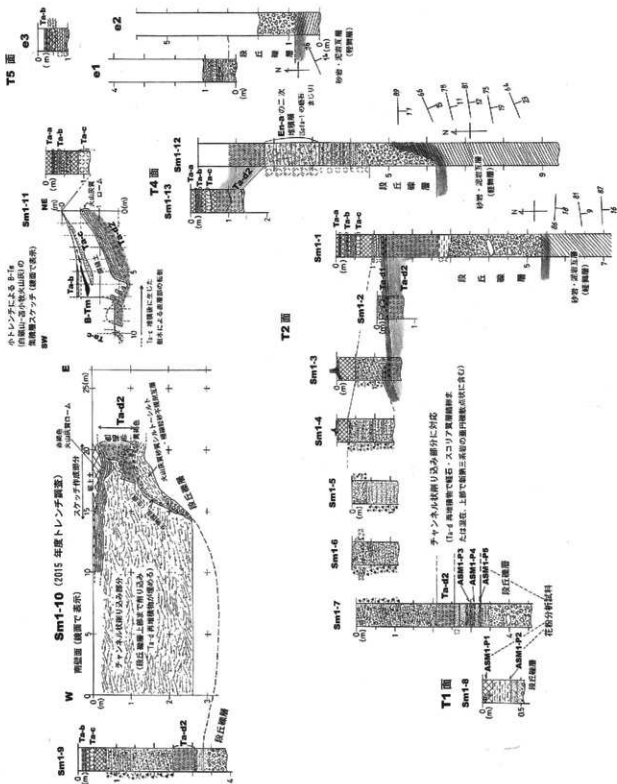


図7 ショロマ1遺跡付近 (E区域) の柱状対比図

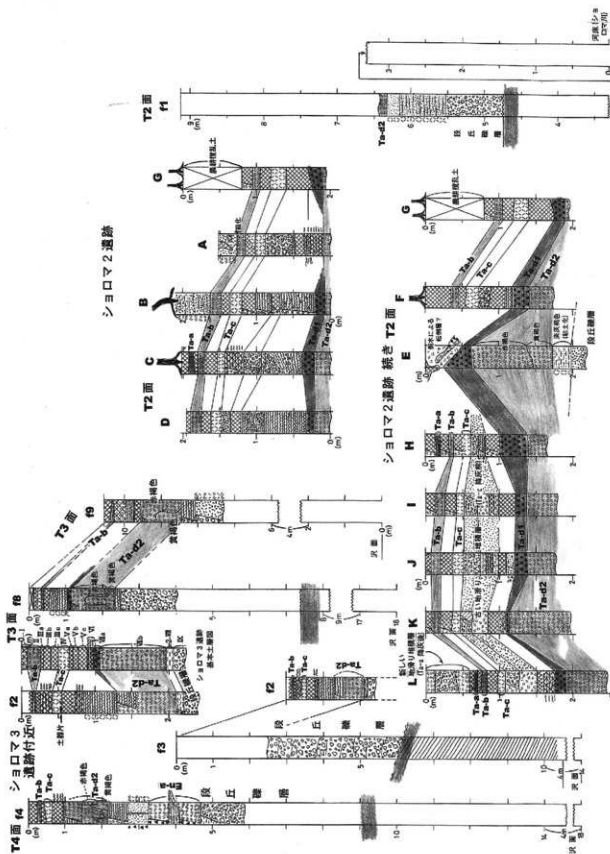


図8 シヨロマ2遺跡および同3遺跡付近 (F区域南部) の柱状対比図

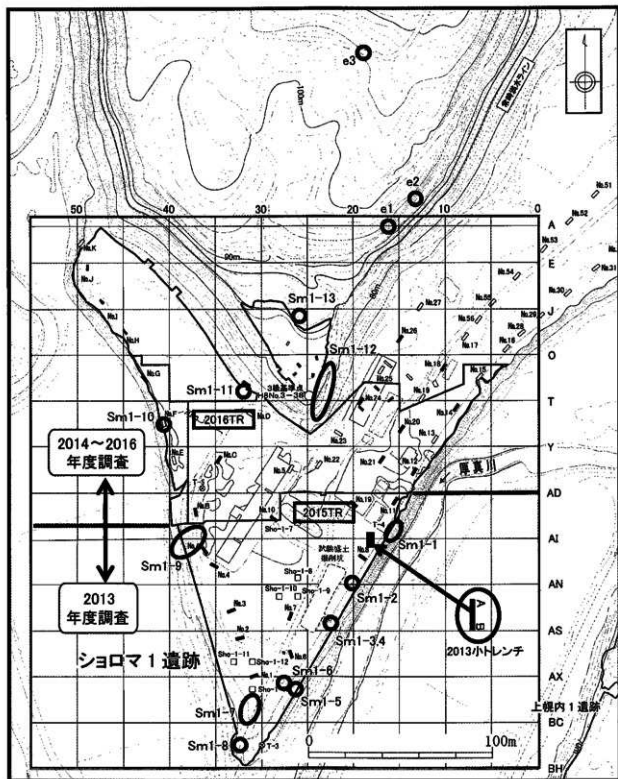


図9 ショロマ1遺跡の地質検討地点

火山灰質)である。以上の層序はショロマ2遺跡の中位段丘面1 (T2) 堆積物に類似するが、段丘面としては明らかにT2よりは10mの段差があり、中位段丘面2 (T3) として扱う。

⑦ショロマ川沿い旧林道からより上位の付替の新林道への作業道沿のヘアピンカーブ部分に

シヨロマ3遺跡より一段高い段丘面が存在し(枝沢面よりの比高は約18m)、その段丘崖(切土)露頭f4地点を観察した(図8)。下位よりi)段丘礫層(厚さ1.2m+;最大計15cm±・新第三系泥岩主体の亜角~角礫)、ii)En-a(厚さ1.4m;黒色スコリアに富む・軽石は黄褐色あばた状で径0.5cm±主体、中部に厚さ30cmの葉理ある細粒砂はさむ)、iii)En-a軽石・スコリア主体再堆積物(55cm)、iv)火山灰質ローム層(55cm、En-aなどの軽石多く極細~粗粒で褐色)、v)Ta-d(厚さ1.2m;黄褐色部・茶褐色部2層が不規則褶曲~クリオターペーション)、腐植土層(95cm±、Ta-c・Ta-bはさむ、下部はいわゆる漸移層)の層序である。このように、En-a以上の火山灰をとまうことから中位段丘面3(T4)に相当する。

③f3・f4地点からヘアピン作業道を上ると付替林道に達する。この道路の切土下の溝部分(図6のf5地点)で礫層の上にオガクズ縁の白褐色粗~細粒サイズの軽石質層の存在を認めた。これはEn-aの下位のSpfaまたはKt-1の可能性が高く、高位段丘面(T5面)の堆積物の存在の可能性が高いと見なした。シヨロマ3遺跡から北へ向かって付替林道箇所には達すると大きな切土面が存在する(図6のf6・f7地点)。新第三系軽舞層砂岩・泥岩互層の上位をおおうようにSpfa?以上の火山灰・ロームが斜面堆積物として重なり、T5面に関連するものと思われる。

④f7地点をさらに北へ向かうと両側切土の工事中のf8地点がある(図6)。ここでは下位より、i)新第三系軽舞層砂岩・泥岩互層(沢面より6~7m高まで)、ii)段丘礫層(厚さ7~8m;f8地点露頭では新第三系泥岩の角~亜角礫、径10cm±主体)、iii)Ta-d2(115cm;最大径3cm±、赤褐色・黄褐色2層屈曲)、iv)Ta-d1(10cm±;スコリア質、粗~極粗粒)、v)褐色火山灰質ローム(50cm;極細~中粒、Ta-c?)、vi)腐植土層(15~20cm;火山灰質シルト~細粒)、Ta-b(7cm±)、vii)腐植土層(28cm、Ta-aのはさみ?)である。層序的にはT2面堆積物に類似するが、それより高位に存在することから、シヨロマ3遺跡関連のT3面に対応できると思われる。さらにf8地点の北東のf9地点(作業道切土)では、対応する面は枝沢よりの比高が10mあまりで、堆積物の層序はf8地点に類似し、中位段丘面2(T3)と見なされる。

### 3. シヨロマ1遺跡南部(2013年度発掘調査)の地質検討

シヨロマ1遺跡南部について2013年度に発掘調査が行われている(奈良ほか編著,2015)。図9に示すように、Sm1-1~9の9地点で観察を行い、柱状図を作成した(図7・10)。全体として中位段丘面1(T2)堆積物としてまとめられ、上位よりi)表層、ii)軽石・スコリア質砂礫層、iii)火山灰質ローム層、iv)Ta-d、v)砂・泥互層、およびvi)礫層の6層に区分でき、各層の特徴は以下のとおりである。なお、Sm1-8地点の低位段丘T1面に関わる堆積物についても説明する。

#### (1) 地層の区分と内容

i)表層(腐植土;0.3m~1m弱):黒褐色を呈し、シルト~細粒サイズ火山灰質である。樽前火山起源の厚さ10cm±のゴマ塩様降下軽石層(Ta-c;細~粗粒)、同10cm±の白褐色降下軽石層(Ta-b;中粒~細礫サイズ)および同5cm±の降下軽石層(Ta-a;中~粗粒)をはさむ。  
ii)軽石・スコリア質砂礫層(Ta-dの再堆積物;層厚最大2m強):遺跡北東寄りのSm1-1・2地点では分布しない(存在しない)。大半の構成物はTa-d(Ta-d1・Ta-d2)由来の軽石・スコリア(粗粒~細礫)、斜交葉理・斜層理が顕著で、スコリア優勢な黒灰色部と軽石優勢な褐色~赤褐色部が不規則縞状を成す。上半部で径5cm±の新第三系堆積岩(泥岩・砂岩)の亜円礫を散点

状に含むが、厚真川沿いの相対的下流に位置する Sm1-7 地点では同亜円礫を下半部に含む。斜交葉理・斜層理が顕著であることと、下流側ほど Ta-d 以外の礫を全体的に含むようになることから、Ta-d 降灰後の堆積物と考えられる。

iii) 火山灰質ローム層 (厚さ 0.3m 程度) : 褐色を呈し、砂質泥状、下位の Ta-d の軽石・スコリアを含む。ii) と対照的で、Sm1-1・2 地点でのみ分布する。遺跡北部の学校基礎付近にのみ分布し、南部および西縁部では ii) に述べた流水の作用で削割されたものと考えられる。

iv) Ta-d (樽前火山降下軽石; 0.5~1m) : 軽石最大径は 2cm±、全体として黄褐色を呈し、上幌内 1・2 遺跡で全体として赤褐色を呈するのとは異なる。風化の程度が、赤褐色部より低いことが考えられる。最上部のスコリア質層 (Ta-d1) と主部の軽石質層 (Ta-d2) から構成される。

v) 砂・泥互層 (25~90cm) : Sm1-1・7・9 の 3 地点で観察できるが、このうち互層状になるのは Sm1-7 地点のみである。同地点では火山ガラス質細~中粒砂と砂質泥の各 5~10cm 程度のものの互層で、河川の後背湿地などの堆積物と考えられる。一方、Sm1-1・9 地点では厚さが 25cm 程度で、黄褐色火山灰質で一見ローム様に見える。

vi) 礫層 (段丘礫層; 1m±~2.3m) : Sm1-1・7 地点での観察では、最大径が 30~50cm に達する新第三系堆積岩 (泥岩・砂岩) の亜角~亜円礫 (大~巨礫) が主体である。Sm1-1 地点では斜層理・インブリケーションなども明瞭にとらえられ、厚真川本流の堆積物と見なされる。

### (2) 花粉分析について

Sm1-7 地点は遺跡南西端に位置し、T2 面へ上る作業道沿いの切土露頭であり、数 m の段差 (地形変換部) を経て低位段丘面 (T1) へ移行し Sm1-8 地点となる (図 7・9)。Sm1-7 地点では T2 面堆積物について、上位より ii) 軽石・スコリア質砂礫層 (Ta-d の再堆積物; 層厚 2m あまり)、iv) Ta-d (46cm)、v) 砂・泥互層 (90cm) および vi) 礫層 (段丘礫層; 厚さ 1.3m+) の総計 4.5m+ の堆積が観察できる。V 層から花粉分析試料 (ASM1-P3~5) を採取したが、花粉化石はほとんど検出できず検討対象にならなかった。一方、Sm1-8 地点ではトップに腐植土をともなう厚さ 50cm 程の泥質堆積物 (中茶路式土器片出土) が認められ、腐植土から花粉分析試料 ASM1-P1、その下位の褐色砂質泥の下部から ASM1-P2 を採取し、花粉分析を行った。

Sm1-8 地点の花粉分析結果について、ASM1-P2 は樹木花粉をほとんど含まないが、ゼンマイ属を 56%、単溝型のシダ胞子を 40% 含んでいる。他方、ASM1-P1 では、ゼンマイ属は認められず、単溝型のシダ胞子は 13% まで減少していた。さらに、樹木花粉はコナラ属、カバノキ属、トウヒ属がそれぞれ 26%、12%、11% の割合で産出した。他に低率のモミ属、マツ属、ハンノキ属、ニレ属、クルミ属、シナノキ属が産出し、草本類は産出頻度が低いが多様化している。ASM1-P2 は単溝型胞子・ゼンマイ属胞子群集とみなされるが、試料を採取した腐植土中には中茶路式土器 (縄文早期) の破片が出土することを考慮すると、縄文早期末 (6,300 年前頃) の植生を反映している。ASM1-P1 は全体としてコナラ属優勢群集で、Ta-d 降灰後の温暖期の特徴を示す。

### (3) その他の検討

① Sm1-1 地点は厚真川本流の河崖の露頭で、中位段丘面 1 (T2) 堆積物のほぼ全容がとらえられるが、河床からトップまでの比高は 12m あまりで、そのうち 7m 以下の部分が新第三系板状泥岩 (軽舞層) である。7m より上位が T2 面堆積物で、最上部の表土 (腐植または黒ボク; 厚

さ1m弱)中にはTa-a・b・cの降下火山灰がはさまれる。このうちTa-c(厚さ10cm程度;細～粗粒)については逆級化が認められ、Ta-b(厚さ8cm±;中粒～細礫サイズ)については、下半部が逆級化、上半部正級化となっている。Ta-dについては軽石・スコリア質砂礫層(Ta-dの二次堆積物)の存在は認められず、一次堆積物が確認できる。

②本遺跡は厚真川とショロマ川の合流部の低位段丘面上に位置し、流水作用で堆積したと思われる礫層(vi)は両河川の影響下で堆積したと考えられる。上幌内1・2遺跡の厚真川谷壁側斜面からの小扇状地堆積物などが不淘汰の垂角礫主体であるのと比較して、礫径が大きく、斜層理・インブリケーションなど流水の影響が明瞭であることで、対照的な違いがある。すなわちこの礫層はこれら河川そのものの堆積物である。軽石・スコリア質砂礫層(ii)はTa-dの軽石・スコリアに由来する堆積物であることから、Ta-d降灰後の何らかの環境変化を反映した堆積物であることは確実である。風成のTa-dが一部削割された可能性はあるが、遺跡(低位段丘面)全体に分布していることから、Ta-d降灰頃すでに段丘化(川からの離水)は始まっていたと見なされる。このような段丘化した部分を削って、流水堆積物(ii)が堆積したということは、Ta-d降灰による植生破壊・土砂流出などによる河川せき止めなど河床水面の上昇が想定される。

③ショロマ1遺跡の発掘調査報告書(奈良ほか編著, 2015)では図9に示す南北31ライン、東西A0ラインおよびATラインの3つの断面がある。これらは地表面(段丘面)下1m前後の深度までの土層状態を示すが、Ta-d(Ta-d1+Ta-d2)本体については出現せず、Ta-dの二次堆積相のみが認められる。発掘調査範囲の北東部(AI-19区)で南北方向の小トレンチが掘削されスケッチ(トレンチの東壁)が示される。見かけ上南へ向かってTa-d(Ta-d1+Ta-d2)が下がると共にTa-d二次堆積層がその上に重なるように描かれている。北東に隣接するSm1-1地点河崖露頭(図7)ではTa-dの上にはTa-a・b・cなどを挟む腐植土層が薄いローム層をはさみ重なっており、ここではTa-d二次堆積層は存在しない。後述するように2014～2016年度に掘られた東西方向の2つの大トレンチではTa-dはほぼ水平で西寄り部分でチャンネル状に完全に削割されTa-d二次堆積層に置き換わっている。

#### 4. ショロマ1遺跡中部(2015年度発掘)および北部(2016年度発掘)の地質検討

2015年度の発掘調査は図11に示す範囲で行われたが、現地での調査は視察程度であり、詳しい検討は行っていない。

##### (1) ショロマ1遺跡中部(2015年度発掘)と2015年度トレンチ(2015TR)の検討

2015年度には図9・11に示す、中位段丘面1(T2)上の範囲において発掘調査が行われ、2013年度調査範囲の北縁部で東西方向の大トレンチ掘削調査(2015TR;東西25m×南北10m×深度2m)が行われた。それらに関連しての地質検討は視察程度であるがトレンチについては、以下のようなことが指摘できる。

トレンチの北東寄り部分で下位より段丘礫層(厚さ約0.5m+)、灰褐色火山質粘土層(ローム;0.5m±)、Ta-d1(1cm±)、Ta-d2(15cm程度)、褐色ローム質層または攪乱土層(約20cm)で、これは河崖Sm1-1露頭などにみられる中位段丘面1(T2)堆積物に対応するものである。しかし、北西寄り部分ではチャンネル状に切り込むようにTa-dの二次堆積層が発達し、削り込みの下底は段丘礫層にまで達し、Ta-dを欠如するまでになっている。



## (2) ショロマ1遺跡北部(2016年度発掘)の調査と検討

2016年度においては、発掘調査は遺跡範囲北西部の中段段丘面1(T2)上と中段段丘面3(T4)上で行われ(図11)、2015年度調査範囲の北西縁部で東西方向の大トレンチ掘削調査(2016TR-Sm1-10地点一)が行われた。それに関連しての地質調査と検討結果を以下に述べる。

①大トレンチについては、図7に示すように、全体の写真撮影と部分的な壁面観察・スケッチ作成を行った(南壁の一部)。地質状況はおおむね2015年度大トレンチに類似している。すなわち、東寄り部分で下位よりi)段丘礫層(厚さ0.3m+;新第三系砂泥互層岩の径3cm±~20cm±の亜角~亜円礫主体・径2cm大以下に赤色チャートなど先新第三系岩の礫多い)、ii)黄灰色火山灰質極細粒砂・砂質泥不規則互層(20~60cm;生物攪乱ともなう)、iii)Ta-d2(0.8m±;黄褐色・赤褐色2層屈曲構造)、iv)Ta-d1(10cm±)であり、西寄りの部分では以上のうちi)層の上部以上ii)~iv)層をチャンネル状に完全にカットして、Ta-d由来の軽石・スコリア主体の粗~極粗粒砂層(細かい平行~斜交葉理発達)が占めている。これは無層理・乱雑な土石流堆積物ではなく、むしろ網状河川的な特徴を示す。Ta-dが河川周囲の斜面をふくめて厚く降灰したため、植生も破壊され土砂流出が活発となり、その土砂が河川に大量に流出し、河道変化が生じたことを意味し、降灰による突発的な洪水の発生を示すものではない。

②トレンチ北東側の斜面際的小トレンチ部(Sm1-11地点)でB-Tm火山灰の部分的集積状態を観察した。ここでは大トレンチ部分で欠如しているTa-dより上位の部分が観察できる。斜面際の部分では、下位よりi)Ta-c(30cm+;淡褐色・ゴマ塩状・中~粗粒軽石)、ii)火山灰質腐植土層(45cm;黒灰色・シルト~細粒、中部に10cm±の新第三系角礫よりなる不淘汰層~土石流堆積物一含む)、iii)Ta-b(10cm±;スコリアまじりの最大径1cm程度の軽石)、iv)腐植土層(30cm±;下部にTa-a一細~中粒・ゴマ塩状一はさむ)である。これに対して、斜面際をやや離れるとスケッチ(図7)にあるように、ii)の上部中にB-Tm(苫小牧~白頭山火山灰)が局所的にレンズ状に集積し厚さ11cmに達する。さらに離れると、Ta-d~Ta-cの直上までの部分が、倒木により転倒した様子の部分が発掘平面・小トレンチ断面観察から捉えられる。なお、B-Tmが局所的に厚く堆積した原因としては、Ta-c降灰後に生じた倒木転倒による表土の盛り上がり局所的に小凹地を形成し、そこに流水・風などの作用が働き集積した可能性が考えられる。

③中段段丘面1(T2)上の2016年度発掘調査範囲は大トレンチより北側の部分である。ここでは詳しい調査は行っていないが、2015・2016年度大トレンチの壁面に現れたチャンネル状構造への変換部(縁)の追跡を行った。南北方向の長い浅トレンチでの変換部の把握、発掘面上でのTa-d露出による褐色塗色部の追跡、遺構内でのTa-d再堆積層の把握などにより、図11に示すような太破線ラインの南西側でTa-dがチャンネルをなして二次堆積層に置き換わっていることが確認できた。この変換部において50cm程度の高度差(段丘面の高度差)も生じており、Ta-d降灰前に氾濫原からの離水により形成されたT2面がTa-d降灰による表層変動(河川変動)の結果ふたたび一部が河川氾濫原に戻り、離水・段丘化したという変動史を復元できる。

④ショロマ1遺跡の2016年度発掘調査は主体を成す中段段丘面1(T2)の上位の段丘面も対象として行われた。上位の段丘面は下位のT2面からの比高は13m程度で、東側厚真川の河床からの比高は23m程度である。上位の段丘面に達する作業道が南東側にあり、その切土露頭の

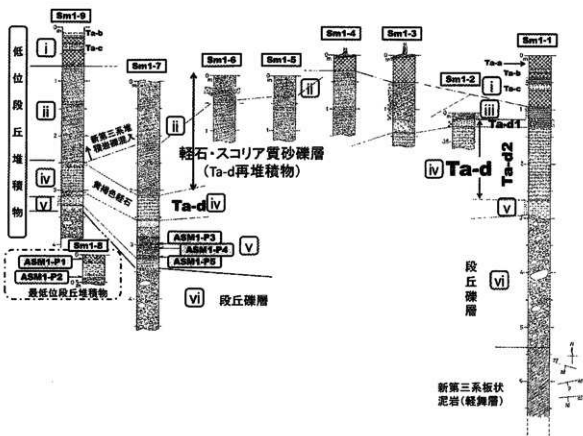


図 10 ショロマ1遺跡南部の地質調査関連の柱状対比図

観察から対応する段丘堆積物の層序が明らかになった。図7 Sm1-12 に示すように、下位より i) 新第三系軽舞層板状泥岩層 (1.2m 高)、ii) 段丘礫層 (厚さ 0.9m±~1.8m); 新第三系泥岩・砂岩主体の亜円礫・葉理あり粒径淘汰やや進む、iii) 灰褐色火山灰質砂質泥層 (97cm; 黒灰色極細粒砂層数枚はさむ・全体ローム?)、iii) 斜交葉理軽石質砂礫~砂層 (1.43m; 火山灰質再堆積層、絹糸状発泡の Spfa-1 軽石も含む En-a 起源軽石主体)、iv) Ta-d (厚さ 0.9m+; 黄褐色・あばた状発泡・スコリアに富む) である。これより上位については、段丘面上の発掘調査区壁面で観察できる (Sm1-13)。下位より、i) 斜交葉理軽石質砂礫~砂層 (厚さ 55cm+; En-a 起源軽石主体、最上部ローム様)、ii) Ta-d (65cm; 赤褐色・黄褐色層 2層屈曲)、iii) ローム様腐植土層 (15~20cm)、iv) 腐植土層 (10cm±)、v) Ta-b (10cm±; 極粗粒~細粒上方級化、淡褐色~白褐色)、vi) 腐植土層 (5cm±)、vii) Ta-a (5cm±、細~中粒・白褐色)、viii) 軽石まじり泥炭質腐植土層 (12cm) の層序が認められる。このように、ショロマ1遺跡上段の段丘面については、周囲の中位段丘面 3 (T4) との対応関係などから T4 と見なされる。

⑤ショロマ1遺跡 T4 面上の部分から北へ上がるとさらに高い段丘面に達する。T4 面からの比高は 12~15m 程度で、やや開析が進んでいる。その段丘崖斜面にあたる南東縁に古い林道があり、崩れが進んだ切土部に露頭を見つけ 2 地点 (e1・e2) で段丘堆積物について断片的な観察を行った (図 9)。e2 地点では、路面から 80cm 高まで新第三系軽舞層砂岩・泥岩互層が占めるが、その上位に段丘礫層 (厚さ 1.2m+; 礫は径 10~20cm± 主体・最大径 10cm×30cm の亜角~亜円の

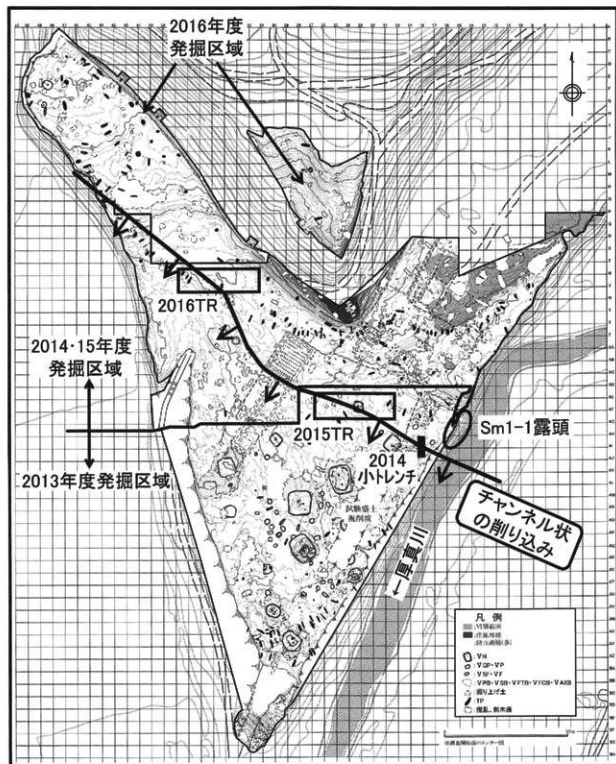


図 11 ショロマ1遺跡範囲におけるTa-dの再堆積物の分布範囲(チャンネル状削り込みの範囲) 厚真町教育委員会作成の遺跡全容図に加筆

新第三系岩)が重なり、e1地点では段丘礫層(25cm+;含礫砂質泥)の上位に火山灰質泥層(0.8m+;部分的に粗粒~細礫サイズ軽石層)が認められる。さらに当該段丘面上のe3地点で

は、下位より Ta-d 軽石を含む火山灰質ローム層 (0.55m+)、腐植土層 (15cm±; シルト~細粒サイズ)、Ta-b (8cm; 径 0.5 cm まで、含スコリア)、腐植土層 (20cm±) の層序を確認した。このように本段丘面は周囲の段丘面との関連から判断して高位段丘面 (T5) と見なされる。

⑥e3 地点から 80m 程度進んだ箇所では、下方へ大崩壊が進んでいるが、その崩壊地の上位では軽舞層の露頭を観察した。

## 文 献

- 天方博章・乾 哲也編著 (2013) : 厚真町 ヲチャラセナイチャシ跡・ヲチャラセナイ遺跡 (1) 第1分冊・第2分冊, 厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5, 厚真町教育委員会。
- アースサイエンス株式会社 (2017) : 平成 28 年度シヨロマ1遺跡発掘事業, 地形面分析委託業務報告書 (厚真町)。
- 乾 哲也・小野哲也編著 (2004) : 厚幌1遺跡, 厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 厚真町教育委員会。
- 乾 哲也・長谷川徹・工藤 肇編著 (2014) : 厚真町 シヨロマ3遺跡, 厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11, 厚真町教育委員会。
- 乾 哲也・長谷川徹・工藤 肇・大谷正芳編著 (2015) : 厚真町 シヨロマ2遺跡, 厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 13, 厚真町教育委員会。
- 奈良智法・乾 哲也・宮塚義人・岩橋由久・宮崎美奈子・松井 昭・服部一雄編著 (2015) : 厚真町 シヨロマ1遺跡 (1), 厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 12, 厚真町教育委員会。
- 岡 幸雄・乾 哲也・奈良智法 (2017a) : 厚真川上流の地形面区分と5万年前以降の環境変動の解明—厚幌ダム地域の遺跡調査に関連して—, 平成 29 年度日本応用地質学会北海道支部・北海道応用地質研究会 (共催: 物理探査学会) 研究発表会講演要旨集。
- 岡 幸雄ほか 12 名 (2015) : 北海道厚真川流域のボーリングによる 60m 長コア (AZK-101) とトーマス型サンプラーによる 13m 長泥炭コア (ATP-1~3) の地質解析の概要及び埋蔵分析結果—厚真川流域の沖積層研究 2014 年度 (その 1) —, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 26。
- 岡 幸雄ほか 10 名 (2017b) : 北海道厚真川流域の沖積層の堆積相解析・微化石解析・AMS<sup>14</sup>C 年代測定に基づく堆積曲線および相対的基準曲線の復元, 名古屋大学年代測定研究, 1。
- 星野サハほか 8 名 (2015) : 北海道厚真川流域のボーリングによる 60m 長コア (AZK-101 孔), 20m 長コア (AZK-5) および 13m 長泥炭コア (ATP-2, 3) の AMS<sup>14</sup>C 年代測定と花粉分析の意義—厚真川流域の沖積層研究 2014 年度 (その 2) —, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 26。
- 星野サハほか 9 名 (2017) : AMS<sup>14</sup>C 年代測定および花粉分析に基づく石狩低地帯南部厚真地域の後期更新世〜完新世古気候変動の解明, 名古屋大学年代測定研究, 1。
- 田近 淳・大津 直・八幡正弘 (2004) 厚幌1遺跡の地すべり堆積物, 厚幌ダム建設に係わる一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (厚真町教育委員会), 296-309。
- 田近 淳・大津 直・乾 哲也 (2015) : 成層した降下火砕堆積物からなる地すべり移動体の内部構造と形成過程: 石狩低地東縁, 厚幌1遺跡の例, 地質学雑誌, 122, 23-35。

## 引用・参考文献

- 赤石慎三 1999 「苫小牧地方の円筒上層式について」  
『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1  
苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 赤石慎三 2006 「苫小牧地方における縄文時代中期後半の土器について」『報報』3 苫小牧市博物館
- 厚真町 1986 『厚真町史』
- 厚真町教育委員会 2004 『厚幌1遺跡』
- 厚真町教育委員会 2006 『上幌内モイ遺跡(1)』
- 厚真町教育委員会 2007 『上幌内モイ遺跡(2)』
- 厚真町教育委員会 2009a 『上幌内モイ遺跡(3)』
- 厚真町教育委員会 2009b 『ニタツプナイ遺跡(1)』
- 厚真町教育委員会 2010a 『厚幌1遺跡(2)・  
幌内7遺跡(1)』
- 厚真町教育委員会 2010b 『幌内5遺跡(1)・富里2遺跡  
・ニタツプナイ遺跡(2)』
- 厚真町教育委員会 2011 『オニキシベ2遺跡』
- 厚真町教育委員会 2013a 『ワチャラセナイチャシ跡・  
ワチャラセナイ遺跡』
- 厚真町教育委員会 2013b 『オニキシベ5遺跡』
- 厚真町教育委員会 2014a 『オニキシベ4遺跡』
- 厚真町教育委員会 2014b 『ワチャラセナイ遺跡』
- 厚真町教育委員会 2014c 『シヨロマ3遺跡』
- 厚真町教育委員会 2014d 『厚幌1遺跡』
- 厚真町教育委員会 2015 『シヨロマ1遺跡』
- 厚真町教育委員会 2016 『上幌内1遺跡』
- 厚真町教育委員会 2017a 『上幌内2遺跡』
- 厚真町教育委員会 2017b 『一里沢遺跡』
- 厚真村 1956 『厚真村史』
- 厚真村郷土研究会 1962 『厚真村古代史』  
厚真村郷土研究会
- 出穂雅実 2006 「第三章第2節 ジオアーケオロジー」  
『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 恵庭市教育委員会 1981 『柏木B遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1995 『ニカンボシE7遺跡』
- 恵庭市教育委員会 1997 『ニカンボシE4遺跡』
- 恵庭市教育委員会 2000 『カリンバ2遺跡第VI地点』
- 恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ4遺跡III』
- 江別市教育委員会 1982 『萩ヶ岡遺跡』
- 大沼忠春 1989 『北簡式土器様式』『縄文土器大観』1  
講談社
- 加藤季幸 他 2013 「第VII章 第5節 胎土分析(2)」  
『ワチャラセナイチャシ跡・ワチャラセナイ遺跡』  
厚真町教育委員会
- 加藤季幸 他 2014 「第V章 第5節 ワチャラセナイ遺  
跡土器胎土分析」『ワチャラセナイ遺跡』厚真町教育  
委員会
- 亀井喜久太郎 1956 「厚真出土の土偶」『先史時代』3
- 亀井喜久太郎 1976 『厚真の旧地名を尋ねて』
- 北沢実・大島居千鶴 2009 「十勝地域の縄文土器概観」  
『北海道百年記念館紀要』27 北海道百年記念館  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 1981 『社台1遺跡・  
虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』北理調報 1  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 1986  
『平取町二風谷遺跡』北理調報 26  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 1989  
『深川市納内6丁目付近遺跡II』北理調報 63  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 1991  
『余市町フゴッベ貝塚』北理調報 72  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 1997  
『千歳市キウス5遺跡(4) B地区・C地区』北理調報  
116  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2003  
『厚真町浜厚真3遺跡』北理調報 186  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2005  
『千歳市オルイカ2遺跡(2)』北理調報 221  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2012  
『千歳市桜梅川小野遺跡(1)・梅川遺跡(1)』北理調報  
285  
(公財)北海道埋蔵文化財センター 2016  
『上幌内3遺跡』北理調報 335
- 寿都町教育委員会 1979 「寿都3遺跡」  
『寿都町文化財調査報告書1』
- 瀬川拓郎 1982 「第2節 「短刻線文土器群」と「余市  
式土器」の製作手法と器種構成」『礼内台地の縄文  
時代集落址』登別市教育委員会

- 早田 勉 2006 「上幌内モイ遺跡後期更新統の層序とデフラ」『上幌内モイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 滝川市教育委員会 1997 『朝日町1遺跡』
- 田近 淳・大津 直・八幡正弘 2004 「幌幌1遺跡の地すべり堆積物」『幌幌1遺跡』厚真町教育委員会
- 千歳市教育委員会 1979  
『ウサクマイ遺跡群における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 1995  
『ウサクマイD・蘭越7遺跡における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 2002a  
『梅川4遺跡における考古学的調査』
- 千歳市教育委員会 2002b  
『ユカンプシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』
- 網走湖町教育委員会 2007 「入江遺跡」  
『網走湖町文化財調査報告第1集』
- 苫小牧市教育委員会 1976 『植苗遺跡』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1987  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群II』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1990  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群III』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター編 1992a  
『静川37遺跡』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1992b  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IV』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1995  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群V』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002a  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VII』
- 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2002b  
『苫小牧東部工業地帯の遺跡群IX』
- 野澤謙庵 1692 「蝦夷記」『續々群書類従第九』
- 泉 昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ 東日本の石匙  
—松原型石匙の分布と製作時期について—」  
『考古学雑誌』76-4
- 益富 壽之助 1987 『原色岩石図鑑』(全改訂新版) 保育社
- 松浦武四郎(吉田常吉編) 1962  
『蝦夷日誌 上 東蝦夷日誌』時事通信社
- 松浦武四郎(高倉信一郎校訂) 1985 『戊午東西蝦夷山川  
地理取調日誌』中 北海道出版企画センター
- 松野久也・石田正夫 1960  
『1:50,000 地質図幅説明書早来』北海道開発庁
- 皆川洋一 1991 「刺突文土器を含む特殊地胎土を有する  
土器群について」『滝里遺跡群』北埋調報 71  
(公財)北海道埋蔵文化財センター
- 南茅部町教育委員会 1992 『ハマナス野遺跡 vol. XIV』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 1997  
『八木A遺跡III 八木C遺跡』
- 宮田雄一郎 1988 「密度逆転成層による周水河インポリ  
ューションの形成」『第四紀研究』等 26 巻第 4 号
- 森 秀之 1990 「空知地方に多出する「丸のみ形石斧」  
に関する考察」『空知地方史研究』24  
空知地方史研究協議会